

山形県中世城館遺跡調査報告書

第 2 集
(村山地域)

平成 8 年 3 月
山形県教育委員会

山形県中世城館遺跡調査報告書

第 2 集 (村山地域)

平成 8 年 3 月
山形県教育委員会



中山城（上山市）

主郭土塁



高櫛城（山辺町）

大堀切



長谷堂城（山形市）
遠景



猿田楯（朝日町）
遠景



本楯館（寒河江市）
北西角から南東を望む



要害森櫛（西川町）
主郭から虎口を見たところ



土生田橋（村山市）
主郭（南から北を望む）



長勝城（東根市）
二の丸堀東側（南から北を望む）

序

本県には豊かな自然とともに、集落跡、古墳、城館跡、窯跡など多くの遺跡が残っています。これらの遺跡は、かつてわれわれの祖先が創造したものであり、その当時はそれぞれが社会の構成要素として一定の役割を果たしていたわけですが、現在ではその機能が失われ、ほとんどが忘れ去られております。一方、物質的な豊かさの追求から教育・文化等、内面的な充実が求められる成熟社会を迎えるなかで、近年、当時の社会生活や歴史に対する人々の関心はとみに高まりを見せております。

この報告書は、昭和63年度から文化庁の国庫補助を受けて実施してきた中世城館址調査の内、昨年度刊行した第1集（置賜管内）に引き続き、村山管内分を第2集としてとりまとめたものです。これまで本県の中世城館遺跡については、その形態、遺構の状況等に関する総合的な調査は行われてきませんでした。この報告書が、当時の人々の暮らしや地域の歴史について知る基礎資料や、豊かな地域づくり等のためにご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、略測図の作成等、困難な調査をお引き受けいただいた調査員、御指導を賜りました調査委員及び御協力いただいた各市町村教育委員会各位に、厚くお礼を申しあげます。

平成8年3月

山形県教育委員会
教育長 佐藤 進

例 言

- 1 本書は、昭和63～平成7年度に文化庁の国庫補助金を受けて実施した中世城館址調査の報告書第2集である。
 - 2 この報告書第2集には、山形県村山地域の次表の市町に分布する中世を主とする城館遺跡の調査成果を掲載した。

地区、市町村名及び 市町村コード		城館遺跡総数	「城館遺跡の概要」 掲載城館遺跡数	備考
東 南 村 山	山形市 201	46	44	
	上山市 207	11	9	
	天童市 210	19	19	
	山辺町 301	17	16	東村山郡
	中山町 302	10	10	"
	計	103	98	
西 村 山	寒河江市 206	44	23	
	河北町 321	8	8	西村山郡
	西川町 322	50	31	"
	朝日町 323	24	15	"
	大江町 324	29	27	"
	計	155	104	
北 村 山	村山市 208	18	18	
	東根市 211	19	17	
	尾花沢市 212	28	27	
	大石田町 341	10	10	北村山郡
	計	75	72	
	合計	333	274	

- 3 調査対象のすべての城館遺跡を市町村ごとにまとめて「市町村別城館遺跡一覧表」を作成した。この一覧表に掲載されている城館遺跡数は2の表の「城館遺跡総数」と一致する。
 - 4 調査した城館遺跡の位置及び範囲を「城館遺跡分布図」に表示した。この地図は、建設省国土地理院の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を3万5千分の1に縮小したものである。
 - 5 城館遺跡の遺跡番号は、「201-001」のように三桁の数字二組で表示している。前側の三桁の数字は市町村コード（2の表参照）である。後側三桁は市町ごとに番号を付けていったものであり、その市町内で完結する。
 - 6 調査した城館遺跡のうち、位置、規模、内容を把握できたものについて、解説と略測図を「城館遺跡の概要」として掲載した。「城館遺跡の概要」に掲載された城館遺跡数は2の表に掲げたとおりである。

7 南町村別城館遺跡一覽表の構成

(1) 表格式

(2) 各項目についての注記

- ア 城館遺跡の名称は地元で一般的に使われているものを用いた。新たに確認した城館遺跡は地名などから名付けた。正式には「〇〇城(館)跡」という名称にするのが正しいが、「跡」の字句は省略した。
- イ 「所在地」は原則として大字段階まで表記した。町の場合は、郡名を省略した。
- ウ 「占地状況」は山頂、平地、その他(丘陵など)に区分した。
- エ 「種別」は館、橋、城砦などに区分した。橋については、グスク、チャシなどと同様に城館の地域性を表していると考えられるので、特に厳密な定義付けをしないで調査員の記載に従った。
- オ 「残有状況」は次の7区分とした。城館遺跡については、種別、規模、特徴などが多様なため、「良」から「不良」までは特に厳密な定義付けをしないで、それぞれの区分の判断は、原則として調査員に委ねた。

区分	摘要
良	
やや良	
やや不良	
不良	
地上遺構消滅	地図図等で城館遺跡であることは確認できるが、現状の地表面観察では遺構が確認できないもの
消滅	山城などが土砂採取等により完全に遺構がなくなったと思われるもの
不明	伝承等により調査地点に城館遺跡が存在すると考えられるが、現状の地表面観察ではその痕跡を確認できないもの

- カ 「現況」は現在の状況を、山林、水田、畑、寺社境内、宅地等と表記した。
- キ 「遺構の状況」は地表面観察で確認できる城館遺跡の遺構(曲輪、土塁、水堀、空堀、虎口、折形等)を原則としてすべて記載した。
- ク 「地図番号」は「城館遺跡分布図」の地図番号である。
- ケ 「備考」には次のものを記入した。
- ・指定文化財の場合、国、県、市又は町史跡と表記した。
 - ・別称のある場合、別称を記した。
 - ・発掘調査が行われた城館遺跡の場合、(一部)発掘調査済と記した。
- コ 「掲載ページ」は当該城館遺跡が「城館遺跡の概要」に掲載されているページである。

8 城館遺跡分布図の内容

- (1) 遺跡番号は「市町村別城館遺跡一覧表」及び「城館遺跡の概要」の遺跡番号と共通であり、この分布図の見開き右側に遺跡番号及び城館遺跡の名称を列挙した。
- (2) 現存する城館遺跡(地上遺構が消滅したものも含む。)は、その位置に範囲を赤色実線で示した。
- (3) 完全に消滅した城館遺跡は、その位置に範囲を赤色破線で示した。

(4) 伝承等により調査地点に城館遺跡が存在すると考えられるが、現状の地表面観察ではその痕跡を確認できないものは、その位置に赤色で×印を付した。

9 「城館遺跡の概要」の構成

(1) 全体の構成

遺跡番号 ふりがな	調査者氏名		
名称（別称）	所在地	築城者	築城時期
史料			
参考文献			
説明文			
略測図（推測図）			

(2) 説明文等についての注記

- ア 「調査者氏名」は実際に城館遺跡を調査した者を（ ）内に明記した。
- イ 「所在地」は原則として小字段階まで記入した。町の場合は、郡名は省略した。また、いくつかの所在地にまたがる場合は、城館遺跡の中心部だけ記入して字名のあとに「ほか」と記入した。
- ウ 「築城者」は史料等により確認できる場合は氏名を記入した。特に伝承のみのため不確かなものは、氏名を（ ）で囲んだ。
- エ 「築城時期」は史料等により確認できるときは年号を記入した。特に伝承のみのため不確かなものは、年号を＜ ＞で囲んだ。「築城時期」が確認できないときは、次のとおり形状等から推定した時期区分を記入した。

時期区分	期間（西暦）
平安期	794～1191
鎌倉期	1192～1333
南北朝期	1334～1391
室町期	1392～1466
戦国期	1467～1589
近世	1590～

- オ 「史料」及び「参考文献」は調査者が調査に際して参考にした史料及び参考文献を記入した。特に参考文献については巻末に一覧表としてまとめた。
- カ 「説明文」には原則として次の事項を記載することとした。
 - ・城館の位置、地形、標高、規模、比高

- ・城館の遺構から見た特徴
- ・隣接する城館遺跡との関係
- ・歴史的な背景
- ・その他

(3) 略測図（推測図）についての注記

- ア 「略測図」は、城館遺跡の地表面観察により作成する「縄張り図」と同義である。
- イ 縄張り調査は城館研究の基本となる調査であり、「縄張り図」は単なる見取り図と異なり、次の3つの条件を満たすものとされている。(千田嘉博ほか著『城館調査ハンドブック』新人物往来社発行)
- (ア) 城館遺構の現況平面図であること
 - (イ) 城館の防御遺構が適確に示されていること
 - (ウ) 研究の基礎資料となり得るために測量(略測量を含む。)が行われていること。
- ウ 地上遺構の残存状況が不良なもの、あるいは消滅したものは地籍図等による復元を行ったものがある。これについては、略測図と区別するため「○○館推測図」等と表記した。
- エ 略測図（推測図）については、規模等を明らかにするため、スケール及び方位を付した。
- オ 「調査者」と略測図を作成した者が異なる場合は、「作図者：○○○○」と明記した。

10 第3集(庄内・最上地域)は、平成8年度に刊行する予定である。

目 次

序

例言

I 調査の目的と経緯.....	3
II 城館遺跡の概要	
1 村山地域の歴史的景観.....	13
2 東南村山地区の中世城館の分布と特徴.....	17
3 東南村山地区の城館遺跡の概要	
山形市.....	21
上山市.....	60
天童市.....	68
山辺町.....	80
中山町.....	91
4 西村山地区の中世城館の分布と特徴.....	101
5 西村山地区の城館遺跡の概要	
寒河江市.....	105
河北町.....	120
西川町.....	125
朝日町.....	147
大江町.....	162
6 北村山地区の中世城館の分布と特徴.....	181
7 北村山地区の城館遺跡の概要	
村山市.....	185
東根市.....	197
尾花沢市.....	206
大石田町.....	222
III 市町村別城館遺跡一覧表.....	229
IV 城館遺跡分布図.....	250
資料	
調査委員・調査員等名簿.....	303
参考文献一覧.....	304
山形県の中世関係年表.....	312

I 調査の目的と経緯

I 調査の目的と経緯

1 調査の目的

山形県内に数多く残っている中世城館（平安時代中頃から戦国時代に築かれ使用された城館）については、これまで所在確認、形態等の総合的な調査は行われてこなかったため、各種の開発行為による中世城館遺跡の破壊が懸念されてきたところであった。

このため、本県に残るこれら中世城館遺跡の所在、遺構の状況等を確認し、今後の保存計画の一助にするため中世城館址調査（悉皆調査）を実施することにした。

2 調査対象

山形県内の平安時代中頃から戦国時代に築かれ使用された城、櫓、館、屋敷、砦、物見台等（近世まで利用された城館を含む。）

3 調査体制

（1）調査主体 山形県教育委員会

（2）調査組織

調査委員会を組織し、調査の基本方針等について意見交換を行い、その指導のもとに調査を実施した。

中世城館址調査基本方針（平成元年6月7日調査委員会決定）

1 調査委員

調査委員は、各ブロック毎の地区担当委員と地区担当を持たない調査委員を県が委嘱する。

地区担当調査委員は、担当地区における調査の指導、とりまとめ及び担当地区の市町村からの要請に応じて現地調査を実施する。

地区担当を持たない調査委員は、県内全域での調査指導、全体の総括及び市町村からの要請に応じて現地調査を実施する。

2 調査員

調査員は、各市町村と地区担当調査委員が協議して推薦した者に県が調査を委嘱し、現地を調査のうえ調査カードを作成し、各教育事務所を経由して地区担当調査委員に提出する。

3 調査謝金及び謝礼

（略）

4 調査

調査は、城館址の所在の範囲確認及びそれに付随する事項を調査し、調査カードに記入することとする。

5 教育事務所の役割

調査員及び地区担当調査委員の謝金及び旅費の支払い事務を行う。

担当地区の調査委員及び調査員の連絡を行う。

なお、担当地区とは各教育事務所の管轄域とする。但し、庄内地区は2担当地区とする。

6 この方針に定めのない事項及び疑義事項について、関係者が協議のうえ決定する。

(3) 調査委員、調査員等の名簿については巻末に一覧表で掲載した。

4 調査方法

(1) 中世城館に探し、地名、古文書、市町村史、絵図、空中写真、地籍図、伝承、既存の研究調査等の情報を収集した。

(2) 実地調査は次の2点について行った。

ア 城館遺跡の遺構の確認（略測図の作成）

イ 古老等への聞き取り調査

(3) 調査を実施するために使用した調査カードは次のとおりである。

市町名			山形県	中世城館遺跡調査票			No.	(その1)
1番	名称	別称		2番	年	月	調査者	平成 年 月 日
所在 地 名	南 部 町	河 内	(この地界)	4 施 設 5 物	文部省			
	昭和30年以前	南 部 町	大字		無・有 (防衛施設・武器・武具・機会・紀源・紀源・荷物)	古跡・すぐり・茶臼・木製品・花		
旧	昭和20年頃	南 部 町	大字 小字	6 施 設 7 物	1 現在の形 態と変遷者		平・緑・赤・黒・緑 (年)	
	* 占地状況 山頂・ 平地・その他 ()	2 市街開拓 (開拓から現状まで)						
3 道 路 の 状 況	山 頂	城 壁	城 壁 (開拓) , 壁, 城壁 (塔基, 俗, 城壁, 墓所)	8 施 設 9 物	3 現在時期 平・緑・赤・黒・江 (年)		主な事件 某城から現状までに城壁に加えられた変化 (改築・改造部分)	
	山 頂	城 壁	山頂・土石・土塁・城壁・土塁・土塁・道路・城壁					
4 施 設 5 物	* 残存状況 良・やや良・不良・消失	4 主要防護者 (城壁の変遷) ,		主な事件				
	1 所有關係 地主地・公用地・寺社有地・個人有地・無	5 延長距離 (開拓から現状まで)						
6 施 設 7 物	山 頂	山 頂	山頂・水辺・沼・寺社境内・宅地・その他 ()	10 施 設 11 物	6 研究文部省		6 研究文部省	
	山 頂	水 辺	山頂・水辺・沼・寺社境内・宅地・その他 ()		7 文部省		7 文部省	
8 施 設 9 物	1 遺跡の特徴 有・無 遺跡番号 ()	年	月	12 施 設 13 物	8 既存の城壁・現時城壁		8 既存の城壁・現時城壁	
	1 文部省指定 國・県・市・町・村・史跡	年	月		9 延長 ()	10 出城 ()	9 延長 ()	10 出城 ()
10 施 設 11 物	1 破壊の場合 時期	年	月	11 延長 ()	12 延長 ()	11 延長 ()	12 延長 ()	
	12 当届予定さ れている開 発計画	13 延長 ()		14 延長 ()		15 延長 ()		
12 施 設 13 物	16 施設名 例との関係	17 施設名 例との関係		18 施設名 例との関係		19 施設名 例との関係		

市町村名	No.	名称	別称
8 施策図・図回答 (平成 年 月 日作図)			
	作図者 ()		
	b 施策回答書からの転写欄		
<p>※特色ある地区・施設名を記入すること。</p> <p>□ 舌紙 (文部省式)</p>			

《その5》

					(その4)	
	No.	名称	別称			
11 元 料	①	支 料 金	税 金	用 途 名	備 考 (注記年次等)	
	②					
	③					
	④					
	⑤					
	⑥					
	⑦					
	⑧					
	⑨					
	⑩					
					記入をうなづける欄	
12 研 究 費	①	算 學 金	基 本 金	成 果 金	刊 行 年 次	大 字 小 字 小字内の呼称(通称・小名・綴字)・題名
	②					
	③					
	④					
	⑤					
	⑥					
	⑦					
	⑧					
	⑨					
	⑩					

5 経費

本調査の事業費及び国庫補助金の額は、次表のとおりである。

(単位:千円)

	事 業 費	うち国庫補助金の額
昭和 63 年度	4,000	2,000
平成 1 年度	5,052	2,526
平成 2 年度	5,700	2,850
平成 3 年度	4,300	2,150
平成 4 年度	4,746	2,373
平成 5 年度	5,300	2,650
平成 6 年度	8,650	4,325
平成 7 年度	4,320	2,160
平成 8 年度	2,778(見込み)	1,389(見込み)
計	44,846	22,423

II 城館遺跡の概要

1 村山地域の歴史的景観

1 村山地域の歴史的景観

伊藤 清郎

和銅5(712)年出羽郡に陸奥国に属していた最上・置賜2郡を割き合わせて出羽国が成立した(『続日本紀』)。さらに仁和2(886)年には最上郡は二分され、最上・村山の2郡となる(『日本三代実録』)。養老5(721)年出羽は陸奥按察使の管轄下に入り、陸奥と強く結ばれることとなる。そこで多賀城と秋田城を結ぶ幹線道が必要とされ、山道駅路ついで最上川を利用した水道駅路が当該地域を走ることとなる(『延喜式』)。最上郡に8郷・村山郡に6郷が存在していて、条里制耕地が造成され(山辺町南部等に条里遺構がある)、口分田が班給されていた。

中世成立期をむかえると、両郡から11世紀～12世紀にかけて荘園・公領が分立していく。最上郡からは大山荘(八条院領)・成生荘(同)・大曾禰荘(撰闇家領、保元の乱以降は後院領)・山辺荘(不詳)それに公領最上郡が分立し、村山郡からは寒河江荘(撰闇家領)・小田島荘(同)それに公領村山郡が分立した。大曾禰荘の年貢は布・馬・水豹皮などで『台記』・水豹(アザラシ)皮は北方交易によるものであろうし、馬は奥羽が馬産地であったことによる。これらの荘園管理の総括責任者の立場にあったのが、平泉の藤原氏であったとされる。しかし、文治5(1189)年の奥羽合戦で平泉方が敗北すると、関東御家人が地頭に補任される。大曾禰荘に安達氏・成生荘に二階堂氏・寒河江荘に大江氏・小田島荘に中条氏などが補任され、鎌倉幕府の強い支配を受けることとなる。鎌倉後期には大部分が北条氏領となってしまう。

鎌倉幕府倒壊後、建武新政府が成立し、葉室光顯が出羽守に補任されるが、すぐ南北朝動乱に突入し、当該地域も巻き込まれていく。やがて、北朝足利方が優勢になるなかで、延文元(1356)年斯波兼頼が山形に入部して、羽州管領職権を行使したとされる(『余目氏旧記』・『最上系図』)。室町將軍と鎌倉公方との対立が出生にも大きく影響する中で、最上氏を筆頭に大江・白鳥・小田島等各氏が当該地域において領主的支配を拡大していく。さらに室町的政治秩序を解体していく、戦国期を迎えることとなる。置賜に拠点をうつした伊達氏との抗争を含みつつ、永正・大永・天文・元亀の各乱を経て、最上義光の代には天正12(1584)年一族天童氏を中心に連合する「最上八橋」諸氏を擊破して霸権を確立する。その間、寒河江大江氏・白鳥氏さらに北方の真室の鮎延氏・新庄の日野氏、小国の細川氏等をも打倒し、新庄盆地まで領域化をすすめていく。次には、秋田方面の小野寺氏、庄内の武藤(大宝寺)氏との抗争が展開していく。しかし、天下人秀吉によって天正15(1587)年関東奥羽「惣無事令」が出され(相馬文書)、翌年5月頃使者金山宗洗が山形に到着する(渦保文書)。そして義光は天正18(1590)年に小田原にいる秀吉のもとに参陣し、この年奥羽仕置が実施された。こうして統一政権の中に当該地域も属することになる。

ところで、このような当該地域において、中世城郭はいかなる様相をみせるのか。鎌倉期の方形館(二階堂屋敷・本楯など)、南北朝・室町期の根小屋・山城の一体化(東根城と薬師寺裏山城など)、戦国期の本格的山城の展開(長谷堂城など)など時代的変遷、大江・白鳥・天童等「八橋」・最上各氏の城郭群を見る各領主・各地域毎の特色、戦国大名最上氏領国内城郭の特色(塊目の城、ネットワーク・陸上水上交通との関連など)、さらに奥羽仕置後の廃城・整理統合など、当該地域における中世城郭を考察する視点は、多く指摘されている(『山形県城郭研究会』大会での発表・討論など)。これらの点を念頭におきながら、以下詳細に検討していく。

2 東南村山地区の中世城館の分布と特徴

2 東南村山地区の中世城館の分布と特徴

菅田 廉信

東南村山地区の中世城館址の数は 105 であり、うち山城は 51、平城は 54 である。これを平面的な分布状況から概観すると、三つに分類できる。一つは山形平野部に展開する平城であり、山形城・中野城・高櫛城・藏増城・高木城などがそれらである。いずれも周囲に堀をめぐらしたものであり、中には臣臣團や寺社・町人の居住空間を堀で巡らした城もある。その中には、中野城や高櫛城や泉出城のように、斯波兼輔の孫たちが山形平野に分封された時代に遡るものもある。さらに立地条件的に中野城・楓沢橋の須川・藏増城の乱川などのように、河川に隣接して營まれ、水運との関係をうかがわせるものもある。第二には、白鷹丘陵上や麓に拡がる城である。この地域は伊達領との境界領域になっている関係上、多くの山城が分布しており、最上領でも有数の分布数を誇る。その多くが山形平野から白鷹丘陵を経て伊達領の長井方面に到るルートを掌握する形で築城されている。しかも長谷堂城（山形市）・高櫛城（上山市）のような拠点となる城郭と、それに到る支線ともいべきルートを防衛するべく中小の城郭が存在している。第三は、奥羽山脈沿い展開する城郭である。これらの城は、奥羽山脈を越えてくるルートを掌握するため、中里橋や行沢橋のように奥羽山脈から平野部にぬける所の比高差のある急峻な尾根に築かれている場合や、岩波橋・成沢城・山家館・小山家城のように奥羽山脈の麓を走る中世の羽州大道や宗教的ルートを掌握すべく造られている場合がある。

戦国期において、東南村山地区の軍事的緊張状態は、大きく三回ほどあった。最初は 1510 年代から 20 年代にかけての永正・大永の乱の時で、伊達稙宗軍が長谷堂城を攻略し、天童城周辺まで進軍している。次が天正 2 年（1574）の最上家の家督争いの時であり、最上家は、義光と義時（義守）方に二分され、伊達輝宗が後者に味方し、白鷹丘陵や上山南部の城に後詰の軍を送っている。最後が天正 13（1585）から天正 16 年にいたる伊達包囲網の結成のなかでの伊達との抗争時である。東南村山地区の城郭は、この間に拠点となる城郭を中心に飛躍的発展を遂げていく。

東南村山地区の城郭の中で、主郭に向かって各曲輪・虎口・堀が求心的構造を持ちながら、機能的に設定されているという事例は僅少である。典型的には、天童古城・成沢城・谷木沢橋・若木城のように曲輪を幾重にも配置するだけあり、深い堀や枡形虎口を堅固に造るという形をとっておらず、庄内・越後郡地域や最上地方に見られるような堀や馬出し虎口を持つ、求心的構造を志向する城は、むしろ例外的といつても過言ではない。東南村山地区の城郭の一典型が天童古城であり、城郭の中心が 5 つに分かれ、どれが主郭であるか不明瞭なほどである。しかも最上本宗家の城が全て平城だった事は、併せて銘記すべきことである。最上本宗家自身は山城を根幹としつつ堅固な最新の技術で城を造ろうとしたことは注目される。これは、最上領の軍事編成が天童古城で見られるように国人的な性格を完全に払拭できなかったことにもよるが、より重要なことは東南村山地区の軍事力が、堅固な城を防衛上の根幹としなくとも済んだからであったと考える。

さて、東南村山地区の城郭の構造上、最大の特色としてあげられるのは、意識的に堀が巡らされている城の存在である。尾根を断ち切る堀切は、戦国期の前期には全国各地で見られてくるが、堀を横に巡らしていくのは、戦国後期のこととされている。東南村山地区でこのような堀を有する城郭は、高櫛城・陣山橋（上山市）・長谷堂城・上野橋・曲森山橋（山形市）・荒谷橋・畠谷城（山辺町）・新山城橋（天童市）である。これらの城に共通することは、いずれもが伊達領とのいわば境目領域にある城であるということである。堀そのものは曲輪を一巡するという形をとっておらず、曲森山橋・新山

城櫓・上野櫓のように、その先端が虎口上の装置を持つ曲輪へと連動していく場合が多い。掘底道を移動してくる敵兵に対する防御装置と考えられる。その意味では堀の構造は、シンプルであり、基本的に曲輪を中心として配置された防御装置を補強するものと考えられる。しかも、その堀の設定の仕方が、中心となる曲輪群の粗放なありかたに比して明確な防御装置となっている場合が多い（上野櫓・陣山櫓・新城山櫓・曲森山櫓）。

最上領において、このような堀のありかたがより顕著に出てくるのは、現在の最上地方である（志茂の手館・太郎田館・判兵衛館など）。そこでは、敵方に曲輪をとらせないために、面を連続して断ち切る幾重もの敵状阻障や主要な曲輪と曲輪の移動すら不可能にまで曲輪同志を断絶する深い堀が施されている。しかし東南村山地区では、このような堀は見られない。むしろ基本的に数段の曲輪群で城郭を構築するというよりもともありふれた東南村山地域の伝統的な城郭が、ある時点で堀をめぐらすことによって補強されていったとすべきである。

最上領の築城理念が、地元の平和を守る軍事拠点としての性格から、庄内・大崎遠征、伊達との抗争、さらには奥羽の平和・豊臣平和令への意識の中で展開したのは、天正10年ころからであった。そして、このころより堀が巡らされる城郭が登場してくる。このような在り方は、比較的多くの軍隊を臨時に駐屯させる場合の城に多く、したがって「境目の城」に、堀を巡らした城が多くなってくる。雄勝攻めをおこなった時に最上方が築城した秋田県雄勝郡羽後町田沢の幡岡城もその好例である。庄内川北では、堀の前面に馬出を造り出した本宮館も登場してくる。

天正13年から16年にかけての伊達との軍事的緊張関係のもとで、東南村山地区の城郭建造は、質的な変化を遂げていく。奥羽全体の「平和」創出をにらみながらの伊達との角逐のなかで、「境目」が意識され、その「境目」領域の城は、山形城からの「結城」的な意識のもと、強化されていく。それは、庄内や最上地方での境目領域で築城された時の技術が、東南村山地区にもたらされていったことを意味する。その典型的な例を、高橋城（上山市）に求めることができる。この城は、堀を防衛戦略上の根幹に据え、二重の横堀とそれに連動する縱堀、さらには堀を移動する敵兵に対する障壁装置を施している。「一城別郭型」の城との印象も与えるが、基本的に曲輪群と縱堀・横堀・虎口・ルートは、各々連動していることより、むしろ以前よりあった高橋城に、より大量の軍隊が駐屯でき、堅固な城となるよう改修していったと考えられる。この高橋城の南方約5キロには、壮大な坂虎口と井形を有する伊達方の中山城がある。また、長谷堂城は、最上領ではむしろ例外的に求心的構造を有する城であるが、この城においても中腹の曲輪を囲繞する堀があったという。また、道を塞ぐ城の典型的な事例である畠谷城も、主郭部分の堀とは別に、道そのものを防衛するための巨大な横堀が巡らされていた。あるいは、この堀は1600年の出羽合戦の時に造成されたのかも知れない。

以上のような城郭の事例は、東南村山地区全体から見た場合むしろ小数である。最上義光は、高橋城や長谷堂城のような「根城」の存在の城があれば、「境目」は守れると判断したのかも知れない。近世幕藩体制になっても、最上山形藩では数多くの城郭が存在しており、その多くが最上領の本拠地である村山地方であった。中世的城館勢力を押しつぶす仕置き政策によらず、彼らを温存する方策は、中世的城館の築城の在り方を現在の人々に残すこととなった。

3 東南村山地区の城館遺跡の概要

やまとじょうにのまるかすみじょう
山形城二ノ丸（霞が城） 201-001

所在地 山形市霞城町

築城者（最上義光）

築城時期 近世初期

史料 山形城下絵図

参考文献 『山形県史』・『山形市史』・『史跡・山形城跡二ノ丸東大手門復元建設工事報告書』（山形市都市開発部公園緑地課）

概要

国史跡。山形城は山形市のほぼ中央に位置する。この地に初めて城を築いたのは、延文元年（1356）に山形に入部した斯波兼頼だったといわれており、以後、代々最上本宗家の居城であった。当時の城郭は、後の山形城本丸ほどの広さであったか。現在の二ノ丸は、最上義光が家督を握り、伊達政宗と相並ぶ奥羽の霸者となる16世紀末のころから造られたと推測される。

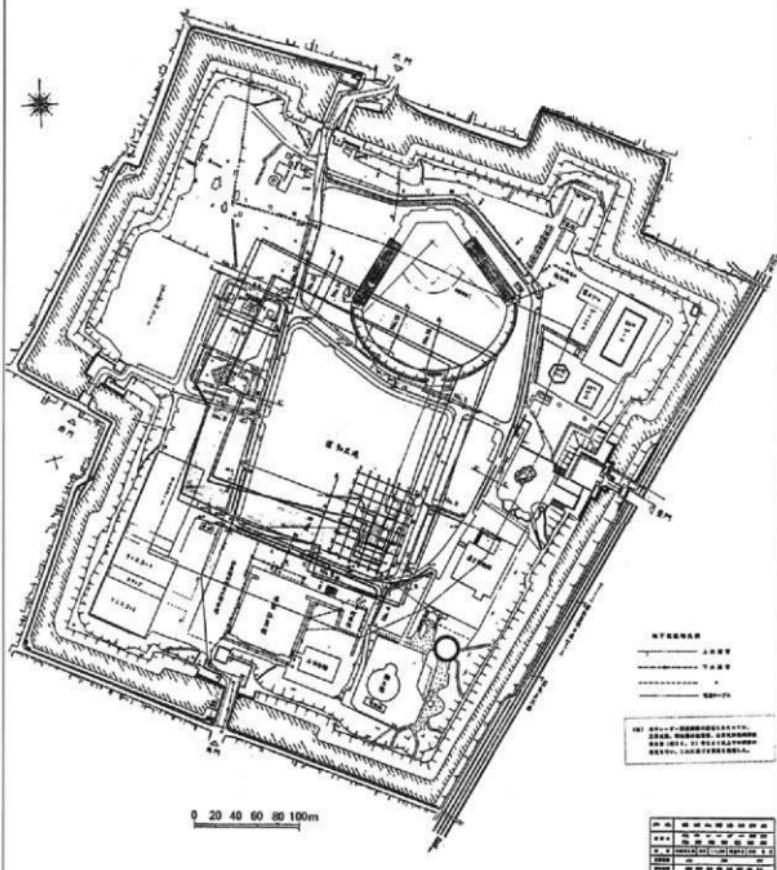
完成した山形城の本丸は東西一丁十九間一尺（約144メートル）、南北一丁十三間（約133メートル）、二ノ丸は、東西四丁三間（約433メートル）、南北四丁二十一間（約474メートル）にも及んだ。さらに、二ノ丸の外に東西十四町五十間二尺（約1617メートル）、南北十四丁十五間（約1553メートル）の三ノ丸が周縁していた。元和8年（1622）、最上山形藩改易の後、鳥居忠政が山形藩主として入部すると、山形城二ノ丸の改修がおこなわれた。最上氏時代の山形城下絵図（山形県立図書館蔵）によると、最上時代の二ノ丸の東南は現在のように直線的ではなく、緩くカーブしていたこと、東大手口と南大手口の枡形虎口が堀の外に突き出す外枡形となっていること、二ノ丸北口が、現在の北口の他にその東にもう一つの門があったことがわかる。また、本丸も最上時代の東門は、鳥居忠政時代のものより北にあったことが分かる。

現況の山形城二ノ丸は、最上山形藩の時代のものに1630年代の鳥居山形藩の大改修と18世紀60年代の秋元山形藩の改修の手が入ったものである。4つの大手口はいずれも石垣の上に櫓を設けた堅固な枡形虎口の形をとっており、このうち東大手口は、高麗門・多間櫓・櫓門・土塀などで囲まれた典型的枡形の構造を有している。

堀は水堀で北側が東側に比して広く、幅約40メートルを測る（「正保年間山形城下絵図」では15間=37メートルとある）。さらに堀の水面から土塀の上部までは、ゆうに20メートルもあり、さらに土塀上に二列の石組が走っていることから、土塀の上に土塀が存在したことが分かる。「正保年間山形城下絵図」からも二ノ丸の土塀上を土塀が周縁していたことがわかるのであり、巨大な堀と土塀の建つ土塀からなる二ノ丸の威容は、仰ぎ見る人々にとってさぞ圧巻だったろうと想像される。また、二ノ丸の土塀の東西南北の端と西口の北部・北口の東部にもに隅櫓があり、特に東北端には、南北10メートル・東西7メートルの橹台状遺構が確認できる。

東大手口から直進すること80メートルほどで、本丸の堀に達したと推測される。本丸は現在、運動広場や野球場・野外ステージの一部となっている。山形市都市開発部公園緑地課の地中レーダー調査によると、ほぼ「正保年間山形城下絵図」に等しい堀を検出できた。本丸の東南部に枡形虎口があつたと考えられる。

（菅田慶信）



山形城本丸地中レーダー探査推定掘削位置図及び山形城二ノ丸図

(山形市都市開発部公園緑地課提供)

やまとたじょうさん の まる
山形城 三ノ丸 201-002

所在地 山形市霞城町

築城者 (最上義光)

築城時期 近世初期

史料 山形城下絵図

参考文献 『山形県史』・『山形市史』・高橋信教『最上時代 山形城下絵図』

概要

国史跡。山形市のほぼ中心街を囲繞する。三ノ丸の堀と土塁が建造されたのは16世紀の最末期。三ノ丸は東西十四町五十間二尺(約1617メートル)、南北十四丁十五間(約1558メートル)にわたる。現在は山形市十日町の歌懸稻荷神社境内にある土塁と堀などを残して破壊されている。付図は、明治34年(1901)大日本帝国陸地測量部発行の2万分の一の地図や聞き取り調査によって推定したものである。

三ノ丸には七日町大手口・横町口・十日町口・八日町吹張口・福荷口・飯塚口・小田口・下条口・肴町口・小横口・錦口の11の出入口があった。山形県立図書館所蔵の最上氏時代の山形城下絵図を見ると、七日町口と横町口以外の諸口は、枠形状になっていたことが分かる。特に、錦口の枠形は大きく描かれている。しかし、国立公文書館所蔵の「正保城絵図」中の「山形城図」では、逆に七日町口と横町口の枠形虎口が大きく描かれており、特に七日町口には櫓門も書かれている。両口の枠形とも石垣を有しており、横町口付近の石垣の一部が、十日町の山形県保健センター敷地内にある。下部は石垣で、その上に土をもっており、比高差は約3メートル。底辺部の東西は23メートルほど。南北は20メートルほどである。

横町口より南へ80メートルほどいくと十日町口に到る。ここには比高差約5メートル、長さ30メートルほどの土塁があり、その外側には幅10メートル・深さ3メートルほどの堀が巡っている。現在、歌懸稻荷神社境内になっている。この土塁は1590年代の築城当時のものであるとされている。また、三ノ丸の西南部の福荷口から北上し、飯塚口にいたる部分も、現在公園の一部として土塁上の高まりが残っている。

三ノ丸までが最上家臣団の居住空間であり、11の門の外に町屋敷が拡がっていた。三ノ丸は中央部の本丸から見た場合、東側一帯が広いのに対して、西側は狭かった。山形城大手口が東側であり、市民の居住空間の大半が三ノ丸の東と南側であったことと密接に関係する。

(菅田慶信)



山形城三ノ丸推測図

山形市
南館 201-003

所在地 山形市南館おいせの前

築城者 (寒河江肥前)

築城時期 戦国期

史料 『南館村粗絵図』『最上千種』

概要

当館は、山形市南部の平野部に立地し、旧羽州街道と小滝街道が分岐する交通の要衝に位置する。両街道に囲まれた内側に館跡があり、水堀によって区画された方形館址であったと考えられる。現在は、市街地となっており、わずかに南西辺に幅約4mの堀跡の一部が確認されるのみである。旧状は、南北約50m、東西約70mの堀が方形に廻り、北東部コーナーが縫状に屈曲していたと考えられ、周囲より一段低い堀の痕跡が確認できる。

(灰木光裕)



南館推測図

いづかたで
飯塚櫛 201-004

所在地 山形市飯塚上飯塚

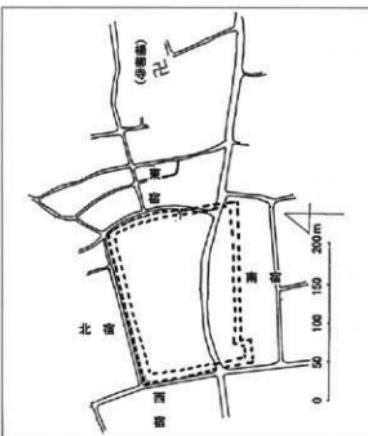
築城者 不明

築城時期 室町期～戦国期

概要

山形城より真西へ進み、須川へと到る地点にある平城。現在、堀跡の一部が残っており、かつては約200メートル四方にわたって堀が巡っていたか。最上義光の時代に阿比子謙岐守らの屋敷地があり、石高が2,500石であったという。東宿・西宿・南宿・北宿の地名が残っており、東方の楊柳寺には延文2年の弥陀三尊板碑がある。

(益田慶信)



飯塚櫛推測図

くぬぎざわらて
檜沢楯

201-005

所在地 山形市檜沢字下檜沢

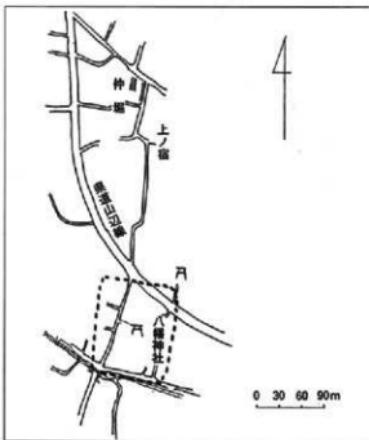
築城者 不明

築城時期 室町期～戦国期

概要

山形市より県道山辺道を西へ進んだ須川の東側にあり、須川に注ぎむ川を堰として利用していた。堰は、堤の一部を残して完全に消滅している。堰は現在の下檜沢にあり、八幡宮がたっている。堰の北の上志戸田の旧称は上の宿。中堀と称される堀がある町場的な空間があった。上の宿より西に向かう道は須川の渡渉地点にいたる。そこには崖八幡・五社の神が鎮座する。須川の対岸に下の宿がある。当堰は須川を掌握するための川の堰である。

(菅田慶信)



檜沢楯推測図

ならきさわらて

村木沢楯 (長岡楯)

201-006

所在地 山形市大字村木沢字長岡

築城者 不明

築城時期 不明

概要

白鷹丘陵の東麓の比高差 20 メートルほどの独立丘陵にあり。神保關岐守・江口五兵衛の居城と言われているが確証はない。南北に長い主郭を中心にしてその下に 3 段ほどの腰曲輪を配置した単純で素朴なる城館である。かつては館の周囲を堀が巡っていたという。城の東端に 1600 年、出羽合戦の際に、戦死者の首を洗ったという井戸がある。

(菅田慶信)



村木沢楯略測図

だい うえたて さのたて
台の上櫨 (佐野櫨) 201-007

所在地 山形市大字村木沢字佐野

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

白鷹丘陵の東山麓のにある平城。北には若木城が、南には村木沢館がある。鎌倉初期の佐野彦右衛門尉の居館と言うが、確証はない。現在は堀跡がわずかに残るのみだが、かつては上の沢川の流水を利用して東側の堀とし、西と南にも堀が巡っていたという。堀の北東部には、「馬場」・「的場」、その北には上宿の地名がある。

(菅田慶信)



台の上櫨推測図

おちあいたて
落合館 201-008

所在地 山形市千歳2丁目沖の原

築城者 (落合伯耆守)

築城時期 戦国期

概 要

馬見ヶ崎川右岸の平地に立地し、館跡があった付近は周囲より若干高い微高地状を呈する。館跡の造構としては、現在宅地、畠等になっており、ほとんど認められないが、北東部に南北に走る堀跡の一部と考えられる幅約2mの堀が確認される。館跡は、山寺へ至る街道に面し、馬見ヶ崎川を渡る直前の防衛上の要所に位置する。

(菅田慶信)



落合館推測図

所在地 山形市下若木字館

築城者 不明

築城時期 不明

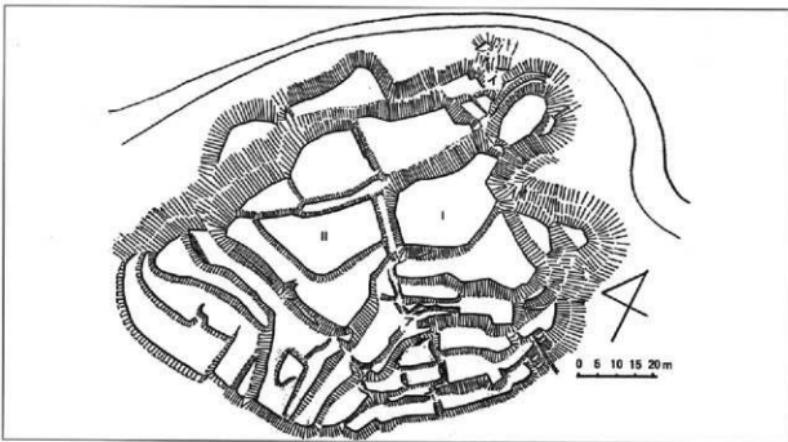
史料 「性山公治家記録」

概要

山形城からほぼ真西の白鷹丘陵の東麓に位置する。山辺より南へ進むと当城に到り、さらに南へと進むと、狐越街道と交差する交通上の要衝にある。比高差は約50メートル程。城の西から北・東へと川が巡り、天然の堀を形成する。永享10年(1438)、最上頼宗家の新関吉綱によって築城されたというが、確証はない。天正2年(1574)の最上義光と義守との争乱の時、義守方だった当城は、最上義光方の軍勢に「外城」を攻められている。

城は、一城別郭的な様相を持ち、主郭にあたる曲輪Iと副郭にあたる曲輪IIとの間に幅5メートルほどの堀が走っている。主郭の東側には、連続的な小さな曲輪が配列されており、アの地点付近には虎口の存在が想定される。ただし、城のほぼ全体が現在畠地となっており、その造成のために削平されている可能性もある。城の南端は、大きな堀切で広福寺から当城へ続く尾根筋を断ち切っており、現在は町道が走っている。主郭の西側にも比較的大きい曲輪があり、残存状況もよい。城の北西部へ降りていくルートは掘手口であり、途中のイの地点は虎口である。最上山形藩の改易とともに廃城。

(菅田慶信)



若木館略測図

もんでんだて
門伝櫓 201-010

所在地 山形市門伝北沢

築城者 (伊良子弾正)

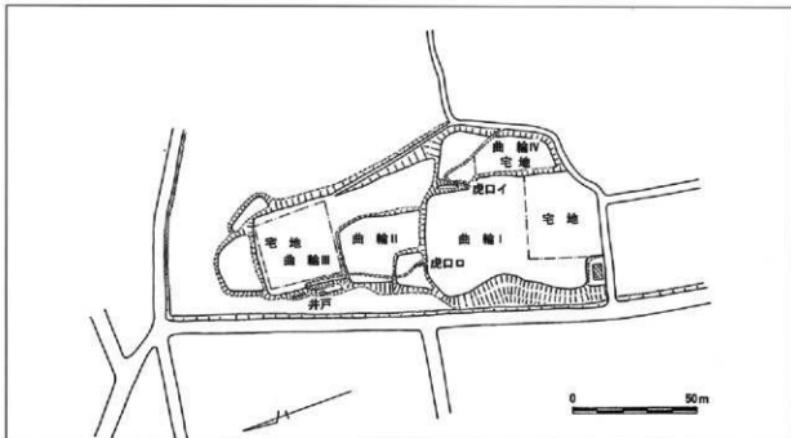
築城時期 戦国期

概 要

山形市の西部、白鷹丘陵山麓部の低平な残丘上に立地する。櫓跡は、門伝集落北西端の館ヶ崎と呼ぶ、北方に向かって舌状に張り出す低丘陵にあり、旧狐越街道のルート上に位置する。西側水田面からの比高は約5mである。現在、丘陵上は、畠および宅地となっており、現況はかなり改変を受けていると考えられる。

曲輪Iは、東西約40m、南北約70mを測り、丘陵の最高所に位置し主郭と考えられるが、南側は宅地になっており、かなり削平を受けている。従って、曲輪Iに対する兩側の施設については明確にしえないが、南縁を東西に走る道路は切り通しになっており、ここに丘陵を分断する堀切が存在した可能性もある。丘陵の東麓を通る道路から分岐して曲輪IVに入り、虎口イを通って主郭に至るルートがあり、虎口付近に腰曲輪状のテラスが確認できる。また、曲輪IIIの東麓直下に井戸跡があり、ここから曲輪IIに至り主郭へ入る虎口ロも考えられるが、かなり改変を受けており明確でない。曲輪IIIの北西部コーナーに塚があり、五輪塔一基がある。

(茨木光裕)



門伝櫓略測図

はせ どうじょう
長谷堂城

201-011

所在地 山形市本沢長谷堂城山

築城者 不明

築城時期 戦国期

史料 『山形県史 古代中世史料』1・2

参考文献 菅田「長谷堂城の築城プランについて」

概要

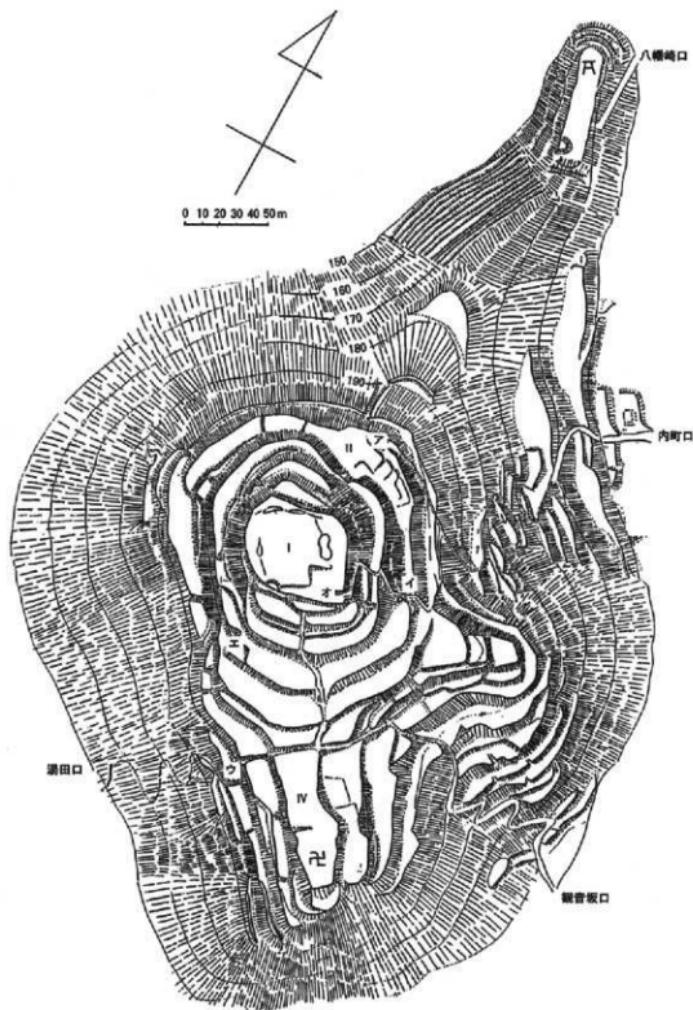
山形平野の西南の端に位置する比高差約100メートルの独立丘陵にある。白鷹丘陵を越えて長井に到る小滝街道と、南進して久保手を越えて上山に到るルートが交差する交通上の要衝に位置する。史料上の初見は、1514年に伊達稙宗軍の山形平野侵攻にさいし、伊達軍が長谷堂において最上兵と合戦し、楯岡・長瀬以下1000人の最上兵を斬り、同城を伊達家臣の小笠川親朝に守備させたという「伊達正統世次考」の史料。その後最上方の城となり、16世紀末期の城主は志村伊豆守光。1600年9月の出羽合戦は、当城を攻めようとした上杉方の直江兼続と後詰部隊を送った最上義光方との戦いであった。その後、当城の城将は坂紀伊守光安。最上山形藩の改易とともに廢城となる。

本城は、基本となる曲輪IIを中心として絶対的防衛地点が想定され、それを守るべく多くの曲輪が連続的かつ有機的な関係を持ちながら造られている。主郭の曲輪Iに到るには、内町口・八幡崎口・観音坂口・湯田口の4つのルートがあり、このうち内町口と観音坂口は麓より曲輪が連なっている。大手口である内町口より曲輪IIに入るに地点に、アの樹形虎口と幾重にも横矢がかかるイの虎口を突破しなければならない。曲輪IIには、数棟の小屋掛けが可能であり、その基壇状造構が確認できる。八幡崎口を登ると、現在、八幡神社が建つ曲輪の西南の斜面に12段の帯曲輪が拡がる。1600年の長谷堂合戦の時、上杉方は、この八幡崎の北方、約1キロ程の所に付城を築いたといわれ、押し寄せてくる上杉軍に対する、防御装置として急速造成された可能性が高い。ここより尾根づたいに主郭の方に進むと、土壁状造構があり、曲輪IIに到る。

長谷堂城の西側斜面の湯田口から登ってきた敵兵に対してはウの虎口が設けられており、道は二回ほど葛折となって曲輪IVに入る。この曲輪には、最上三十三觀音の札所、長谷觀音堂が建つ。これより上の曲輪に到り、前述の曲輪IIと同じ高さの曲輪に登らせないために、エの地点にも三方から横矢が入る虎口が設けられている。観音坂口は、麓から曲輪が連なり、曲輪IIと同一の高さの曲輪に入らせないために、途中に虎口が構えられていたと想定される。城の南西端には堀が確認でき、かつて城の中腹部を一巡していたといわれている。城山の西斜面にはかつてブドウ園があり、その造成のために斜面の削平がなされたが、この西斜面には内町口で見られたような連続する曲輪は観察できなかったという。主郭の曲輪Iの南側には、物見櫓がたったと推定される土壇状造構がある。主郭は、南北約55メートル、東西約60メートルである。内町口から主郭に入る地点に権現神社が建っているが、この部分も小規模ながら枠形状の虎口オとなっている。

城山の麓には、かつて上幅9メートル、高さ5メートルの土塁とその外に水堀を配したがあったといわれ、城山をほぼ閉鎖していたという。また、城山の東側には、内町などの地名も残り、元和の検地帳によると内宿に44の屋敷がある。内宿の外側にも堀が巡る二重堀の都市的景観を呈していた。

(菅田慶信)



長谷堂城略測図

すげきわやまほんじんあと
菅沢山本陣跡

201-012

所在地 山形市菅沢

築城者 直江山城守兼続

築城時期 廉長 6年

史料 『上泉泰綱条書』(小山田文書)

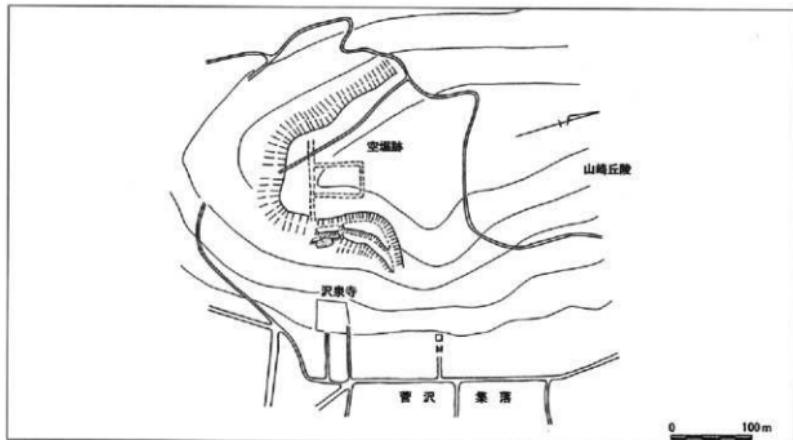
概要

山形市西部の菅沢集落の背後に連なる山崎と呼ぶ丘陵に位置する。同丘陵は、標高約200m、東方の水田方面からの比高約60mを測り、尾根上には古墳時代中期後葉の菅沢2号墳が所在する。

陣所があった地点は、菅沢、沢泉寺背後の丘陵地であるが、昭和43年頃、付近一帯をブドウ畑に造成し、その際、主要な遺構は大部分削平された。また、最近、丘陵上に老人養護施設が建設され、遺跡はほとんど消滅した。現在、丘陵稜線から若干下がった、浅い谷状凹地の源頭部を囲むように段々のテラスが確認され、岩井戸と称する井戸が残っている。当該遺跡は、廉長5年の所謂、出羽合戦における上杉勢の陣所跡で、菅沢集落背後の丘陵地一帯に、直江兼続を本陣とし、春日元忠、上泉泰綱、木原親重らの諸将が布陣し最上勢との間で合戦が行われた。上杉勢は、直江軍を本隊とし、箕越を通って畠谷城を落し、長谷堂城と対峙する西方約1kmの同丘陵上に陣を構えた。

畠地造成以前、丘陵の頂端部にコの字状を呈する幅3m、深さ60cm程の空堀があり、南端は東西に走る長さ約250mの空堀によって区画された陣跡があったという。

(茨木光裕)



菅沢山本陣跡推測図

や かしわだて
谷柏館 201-013

所在地 山形市谷柏

築城者 不明

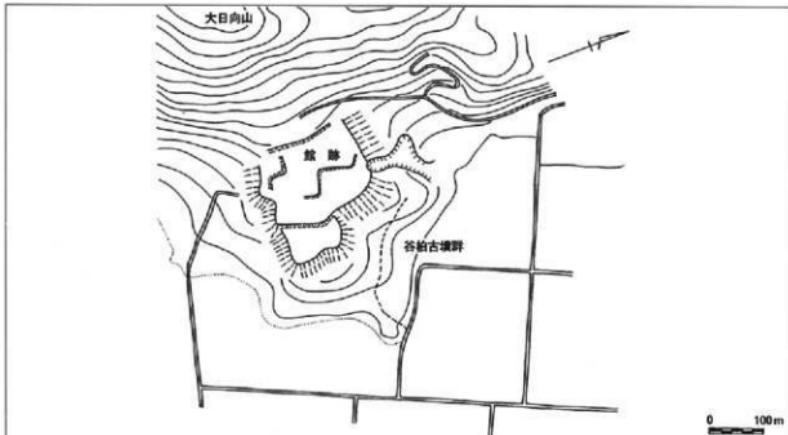
築城時期 戦国期

概 要

山形市南西部の盆地縁辺を画する丘陵が平野部に張り出した高崎山と呼ぶ低丘陵上に立地する。標高は約150m、東方の水田面からの比高約20mを測る。館跡は、高崎山の丘陵頂端部から大日向山（標高239.6m）の山麓部へ続く尾根状の台地に所在し、丘陵突端には、箱形石棺を内部主体とする谷柏古墳群がある。

丘陵上は、平坦で東西約140m、南北約180mを測り、現在ブドウ畠となっている。その開墾に伴って館跡にかかる遺構は全く消滅している。以前、丘陵上に池があり、掘跡の一部であったと云われているが、現状では確認することができない。谷柏館がある丘陵を含む一帯は、古代から中世にかかる多くの遺跡が密集する地域であり、大日向山山頂から経塚が発見されている。また、館跡周辺には五輪塔が散在し、以前、多量の備蓄鏡が出土した。この地域は、遺跡のあり方等を考えると、地域の豊饒的性格を指摘することができ、それを包括するような状況で館が築かれたと思われる。また、丘陵の鞍部を越えて長谷堂城へ至るルート上に位置している。

（茨木光裕）



谷柏館略測図

所在地 山形市成沢

築城者 不明

築城時期 室町期～近世初期

史料 『最上記』・『奥羽永慶軍記』・『最上家中分限帳』

参考文献 伊藤清郎「羽州最上成沢城をめぐって」

概 要

山形平野の東南部、奥羽山脈の山麓の比高差 57 メートルほどの所に位置している。当地は、山形城より、東南に進み、当城から奥羽山脈の裾野を南に進んで、上山方面に到る交通上の要衝にある。また、当城から真東に到れば、中世の山岳信仰の一つ龍山信仰の登拝口のルートとの分岐点にもあたっていた。

城の範囲は南北で 580 メートル、東西で 350 メートルに及ぶ。城は斯波兼頼の孫の兼義が、成沢城より北西にある泉出館から当地に移った時の築城という。天正 6 (1587) 年の最上義光と、伊達輝宗の応援を受けた上山満兼とが柏木山で合戦した時、山形防衛の前線基地となったのが、当城であった。慶長 5 年 (1600) の時の城主は、坂紀伊守。その後、氏家尾張守・安食大和守・寺内藤摩守などが城主となった。

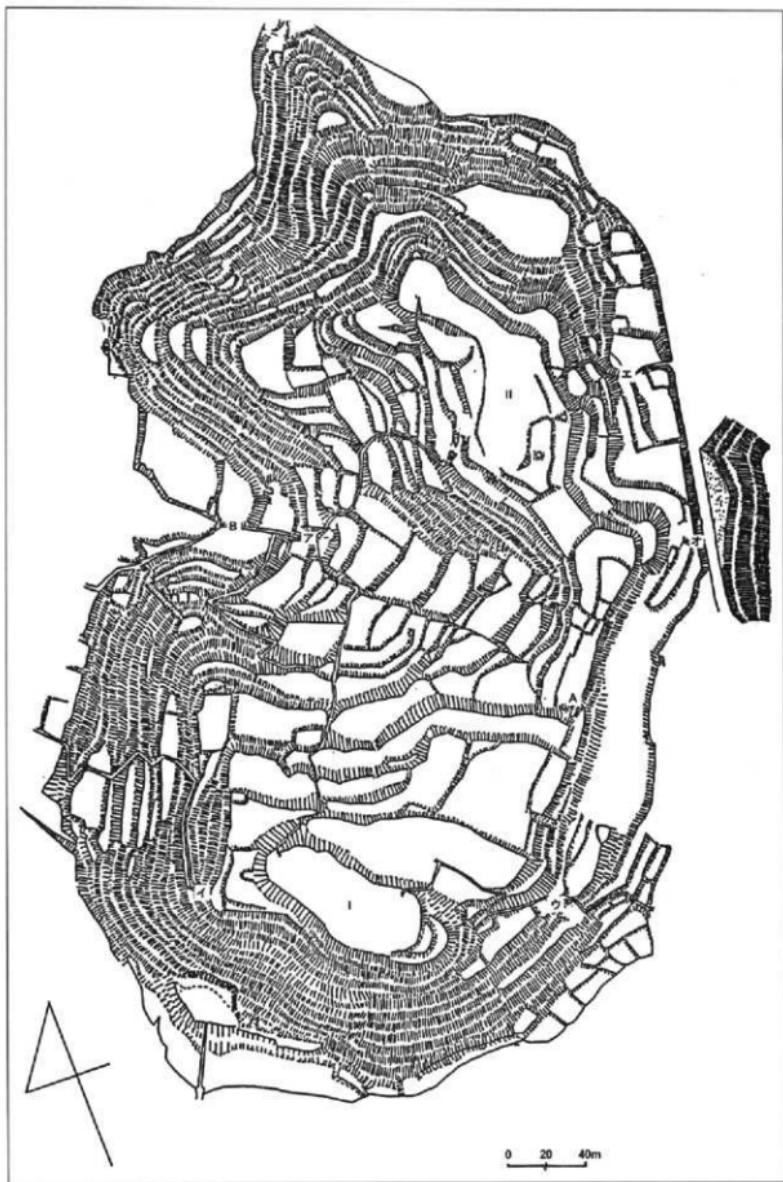
城は、2つの中心点を持つ一城別郭型的な様相を有している。曲輪 I が本丸に、曲輪 II が二の丸にある。両者は尾根道で連絡されており、A の地点には土塁の残存も確認されている。曲輪 I も II も、その下に幾重もの曲輪を配しているが、畠やブドウ園造成のために削平されている。アの地点は虎口であり横矢が入る構造になっており、「和合」と称されている。B は道でアの地点で 2 つに分かれ、各々が曲輪 I と II へと到る。他の虎口がイである。この地点は、城の西麓にある常善寺から入るルートである。

さらに城の東南にも虎口ウがある。この地点は横矢が入る虎口であり、「大手口」という伝承が地元にあり、虎口の残存状況もよい。また、曲輪 II に城の東北部から入る道としてエがあり、途中の折りでは横矢が入るようになっている。また、オの大きな堀切で尾根筋を斬ち切っている。現在は、その堀切を拡張して道路が通っている。また、この堀切の東方に連なる高日向山の方から櫛を用いて城内に飲料水を引き込んだという伝えもあって、堀切の付近は「櫛下」称されている。

曲輪 II には秋田藩佐竹氏の寄進による馬頭観音が、また曲輪 I には秋葉社が建つ。秋葉社の真下には八幡神社が建ち、県文化財の平安末期の石鳥居が併立している。八幡神社は成沢城のある山上に鎮座しており、築城とともに現在地に下したと言われている。成沢城の築かれた館山全体が龍山信仰の登拝道の一つ成沢口に位置していた。

成沢城の西側真下を鳴沢川が流れ、天然の内堀を形成しており、内堀と館山との間の空間に城主の居館や家臣团屋敷が拡がっていた。また、鳴沢川に沿って道が走り、都市的な場が形成されていたことが、馬場宿・裏宿・町裏の小字名からも言える。現在の常善寺門前には六面石幢がたっている。このような都市的空間の西側を囲繞する形で外堀が巡っていた。成沢城は、宿町を包み込んだ宿城として総構えの構造を有していた。

(菅田慶信)



成沢城略測図（作図者：伊藤清郎）

いづみでじょう
泉出城 201-015

所在地 山形市成沢久保田

築城者 (大極兼義)

築城時期 室町

史 料 『渡辺家文書』山形市黒沢

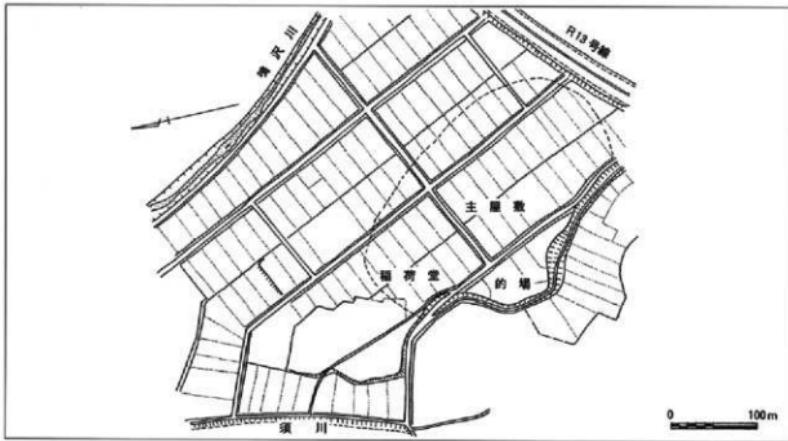
概 要

山形市南部、須川右岸に流入する鳴沢川の合流点付近に位置し、両河川にはさまれた舌状台地上に立地する。斯波兼頼の子、直家の六男である大極兼義が当地に分封され、成沢東出の地に永徳3年築城したとされ、その2年後に成沢館山に移ったと伝えられる。

遺跡は、昭和30年頃に施工された耕地整理および、それ以降の宅地造成などにより、ほぼ壊滅しており、館にかかる遺構は現在、確認できない。付近には、的場、主屋敷、本館、稻荷堂などの地名が残っているが、短期間の館跡であり、その様相は全く不明である。

館跡の所在地については、以前から、須川左岸に接した低地にあったと考えられてきた。その地域は、須川の氾濫原に位置し、天明の洪水によって流出しており、立地状況からみて館跡があったとは考えられない。前記のように須川右岸の当該地点は、二つの河川に画された段丘上に立地し、関連する地名が残っており、成沢城の前身としての背景を考えれば、この地域に館の所在を想定するのが妥当と思われる。

(茨木光裕)



泉出城推測図

所在地 山形市上野

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

山形盆地の東縁を画する藏王上野地区の丘陵山中に位置する。館跡は、竜山泥流の形成した傾斜面にそって点在する上野集落の北東方にある。南と北の両側を沢にはさまれ、西に向かって舌状に大きく張り出した板山尾根と称する山丘の突端、頂上部に立地する。館跡が所在する尾根の東と西の両斜面は、裾部を流れる深い沢に急斜面となって落ち込んでおり、両側の二つの沢が、館跡を画す防御的機能も果たしている。この山丘は、標高約460m、西側を走る道路からの比高約60mを測り、地元では小夜盤山と称している。築城時期、館主等の伝承は全く無く、その詳細については不明であるが、遺構の遺存状況は比較的良好である。

当該館跡は、曲輪Ⅰを主席とする単廊式の山城で、東から続く尾根筋を巨大な堀切Aによって切断している。堀切Aは、両側斜面にまで及び、長さ約42m、幅約5m、深さ約2mを測る。曲輪Ⅰは、最高所に位置する主席で、長さ約38m、最大幅約40m程の規模である。西に向かって緩く傾斜し、曲輪内は未整地の状態である。曲輪Ⅰから西に張り出す尾根にそって4段の曲輪が連なるが、北側端部は、縁辺まで至らずに曲輪Ⅰから続く平坦面と接している。

曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰの北・東辺および南半部を囲む幅約4mの帯曲輪で、堀切Aによって切断された部分に長さ約7mの小規模な土塁1がある。主席の北側にも、ほぼ等高線にそって土星が認められ、土塁2は長さ約15mである。この内側に堀底道があり、この地点に虎口イが想定される。

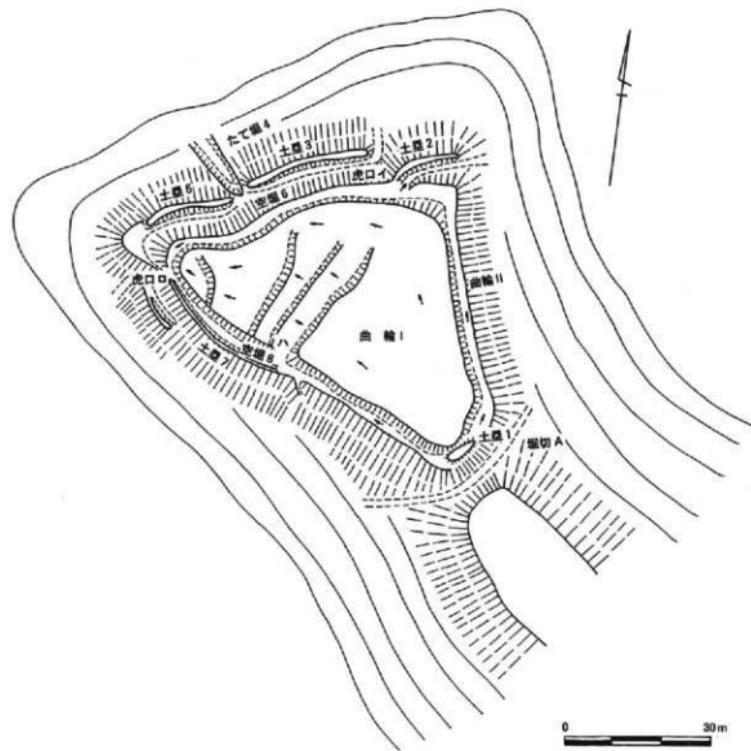
曲輪Ⅱから一段下がった地点に土塁3および土塁5があり、長さは、土塁3が約26m、土塁5が約18mである。土塁3と土塁5が途切れた部分に、たて堀4が掘られており、長さ約14m、幅約4.5mを測り、直線的に山麓に向かって落ち込んでいる。土塁3および土塁5の内側には、空堀6があり、尾根が張り出した北西部コーナーに小規模な腰曲輪が認められる。

主席である曲輪Ⅰの南西部にも、長さ約34mの土塁7がほぼ等高線にそって存在し、その内側に空堀8がある。虎口は、館の北および西に発達した樹型虎口がみられ、土塁2の内側に虎口イが想定される。さらに、空堀6の堀底を通り、腰曲輪から虎口を通り曲輪Ⅱの端部に至るルートも考えられる。また、空堀8の堀底を通り虎口ハから曲輪Ⅰに入る樹型虎口がある。

当該館跡が、立地する尾根端部の西側斜面は、比較的傾斜が緩く、この地点に土塁、空堀等を配置し、東の尾根筋を堀切によって切断している。しかし、主席を中心に認められる帯曲輪、土塁、空堀等や、樹型虎口から主席へ至る明瞭な構造的意図を読み取ることができず、個々の施設は、全体的に統一性に欠ける配置状況であり、山形市域の山城でも特異な様相を呈している。

上野地区は、藏王温泉に至る道路を登った山間部にあり、館跡の性格も明確には把握し得ないが、竜山へ至るルート上に位置し、館跡西麓部に大坊清水と呼ぶ湧水がある。付近には、札前、的場、城表等の地名が残っており、竜山を中心とする山岳信仰との係りも指摘できる。

(大堀雅之)



上野館略測図

いいだたて
飯田館 201-017

所在地 山形市飯田

築城者 飯田播磨守

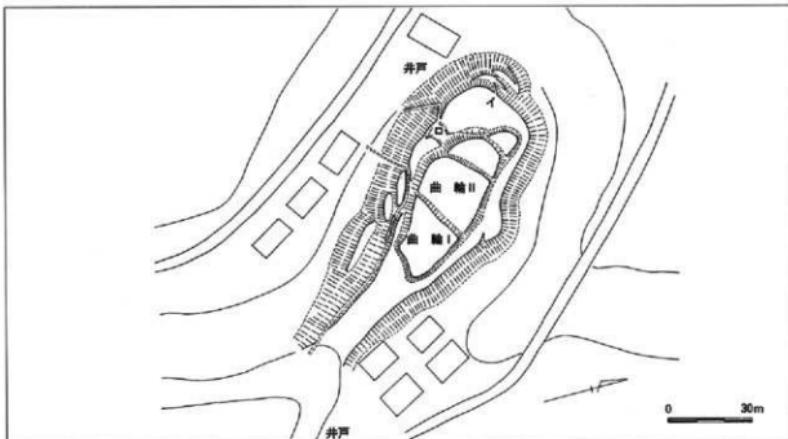
築城時期 戦国期

概 要

成沢城の北東約1.5kmに位置し、丘陵山麓が平地に張り出した台地先端部に立地する。標高は約150m、比高約10mを測り、東方から張り出した丘陵は先端部で広くなり、館跡はその端部に所在する。館主は、飯田播磨守と伝えられ、尾花沢の本飯田より当地に封任され築かれた居館跡と考えられる。曲輪の配置等をみると、軍事的機能よりは日常的な居館としての性格を指摘できる。飯田播磨守は、慶長6年の出羽合戦の際、畠谷城救援に向かい戦死している。

館跡が所在する丘陵は、現在、畠、雜木林となっている。主郭部分の丘陵上の平坦面はブドウ畠として利用されており、現状はかなり改変を受けていると推測される。主郭は、東西約45m、南北約25mで丘陵先端に向かって段々状の曲輪が連なる。主郭を囲むように幅約8~12mの帯曲輪があり、丘陵最先端と南面に小規模な腰曲輪群が確認できる。虎口は、改変を受けているため明確ではないが、丘陵最先端の腰曲輪群を上った付近に、および南斜面口あたりに想定できる。

井戸跡は、先端部に近い南西麓と館跡南東の山麓部にあり、後者の井戸から館跡内に引水した水路跡が現存する。
(村山正市・茨木光裕・大場雅之)



飯田館略測図

所在地 山形市上山家町野伏山

築城者 不明

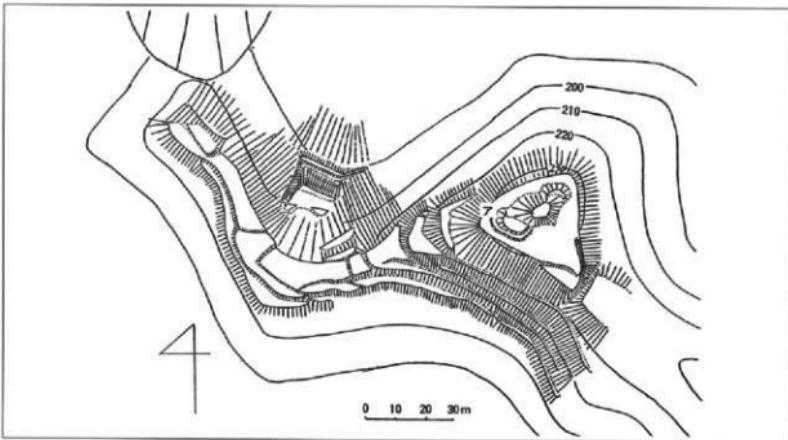
築城時期 不明

概要

山形市の東部、馬見ヶ崎川の東側の比高差約80メートルほどの山上にあり。山形城より東部に進み、当城から北上するルートは中世の幹線道路であった。山家氏の始祖は山家信彦。南北朝期は南朝方の国人領主で、やがて羽州探題斯波氏の臣家となり、後に最上義光の直属家臣となる。

主郭は狭く、物見台的な高まりを有する。主郭の東側は、浅い掘切で東に続く斜面と断ち切られているが、十分な備えとは言い難い。主郭の西端に虎口（ア）と考えられる地点がある。主郭から西に向かって緩やかに降りていく斜面に4段ほどの小規模な曲輪が配置されている。さらに、その西側には比較的広い曲輪が延びている。この尾根筋の北側には、縦堀とそれに続く横堀があり、北から侵入する敵兵に対する備えとなっている。主郭の南に4本の腰曲輪が走っているが、後世の開発による造作とも考えられる。この城の麓には、入宿・下宿・浦宿・川原宿・表宿の地名も残り、さらには貞治7年（1368）の月山結衆板碑もあり、都市的空间が残っていた。

(菅田慶信)



山家城略測図（作図者：大場雅之）

所在地 山形市風間

築城者 不明

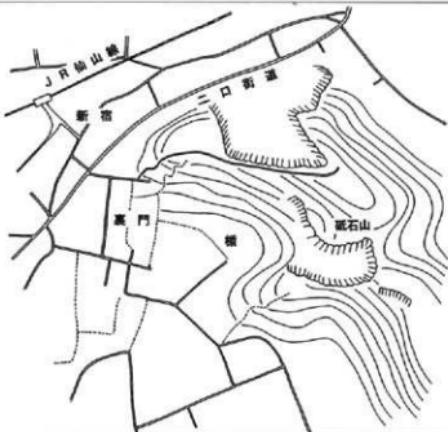
築城時期 戦国期

概 要

山形市の北東部、盆地東縁を画する丘陵が大きく盆地平野部に張り出した突端に位置する。館跡は、大岡山から派生した標高 220m の砥石山にあったが、採石場となり丘陵が大きく削平され、造構は壊滅した。以前、丘陵上に東西 200m、南北 150m 程の平坦地があり、馬乗場、的場、櫓倉等の地名が残っていた。砥石山南西麓の平地に、新宿、橋、裏門などの小字と内城という地名があり、水路で区画された屋敷跡が確認できる。

当該館跡があった丘陵山麓部は、山寺街道と二口街道が分岐する地点にあたり、近くに所在する中里館とともに、この両街道を押さえるための館であったと考えられる。字切図によると、街道に面した山麓部直下に方形の水路で区画された居館があり、それを中心として小城的な集落を形成していたと推測される。

(茨木光裕)



風間館略測図

うるしやまたて
漆山館

201-020

所在地 山形市漆山

築城者 最上満頼

構築時期 室町期～戦国期

概 要

山形市の北、漆山地区にあった。最上満直の子、満頼の漆山館という伝承が残る。光明寺本の最上家系図によれば、最上満直の子に満頼と見え、漆山殿・大窪殿とあらわれている。このような史料に従うならば、最上氏間係の領国経営のための城郭と言うことができよう。発掘などの調査はなされず、遺物なども不明である。提示した図は概略的であるが、現在も方形の館跡の痕跡を追うことができる。

(山口博之)



漆山館跡図

だてのじょう
伊連城

201-021

所在地 山形市漆山伊連城

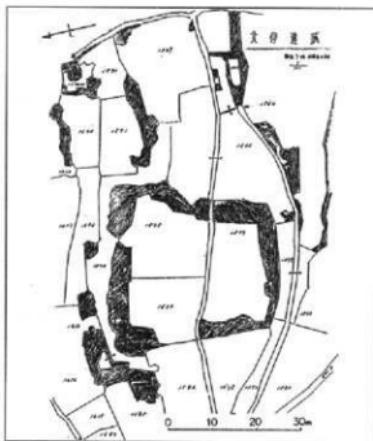
築城者 不明

構築時期 室町期～戦国期

概 要

山形市の北、漆山地区にあった。1945年に始まる飛行場建設とその後の開発のため、現在はその痕跡を見いだすことはできない。発掘などの調査はなされず、遺物なども不明である。伝承等も失われている。中世末この地域はしばしば伊連氏と最上氏の抗争の地となっていたこと、また付近に残る十文字などの交通の要衝としての地名を考えれば、当地に城郭を構えることは戦略的に重要と言える。この地域に複数残る伊連城地名との関係も興味深い。

(山口博之)



伊連城跡図

みうらやしき
三浦屋敷

201-022

所在地 山形市松波 2 丁目十二柳

築城者 不明

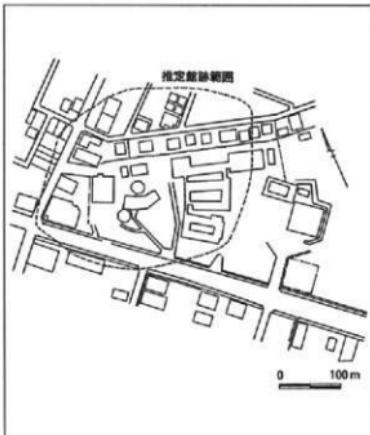
築城時期 不明

参考文献 『山形市史 上巻』

概 要

馬見ヶ崎川扇状地、扇頂部の河岸段丘上に立地した、在地豪族の方形居館跡と考えられる。小白川の西光寺の南方約 300m付近に位置し、現在市街地となり、当該館跡にかかわる遺構は、全く残っていない。

明治末頃まで、方形の水堀が廻り、その内側に土塁があったという。以前、館跡内から小仏像、五輪塔などが出土し、五輪塔は西光寺に移設、保存されている。
(茨木光裕)



三浦屋敷推測図

あらだて
荒櫛 201-023

所在地 山形市荒櫛町 1 丁目

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

荒川左岸の平地に立地し、市街地のなかに位置しており、櫛の遺構は全く現存しない。築城時期、櫛主等の伝承も認められず、様相は不明である。
(茨木光裕)



荒櫛推測図

所在地 山形市吉原若宮

築城者 不明

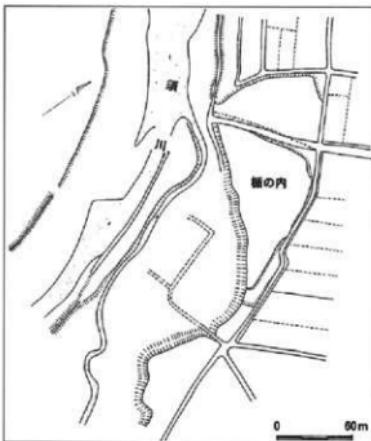
築城時期 戦国期

概 要

須川右岸に接した段丘上の楯の内地内に立地する。付近は周囲より若干高い微高地になつておる、現在は堀跡の一部が確認されるのみである。南は、須川河岸の段丘斜面で画され、西辺に一段低い幅約8mの掘跡と思われる部分があり、道路となつてゐる。また、東西に走る農道にそつて、堀の痕跡と思われる僅かな段差が認められ、東辺で屈曲する。内部は、東西約110m、南北最大幅約70mで、試掘によって、柱穴等が検出されている。

羽州街道が整備される以前の陸路が、須川を渡河する要衝に位置し、それを掌握するための川の楯としての性格を指摘できる。

(茨木光裕)



若宮館略測図

所在地 山形市古館

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 「古館城考」(大曾根郷土史研究会)

概 要

山形平野の中央部、須川の西岸に位置する。南方約1キロに若木城があり、新開氏の居住地の館を最上氏が古館として拡張整備したといわれている。堀の名残が、現在、個人宅地の池の一部として残っているのみである。

(谷田慶信)



古館推測図

なかのじょう
中野城 201-026

所在地 山形市中野

築城者 不明

築城時期 不明

概要

山形市の北方、六十里越えと須川との交差する交通上の要衝にある。斯波最上家三代満直の子満基が初代城主。満基の子孫は当城を拠点とし、代々中野氏を名のった。最上義守も中野城から最上家の家督をついだ。

城は完全に消滅。現在の大郷小学校敷地がほぼ城の中心部にあたり、その東側に居館群があり、今も仲小路・オクラマエ・入倉の地名が残っている。かつては、東側324メートル、西側360メートル、南側200メートル、北側300メートルほどの堀と土塁がまわっていたという。堀幅は、10~5メートルほど。西側の堀は、逆川のすぐ東側を走っていた。堀の内側には高さ2メートルほどの土塁が走り、土塁の上に板塀があったという。二の丸堀には東西南北に門があり、このうち南門が大手口で、内側は登坂と称されていた。逆川の西には「待町」・「七日市場」、二の丸の東門の外には東宿の地名もあり、都市的空間が拓がっていたことが想像される。天正3年(1575)、中野義時が殺害されるに及んで中野城は山形城の直接支配下におかれたと思われる。

(蒼田慶信)



中野城推測図

所在地 山形市中里二本堂

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

山形市の北東部、高瀬地区の二本堂地内に所在し、陸奥国の秋保から名取川を通り奥羽山系の二口峠を越えて、最上領へ至る二口街道に面している。館跡は、高瀬川左岸にそって、奥羽山系から派生する尾根が、平野部へ張り出したその突端部に所在し、猪鼻山と呼ぶ標高343.4mの山頂付近一帯に立地する。北側山麓にある二本堂集落からの比高は、約180mを測り、平野部から望むと円錐形の急峻な山様を呈している。山全体が雜木林で覆われ、遺構の遺存状況はかなり良好で、奥羽山系ぞいに点在する山城では、かなり規模の大きい山城である。

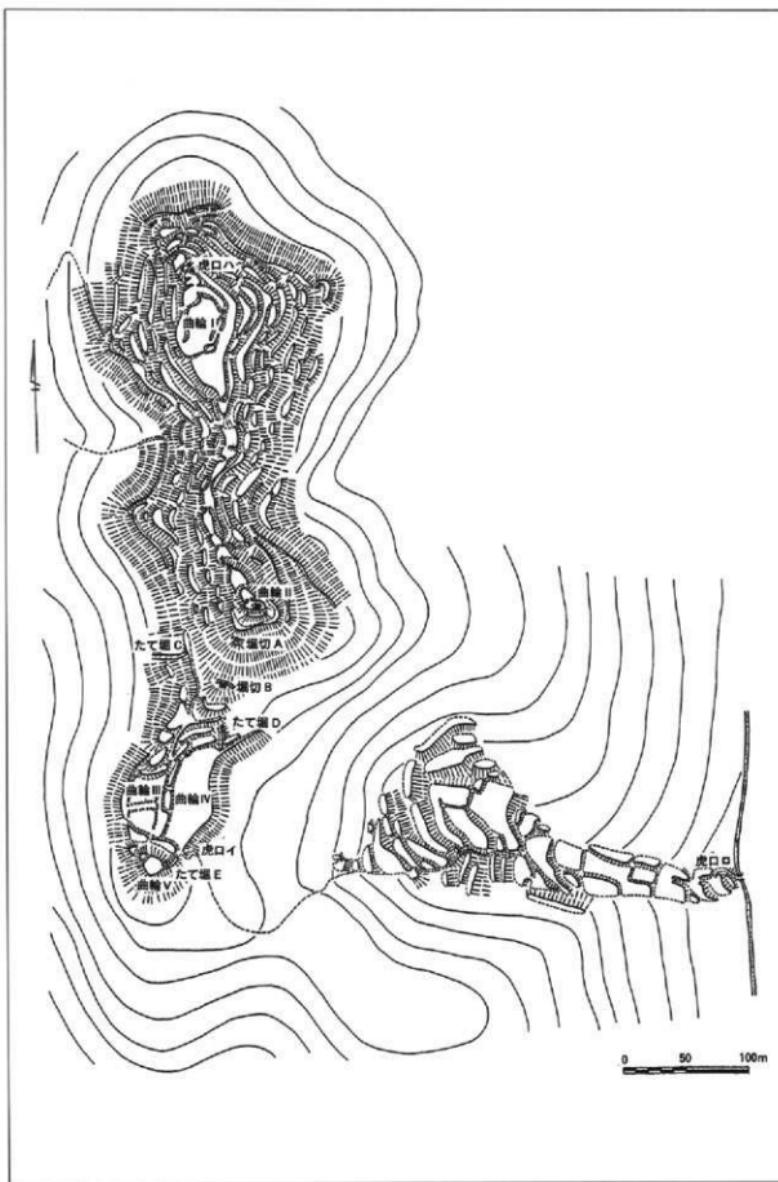
館跡は、猪鼻山の山頂部に主郭と考えられる曲輪Iがあり、南へ続く尾根筋にそって小規模な腰曲輪群が鱗片状に配置されている。曲輪Iは、約50×30m程の大きさで、主郭部を中心に帶曲輪、腰曲輪群が段々状に幾重にも配置され、西側山麓部から登ってきた部分に虎口Hがあり、からめ手の通路にあたると考えられる。さらに、主郭から南に続く、かなり幅の狭い尾根筋にそって、通路を兼ねた小規模な曲輪群が連なり、曲輪IIに至る。その尾根の東西両斜面にも多数の腰曲輪群が認められる。

曲輪IIは、18×10m程度の小規模な曲輪で、現在三角点が設置されており、曲輪Iから続く尾根の南方の肩を形成しており、そこから急激に高度を下げて落ち込んでおり、その斜面に二重の堀切がある。堀切Aは、長さ約12m、堀切Bは長さ約17mで、稜線を分断するように設置されている。また、曲輪IIの南側に3ヶ所の縱堀があり、縱堀Dおよび縱堀Eは、掘り上げた土砂を一方の側面に盛り上げ土塁を築いている。曲輪III、IVは、曲輪Iから続く尾根が、急激に落ち込んだ山麓部にあり、東から緩く入り込んだ谷状凹地の源頭部に位置する。曲輪IIIは、30×40mを測り、曲輪IVは、75×30m程の規模である。この平場には、井戸跡が3ヶ所程確認され、根小屋跡であったと考えられ、虎口Iは典型的な樹形虎口を形成している。さらに、東から入り込む浅い谷の曲輪IIIおよび曲輪IVに至る登り道にそって、山麓部から曲輪群が段々状に連なり、そのなかには、小屋掛けが可能と思われる比較的広い曲輪も認められる。山麓曲輪群に入る虎口Iが大手口と考えられ、発達した樹型虎口を成している。

当該山城は、二口街道を意識したものであり、高瀬川が最初の防衛的性格を有している。高瀬川を渡河し、大手口の虎口Iから登る道は、山麓部の曲輪群で防備され、正面あるいは側面からの矢掛けが可能な配置状況を呈している。その登り道は、根小屋跡と考えられる最奥部の曲輪III、IVに至り、高台に位置する曲輪Vは、見張り台的な性格の曲輪と思われる。

築城者等に関しては不明であるが、城の構造的様相からみて、戦国後期頃の時期が想定される。天正16年頃、奥羽山系をはさんで、伊達と最上の軍事的緊張が高まり、「貞山公治家記録」によれば、天正16年4月28日、秋保付近で山形の兵101人が討ち取られ、21級の首駄がおこなわれたとの記載がある。二口街道に面し、奥羽山系をはさんで伊達領と対峙する当該館跡は、最上領の境目の城として重要な位置を占めていたと考えられる。

(灰木光裕・大場雅之)



中里館略測図

おおがみねだて
大ヶ峯館

201-028

所在地 山形市高瀬上東山

築城者 不明

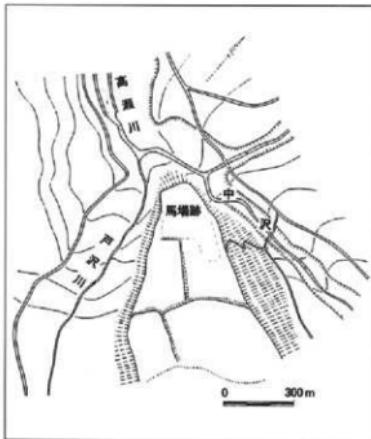
築城時期 不明

参考文献 『高瀬郷土史』

概 要

館跡は、高瀬川上流、平石水集落の西方にある大ヶ峯と呼ばれる丘陵に位置する。戸沢川と中沢の両河川にはさまれ、南方より張り出した舌状台地上に立地する。現在は、山林荒地で、一部畠として利用されている。丘陵上に井戸跡と称する湧水地があり、馬場跡と伝えられる地点もあるが、現状では館としての遺構は残っていない。当該館跡についての記述は、地元に残る伝承のみであり、遺跡の様相については不明である。

(茨木光裕)



大ヶ峯館略測図

しづえだて
渋江館

201-029

所在地 山形市渋江

築城者 不明

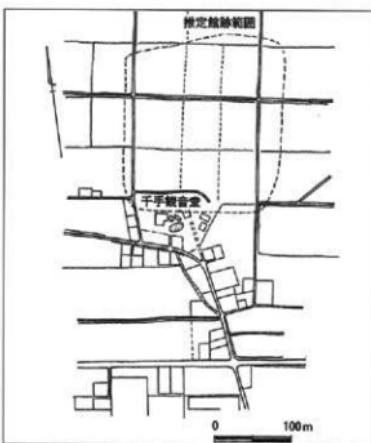
築城時期 戦国期

参考文献 『ふるさと明治』明治地区郷土史
編集委員会

概 要

須川の支流である白川右岸、館の内地内の平地に立地する。現在は、千手観音堂境内に隣接した水田、畠となってしまっており、遺構は全く消滅している。山形城下から高瀬を通り谷地へ至るルート上に位置し、須川から白川をのぼり、当該館跡の近くに至る水路があり、付近に船着場があったと云われる。

館の様相については、現状では把握し得ないが、その立地的状況から須川の水運等に係る機能を考えることもできる。



渋江館推測図

おおがまえだて
大構館 201-030

所在地 山形市山寺芦沢

築城者 本間作右衛門

築城時期 元和6年

概要

立谷川左岸、芦沢集落の薬師堂境内周辺にあったとされるが、遺構は全く消滅している。最上家改易に近い元和6年、本間作右衛門が居した屋敷跡と云われ、元和8年改易に伴って廃された。

寺社境内となっており、当該期の様相については、現状では把握し得ない。(茨木光裕)



大構館推測図

にしおこたんばやしき
西根小但馬屋敷 201-031

所在地 山形市宮町1丁目

築城者 (西根小但馬)

築城時期 宮町～南北朝

史料 『光明寺由来記』慶安5年

参考文献 『山形市史資料編1 最上氏関係資料』

概要

中世の在地豪族の居館跡と考えられる。遺跡は、宮町の慈光寺境内付近一帯の市街地にあり、当該期の遺構は全く残っていない。

斯波兼頼は、延文元年最上郡に入部、同屋敷で越年し、翌年山形城の築城に着手したと伝えられる。近くの円応寺境内に、延文2年の自然石板碑があり、この地域は、中世の主要な幹線が分岐し交差する交通の要衝を占めていた。(茨木光裕)



西根小但馬屋敷推測図

いまづかたて
今塚櫛 201-032

所在地 山形市今塚

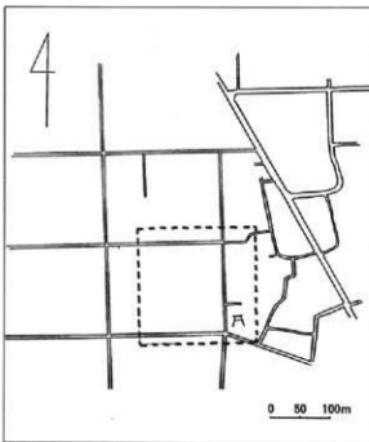
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

山形市の北部、山形平野のほぼ中央部に位置する。天正年間、丹野与惣右衛門の築城と言われているが、確証はない。藤太道という山形より北に直進するルート上にあり。元和8年(1622)、今塚櫛の場所に、曹洞宗高源寺が建てられたという。櫛跡は、現在完全に消滅している。本屋敷の小字名あり。

(芥田慶信)



今塚櫛推測図

どうじん や しき
同心屋敷 201-033

所在地 山形市中野

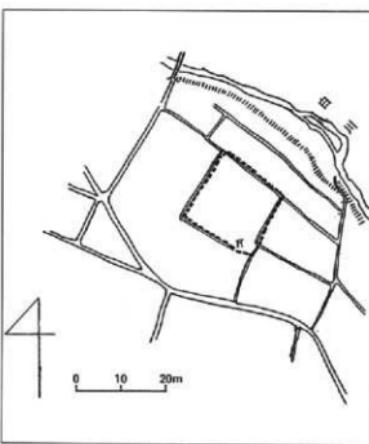
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

中野城から4キロほど東へ進み、白川の西岸にあり。中野城の見張り所的な役割をもった櫛であったといわれている。現在は完全に遺構は消滅しており、富士神社の建つ境内が櫛跡であったといわれている。この地点より、白川を渡りさらに東に1キロほど進むと、千手堂に到る。

(芥田慶信)



同心屋敷推測図

局屋敷 201-034

所在地 山形市村木沢悪戸

築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

山形市の西部、白鷹丘陵の山麓に近い須川左岸に接した低平地に立地する。館跡は、悪戸集落内に位置し、現在個人の宅地になっており、遺構は消滅している。義姫が、里方の最上義光の下に帰り、一時、南館に居したが、その後悪戸に移り、館跡の一角に阿弥陀堂を建て草庵を結び居住したと云われる。

館跡は白鷹丘陵を越える街道が、須川を渡河する地点に位置し、それを掌握するための館であったと推測される。（茨木光裕）



局屋敷推測図

金谷館 201-035

所在地 山形市小白川4丁目

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『馬見ヶ崎川流域の変遷』

斎藤林太郎

概要

馬見ヶ崎川扇状地扇頂部に位置し、付近に三浦館があり、同一の占地状況にある。現在は、市街地に位置し、当該期の遺構は全く消滅している。戦前まで、館の土塁が残っていたが、戦後、農道を開設する際に削平され現存しない。

付近は、管谷街道が山形盆地の平野部へ入る入り口にあたり、在地豪族の方形居館跡とも推測されるが、遺跡の様相は現状では全く不明である。（茨木光裕）



金谷館推測図

まがりもじやまたて
曲 森山櫛 201-036

所在地 山形市柏倉

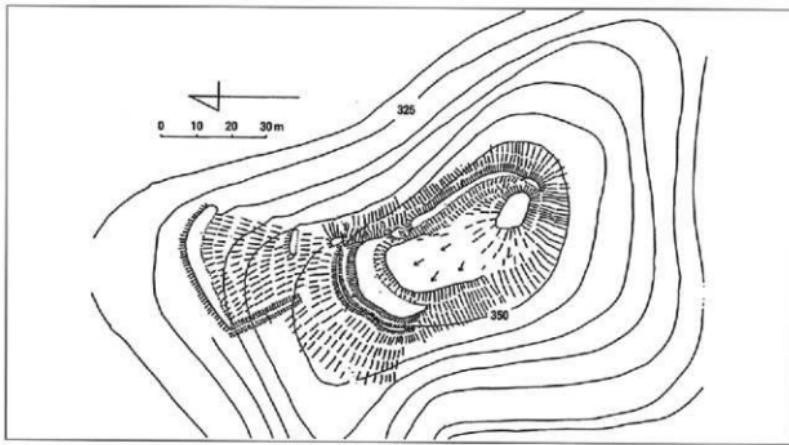
築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 菅田「『境目の城』と城の破却」

概 要

白鷹丘陵の東、富神山から西に続く尾根筋にある。麓からの比高差は、約150メートル程。主郭は、西北への緩い斜面上にあって整地されておらず、小屋掛けは不可能である。中腹の曲輪の西側に深い堀がある。その深さは、最大で、約3メートル、長さも約40メートルで曲輪の西を囲繞する。堀の東端は、その上の曲輪に入るための虎口である。この中腹の曲輪は、整地状況もよく、小屋掛けが可能である。櫛の最下段にも曲輪があり、その長さ約40メートル、幅は最大で6メートルを測る。この最下段の曲輪の西端から上に向けて深さ、約1メートルの縦堀が途中まで走っている。櫛の中段の横堀から最下段の曲輪に至る方向は、むしろ稜線から外れ、約100メートルほどで眼下を通る孤越街道に至る。堀と未整形の曲輪の存在は、この櫛が陣城的なものであったことを類推させる。（菅田慶信）



曲森山櫛略測図

たきのやまたて
滝の山櫓

201-037

所在地 山形市大字柏倉

築城者 不明

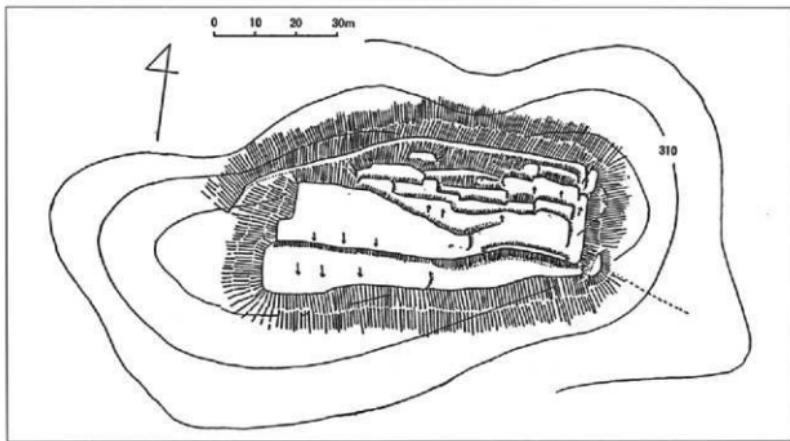
築城時期 戦国期

参考文献 菅田「『境目の城』と城の破却」

概 要

白鷹丘陵の東、富神山から西に延びる稜線上にあり。山形より畠谷を通って荒砥に至る狐越街道を塞ぐ城とし存在した。狐越街道からの比高差は、約 80 メートル。櫓の西側は土砂採掘で破壊されている。また、主郭部分は畠地や果樹園になっている。主郭は、幅 12~13 メートル、長さ約 60 メートル。整地されておらず、あるいは果樹園にするさいに削平された可能性が大である。主郭の東南には、高さ 1 メートル、長さ約 23 メートルの土塁がある。主郭の北側斜面の各曲輪は、微妙な高低差をもって幾重にも拡がっている。最下段の曲輪は道を兼ねた帯曲輪で、西に進むと狐越街道にいたる。この帯曲輪を進む敵兵に上の曲輪から横矢が入る。櫓の北東端に虎口がある。この櫓のある稜線を東に約 500 メートルほど進むと、曲森山櫓がある。

(菅田慶信)



滝の山櫓略測図

おかぐら山城 201-038

所在地 山形市七ツ松

築城者 不明

築城時期 戦国期

史料 『性山公治家記録』

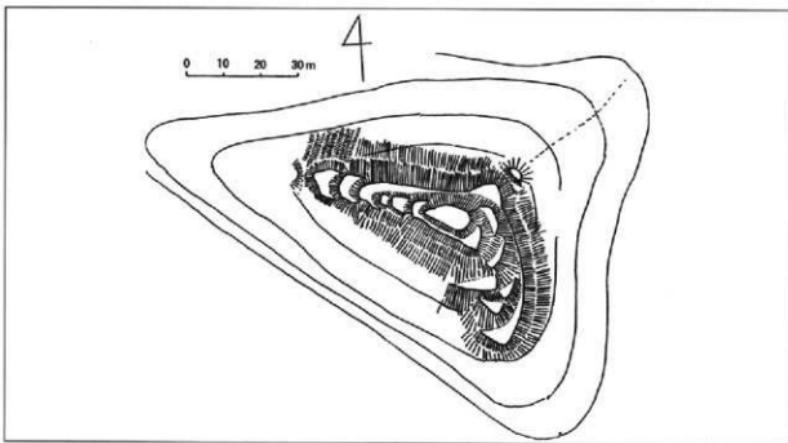
参考文献 菅田「境目の城」と城の破却」

概要

糸越街道の途中、七ツ松集落の北の山稜に位置している。南は急峻な崖で、笠松川に落ちている。尾根の頂上部に南北10メートル、東西15メートルほどの広さの主郭があり、ここより三方に曲輪が延びている。このうち北東のルートは、堀切によって断ち切られ、この堀切よりさらに下れば、門伝に至る。主郭より西の方向にも連続して曲輪が5つほど重層的に続き、その最西端は堀切によって切られている。この堀切の北には、畝状阻障が観察される。主郭より東南の方向にも5段ほどの曲輪があり、最下層の曲輪は帯曲輪となって柵を巡っている。

この城より西の尾根筋を進めば、畠谷城に至る。その途中には、1600年の長谷堂合戦の時、上杉軍と最上軍が激戦を展開し、多数の死者が出て、その首を埋めたという場所もある。畠谷城から尾根筋に降りてきたルートは、この城の北西付近で二つに分かれ、一つは東に進んで柏倉に至り、一つは北東に折れて、若木方面へと向かった。『性山公治家記録』によると、天正2年(1574)5月、長崎某が最上義守への奉公の証として、敵対する最上義光方の籠もる当城を攻撃している。

(菅田慶信)



オカグラ山城略図

いわなみだて
岩波館 201-039

所在地 山形市岩波

築城者 不明

築城時期 戦国期

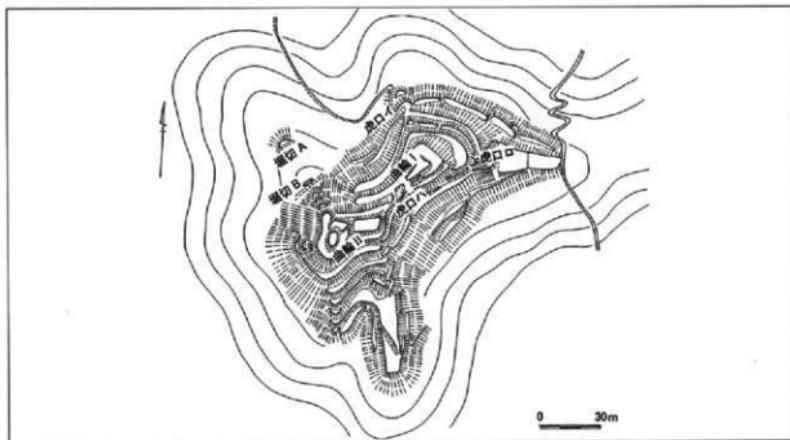
概 要

山形市の東部、行基の草創、貞觀二年（860）慈覺大師円仁の中興という寺伝をもつ石行寺の裏山に位置する。石行寺は、文和二年（1358）から応安八年（1375）にかけて写經事業を行っており、鎌倉期以降、所謂、竜山信仰の中心的な寺院であったと考えられる。館跡は、石行寺背後の、大林山（標高470.6m）から西に派生する尾根の突端部に立地し、標高約300m、西側の集落からの比高約70mを測る。石行寺から尾根の鞍部を通る道路添いに墓地が造成され、一部破壊されているが、雜木林となっており、遺存状況は比較的良好である。

館の北東を通る道路および西藏王へ至る道路に面する斜面に、多くの曲輪が造られており、主郭と考えられる曲輪Ⅰを中心幅2~3m程度の狭い帯曲輪が横重にも配置されている。曲輪Ⅱは、最端部に位置し、擂台的な曲輪と思われる。そこから北西に張り出す尾根にそって連続した腰曲輪群があり、二重の掘切A、Bが存在する。また、西および南西に張り出す尾根筋にも、連続した小規模な腰曲輪群と帯曲輪が認められる。北西麓からの登り道を登った虎口が大手口と考えられ、帯曲輪を通って虎口ロに至り、虎口ハから曲輪Ⅰに入るルートが想定される。

当該館跡は、籠谷街道から分岐して妙見寺、八森を通り山形城下へ至る道路の出口に位置し、その街道を押さえるための館であったと考えられ、石行寺などの寺院勢力との関連も指摘できる。

（茨木光裕・大場雅之）



岩波館略測図

ないじょう

内城 201-040

所在地 山形市鈴川2丁目

築城者 不明

築城時期 平安

史 料 『印役村御御打之帳』元和9年

参考文献 『古代集落の発展と郡衛』

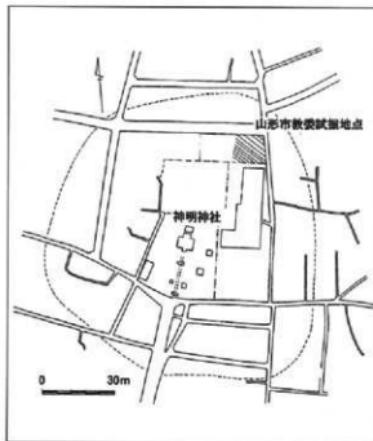
山口和夫 昭50

概要

古代律令制下における最上郡衛の疑定地に比定されているが、確認はない。遺跡は、鈴川にある印役神明神社境内を含む市街地に位置し、馬見ヶ崎川扇状地側縁部の湧水帯に立地する。須恵器、赤焼土器等の遺物が出土し、礎石状の石材が散見されたという。

神社の北東部に以前、国司壇という方形土壇があり、付近より蘇手刀が出土した。網打帳に、内城として約1町5反の小字があるが、郡衛としての確認は得られていない。

(茨木光裕)



内城推測図

ひら し ろすだて

平清水館 201-042

所在地 山形市平清水

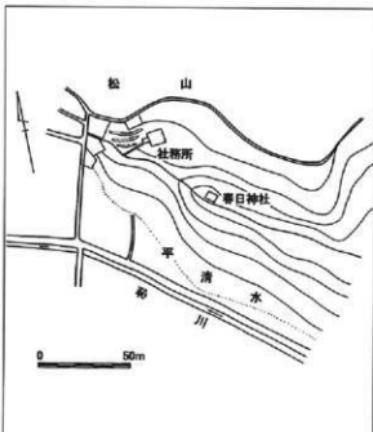
築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

平清水集落の北、千歳山の南西麓から西に張り出す丘陵の突端部に立地する。尾根上に春日神社があり、その付近で比高約40m程度である。遺構は、丘陵先端部の北斜面山麓に幅約2.5mの帯曲輪が3段認められるのみで、神社境内等の改変のため、主要な遺構は、ほぼ消滅したと考えられる。東から続く尾根筋を断ち切る堀切等の施設も、現状では確認できない。丘陵の南斜面には、曲輪等は認められず、笹谷街道に面した防御を想定することが可能かもしれない。

(茨木光裕)



平清水館略測図

かしわぐらたてやまたて

柏倉櫛山櫛

201-044

所在地 山形市柏倉

築城者 不明

築城時期 戦国期

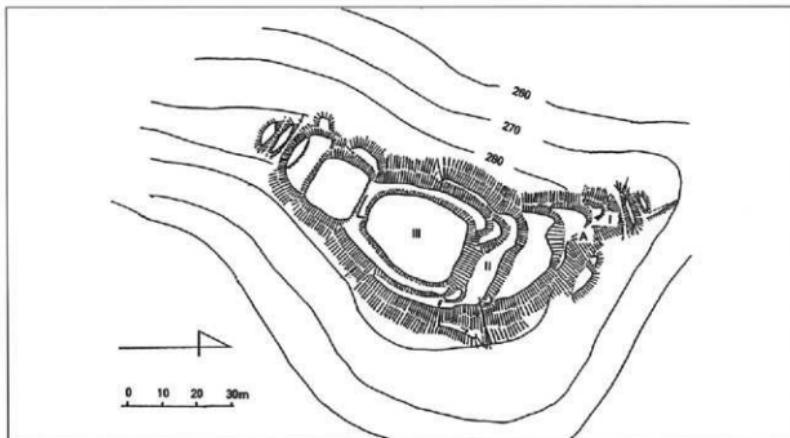
参考文献 菅田「『境目の城』と城の破却」

概要

柏倉の集落より白鷺丘陵の麓を通り、南へ至るルート上に位置する。ここよりさらに西へ向かうと仁田沢から内山、須刈田を経て滝の山に至った。麓との比高差は、約100メートル。南より延びる尾根筋の突端に位置している。櫛の北端に二重の堀切がある。外側は浅く、内側は深い。堀底から内側の曲輪までの比高差は4メートル近くに及ぶ。曲輪Ⅰから上の曲輪に向かうべくAの道を進むと、横矢が次々と射かけられる。曲輪Ⅱは、主郭（曲輪Ⅲ）の真下にあり、ここより主郭に至る地点に虎口の存在が想定され、この虎口に殺到しようとすると、二重の横矢が入る構造となっている。主郭下の切岸は、約10メートル近くもあり、長谷堂城のそれとの類似性を見いだすことができる。

主郭は、南北約30メートル、東西約20メートルの広さで、下に二重の帯曲輪を備えている。主郭は平坦に整地してあり、ここに数棟の小屋掛があったと想定できる。主郭の南にも曲輪が2つあり、その南方にある二重の堀切があり、内側の堀が深くなっている。櫛の位置する山稜のすぐ西の尾根には、鎌倉時代の廃寺、真妙寺がある。

（菅田慶信）



柏倉櫛山櫛略測図

所在地 山形市柏倉中丁

築城者 不明

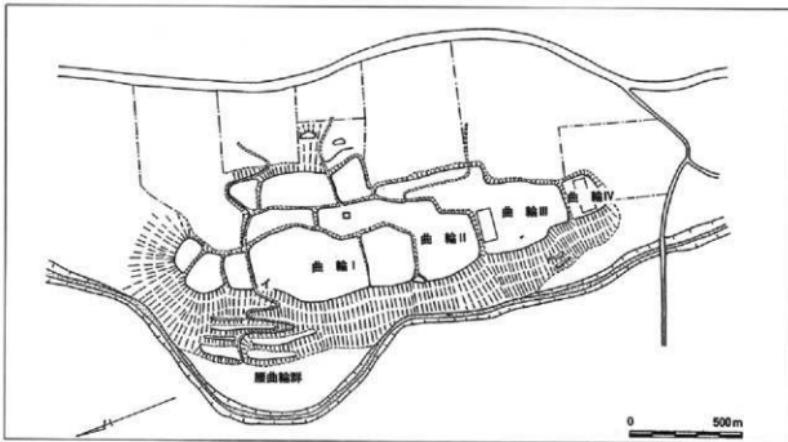
築城時期 戦国期

概 要

山形市の南西、柏倉中丁集落の背後に連なる丘陵上に位置し、その突端に柏倉八幡神社がある。丘陵の西側山麓部を富神川が蛇行しながら北流し、急斜面となって落ち込んでいる。丘陵上は、畠やブドウ畠で、曲輪の一部や東側一帯は宅地になっており、現状はかなり改変を受けているものと考えられる。河川が丘陵山麓に直接接する急斜面には、何ら遺構は認められないが、西に蛇行して右岸部に若干の平地がある部分は、比較的傾斜が緩く、小径の両側に帯曲輪群が存在する。曲輪Ⅰは、南北約70m、東西約30mを測り、最高所に位置し主郭と考えられる。その南側に、曲輪Ⅱ～曲輪Ⅳが丘陵にそって段々状に連なり、曲輪Ⅰの東にも小規模な曲輪群が認められる。虎口は、腰曲輪群を登りきったイの付近、東から曲輪Ⅱに入るロの付近などに想定されるが、改変を受けているため明確ではなく、曲輪等の配置も軍事的機能よりは居館としての性格を指摘できる。

館跡は、出羽合戦時の上杉勢の侵攻ルートに近く、柏倉八幡神社はその際、兵火により焼失したと伝えられる。付近は、小滝街道から分岐して柏倉櫛山館の山麓を通り門伝館へ至るルートと、狐越街道から富神山南麓を通るルートが合流する地点に位置し、それを俯瞰する丘陵に築かれた館跡である。

(茨木光裕)



柏倉館略測図

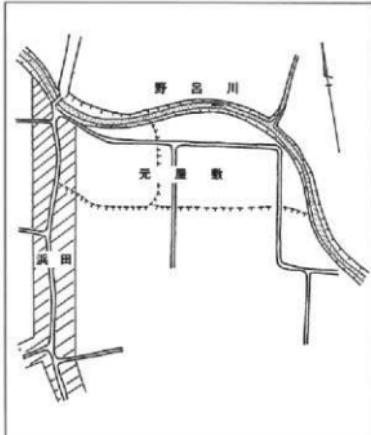
所在地 山形市大野目浜崎

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

山形市北部の平野部に位置し、浜田集落の東側一帯の元屋敷地内に所在する。現在は宅地化が進み、区画整理や河川改修等によって、館にかかる遺構は全く消滅している。遺跡は、野呂川に接した左岸に立地し、北流する流路が西に大きく蛇行し、それによって画された地域は、以前、台地状の微高地になっていた。字切図をみると、館跡付近で野呂川が直角的に屈曲している部分があり、人為的に流路を変更している状況が確認できる。館跡は、旧二口街道に面し、在地豪族の居館跡であったと推測される。（渋木光裕）



浜田館推測図

所在地 上山市中山字上郭

築城者 中山弥太郎

築城時期 戦国期（永禄、元亀）

史料 晴宗公采地下賜録

参考文献『東置賜郡史』『赤湯町史』『山形県史』

概要

中山城は、標高 343.9m の天守山の山頂に位置し、北西から東方に入り込んだ深い谷と、北西の深い谷に挟まれた独立の形状をなす丘上に構築された山城である。

城の縄張りは、北西に榎沢から流れる川と、北東に横町沢を流れる横川に挟まれ、東方の正面に前森と称する小高い山があり、自然の要害を利用した防備の山に囲まれている城である。形態は、基本思想といわれる堅固三段の曲輪からなる。即ち、本曲輪、二の曲輪、三の曲輪が設けられている。

主郭となる本曲輪は、登り口より南北に 51m、東西 38m と梢円形をした平坦な地である。その廻りには土塁が築かれ、東西には、主郭より 4m 高い位置に、正方形で平坦な物見台（天守台ともいう）が設けられており、西北面と北東面には見事な石積がなされている。

二の曲輪は、本曲輪より 4.9m 低い位置に構築されており、南東から西南まで 83m、北東から西南まで 49m の平坦な地で、中山城では最大規模の曲輪である。

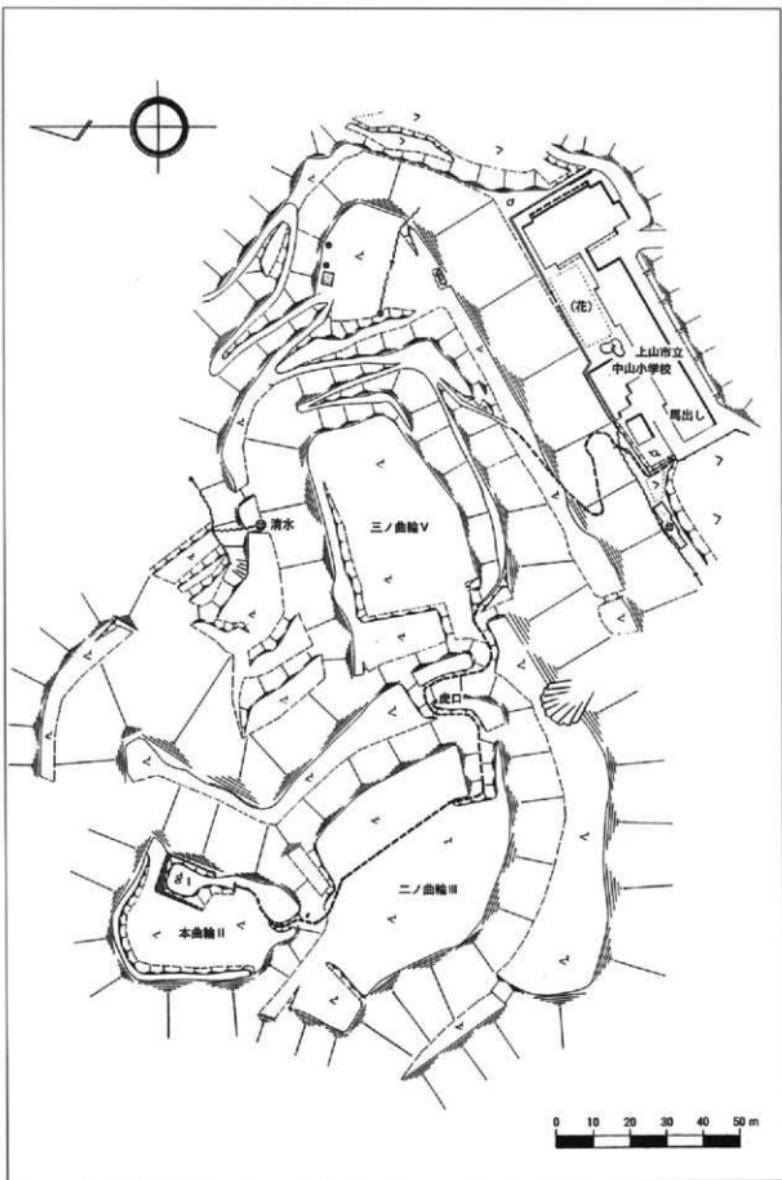
三の曲輪は、二の曲輪より 17.9m 低い位置に構築されており、東から西まで 53m、北から南まで 40m と、やや長方形に近い曲輪である。北側には本曲輪と同様に土塁が築かれており、その高さは 2m から 2.5m、幅も 2m から最大 8m もある。また、三の曲輪から二の曲輪に入るところは急に狭い樹形になっており、5 回も曲折して通らなければならない程、見事な虎口となっている。

さらに、土塁の構築されている北側は急斜面で、真下は狭い曲輪があり、そこに涌水を利用して井戸が設けられている。この井戸を七色の清水と称し、城内の飲用水として使用されていた。昭和 32 年、中山小学校建設の時、井戸を調査している。その時、井戸の四方が木枠で組まれ、深さも 180cm 程あったが、遺物品の出土はなかったという。

本曲輪と三の曲輪を挟む北東の谷間は湿地帯で薄暗く、六段階状の見事な帯曲輪がめぐらされているのも一つの特徴であると思われる。

現在、元中山小学校舎の敷地内は、馬出しであったが、近世に入ってからは馬場と変わり、御役陣屋が配置されてからは道場となり、その下のグラウンドも曲輪であったものを、そのまま利用しているが、いずれも、上杉領になってからの構築であると思われる。総体的に見ると、最初の築城は伊達領を最上から防備するために築き、後、浦生領に移り、上杉領になるまでの間、その領主によって構築の変更もあったものと考えられる。

（加藤和徳・市川和夫）



中山城略測図

うえ の やまたて
上ノ山城

207-002

所在地 上山市中山字上ノ山

築城者 中山弥太郎

築城時期 戦国期（1467～1589）

概 要

中山城より150m南、通称、片倉山の山麓が北から南に突き出た半島状の丘陵に構築されている。主郭と見られる頂部はやや平坦で、西側は狹小な段が幾重にも取り囲み、次第に下降している。東南側も同様に段々と下降、南北側は大きく果樹園（昭和45年破壊）となっているが、以前は狹小な段となっていたと見られる事から、階段状帶曲輪を囲ぐらしていた。中山城を防備するための支館の性格を示すものと思われる。



上ノ山城略測図

（加藤和徳・市川和夫）

もの よまとて
物見山城

207-003

所在地 上山市中山字物見山 265

築城者 中山弥太郎

築城時期 戦国期（1467～1589）

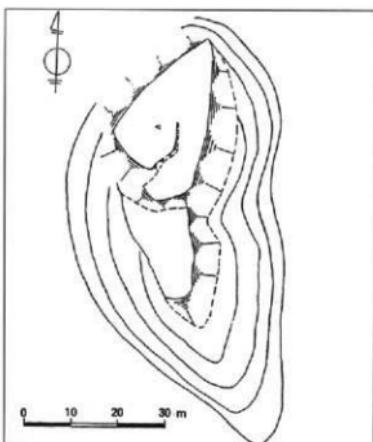
参考文献 『続郡書類從』『最上義光物語』

概 要

物見山は上山市の西南西7kmの単独丘陵に位置するもので、跡跡は標高360mの山頂に構築された。南北40m、東西17mの楕円形テラスを主郭とするもので、西斜面は伊達領の登り口があり、東斜面は最上領で、三段の曲輪を配している造構が残されている。

永禄、元亀年間、中山城主である中山弥太郎が構築、最上領を三方に見渡す事のできる位置から、物見台と烽台的な性格を持っていたと見られる。

（加藤和徳・市川和夫）



物見山城略測図

じんやまたて
陣山櫓 207-005

所在地 上山市阿弥陀地字塙崎

築城者 不明

築城時期 戦国期（1467～1589）

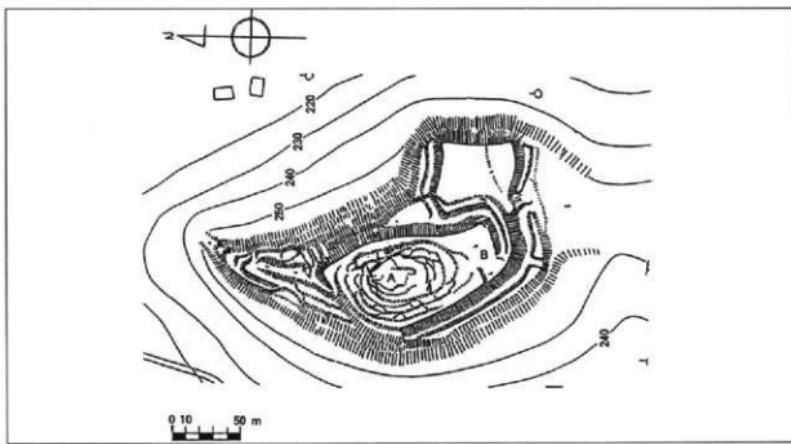
参考文献 『中世城郭研究』『山形県史』

概要

本館跡は、標高 291m（比高 73m）の山頂一帯の丘上に位置し、南側は半天子山の尾根続となる。造構は丘陵の頂部 A はある程度平坦になっているが狭小で、それを中心にした階段状テラスを主要曲輪として段が幾つも曲輪を多様しているのが特徴である。

自然地形でないのが明らかであるが、城館としての明瞭な防衛思想をうかがうのはきわめて難しい。強いてあげるならば、北から登ってきた道が A にとりつく地点のあたりが樹形虎口をなしているように見えるのだが、断定するにはあまり地形が微弱すぎる。また、周囲をとりまく段もきわめて幅が狭く、通常の腰曲輪との同一視は現状を見る限り困難であろう。ところが、こうした段を何段も下るうち、突如として明瞭な壁が現れ、西側ではその下を堀がめぐり、城壁を画定しているのである。A の西下を南に折れ、ほぼその延長上で丘陵を横断し、尾根続に対する明瞭な防衛ラインを形成する。ただし、その中央あたりに平坦部 B へ上がる坂道がある。ここは当然の虎口と想定できる箇所である。二つの堀の中間は狭い帯状の地形となっている。また、東側には堅堀も見られ、その西側は畠地に変わり、曲輪等は破壊された。

（加藤和徳）



陣山館略測図（作図者：松岡進）

ほそくじや

細谷館 207-004

所在地 上山市細谷字下細谷

築城者 細谷四郎左エ門義知

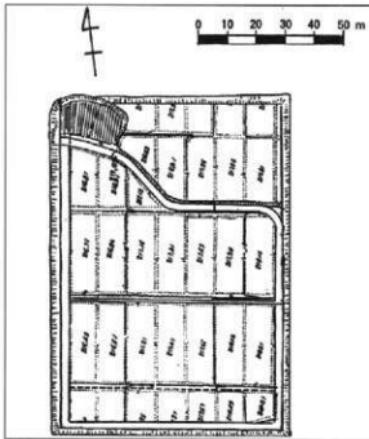
築城時期 戦国期（1467～1589）

参考文献 「西郷村誌稿」

概要

現在は圃場整備事業により消滅してしまったが、この館は陣山館の東に位置していた。この事は、昭和32年発刊の「西郷村誌稿」により明らかである。だが、資料等は残されていないが、整備以前の人達の話を総合すると「館堀り」が主体になると考えられる。現在の農道は土塁跡で、高さ70cm、幅100mの周囲に掘をめぐらした小規模な正方形跡であったと思われる。また、土塁と堀跡の間に矢竹が植えられ、池は当時の堀跡という。

（加藤和徳）



細谷館推測図

つきおかじょう

月岡城 207-006

所在地 上山市元城内字天神森

築城者 武衛義忠

築城時期 天文4年

史料 上山城縄張図（国立公文書館内閣

文庫蔵）、（大阪城天守閣原蔵）

参考文献 「上山市史」「上山城郭資料集」

概要

月岡城は、天文4年、武衛義忠が天神森に構築したと『上山見聞附筆』に記載されている。しかし、城郭の縄張や曲輪等については不明である。

現在の月岡神社が建立されている辺が主郭で、西の駐車場は二の曲輪であったと見られる。延宝年間に描かれた「上山城縄張図」の写しによると、平山城で本丸、東西29間、南北20間で、西側に二ノ丸を配している。天文期の構築には程遠く、名残りは見れない。

（加藤和徳）



月岡城絵図

ならげじょう
檜下城 207-009

所在地 上山市檜下字台の上

築城者 長沼信濃守

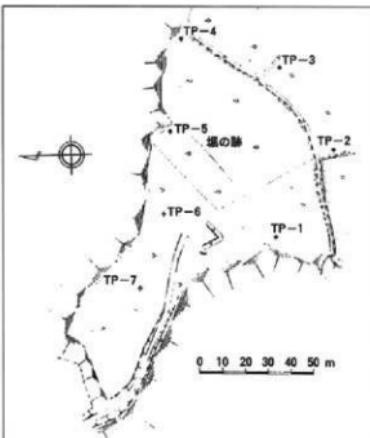
築城時期 戦国（1467～1589）

参考文献 『山形県史』「ふるさとの城」
(山形新聞)

概要

片倉山が上山盆地に突き出た舌状の丘陵に位置し、北は宮川、南は金山川が合流している自然要害に檜下城が構築された。天保期に領主の命により、村民を練兵員、空堀や土塁を破壊、田畠に変貌した。しかし、主郭と見られる「台の上」周辺の東側は階段状の水田や空堀、土塁の遺構が一部ではあるが残されている。文明期頃、伊達氏の勢力下に属していたため、置賜郡高畠城の支城でもあったが後、最上氏の勢力下に入った。

（加藤和徳、市川和夫）



檜下城略測図

もとやしきたて
元屋敷館 207-010

所在地 上山市裡森字元屋敷

築城者 不明

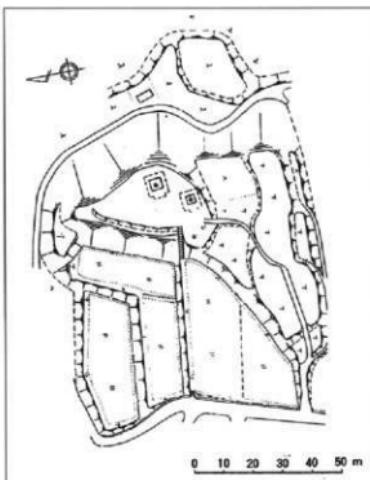
築城時期 戦国（1467～1589）

参考文献 『伊達天正日記』『米沢市史』

概要

元屋敷集落の南方100mの単独丘陵に位置するもので、通称、虚空蔵堂と称されているところに構築されている。主郭の四方は曲輪がめぐり、とくに南側は主郭より2m低く段差があるので丸木橋を架けて渡っていたと云うから、掘切（藻研掘）があったと推測できる。東側は自然の要害で急斜面、虎口は北側にあったが、現在は民家が建っている。全体的には、丘陵を平坦に構築、小規模な郭であるため、長谷堂城の支城的な性格を示す。

（加藤和徳、市川和夫）



元屋敷館略測図

たかばてじょう かめ が おかじょう
高橋城（亀ヶ岡城） 207-011

所在地 上山市松山字高橋

築城者 上山満長

築城時期 南北朝期（1394～1428）

史料 「今津四家合考所収文書」「最上斯波家伝」（上山合戦）

参考文献 「上山見聞隨筆」「上山郷土史」

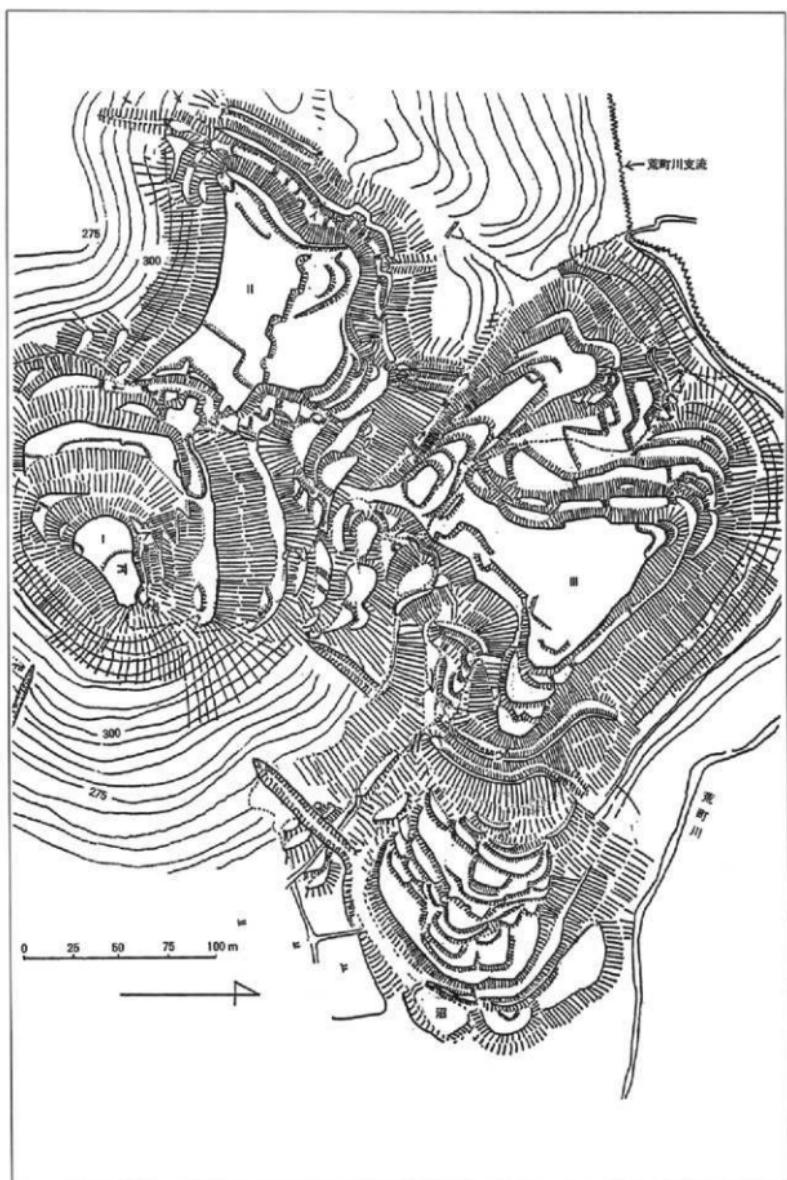
概要

高橋城は、上山市の西南、2.3km、出羽丘陵の東麓に突出した角状の山、海拔 356.3m の虚空蔵山に構築されている。享保以前は亀ヶ岡と称し、山頂からは市内を一望できる要害の地に主郭を築いた。高橋城は、大きく分けて、虚空蔵堂の建立されている山頂から中腹にかけてを主郭として、白土平を二の曲輪、北方山の平を三の曲輪、東側を四の曲輪となる。第一の曲輪群は、山頂を中心とした階段状テラスを主要曲輪として、下に行くにしたがって帯曲輪を多様し、空堀も深くしてあるのが特徴である。

主郭は東西 56m、南北 36m と瓢箪形に整形した平坦面であり、物見台（烽火台）的な役割をなしておったと思われる。また、堂の裏方には 1m の段差に長方形の留池があり、飲用水として使われおったようである。その東南は急斜面で自然な要害となっており、その西側 30m 下は延長 70m、北に 45m 程の曲輪を配置、その間は狭く虎口と見られる。さらに、その下、西側には総延長 105m、深さ 5m の空堀がめぐらされている。この曲輪を白土平と称し、主郭より 43.3m 低い標高 313m、東南 100m、南北 71m の平坦地、文明期から長禄期に、満長によって構築されたのではないかと推測される。とくに、空堀は東側に二重に構築、その総延長 153m、最大幅 15m、最大深 12m あり、真に谷間といえる。また、郭の南西から北西には土塁が築かれ、その最大幅 12m から 13m、高も最大で 1.5m から 1.8m、北側には曲輪が数段に配直し、堅堀も二筋に構築されている。

三の曲輪を北平と称し、二の曲輪より 31m 低い標高 284m で、水無沢というところで切られている。その沢を自然の堅堀を利用して、西北には歓城が残されており、現在の郭は畠地に開墾されているが、以前は南西から北東にゆるやかな傾斜であるため、数段の郭になっていたのであろう。東南側は、東から南に二重の空堀、西から東南にかけて堅堀で防備され、もっとも重要な虎口も構築されている。さらに、東緩斜面には四筋の空堀で防備、その中で、一番外にある空堀は延長 188m、南西に 60m の堅堀が山麓から山頂の方向にむかって配しており、その総延長 248m は、本城跡で最大の遺構である。全体的な機能や形態は、初代、上山満長が応永期に主郭と二の曲輪等を築城、永正期頃は伊達領の居城となった数年間は、三の曲輪を構築、時代的変遷の中で拡大し、現在に残る遺構であると推測される。だが、断定するまでには行かない。

（加藤和徳）



高橋城略測図（作図者：養田慶信）

二階堂館

210-001

所在地 天童市大字大町字二階堂

築城者 不明

築城時期 鎌倉期

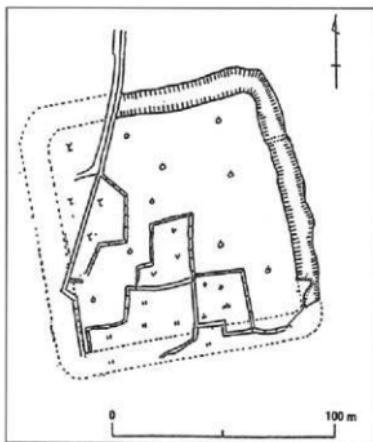
参考文献 『天童市史』別巻上

『天童市史』上巻『天童の城と館』

概要

乱川扇状地の先端、自然堤防上に立地し、標高 94 メートル。現在北側と東側に明瞭な水堀の跡を残すが、ほぼ一町四方堀によって囲まれていたことは地籍図でもうかがわれる。北西の隅の部分より建物の存在を示す掘立て柱穴と鉄錆が発見された。ここを時宗仏向寺跡とする伝承もあるが、中世の居館跡か、二階堂の地名からして、成生庄の頭頭に補任された二階堂氏に関連する遺跡ともみられる。

(川崎利夫)



二階堂館推測図

高木館

210-002

所在地 天童市大字高木字古高木

築城者 中川弥兵エ

築城時期 室町期

参考文献 『天童の城と館』

『寂ゆく面影小閑村の来しかた』

概要

県道天童谷地線の高木集落に位置し、館跡の付近には、どじょう屋敷、鉄砲町、すのこ町などの地名がのこっている。方形の屋敷跡と思われるが、縄張は不明である。館主は、高木の土豪地侍で館の規模は、半町四方で湧水からなる堀で囲われていたと伝えられる。付近の道路は、鍵型路、丁字路からなりその面影が残る。子孫は、天正年間の最上合戦で天童方につき江戸時代に帰農して、名主を勤めた。



高木館推測図

なりょうだて
成生館 210-008

所在地 天童市大字成生字櫛の内

築城者 里見義景、里見頼直

築城時期 鎌倉期

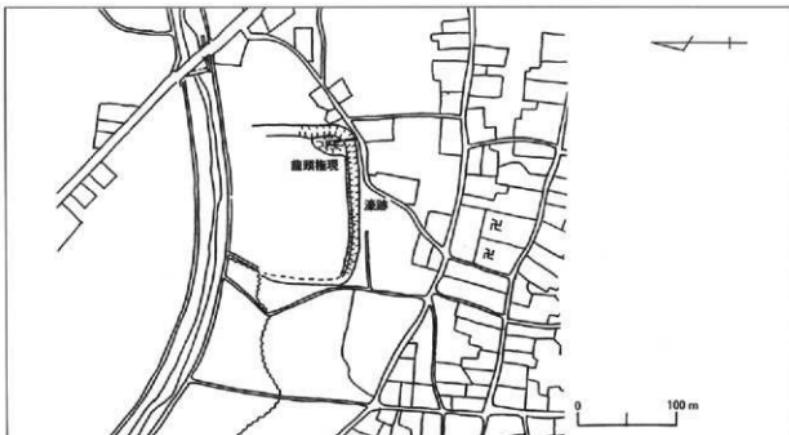
史料 龍頭権現社の事

参考文献 『天童の城と館』、『最上四十八櫓の研究』『天童市史』上巻、『天童市史』別巻下

概要

この館は、天童市街地より西北へ4km、押切川の自然堤防や水利を利用して築かれている。天授元年、里見頼直が天童古城に入る以前に封じられたところで、最上氏が寒河江大江氏や東根小田島氏に対する北・西の戦略的な要塞であった。里見氏が天童古城へ移ってからは、重臣の成生伯耆守が代々居城し、古文書や軍記ものに成生十郎、成生藏人の名がみえる。天正12年の最上・天童合戦では、はじめ家老として天童方についていたが、途中から裏切り最上方へ投じた。館は堀と土塁からなる方形の館跡で現在はわからないが複郭であったという。現在残されているのは、龍頭権現が記られているところに、築山と伝えられる高台と幅5~8mの堀跡があり、主郭の部分は少し高くなっている。虎口は南側のほぼ中央に残されている。館全体の面積は2haほどで、外郭に熊野権現、薬師権現、諏訪権現、白山権現などを配置している。

(村山正市)



成生館略測図

なかばりたて
中堀館

210-004

所在地 天童市大字川原子字中堀

築城者 滝口兵部

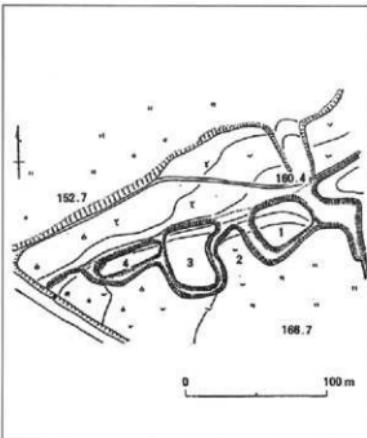
築城時期 戦国期

参考文献 『天童の城と館』『天童落城記』

概 要

乱川上流の高位段丘を利用して、深さ3~5メートル、幅5~10メートルの空濠をめぐらし、段丘崖を利用して東西に4つの曲輪を連ねる。規模は、東西200メートル、南北80メートル。第2郭が主郭で、その背後は平坦な畠や水田となっている。

天正13年、天童落城後、その再起をばかり、滅ぼされた滝口兵部らが拠った館と推定される。滝口氏は川原子兵部ともい、天童市北部を支配する土豪であった。(川崎利夫)



中堀館略測図

しもやまぐちだて
下山口館

210-005

所在地 天童市大字山口字下組

築城者 浅岡大炊之助

築城時期 室町期

史 料 山口村明細書上帳

参考文献 『天童の城と館』『天童市史』上巻

概 要

天童から関山へ向かう国道48号線よりやや南へ下山口の集落がある。浅岡館を詰の城とし、この館を居館とした。現在は宅地や水田となって網張は不明だが、明治8年の記録によれば、東西51間、南北58間の方形館跡で、「濠ハ土居ヲ濱シ垣ニハタシ貢地」と記す。元和の後地帳に記す縄之内と思われる。天正年間の最上合戦で天童方で再起を志して、最後まで争い滅ぼされ廃城となった。

(村山正市)



下山口館推測図

あきおかたて
浅岡館 210-006

所在地 天童市大字山口

築城者 浅岡大炊之助

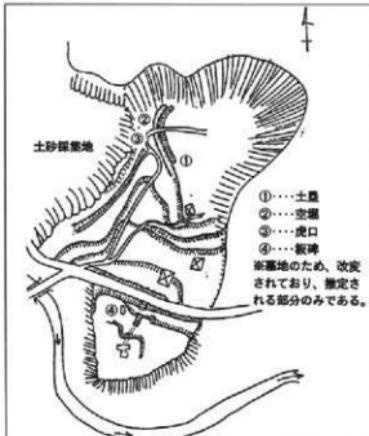
築城時期 戦国期

参考文献 「天童の城と館」

概 要

下山口妙見神社からその南側の丘陵部をしめる。古道に面し、北は押切川が流れる。妙見社の辺りが主郭で、南側の街道に向かって2・3段の曲輪を構える。南側の丘陵は、墓地などのために破壊されているが、帯曲輪がめぐり、土塁や空濠の跡もうかがうことができる。「天童落城記」などにみえる浅岡氏の館で、天正13年、瀧口兵部らとともに最上氏に抵抗し滅ぼされた。

(山口博之)



浅岡館略測図

こ ゃん べ じ ゆう
小山家城 210-007

所在地 天童市大字山元字立宿

築城者 小山家師時

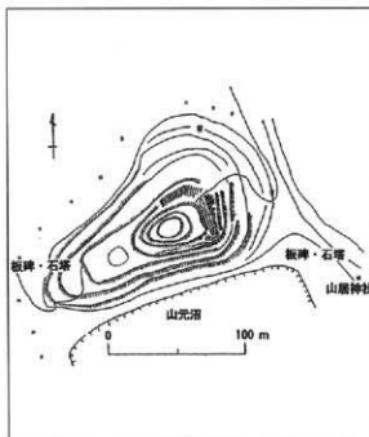
築城時期 天正12年(1548)～慶長8年(1603)

参考文献 「天童風土記」『天童の城と館』

概 要

比高30メートルほどの平地に向かって張り出す丘陵。腰曲輪が3段にめぐり頂上部は、13～14段の帯曲輪が配され、北側に空濠がのこっている。南麓の山元沼は水濠であった。天童落城後に不穏な動きがあった北部の土塁に対するために、最上氏重臣の山家氏の一族をこの地に配して守りにあらせた。「立宿」「的場」などの地名を残している。

(川崎利夫)



小山家城略測図

くらやうじょう くらづだて
藏増城（倉津館）

210-008

所在地 天童市大字藏増

築城者 倉津安房守

築城時期 室町期

史 料 藏増村地誌書上

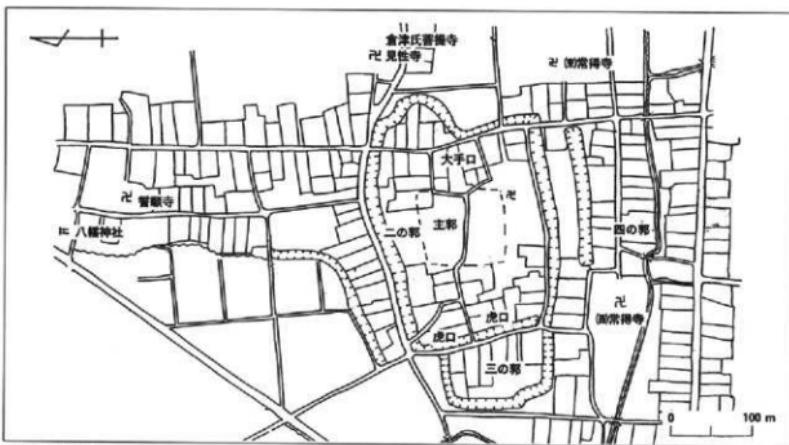
参考文献 『天童の城と館』、『最上四十八櫓の研究』『天童市史』上巻、『天童市史』別巻下

概 要

天童市街地より西へ4km、最上川を挟んで寒河江大江氏領との境界に位置する。現在の藏増集落のはば全体が城跡で特に集落の中央部に堀跡が残されている。主郭は西称寺付近で、境内には城主の姫君萩姫の化粧井戸と伝えられる井戸が残っている。城の形態は、輪郭式で主郭を中心に回字状に堀で囲む。外郭は、前田川、樽川、倉津川などの河川を改修し、集落全体を囲んでいる。堀は、主郭を中心にして3~4重の水堀と土塁からなり、堀は幅5~10mあり、深さも2~3mほどである。城の鬼門には、八幡神社を、北東には菩提寺である見性寺、南東に東常得寺、南西に西常得寺などを城の外郭に配置している。三の郭は、張り出した曲輪で西小路と呼ばれており、家臣の居住したところといわれている。道路はすべて鎌型路、丁字路、食い違い、屈曲路からなる。主郭と二の郭を合計したところ（中宿）の規模は東西100間、南北120間となる。

天正12年の最上・天童の合戦で最上方に加わり、その恩賞として最上郡小国領地を与えられ、城主も最上郡小国へ移封し廃城となった。最上の家臣に藏増大膳亮という人物がいた。山形城の要職にあり、文禄元年に最上義光が肥前名護屋に赴いた時、義光が途中から大膳亮宛に留守中のことを託し書状を送っている。藏増大膳亮も倉津一族であったろう。

(村山正市)



藏増城略測図

なかじまたて
中島館 210-009

所在地 天童市大字貫津字中島

築城者 不明

築城時期 室町期

参考文献 『天童の城と館』

概 要

奥羽山脈の湯の上山の南麓、周囲は水田であるが、僅かに高い畠地として残っている。

標高 125 メートル。一町四方を水堀で囲んだ単郭方形館。内部は縄文遺跡で、土器や石器が出土している。南側の水田中より門柱らしい柱根が発見されたことがある。堀の幅は 10 メートルで、北側にその痕跡をうかがうことができる。開発領主の居館跡と推定される。

(川崎利夫)



やまとやまとて
山崎山館 210-010

所在地 天童市大字貫津字山崎

築城者 不明

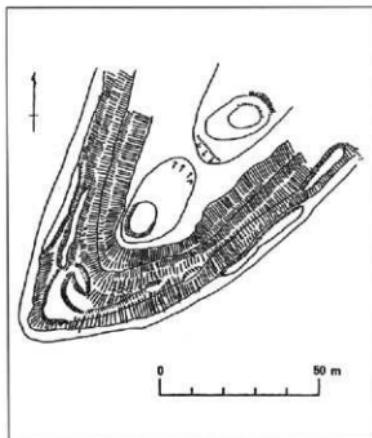
築城時期 戦国期

参考文献 『天童の城と館』

概 要

奥羽山脈より盆地に張り出した丘陵にあり、山元へ貫津の山脈の古道を扼する位置にある。南面する丘陵先端に三段の小規模な曲輪が設けられ、道路に臨む西側は二段の帯曲輪がめぐる。東側は急な崖をなす。尾根上に平坦面を二箇所設け、背後の尾根につづく。南東 600 メートルに新城山館があり、それに付随する見張り台または連絡のための臨時の城砦と見られる。

(川崎利夫)



山崎山館略測図

しんじょうやまたて
新城山館

210-011

所在地 天童市大字實津字新城山

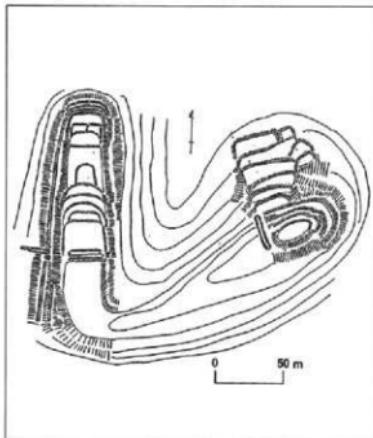
築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『天童の城と館』

概 要

西郭と東郭に分けられる。西郭は北側にむかって突出する。丘腰部に11段の曲輪が設けられ、それを囲むように北から西へ空堀がめぐる。更に頂上部でも2条の空堀がめぐり、曲輪が屋根上に連なる状況はみごとである。東郭は、西から続く尾根に堀切りを設け、頂上の主郭から北の麓にむかって10段の曲輪がつづき、東側は3段の腰曲輪がめぐる。両者とも虎口があり、連絡路もある。山麓の古道を意識した繩張りである。（川崎利夫）



新城山館略測図

てんどう ま だなで
天童織田館

210-012

所在地 天童市大字天童字小畠ほか

築城者 織田信美

築城時期 天保 2年（1831）

参考文献 『天童織田藩史』『天童市史』中巻
『天童の城と館』

概 要

天童駅の南側に位置する。本丸は、喜太郎稲荷神社、田鶴町公民館のあるあたり。内郭は東西95メートル、南北140メートル、外郭に武家屋敷があり、水濠と土塁がめぐっていた。藩校「養生館」や馬場は外側にあった。外郭は南北400メートル、東西300メートルに及ぶ。織田氏が高畠町よりこの地に移り、文政12年から築城に着手しているが、行政面を重視した近世後期の城郭である。（川崎利夫）



天童織田館繪図

てんどう こじょう まいづるやまじょう
天童古城（舞鶴山城）

210-013

所在地 天童市大字城山

築城者 天童頼直

築城時期 天授元年（1375）

史料 『天童落城並仏向寺縁起』『天童落城記』『天童軍記』『奥羽永慶軍記』『最上義光物語』

参考文献 『最上四十八館の研究』『風雲天童城』『天童史跡八幡山古戦場誌』『天童の城と館』

『天童市史』上巻

概要

近世後期に築城された鐵田館と区別するため「天童古城」と呼称することにした。舞鶴山城ともいふ。天童市にそびえる独立丘の舞鶴山全山を城として利用している。東西1000メートル、南北1200メートルの範囲に及び、県内唯一の規模をもつ山城である。標高231.8メートルの山頂部に主郭を置き平坦地となっている。いま愛宕神社が建っている。この下には、帯曲輪が巡り、要所には幾重にも段状の曲輪が連なる。舞鶴山の八方にのびる屋根や支城にはいたるところに曲輪がある。主郭を中心にして、北に中央郭・北郭、東に東郭、西に2つの西郭、南に南郭があり、それぞれがあたかも独立した城郭の態を呈する。大手口は南東部の山麓に位置し、きれいに曲輪が連続する。最近、この前面の平地の発掘調査が行われたが、建物跡や道路、合戦の跡をしめす焼け跡などが検出された。

この城の始まりは、南北朝時代に南朝の北畠天童丸といわれるが、定かでない。その後山形に入部した斯波兼頼の孫の頼直をこの地に配したという。そして室町期を通して11代にわたってこの城を根城としたが、戦国期の天正12年（1584）村山地方の霸権をかけての対最上合戦に敗退して廃城となつた。

現在、公園造成などにより改変されたところもあるが、よく旧態を残している。現状の縄張りは天正の頃のものであろう。この山をめぐって城下の町並みが形成された。
(川崎利夫)



天童古城略測図

てらづじょう
寺津城

210-014

所在地 天童市大字寺津字元寺津

築城者 寺津（藤原）甲斐守秀敏

築城時期 室町期

史 料 大木翁置文

参考文献 「水郷寺津史」「天童の城と館」

概 要

この城は、最上川と須川の合流地点にあって、自然地形を利用した城跡で、水運や対大江氏にとっても重要な要塞である。遺構は堀跡の一部や道が鍵型路、丁字路を残すが網張りは、不明なところが多い。明徳・応永年間に斯波直家の臣家藤原秀敏が直家の子女を妻とって築城したという。天正年間に最上合戦で天童方につき滅ぼされた。

（村山正市）



寺津城推測図

たてのじょう
楯ノ城

210-015

所在地 天童市大字芳賀字楯の城

築城者 伊達伯善守

築城時期 鎌倉期

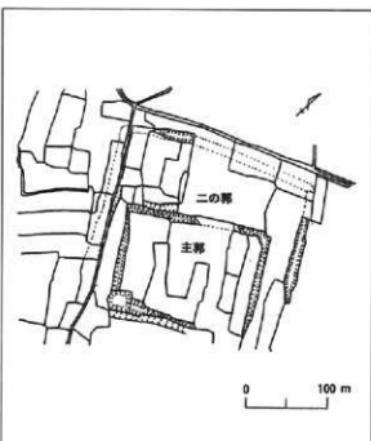
史 料 芳賀村地誌

参考文献 「中世城館跡研究—立谷川脇状地
—」「天童の歴史」、「高瀬郷土史」

概 要

天童市街地より南東部に位置し、羽州街道が開通する以前の主要道横街道が通る。この館跡は、字限図によれば二重の堀と土塁で区画された方形館跡である。堀の規模は、長さ東西 60 間、幅数間で主郭のところがやや大きい。昭和初年の開墾の時に瓦や柱根などが出土している。一説によれば、斯波兼頼の末弟義宗を成生莊地頭里見景義の養子に入った際伊達伯善守を居城させたという。

（村山正市）



楯ノ城跡測図（明治 28 年字限図参考）

たかだまじょう
高擣城 210-016

所在地 天童市大字高擣

築城者 斯波（最上）義直

築城時期 室町期

史 料 高擣村水帳、高擣村明細差出帳、鎮守山盤石寺大日如来御縁起

参考文献 『高擣郷土史』、『最上四十八城の研究』、『天童の城と館』、『高擣城の興亡—戦国争乱期を中心としてー』、『天童市史』別巻下

概要

山形盆地のほぼ中央部、天童市南西部に位置し、今なお集落そのものが方形を呈し、その面影を忍ることが出来る。築城は、応永年間ともいわれるが、現在の形になったのは、文明年間の城郭整備によると考えられる。城の中央に守り本尊の大日堂（皇太神社）を設け、外郭には寺院を配置している。城の整備時には、東、南、西を重要視しており、永正の乱や最上内紛、最上天童合戦に備えであろう。城の形態は、主郭を中心に外堀を含めると4重の水堀からなる輪郭式である。道路は、すべて鍵型路、丁字路、食い違い、屈曲路からなり、北側は、京川を改修して堀の役割をさせている。主郭の位置は定かでないが、元和の検地帳に字本丸とあり、6,504坪の面積の記載があることから、現在の堀の内のほぼ中央部であったと思われる。虎口は、東に大手を、西に勝手口を設け、西堀と中小路の南と西に三の郭から別れる郭があり、そこには家臣連が居住したと伝えられている。堀の幅は、二の郭を回るもので幅8~14間で堀底には切り石を敷いたところもあるといわれている。この城は、はじめ最上領の北を押さえるための軍事上の城であったが、その後天童氏の隠居城になったり、江戸時代初期には、最上家臣斎藤伊予守が5,500石で配置になり、政治的あるいは、居城的な性格であったろう。弘化4年には、館林藩高擣陣屋が置かれ、嘉永元年に廃止された。

（村山正市）



高擣城略測図

だてのじょう
伊達城

210-017

所在地 天童市大字清池字伊達城

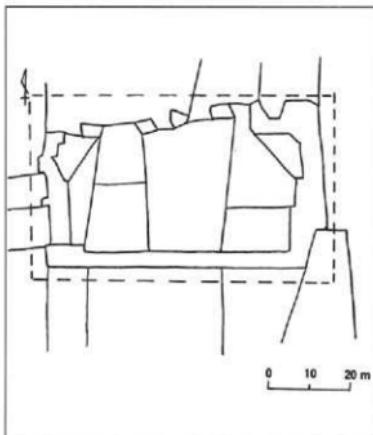
築城者 不明

築城時期 室町期

参考文献 「中世城館跡研究－立谷川扇状地－」『天童の歴史』、『高擣郷土史』

概要

清池から山寺へ向かう街道、現在の県道転免許センターの北側に位置し、字限図で確認できる。伊達城の地名は、この城の付近に3ヵ所あり、いずれも永正17年の永正の乱に関係している。この城も伊達稙宗が天童進攻の陣城で臨時に一時駐留した要塞であったろう。規模は2ha余である。（村山正市）



伊達城推測図（明治5年字限図参考）

いしごらだて
石倉館

210-018

所在地 天童市大字下荻野戸

築城者 不明

築城時期 室町期

参考文献 『天童の城と館』

概要

この館は天童古城から山寺へ向かう古い街道が通っており、街道を押さえる軍事的な要塞であった。館跡の範囲は不明であるが、地名として押堀などがあり、集落内の道路は丁字路や鍵型路からなっている。この地区には、工藤、花輪の二氏のみで古くから村の実権も交代しながらおこなってきた。元和2年の判物は高擣城主斎藤伊予が山守衆3名に当たるもので、取締り方などからして、半士半農の家臣であったろう。（村山正市）



石倉館推測図

ちょうじゅ やしき あたばなげ やしき
長者屋敷（北畠屋敷） 210-019

所在地 天童市大字荒谷

築城者 北畠天童丸

築城時期 南北朝期

史料 続太平記、出羽風土略記

参考文献 『天童の城と館』、『天童の生い立ち』『天童市史』上巻

概要

南朝方の北畠天童丸が、天童古城に城砦を屋敷（居館）を荒谷長者屋敷に築いたと伝えられる。これらは、続太平記、出羽風土略記に記され、『天童市史』上巻には、天童・山寺の間に、長者屋敷あるいは天童屋敷と称する所があつて天童丸の住居跡と伝えられる。繩張など不明であるが井戸跡や土塁があったという。

(村山正市)

たて みねたて
櫛の峯館 301-001

所在地 山辺町大字北山字湯舟

築城者 不明

築城時期 戦国期

史 料 江戸時代の北山村山論絵図

概 要

小島海山と湯舟地区の中間の峰伝いの標高444mの狭い山頂部とその中腹部による山館である。山頂部は小規模であるが、西側はかなりの急傾斜になり、南側は尾根伝いの山道で2ヶ所に空堀が掘り切られ、北側と東側は急傾斜地に三段のテラスが用意され、部分的に空堀が掘られている。北側入口が虎口で曲折した登り口になっている。寒河江・大江氏側に立って山辺方面に通ずる街道を監視し連絡する烽火台や砦の役割を持ち、山形・最上氏の侵入に備えたものであろう。

(後藤禮三、佐藤維雄)



櫛の峯館略測図

がんさだて
荒沢館 301-002

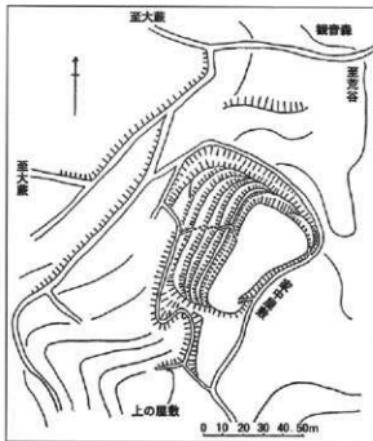
所在地 山辺町大字大原字前田

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

荒沢館は荒谷丘陵から大原地区に向けて西部に突出した小丘を利用したもので砦的性格であったろう。特に西側が急傾斜しているが、山頂部すぐ下には空堀が用意され、山麓部まで5、6段のテラスが設けられている。東方平坦部は「家中屋敷」と呼ばれているが、館には寒河江・大江氏側に立つ豪族が居住し、その配下が家中屋敷に居住しつつ、南方約五百米に位置する荒谷館を守り、宮宿・鳥屋ヶ森城と連絡したものであろう。



荒沢館略測図

(後藤禮三、佐藤維雄)

あらやだて
荒谷館 301-003

所在地 山辺町大字大藏字荒谷

築城者 不明

築城時期 戦国期

史料 高山彦九郎：「北行日記」

概要

荒谷館は中心となる西郭（標高492m）とその東方に位置する東郭（標高487m）の双郭から成っていた。西郭は東部と南部が緩斜面になるので二重堀を配し、北部は3段のテラスを設けその下は急傾斜となり、西部は急斜面で山麓との比高差は百数十mである。東郭は山形盆地を遠望でき、北側と東側の緩斜面に3段の帯状テラスを設けて備えを固めている。宮宿・鳥屋ヶ森城の支城として連絡を密にして大藏街道を抑えつつ山形・最上氏に備え、その動向を探ったものであろう。

（後藤禮三、佐藤繼雄）



荒谷館略測図

おおばたけだて
大畠館 301-004

所在地 山辺町大字北作字桶付場、字森

築城者 渡辺兼貞

築城時期 戦国期（再築）永禄3年

史料 北作・渡辺平治家文書

概要

北作地区の北端の山麓部に位置し、すぐ下を大蔵～北作間の道路が通じている。南方数百米の地点に山形・最上家に立つ北作・館山館や築沢館があり、遙かに烟谷城が聳えている。造構は田や畠と化して殆ど消滅し、わずかに「小次郎屋敷」の周囲に低い石垣と「うこぎ」の垣根が残されているだけである。北方には荒谷館や蟹沢館があり、ともに、寒河江・大江氏の側に立ち、宮宿・鳥屋ヶ森城と連絡していたものであろう。

（後藤禮三、佐藤繼雄）



大畠館略測図

たてやまとて
楯山館

301-005

所在地 山辺町大字北作字楯山

築城者 不明

築城時期 戦国期

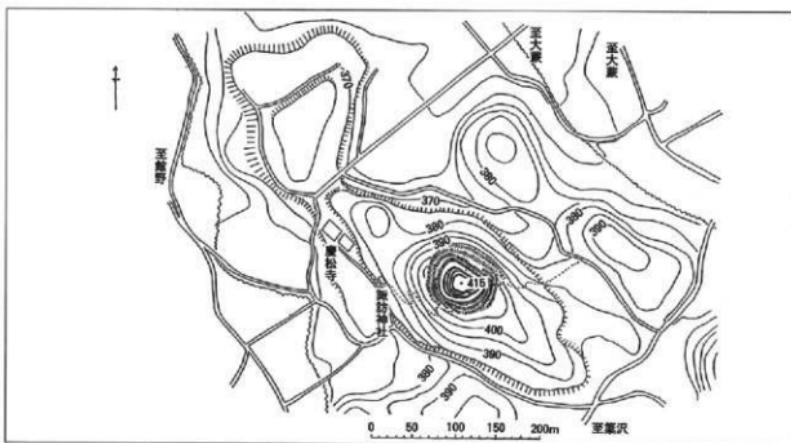
史 料 無し

参考文献 朝倉高次郎：作谷沢誌、鈴木 和吉：出羽合戦の史蹟

概 要

楯山館は北作地区の中央部にある標高415mの館山を中心とする丘陵部とその周囲の浸食された地形を利用して築城された山城で、山麓部との比高差は約40mである。山頂部は東西約25m、南北約20mとそう広くはないが、館山とその周囲の丘陵山麓部はかなり急峻である。山頂部のすぐ下部の周辺に数段の帯曲輪が造らされている。さらにその下の一巡する帯状的道路は地区の青年団が第二次世界大戦後、陸上競技練習用地として造成したものであり、そのためにかなり破壊されてしまった部分がある。中腹の東部と西部に空堀が残っているが、丘陵部の峰伝いの地形を考慮して備えを固めているようである。山麓部には広い範囲にわたって城郭の遺構を窺わせるものがあり、かなりの規模で築城されているようであるが、詳細は城絵図や村絵図が伝えられていないので不明である。

北部には「大烟城」、南には「烟谷城」があり、その中に位置しているが、楯山館に関する記録が存在しないのでその性格は不明である。江戸時代の古文書に、寒河江・大江氏側に立つ「小諸城」の存在を伝えているが、それとの関連もはっきりしていない。
(後藤禮三、佐藤繼雄)



楯山館略測図

やなぎたて
葉沢館 301-006

所在地 山辺町大字葉沢字櫛

築城者 不明

築城時期 戦国期

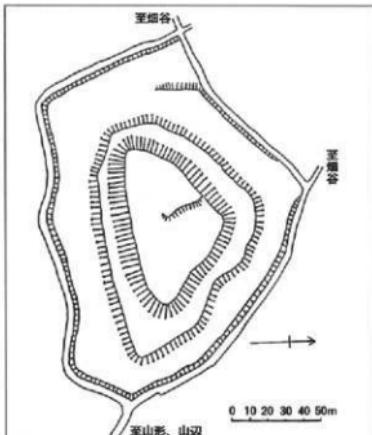
史 料 直江山城守書状

参考文献 朝倉高次郎：作谷沢誌

概 要

盆地状の葉沢地区の中央の小丘を利用した館で、山麓部との比高差は約10~20mである。山頂部は東西約90m、北東側約60m、北西側70m、という二等辯三角形に近い形状である。地形を利用して直下の四周に帯曲輪が設けられ二重に備えを固めている。最下部は道路が廻っているが、部分的に1m以上の比高差がある。関ヶ原の戦いにおける出羽合戦では、最上義光の命により山形に引き揚げ、合流している。

(後藤禮三、佐藤繼雄)



葉沢館略測図

しだみ沢陣所 301-007

所在地 山辺町大字北作字しだみ沢

築城者 不明

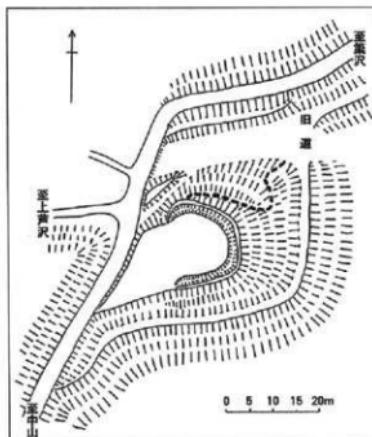
築城時期 戦国期

参考文献 鈴木和吉：出羽合戦の史蹟

概 要

山形・山辺等山形盆地から北作・葉沢方面と登ってきた道路が、更に損待・荒砥方面と下芦沢・送橋方面への分岐点に位置し、約十m小高い突出した地点にあるので街道監視に好都合である。南東方面の畑谷城と似た高度にあるのでその動静が分かり、情勢を把握するのが容易であり対応したものであろう。豊賀の伊達勢か上杉勢が畑谷城攻撃に当たって陣所として設けたものと思われる。道標としてはわずかに空堀を残すだけである。

(後藤禮三、佐藤繼雄)



しだみ沢陣所略測図

所在地 山辺町大字畠谷字館山

築城者 (駕板淡路守)、江口五兵衛光清

築城時期 戦国期

史 料 『作谷沢誌』、『上杉家御年譜三』、『伊達史料集 上・下』

参考文献 武田泰造『山辺町郷土歴史』、丸山茂『最上四十八館の研究』

概 要

畠谷城は館山を主郭とする山城である。南部に比高差70mの畠谷地区、北部に比高差170mの堺沢地区、の両地区の中間に位置し、東は標高766mの東黒森山から西に標高575mの尖り森、更に標高549mの館山と連続している。その西方はやや高原状の尾根となり、西端は急傾斜して断崖状となっている。

畠谷城跡は館山山頂部を中心とするⅠの部分、東方山麓部等の空堀や堅堀、その他の遺構を窪わせるⅡの部分、それに西方三重の堀を持つ尾根から山麓部にかけてのⅢの部分、の三つの部分に分けられ、遺構は空堀、堅堀、階段状テラスの曲輪等となって残され、山辺町文化財に指定されている。

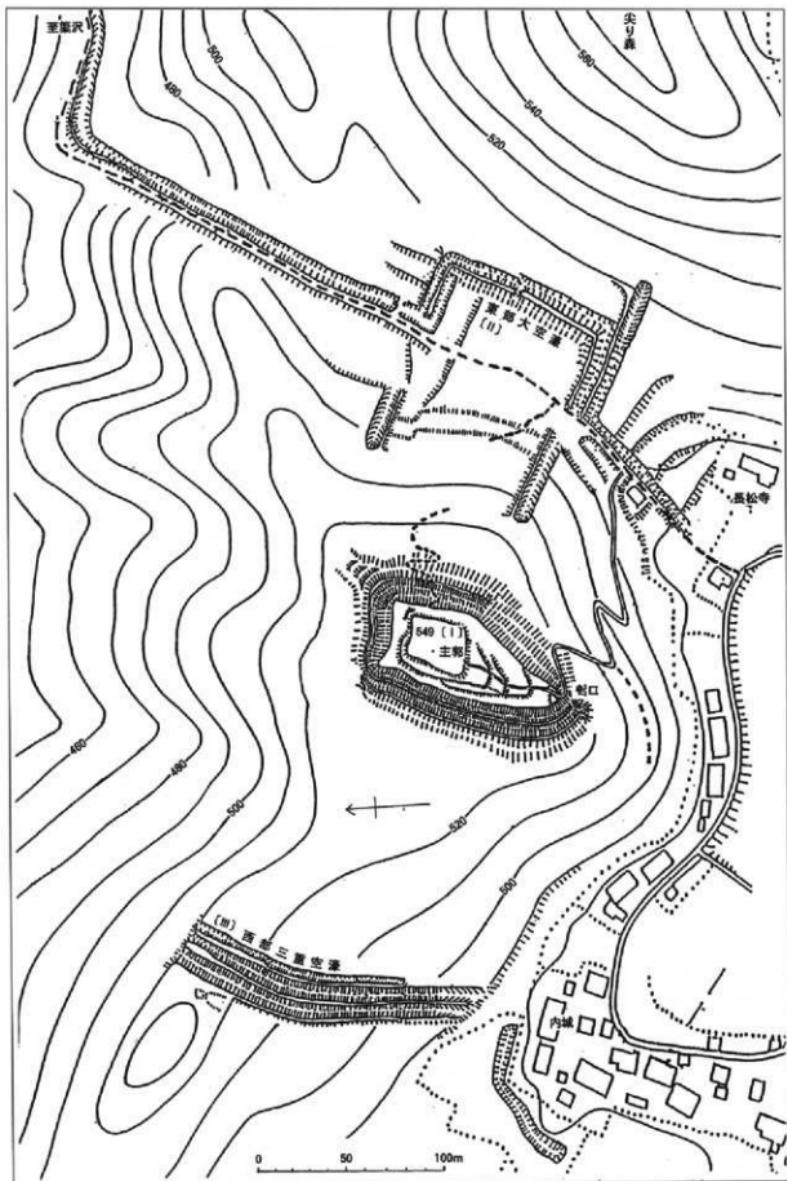
Ⅰの部分は山頂部が主郭となり、東西約24m、南北約30mと広くはないが、山形城を遠望できる。山頂から南方向に緩傾斜となり、階段状テラスの数段の帯曲輪がめぐらされている。その下部にある空堀は山頂部周囲の東～北～西～西南と堀り、西～西南部は二重堀になっている。東南部は急峻なので堀は用意されていない。南端部が東部山麓部からの山道を登ってきた虎口で約90度の曲折を経て山頂部を目指す。東北端は尾根になり、内側直下の高い部分に堀切りを配して二重堀状となり、下の尾根にも2段の狭い腰曲輪がある。西北端は二重堀が始まり、その先は尾根で急傾斜である。

Ⅱの部分は西・館山、東・尖り森の双方の山麓部とその間の平坦部になる。館山の山麓部は南端を山頂への山道が通じている。中央部は2段の階段状テラスになる曲輪があり、その両端には堅堀が切られている。堅堀から約40m上るとⅠの部分の空堀に達する。尖り森は館山より高いので尖り森側への備えも大規模で、山麓部全面に空堀を配し、中央部は尖り森山麓部に方形に大きく高く切られ土盛りされていて、平坦部への見通しを妨げている。なお、南端は堅堀となって尖り森山腹に上っている。この平坦部の中央部分は畠谷地区から堺沢地区への山道が通じているが、建造物等の施設があったものか方形に区切られており周囲が一段高くなっている。南・畠谷方面からの上り口には4段の階段状テラスによる曲輪が用意され、道路の両側は空堀になっている。

Ⅰの部分の下部・二重空堀から西に約100m行くと、Ⅲの部分の三重の空堀に達する。尾根の部分から南側山麓部にかけての大規模な三重の空堀は中途で二重になるが、下に降りて平坦部でも空堀が存在した。なお、こここの平坦部一帯は内城（うちじょう）と呼ばれ、城主が日常居住した地域であった。尾根から北の部分は急傾斜地である。内城から西に約200m行くと「御所清水」と呼ばれる湧泉があり、日常飲用されていたが、山上からの通路もあって水汲み、その他に利用されていた。

畠谷城は、山形・最上氏と米沢・伊達氏の両勢力の接点に位置し、下長井方面からの伊達氏による侵入路としての最短距離にあり、墳目監視という役割を担い、山形・最上氏が防衛の最前線として重要視していた。また、畠谷城の北部から西部にかけて山形・山辺～堺沢～撰待～中山という街道、南部には山形～門伝～畠谷～撰待～中山、という置縣方面への両街道が通じており、これらの街道を監視し、抑えるという役割も担っていた。関ヶ原の戦いにおける出羽合戦では、下長井方面からの上杉勢本隊の進入路となり、江口五兵衛光清氏の畠谷城での歴史に残る攻防戦が展開されている。

(後藤禮三、佐藤繼雄)



細谷城略測図

あぶみとかじんしょ ど るい
鐘坂陣所土壘 301-009

所在地 山辺町大字畑谷ハラダ石

築城者 不明

築城時期 戦国期

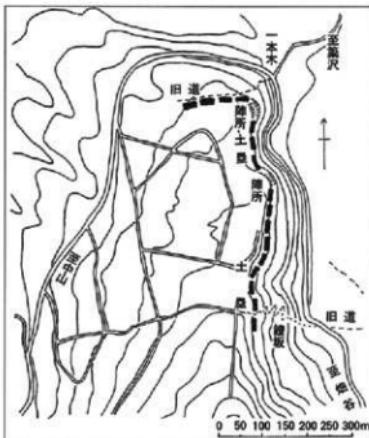
参考文献 朝倉高次郎：作谷沢誌

鈴木 和吉：出羽合戦の史蹟

概要

西黒森山を北に下りた尾根とその背後の平坦部一帯に畑谷城を覗むように数百mの長さで壮大な土塁が築かれ、空堀を持つ陣所が設けられている。標高590m位で畑谷城一帯より4,50m高い位置にあるので、状況が一望にできる。中世において置賜方面より侵入する伊達勢か上杉勢によって築かれ、侵入時の前線基地や退却時の拠点として使用されたものと推定される。西黒森山の山麓部を村山地区から置賜地区への二本の街道が通じており、軍勢の掌握にも便利な地である。

(後藤禮三、佐藤健雄)



鐘坂陣所土壘略測図

みつもりやま
三森山見張所 301-010

所在地 山辺町大字畑谷字上の平・国有地

築城者 不明

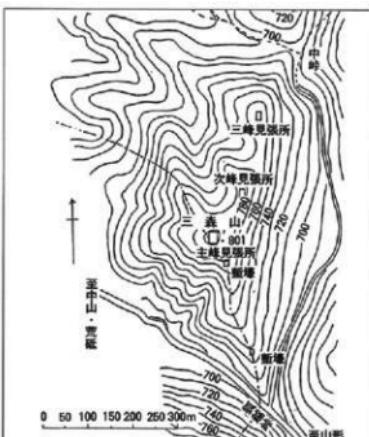
築城時期 戦国期

参考文献 鈴木 和吉：出羽合戦の史蹟

概要

標高801mの三森山は西黒森山と境になる北部山麓部が中峰で、山形・山辺～畑谷～(中峰)～折待～置賜、と街道が通じ、南部山麓部は白鷹山山麓部と合流した狐越峠を置賜方面への狐越道が通じている。置賜地区から畑谷盆地への侵入に当たっては全体の状況把握に良い位置にあり、街道も抑えられる必須の地であった。主峰、次峰、三峰、と三つの峰それぞれに塹壕を掘り見張り所とし、狐越道から主峰に登る途中にも二か所の塹壕があり、全体では五つの拠点を設けていた。

(後藤禮三、佐藤健雄)



三森山見張所略測図

さいこうやまとて

西光山館

301-011

所在地 山辺町大字大寺字西光山

築城者 不明

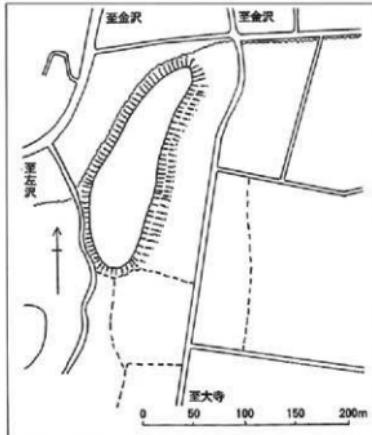
築城時期 戦国期

参考文献 武田泰造：山辺町郷土概史

概要

山形盆地に突き出た丘陵部の舌端部で山麓部との比高差が10m～20mあり、盆地全体を眺望するのに非常に良い位置にある。東部山麓部を、山辺～大寺～金沢～平塙～寒河江、左沢、と通ずる街道が古来利用され、それを抑える場所に位置している。寒河江・大江氏側に立つ長崎・中山氏との接点にあり、東方約200mの平野部の「新館」や、西南山上にある物見台と思われる施設とともに、山形・最上氏側の最前線拠点であったものと思われる。

(後藤禮三、佐藤繼雄)



西光山館略測図

すだて(しんたて)

新館

301-012

所在地 山辺町大字大寺字新術

築城者 不明

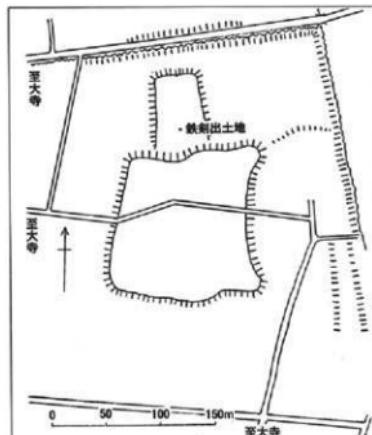
築城時期 不明

参考文献 武田 泰造：山辺町郷土概史

概要

平安時代に出羽郡司小野良実が居館を構えて当地方を支配した地であると伝えられている。大正8年、左沢線の線路路盤用土を取るために掘り崩していた時に108cmの鉄剣が出土していることから古墳とも考えられるが、やや高い地点に位置し周囲に堀をめぐらした形跡があり東方山形盆地の眺望が良い地点にあり、山辺から長崎・寒河江方面へ通じる街道を抑えた中世の館跡と思われる。現在は完全に破壊され、果樹園・田・畑として利用され、地形も変化している。

(後藤禮三、佐藤繼雄)



新館略測図

所在地 山辺町大字山辺字西高橋

築城者 武田信安

築城時期 戦国期

史料 江戸時代の村絵図

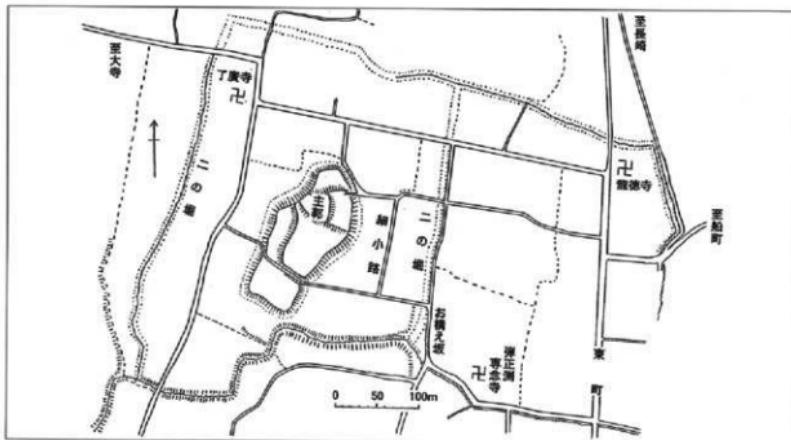
参考文献 武田 泰造：山辺町郷土歴史

概要

高橋城は西高橋地区の丘陵地を利用・立地した平山城で、山頂部は東西20m、南北26mの平坦地で狭いが、その下部には地形に応じて数段の曲輪が配置され、山麓部周囲には堀がめぐらされていた。なお、山麓部數か所から清水の湧き出る井戸があった。西方、北方、東方には二の堀が走り、西方、北方は集落を囲む形であった。東方は長崎方面からの「立つ道」に沿って三の堀が用意され、渋江川となって東流している。南方は断崖絶壁を伴う沢が流れおり、山野辺城との境となっていた。高橋城と山野辺城の主郭（本丸）間の距離は直線で四、五百mしか離れていない。このような近距離に「対等な立場」の城郭が存在したのは何故なのか、不思議である。

高橋城は武田信安が宝徳元年（1449）築城し、文明4年（1472）頃引退したという。後に、山形・最上氏と姻戚関係にある高橋遠江守正福が城主となり、支配した。高橋氏は最後まで山形・最上氏の忠実な武将で、最上氏改易後は共に近江国大森に赴き、代々家老職を勤めた。文政11年（1828）斯波兼頼四百五十年忌法要が山形で行われたとき、正福10代の後裔俊秀が代参として来形した。

(後藤禪三、佐藤雄雄)



高橋城略測図

やまのべじょう こづるじょう
山野辺城（小鶴城） 301-014

所在地 山辺町大字山辺字館、その他

築城者 不明

築城時期 戦国期

史 料 村絵図（宝暦 11 年）、山野辺城址地図、山野辺分見図明細絵面（文政 6 年）

参考文献 武田 泰造：山辺町郷土概史

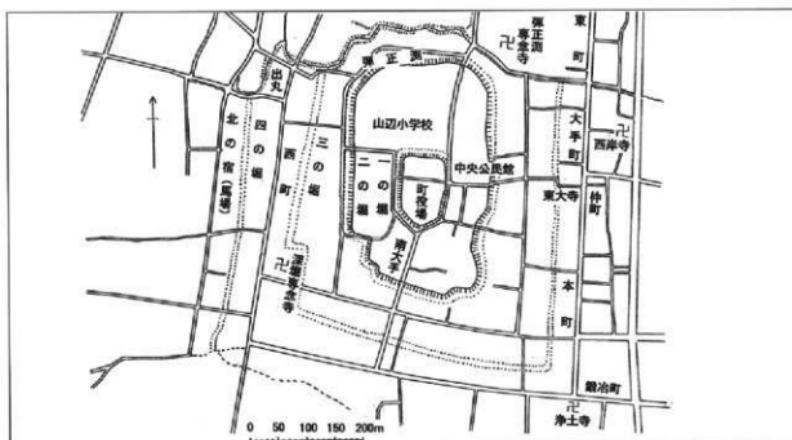
概要

山野辺城は、出羽丘陵から山形盆地に突き出た小丘陵の舌端部に立地し、現在町役場の置かれている小丘を中心とする部分が主郭である。その周囲の、次に小高い部分の台地が副郭で、自然の地形を利用した略長方形の輪郭式の平山城であった。東部入口が大手口で、「大手町」という地名が残っている。坂を登った副郭入口が虎口であったが、現在とは違った位置で、西北方向に登って行った。

大寺・安国寺にあった「十六羅漢由来添状」によると、14世紀初めには当地方は山野辺城を中心にして繁栄していたのが分かる。山辺地区は須川西部地域の中心として交通上の要地に位置し、中世において北は寒河江・大江氏とその武将である長崎城・中山氏、西部は出羽丘陵を越えて大江氏側に立つ宮宿・鳥屋ヶ森城とその支城群に備えて最前線基地の役割を担っていたものであろう。

慶長 6 年（1601）山野辺義忠が山野辺城主となり、主郭（本丸）と副郭（二の丸）の周囲に三の丸を設け、西方は山岳部になるので四の堀を用意し、西北部には出丸を作って備えを固めている。しかし、元和 8 年（1622）最上氏が改易され、山野辺城も上杉氏の手勢によって破却されてしまった。

（後藤禮三、佐藤巣雄）



山野辺城略測図

とうないやまたて

藤内山楯

301-015

所在地 山辺町大字根原字藤内山

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 安達卯太郎：相模村史蹟勝地調査

要項

概 要

根原地区から山間部に入り、玉虫沼に通ずる道の中間部に位置している。周囲に土塁をめぐらし、北・根原地区から登って来る人々を見下ろせるし、南・玉虫沼方面からは一直線なので、どちらに対しても見通しの良い、情勢の把握し易い位置にある。したがって、見張り所的なものとして機能していたものであろう。伝承として、藤内・坂内という二人の兄弟の盗賊が居を構え、往来する人々を襲った地であるという。

(後藤禮三、佐藤徹雄)



藤内山楯略測図

とよばたじょう

樋幡城

301-016

所在地 山辺町大字要害字竹原、字熊の前

築城者 佐藤豈後憲茂

築城時期 戦国期

参考文献 安達卯太郎：相模村史蹟勝地調査

要項

概 要

北部は西部山地から東部平坦地にかけて不動沢（雨上沢）が流れて深い切込を作り 5、6 m の断崖絶壁状となり、その他の部分には一段高い台地状となっているので堀をめぐらしていたようだ、地籍図から推定される。江戸時代に要害組の大庄屋を勤めた佐藤理兵衛家の先祖が居住した居館であったと言われ、同家は江戸時代に入って要害の現在地に移った、と伝えている。(後藤禮三、佐藤徹雄)



樋幡城略測図

ながさかたて
長崎櫓 302-001

所在地 中山町大字長崎字古城ほか

築城者 中山左衛門繼信

築城時期 至徳元年（1384）

史料 「中山玄蕃頭系図」

参考文献 『長崎櫓址記並補説』

概要

長崎櫓は、標高 93~94m で中山町の中心部に位置し、全体では東西 580m、南北 360m の長方形をなす。造構は水堀と本丸の井戸が 1 基、二の丸の家老宅の井戸が 1 基残っており、水堀は生活排水路として現在も使われている。また、以前は土塁も残っていたが、大半が宅地であるため後世の開発により消滅している。本丸の銀杏の樹下に板碑が 1 基残っている。

長崎櫓は、領主中山氏の本城であり、支城として西方の出羽丘陵に谷木沢櫓がある。

（小岡昭栄・高橋昌敏）



長崎櫓略測図

どう や しき
銅屋敷 302-002

所在地 中山町大字金沢字銅屋敷

築城者 不明

築城時期 不明

概要

銅屋敷は、中山町の中心部より南西 2.5km、出羽丘陵の東山麓部に位置し標高 115~120m を測る。字切図の地形より推測したもので、東西 80m、南北 70m ほどの規模である。明治 20 年頃は大半が畠地であったが、現況は宅地で造構は確認できない。銅屋敷の中心部には、朴清水（弘法清水）と呼ばれる湧泉があり、西側の白山神社境内には、板碑が 2 基残っている。高地ではないが眺望が良く、山形・天童・寒河江方面を見渡すことが出来る。

（佐東一男・高橋昌敏）



銅屋敷推測図

やまとさわだて やまとさわだて
谷木沢楯（八木沢楯） 302-003

所在地 中山町大字柳沢字山楯ほか

築城者 中山玄蕃頭朝勝

築城時期 寛正5年（1464）

史料 「中山玄蕃頭系図」

参考文献 『長崎楯跡記並補説』『中山氏の歴史』『中山鏡』『山楯の研究』

概要

谷木沢楯は、中山町の中心部より西方3.5km、旧豊田村柳沢地区から岩谷地区へと通じる山道を、1km程入った出羽丘陵上に位置する山城である。北・西・南の3方を山に囲まれ、東方には村山盆地が広がり、本城の長崎楯はもとより山形・天童をはじめ、遠く東根辺りまで一望に見渡すことができる。標高250mの山楯山頂一帯と北東に延びる舌状の尾根に沿って構築されており、全長は東西の主軸850m、南北の最大幅200mの規模で、山頂から山麓までの比高差120mを測る。谷木沢楯の北側と南側には、石子沢川と湧沢の2本の谷川が流れおり、両側とも断崖が続き、2本の谷川は本楯跡の東端で合流する。西側は南方へ尾根が延びているが、掘切を2箇所に配し尾根を断ち切っている。山頂の主郭（I）部分は、約1000m²の長方形の平坦地で、周りを10m程急勾配に切下げ、帶曲輪と腰曲輪を配置している。主郭部分からは以前耕作中に礎石とみられる石が大量に出土したという。主郭の東下段には「玄蕃屋敷」と呼ばれる広い曲輪があり、以下尾根に沿って曲輪が連なっている。また、主郭を中心とする本丸の北西部には1本の縱堀を有し、二の丸との境には空堀を配している。二の丸には30～40mの方形の曲輪が段々畠状に連なっている。三の丸は、道路建設により分断されているが、東部に「越後楯」（II）と呼ばれる高台がある。頂部が台形の平坦地で、周りに腰曲輪と帶曲輪を配置し、谷木沢楯内における第2山城的存在である。更にその東下方には、「出掛平」と呼ばれる広さ約4000m²の平坦地があり、谷木沢楯の最東端に位置し、石子沢川の対岸は柳沢の集落となる。谷木沢楯中央部北側の「大手口」と呼ばれる場所が虎口（a）とみられ、曲折する急傾斜の山道に沿って5段の腰曲輪が配置されている。主郭から西へ130m程行くと「玄蕃清水」と呼ばれる湧泉があり、更に西方には「玄蕃井戸」と呼ばれる湧泉が数箇所ある。

谷木沢楯北側の石子沢川沿いには、西方の岩谷地区を経て大江町の三郷（伏熊・深沢・用）に通じる山道がある。三郷地区は中山氏の領地でもあり、万一敵軍に攻略され撤退する際は、三郷への最短距離の山道である。逆に敵軍が石子沢山道から本城の長崎楯に侵攻しようとした場合は、ここで一旦くい止める要所もある。

谷木沢楯は、寒河江・大江領と山形・最上領との境目に位置し、最上氏の攻略に備え構築された。史料によれば、本城「長崎楯」の支城として寛正5年（1464）に構築され、大永6年（1526）に廃されるまで62年間続いたとある。しかし、現在長崎楯内にある2寺院（満願寺・円同寺）が、元は谷木沢楯付近に在ったということから、楯の構築時期は谷木沢楯のほうが早いのではないかという説もある。

本楯跡の北東1.5kmには楯堂・楯戸遺跡、東方1.5kmには竹ノ花遺跡があるが関係は不明。

（小関昭栄・佐東一男・高橋昌敏）



谷木沢概略測図

まつした や しき
松下屋敷

302-004

所在地 中山町大字達磨寺字西屋浦

築城者 (松下治左エ門正直)

築城時期 战国期

史 料 「達磨寺村・向新田村繪図」

参考文献 『中山鏡』

概 要

松下屋敷は、中山町の中心部より南方1.5km、国道112号中山バイパス沿いに位置し標高は93mを測る。字切図の地形より推測したもので、東西85m、南北70mほどの規模である。松下屋敷は、東・北・西側に堀をめぐらした館であったということだが、大正4~5年の耕地整理により消滅。達磨寺村は、中世において中山氏の領分ではなく、山野辺又は高橋の支配下にあったという。

(横尾尚壽・高橋昌敏)



松下屋敷推測図

ものみだい
物見台

302-005

所在地 中山町大字長崎字瀬ノ上

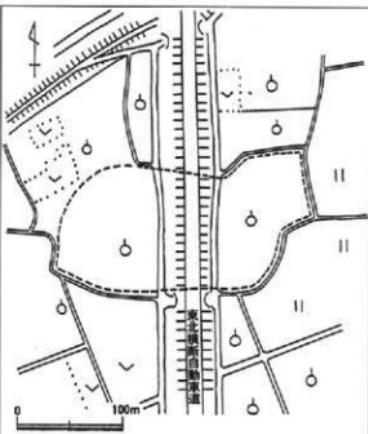
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

物見台は、中山町の中心部より北東1.7km、最上川右岸に位置し標高90~93mを測る。最上川により形成されたとみられる自然堤防状の微高地で、東西250m、南北100mほどの規模である。中山氏の出城であったといわれるが、中世の遺構は確認できない。むしろ、古墳時代後期の集落跡として知られ、発掘調査では古墳時代の遺構や遺物が大量に見つかっている。東北横断自動車道の建設により破壊されている。

(小関昭栄・高橋昌敏)



物見台推測図

かね ゆ しき
金屋敷

302-006

所在地 中山町大字土橋字金屋敷

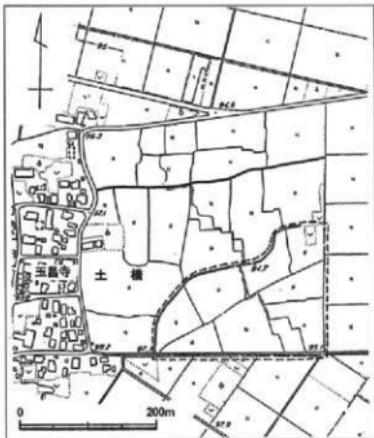
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

金屋敷は、中山町の中心部より西方1.5km、出羽丘陵の東方に位置し標高97mを測る。字切図の地形より推測したもので、東西250m、南北180mほどの規模である。現況は水田で、金屋敷は圃場整備事業で消滅しており、年代を示す伝承や文献等も残っていない。土橋集落内の玉昌寺に板碑が3基残っている。また、金屋敷の北西1kmには経塚遺跡があり、経文等が出土している。

(佐東一男・高橋昌敏)



金屋敷推測図

たけ の はな
竹ノ花

302-007

所在地 中山町大字金沢字三条目

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『中山町史(上巻)』

概 要

竹ノ花は、中山町の中心部より南西2km、柳沢条里道跡内に位置し標高は97~101mを測る。字切図の地形より推測したもので、東西600m、南北220mほどの規模である。地表面での遺構は確認できないが、圃場整備事業にともなう発掘調査で、柱穴や井戸跡が見つかっている。遺物としては、珠洲系陶器片、青磁片、古瀬戸片などが出土している。西方1.5kmには谷木沢橋があるが関係は不明。

(佐東一男・高橋昌敏)



竹ノ花推測図

たけのぼり
竹ノ花 302-008

所在地 中山町大字岡字中江

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

竹ノ花は、中山町の中心部より北西 2.5km、出羽丘陵の東山麓部に位置し標高 105m を測る。字切図の地形より推測したもので、東西 70m、南北 120m ほどの規模である。現況は水田・宅地であるが、遺構は確認できない。また、年代を示す伝承や文献等も残っていない。北方 800m に嚴森山、1.2km には中山氏の一族、山崎氏の山崎城がある。また、南方 800m には経塚遺跡があり、経文等が出土している。

(小関昭栄・高橋昌敏)



竹ノ花推測図

たてどう たてど
楯堂・楯戸 302-009

所在地 中山町大字土橋字楯堂ほか

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

楯堂・楯戸は、中山町の中心部より西方 2.3km、出羽丘陵の東端に位置する。土橋・柳沢の境界の尾根上にあり、標高 210m、東西 500m、南北 300m の規模で、麓までの比高差 95m を測る。山形盆地を一望に見渡すことができ、麓には足軽屋敷があったという伝承もあり谷木沢橋に関連するものとみられるが、遺構等は確認できない。北方 600m には経塚遺跡があり、土橋集落内の玉昌寺には板碑が 3 基残っている。

(佐東一男・高橋昌敏)



楯堂・楯戸推測図

とのもりやま

殿森山 302-010

所在地 中山町大字小塙字松岡山

築城者 不明

築城時期 不明

概要

殿森山は、中山町の中心部より北西3km、出羽丘陵東端の旧街道沿いに位置する。標高は134m、東西170m、南北130mほどの規模で比高差25mを測る。現況は樹園地で、後世の開発により遺構は消滅している。北方300mに中山氏一族の山崎氏の山崎楯があり、殿森山は山崎楯の砦として存在したのではないかとみられる。（小関昭栄・高橋昌敏）



殿森山推測図

4 西村山地区の中世城館の分布と特徴

4 西村山地区中世城館の分布と特徴

北島 敦爾

分布：

分布図によって一目瞭然であるが、寒河江川、六十里越街道沿いに分布する西川町域、月布川流域に分布する大江町域、最上川に沿って五百川を経由して置賜地方に通ずる大江・朝日町域と、寒河江川・月布川・最上川の三つの川沿いに分布の密度が濃く、河北町域はいたって少ないことがわかる。

いうまでもなく西村山地域は、寒河江庄として鎌倉時代大江広元が地頭職に任せられた地である。承久の乱後数年をへて、寒河江北方が欠所とされて北条氏領になったが、この寒河江北方が現在の河北町域にある。河北町域に8カ所と城館址が少ないので、自然の地形、戦国時代のこの地の政治情勢などの要因もあるが、西村山地域の中で、寒河江大江氏領とは別の歴史を辿ったことも関係するといえよう。

六十里越街道・寒河江川沿いに分布が多いのは、古くは大江氏の本拠である吉川を中心に展開された形のものもあるが、大部分は戦国期に庄内の武藤氏、あるいは上杉氏に備えて、大江氏や最上氏によって築かれたものであろう。最上川沿いに五百川地方を経て、置賜に到る道沿に分布する城館は、置賜の伊達氏に備えたものであった。月布川流域に分布するものも、やはり庄内と置賜に通する軍道に沿うものと考えるが、月布川流域に沿う城館址の状況は、前二者のそれに比較して一般に粗雑で構造も単純であるといえよう。この地域は比較的古い時代に築かれて、戦国時代には戦略的重要性が薄くなったものと考える。

特色：

鎌倉時代から室町時代初期にかけて構築されたと考えられる寒河江・本橋・吉川・入間・柴橋・高松・日田・溝延・小果・高屋などが大江系図によって伺える。これらは当初、方形單郭式の居館であったと考える。底平な台地に位置し、交通の便ことに水運に恵まれた場所に立地する。二重・三重に堀を周らしたものもあるが、これらは、のちに整備されたものであろう。寒河江城・溝延城両城は構造が基本的に類似する。いわゆる平城の中で大きく異なるのは谷地城であるが、白鳥氏の築城技法というべきか。史料的に南北朝時代に構築されたといえる山城に白岩・左沢楯山城がある。しかしその他少數の山城を除いて圧倒的多数の城館址は史料・記録にその名を表わさない。

城館址の構造の特色は、それぞれの報告書に委ねるが全体的には次のように言えないだろうか。月布川流域の若松山城（さまとやま城）などに典型的に見られる帶曲輪中心の様式が、白岩・左沢楯山城などの場合も基本的な形として認められる。西村山地域の場合、時代が比較的古く、のちに手が加えられない城館址に多いと考える。

これに比して西川町域の六十里越街道沿いや、朝日町の最上川沿いの城館址には、堀を重視した新しい形が見られる。特に西川町の水沢館・沼ノ平館や朝日町の前田沢楯など、庄内勢や伊達勢との境目といえる城館址に見る横堀の構造などは、新らしいものであると考える。当時の政治情勢から最上氏によって構築されたものと考えるのが妥当であろうか。

名もない数多くの西村山地域の山城の大部分は、戦国時代に構築されたもの、あるいは少なくとも戦国時代に機能したものといえよう。一般的に当方の山城は左沢楯山・白岩両城を除くと小規模のものが多い。地形上の制約もあるが、山城の標高は低く、しかも集落に近く立地するものが多いと言えるようである。

歴史的には室町中期以後、左沢・白岩・溝延各氏が大江一族の中で独立化の傾向をみせ、それぞれの領内防備を強化する傾向がみられるが、天正 12 年（1584）大江氏滅亡後、西村山地方を領有した最上氏によって大きく手を加えられたものが、特に西川・朝日町城の山城に多いと考える。

5 西村山地区の城館遺跡の概要

さがえじょう

寒河江城 206-001

所在地 寒河江市丸内、南町

築城者 大江親広

築城時期 錦倉期

史料 寒河江大江城古絵図

参考文献 「寒河江市史 上巻」、阿部西喜夫
『寒河江大江氏』、沖津常太郎『寒
河江城を語る』

概要

寒河江市市街地の中心部、標高 93m～98m の段丘上に位置する。連郭式の平城で三重の堀を持つ。本丸は東西約 100m・南北約 160m、二の丸は東西約 240m・南北約 320m、三の丸は東西約 420m・南北 520m で、南北に長い方形を呈する。三の丸南に東西 400m の



寒河江城推測図

堀・土塁を築く。城の構造は、堀の内側に土塁と家臣屋敷・道の順に配する。堀跡は土地の区画で一部確認できるものの、土塁は残存しない。道形に食い違いが見られる。

(宇井 啓、大宮富善)

ながおかやまたて

長岡山城 206-002

所在地 寒河江市八幡町、山岸、長岡山

築城者 寒河江大江氏

築城時期 戦国期

概要

寒河江市市街地の西、標高 160m の独立丘陵に位置する。東西南北とも約 800m 四方である。南端の寒河江八幡宮に曲輪群が存在し、神社城を主郭として、東から南にかけて帯曲輪を配する。西側のテラスでは、現在も流鏑馬が行われている。長岡山城の東裾、山岸町から石持にかけて、空堀が巡らされていたと伝えている。山岸に堀跡の一部が残る(図 B)。崖下を長方形に堀切り、南東側に直角に崖地を延長させた屋敷地と推定される。



長岡山城略測図

(高橋慎示)

もとだてたて
本楯館

206-003

所在地 寒河江市本楯

築城者 多田仁綱

築城時期 錢倉期

史 料 大江氏系図

参考文献 『寒河江市史 上巻』、阿部西喜夫

『寒河江大江氏』

概 要

寒河江市の東端、最上川左岸の河岸段丘上に位置する。標高約90m。形態は一边が約200mの方形館址で、西北隅の部分に掘跡が田となつて残る。掘幅は約10m。その内側に幅約5mの土塁跡も確認できる。さらに、この外廻り、西側と南側に掘跡が確認される。

西側推定堀幅30m。主郭の西北部分に「土井の内」という地名を残す。この部分は、戦国期に改修を行つたものであろう。楯の東側を往時最上川が流れ、船付場の要衝であった。

(宇井啓、大宮富善)



本楯館略測図

にったなたて
新田楯

206-004

所在地 寒河江市日田

築城者 新田重通

築城時期 永享元年 (1429)

参考文献 沖津常太郎『西根村史談』

概 要

寒河江市の北東部、最上川の河岸段丘上に位置する。標高約90m。方形単郭の形態で、昭和10年沖津常太郎調査によれば、東西109m・南北127mで、東辺郭が段丘崖であり、比高約2.5m。掘幅は約9m(5間)、内側の西側から北側にかけて幅5.4m(3間)・高さ1.2m(4尺)の土塁が残存していたが、現在、土塁は削平されている。楯の内側を俗に「八反歩」と称している。あるいは、東側に開いたコ字形の構造であったことも想定される。

(宇井啓、大宮富善)



新田楯推測図

たか オ やまたて
高瀬山櫓 206-005

所在地 寒河江市島、高瀬山

築城者 不明

築城時期 戦国期

史 料 大江系図

参考文献 阿部西喜夫『寒河江大江氏』

概 要

寒河江市の南部、最上川の左岸、標高120mの独立丘陵に位置する。上部は東西40m南北約200mの平坦部で、御嶽神社が鎮座し、その周間にかつて経塚が数基存在していた。主な防御施設は最上川に面している南斜面に集中している。山腹には小森神社が所在し神社を守護するように、3段の腰曲輪が配され、その下方南側、表道を扼するように腰曲輪が3段備えられている。(高橋慎示)



高瀬山櫓略測図

おと も ちょうじゅ や しき
落衣長者屋敷 206-007

所在地 寒河江市柴橋金谷

築城者 高松顯広

築城時期 室町期

史 料 大江系図

参考文献 長井政太郎『柴橋村誌』

概 要

寒河江市の南西、最上川左岸の河岸段丘、標高約104mに位置する。内郭の1辺が約100mの方形単郭で、北部に幅12mの堀と幅5m・高さ約2.5mの土塁が約20mの長さにわたって残る。界字から西側掘幅は広く、南西部に40mにわたって張り出し部を持つ。堀の北側100m先に東西に旧河道が走り、自然の防衛線となっている。堀の南西角の南方70mに旧六十里越街道の牛前河岸の渡し場がある。街道の要衝を押さえる格好の場所に立地する。

(宇井 啓、大宮富善)



落衣長者屋敷略測図

やまとさきて
山崎橋

205-010

所在地 寒河江市平塙字山崎

築城者 中山忠満

築城時期 文安年間（1444～1448）

史 料 大江系図

参考文献 長井政太郎『柴橋村史』、

『中山町史』

概 要

寒河江市の南端に位置し、平塙と中山町小塙との間に突出した出羽丘陵の北端に所在する。橋の東麓を平塙熊野神社と長崎及び岡・土橋方面への追分となり、橋はこの道を掌握する。橋の構造は、北側と南側に張り出した尾根筋に施した腰曲輪を主な防衛施設としている。標高151m東西15m南北30mの平場



山崎橋略測図

を主郭とし、主郭南に隣接する尾根に空堀を北・西・南に廻らしているが、ピークを曲輪に削平しているものの、ほとんどの斜面は自然地形である。

(高橋慎示)

なかごうはり の うち （かくばたて）
中郷堀の内 (川久保橋)

206-014

所在地 寒河江市中郷字川久保・堀の内

築城者 中山忠家（中山忠義の二男）

築城時期 錬倉期

史 料 中山玄蕃守系図

参考文献 長井政太郎『柴橋村誌』

概 要

寒河江の南、最上川の右岸の中郷段丘が最上川に突出したあたりに位置する。標高約115mで最上川との比高20mである。橋は北側の最上川に開いたコの字形の方形館である。橋の大きさは、ほぼ1町四方で、西側に幅15mの掘跡が残り、その内側に幅9mの土壘状の遺構が認められる。また、東側にも堀跡の名残である幅9m長さ18mの溜池があった。橋の南に市道平塙中郷線が走り、その南の集落を田中、田を前田と称している。

(宇井 啓、大宮富善)



中郷堀の内略測図

ひ わ だ た て (たてぐす)
日和田櫛 (櫛越) 206-017

所在地 寒河江市日和田字櫛越

築城者 伝日和田五郎

築城時期 南北朝期

参考文献 宇井啓・大宮富善「日和田櫛について」

概要

葉山の南縁、慈恩寺山の東の台地突出部を大堀切で切り離した山城である。主要施設として約4段の帯郭を設け、主郭は約80平方mの広さを持つ。櫛越稲荷神社の下方平場は東西25m、南北70mを計り、長者屋敷の伝承を持つ。櫛の西側の麓から大堀切至る道に坂虎口が見られる。北東側は腰曲輪を配して、側面部は堀で仕切られる。更に、この櫛を中心心にコの字形に日和田集落を内堀・中堀・泥田堀の三重の堀が囲み、総構えの構造を呈していた。

(宇井 啓、大宮富善)



日和田櫛略測図

お やまとて
尾山櫛 206-018

所在地 寒河江市慈恩寺

築城者 不明

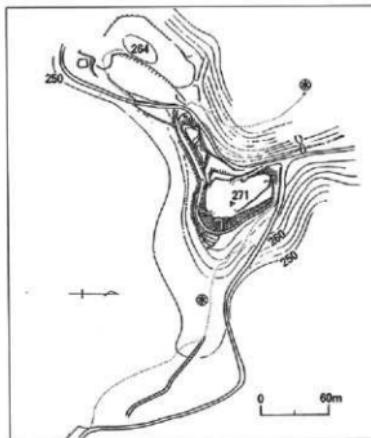
築城時期 戦国期

史 料 慈恩寺一山絵図 (正徳6年)

概要

慈恩寺城館群の一つ。慈恩寺一山の背後の丘陵260m～270mに位置する。頂点を主郭とし、東西尾根筋に小郭を連ねて配する。主郭は南北に65m、東西40mの梢円形で、北に腰曲輪を設け、東側の腰廻りに横堀を配する。南西に張り出す副郭が、50mの長さに2段に配備されている。この南側の切岸は坂道となっているが、横堀の可能性もある。北側尾根筋の鞍部に堀切の残れが見られ、東側尾根筋にも空堀道の一部が残る。

(高橋慎示)



尾山櫛略測図

こ ろ び つ た て
ゴロビツ櫓

206-019

所在地 寒河江市日和田

築城者 不明

築城時期 戦国期

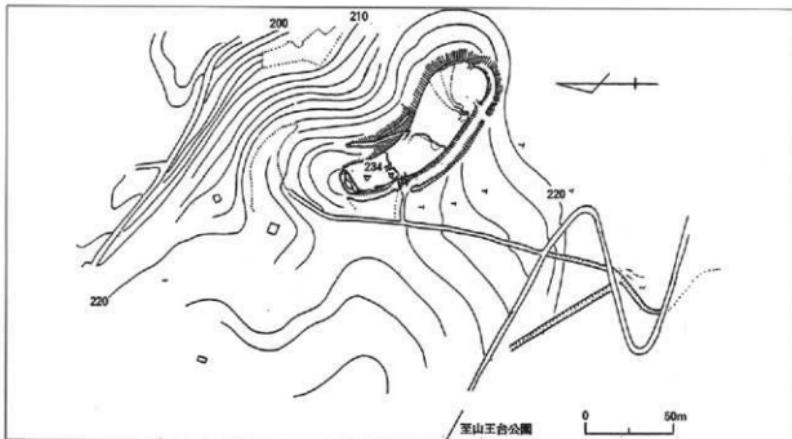
史 料 慈恩寺一山絵図(正徳6年)

概 要

菫山の南縁、慈恩寺一山の宗教聖地である尾山の北東に位置し、慈恩寺城館群の一つ。標高234mの舌状台地に立地する。南東-北西を主軸とする長さ約100m、幅約30mの細長い楕円形に4段の曲輪群を配する。麓の県道日和田松川線との比高差118m。主郭は北西側に位置し、南北20m、東西15mの広さを持ち、北・西の一部に土塁を残す。郭の西南にかけて幅約6mの横堀を廻している。櫓の西斜面は、現在墓地であるが、墓地西側に空堀道の一部が認められる。櫓の北東斜面に腰曲輪群が展開する。ゴロビツ櫓の北東下に矢呑沢があり、自然の防御をなしている。また櫓の南下に、通称「上ノ寺」「小寺山」の地名があり、古く薬師堂があったという伝承を残している。溝延長老の説話を伝える五輪塔などが近くにある。

ゴロビツ櫓から、南西に下ると松藏櫓に達する。この櫓下では、東の箕輪集落からの道と、南麓下の日和田集落から登る鬼越え道が合流する。日和田櫓・松藏櫓・ゴロビツ櫓が形成するラインは、慈恩寺一山の東部守備ラインだったと考えられる。

(高橋慎示)



ゴロビツ櫓略測図

所在地 寒河江市慈恩寺字松藏

築城者 不明

築城時期 戦国期

史料 慈恩寺一山絵図(正徳6年)

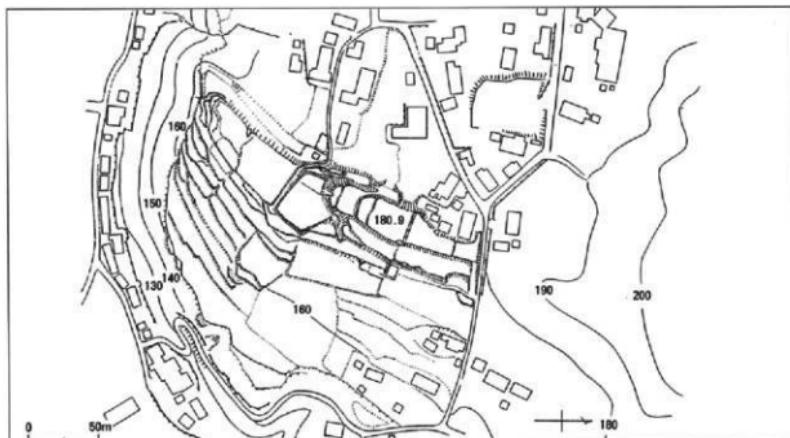
概要

慈恩寺城館群の一つ。慈恩寺山の南東の舌状台地に位置し、標高180mから140mの東斜面にかけてほぼ全体に曲輪群を配している。慈恩寺山内への東からの侵入路である鬼越路に対処したものと推定される。

櫓の北端は、ゴロビツ櫓のある尾根筋続きを、鬼越路が切通しにしている。主郭は切通しの南50mに位置し、東西22m、南北27mの方形で、北側に土塁を配している。曲輪群は主郭の南に厚く、郭南に切通し道が走る。古くは、鬼越路は、櫓の東の切通しに至る前に南折し、曲輪下を通り、郭南の切通し道に連結したものであると推定される。櫓への虎口は、この切通し道が慈恩寺山内に入る曲折する地点から空堀道を北進し、右折して副郭に至るものである。

櫓の南半東斜面には、南北100mを測る9段にも及ぶ曲輪群が整然と配置されている。

(高橋慎示)



松藏櫓略測図

○ サンダーベルト
肥前櫛 206-021

所在地 寒河江市慈恩寺

築城者 不明

築城時期 戦国期

史料 慈恩寺一山絵図(正徳6年)

概要

慈恩寺城館群の一つ。慈恩寺一山を囲む標高220mの西尾根筋に位置し、慈恩寺背後の丘陵に所在する尾山櫛に連絡する。櫛は、東西50m、南北25mの南に広がる半円形を呈し、西端に東西幅10mほどの高まりが残る。櫛の南麓きわ、田沢集落の背後に東西80mにわたって4段の腰曲輪が施され、肥前櫛、田沢要害に連絡する。

(高橋慎示)

た ざわようがい
田沢要害 206-022

所在地 寒河江市慈恩寺

築城者 不明

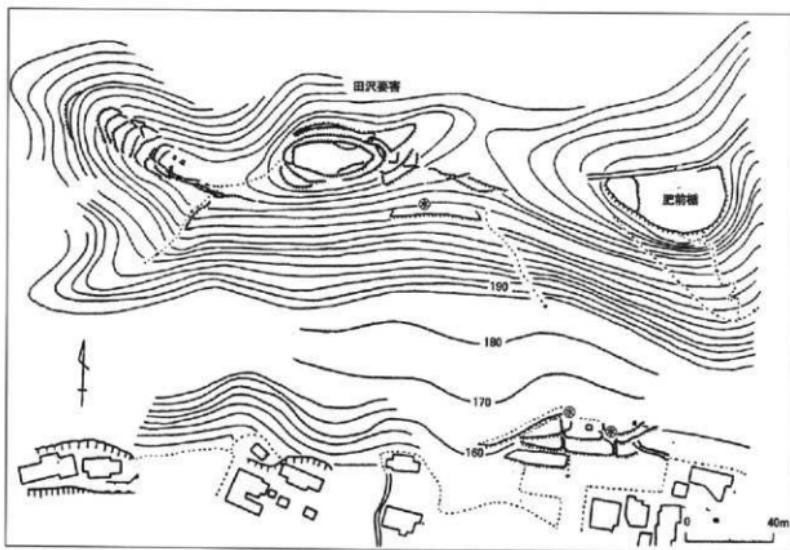
築城時期 戦国期

史料 慈恩寺一山絵図(正徳6年)

概要

慈恩寺城館群の一つ。慈恩寺一山を囲む西の尾根筋、肥前櫛の西100mに位置する。主郭は東西35m、南北15mの楕円形を呈し北に横堀が廻る。南側、北側に数段の腰曲輪を配す。主郭から西側尾根筋を50mほど下ると、段丘西端に東西50mにわたって10数段の曲輪群が配されて、田沢方面から慈恩寺山内への侵入に備えている。櫛への道は、主郭の西下、南側から尾根道を上り詰めたところに土壁の食い違いによる坂虎口が施されている。

(高橋慎示)



肥前櫛・田沢要害略測図

じん が みねたて
陣ヶ峰櫓 206-026

所在地 寒河江市白岩

築城者 不明

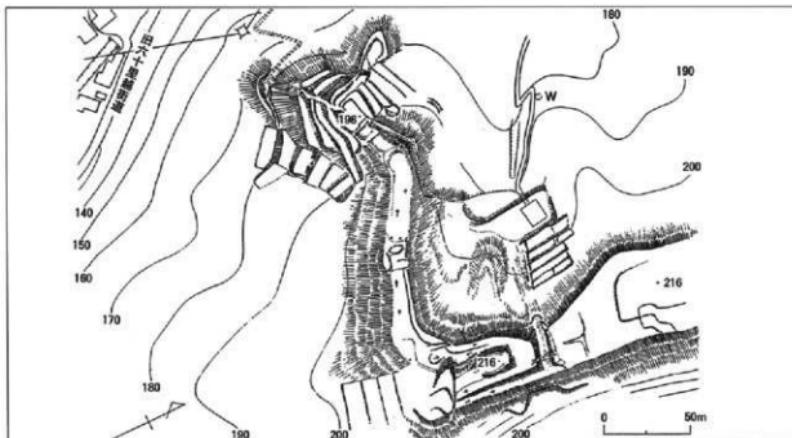
築城時期 戦国期

概 要

葉山山麓の南縁、葉山より南流する実沢川の左岸、寒河江川の合流点手前の舌状台地に位置する。台地の南裾を旧六十里越街道が走り、櫓の麓の集落は白岩新町である。この櫓と実沢川を挟んだ西側段丘上が白岩本城があり、陣ヶ峰櫓が名前の示す通り、白岩城の支城・陣城として機能していたものと推定される。

櫓には、標高 170m から 220m の逆 L 字状の尾根筋に沿って郭が設けられている。南北端に位置する 10m 四方の主郭を中心に比高差 30m に 5 段の帯郭が南北西の三方向に廻らされ、さらにその南側に 6 段の腰郭が設けられ、新町からの進入路に備えられている。尾根筋を約 130m ほど東進し、50m 程北進すると主郭に至る。その角部分の南斜面に 4 段の腰郭が設置されている。北部の主郭は東西 10m 南北 20m の曲輪となっている。主郭の北側の尾根筋を大堀切で遮断している。西側からの進入路は観音堂から大堀切に至る。観音堂裏の東斜面に 5 段の曲輪群が設けられている。堀切北側尾根にも平場が広がる。主郭部分の東西両側とも防衛施設が希薄である。

(高橋慎示)



陣ヶ峰櫓略測図

しらいわい なきやまたて
白岩福荷山櫓 206-028

所在地 寒河江市白岩

築城者 白岩大江氏

築城時期 慶国期

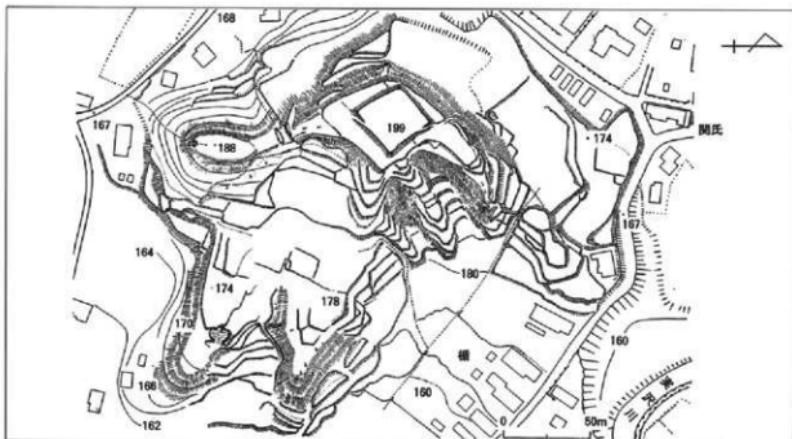
参考文献 『山形県史 古代・中世資料2』

概 要

白岩城館群の一つ。白岩城館の中で中央に位置し、城館群の中核に相当する。櫓の北・東を実沢川が流れ、櫓と川の間を白岩本町から留場・田代・蓮山への道が走る。南は上插山、八幡櫓等が聳え、六十里越街道からの侵入を遮る。西には広い尾根を取り込む複合郭型式の新櫓が対峙する。

櫓は標高199mの独立丘陵に所在し、主たる防御施設は、東・北部分に施されている。主郭は北西よりのピーク部を40m角に削り出し、周囲を腰曲輪が廻り、集落との平均比高差は40mである。北々東から東側は、下り尾根と虎口が開き、各数の腰曲輪を設け、麓にはさらに広い曲輪を複雑に配置する。その北側を「櫓」と称し、屋敷地割りが現存する。西端の下り尾根を堀切にて切断し、「櫓」と西側曲輪、さらに新櫓に連結する。西側は、堀野に水堀を廻らしている。主郭南側尾根は、鞍部に堀切が施され、主郭側と切り離されている。頂上には福荷神社が祀られ、斜面にはほとんど防御施設が施されていない自然林である。

(高橋慎示)



白岩福荷山櫓略測図

所在地 寒河江市白岩

築城者 白岩大江氏

築城時期 戦国期

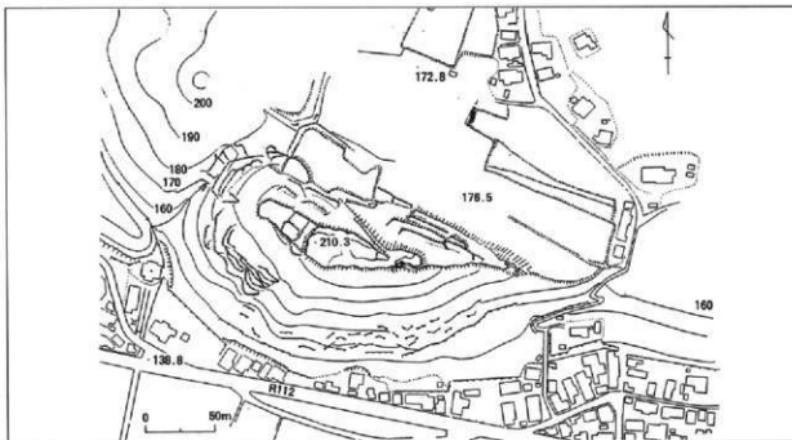
参考文献 「山形県史 古代・中世資料集1」

概 要

白岩城館群の一つ。白岩城館の中で南西に位置し、標高 210m の独立丘陵に所在する。物見を兼ねた一拠点である。麓を六十里越街道が走り、西の麓に三日月不動尊が祭られている。東は、麓集落への虎口となっている「ウドザカ」切通で区切られている。上楯山山頂部との比高差 70m、北側台地との比高差 40m である。

山頂曲輪は、東西 85m 南北 25m の楕円形を呈し、虎口は東側と西側に各 1 カ所、北側に 2 カ所設けられている。山頂東半分は、東に細い不整形を呈し、端は虎口である。西半分は 4 分割され、中央に切岸が鮮明な方形台が残る。この曲輪には北と南に虎口が開き、北は中段曲輪に、南は腰曲輪に下り、さらに腰曲輪群を経由して、三日月不動尊に至る。東斜面には帯曲輪が 5 段西に伸び、北中央には稲妻形の空堀通路が虎口に通じている。北の帯曲輪群は、この空堀道頭上に達する広い曲輪を形成している。北の麓台地上には、屋敷群の存在が推定される。

(高橋慎示)



白岩上楯山略測図

所在地 寒河江市白岩

築城者 白岩大江氏

築城時期 戦国期

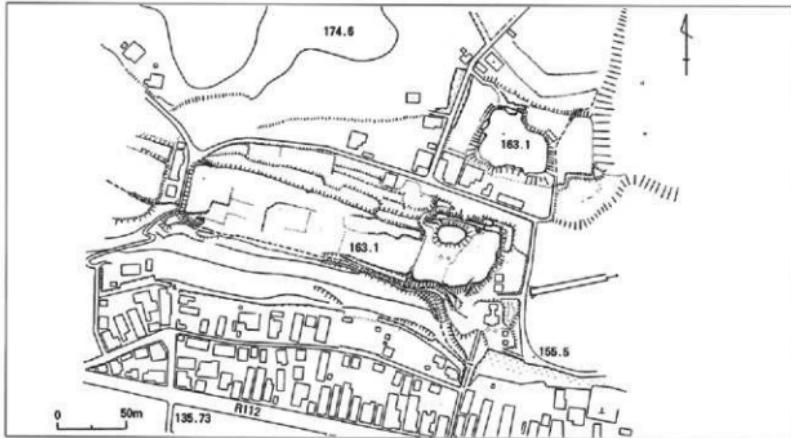
参考文献 『山形県史 古代・中世資料1』

概 要

白岩城館群の一つ。白岩城館の中で南に位置する。櫛は東西 250m、南北に 80m、標高 165m で南の集落部との比高差 29m の長方形台地である。櫛の東に白岩出城が、西に上櫛山が続く。出城との比高差は 16m である。南の切岸は、自然の断崖で、防御施設は設けられていないが、北側には 3 段の帯曲輪が残る。櫛の東端に白岩八幡神社が祀られ、櫛の東部分 60m は枢要施設に当たり、神社境内と北西の公園とは 3.5m の段差で区別、中間地は横矢を備えた虎口が開ける。公園の北端に高さ 3m、幅約 10m の高まりが残り、背後に帯曲輪をもつ。この西側に坂道が残り、腰曲輪と 2 条の土塁とで通路を扼する。この通路の北側延長に「櫛」の集落が存在する。境内崖際には岩盤を開削した大きな空掘状通路が開口する。櫛の西半分は、ほぼ平坦地である。また、台地西端には継の切通「ウドザカ」がある。

櫛の南裾に拠集落が展開し、六十里越街道が東西に走る。往時の街道は八幡神社参道から櫛の方に折れ、参道下で再び西に折れ、山際に沿って走っていたものである。櫛はこの街道を押さえる要衝に位置する。

(高橋慎示)



白岩八幡櫛略測図

とめばたて
留場櫓 206-033

所在地 寒河江市白岩

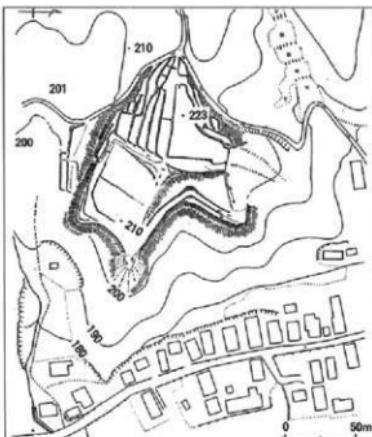
築城者 白岩大江氏

築城時期 戦国期

概 要

白岩城館群の一つ。白岩城館の中で北に位置し、葉山・田代より南下する道を扼する。主たる郭が東西2つであり、東の郭が標高約210mに位置し、一辺が50mの方形を呈する。西側の郭は、東南を角にもつ直角三角形状のプランを呈し、東の郭とは掘切りによって切り離され、東郭より10mほど高い。この郭の南と北西辺に帯郭を数条有し、防衛を厚くしている。

(高橋慎示)



留場櫓略測図

みやうちたて
宮内櫓 206-037

所在地 寒河江市宮内

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 寒河江市史編纂叢書第28集

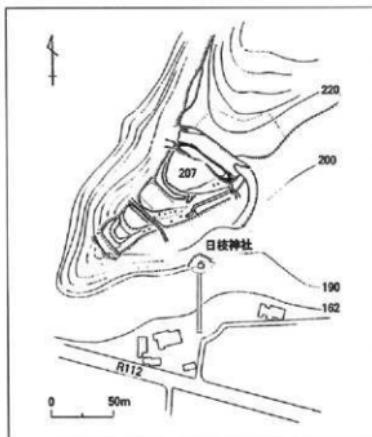
『宮内村資料集』

概 要

寒河江市の西端、葉山南縁、旧六十里越街道と葉山幸生道の分岐点南東角に位置し、標高200mの舌状台地に立地する。南山腹に宮内日枝神社を擁し、麓には宮内集落が残える。集落との標の比高差48m。櫓城は南西—北東に105m、櫓は舌状台地を大堀切で遮断し、さらに先端部を掘切で切り離している。

主郭の切岸に横堀が半周し、神社裏上方に食い違いのある横堀をセットしている。南西端に小腰郭群を配し、大堀の北東側は兵員駐屯地の可能性もある。

(高橋慎示)



宮内櫓略測図

所在地 寒河江市幸生

築城者 東海林康広

築城時期 戦国期

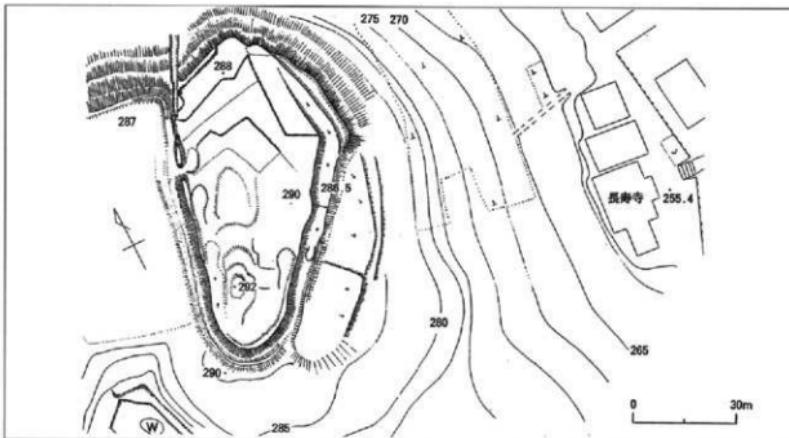
参考文献 『西村山郡神社誌』

概 要

寒河江市の北西、葉山山内幸生集落中心部に位置し、標高 280m～290m に立地する山城である。楯の東裾に長寿寺を擁し、その東側に葉山を越える主要地方道新庄大江線が走る。主郭と籠との比高差約 40m、山腹は現在寺の墓地となっている。

主郭の大きさは東西 30m・南北 80m で楕円形を呈する。主郭の東に帯曲輪が廻され、さらに幅 12m の曲輪が南北 60m にわたって小段差をもって付属し、さらに帯曲輪が廻る。主郭の南西部に一部土塁状の高まりが見られる。主郭への入り口として、北西部に舟形状の虎口が設定されている。主郭外面の南西部一帯に横堀が残存している。寺裏手から主郭に至るのに、この横堀を半周することになる。楯の斜面北東側より虎口に至るのを遮断するように、北側に緩堀が 1 本施され、堀の上部には、東西两侧に土塁が設置され、緩堀を扼する。このほか、横堀、腰郭、井戸等が残るが、全体として破壊が著しい。

(高橋慎示)



東海林楯略測図

にったじょうのうち
日田城の内 206-042

所在地 寒河江市日田

築城者 小国大膳亮

築城時期 戦国期

参考文献 沖津常太郎『西根村史談』

概要

寒河江市の東部、最上川河岸段丘上で、寒河江・天童間の通路を押さえる要所に位置する。新田橋の南西400mにあたる。本丸は、東西50m・南北70mで、堀跡・土塁等は確認されないが、道形が残る。この地域を中心として、不整方形の二の丸が本丸を取り囲む。北西部に堀跡がみとめられ、東部分は村内を南北に貫流する守川に連絡する。二の丸外側に所在する集落も取り込まれて城郭が形成されていた可能性がある。馬寄、的場の地名が残る。

(宇井 啓・大宮富善)



日田城の内推測図

きのさわだて
木の沢橋 206-043

所在地 寒河江市木の沢

築城者 橋間氏

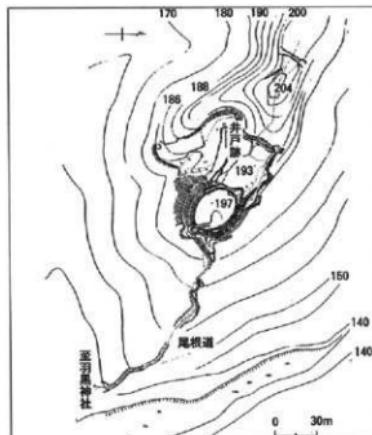
築城時期 戦国期

参考文献 大宮富善「木ノ沢橋」

概要

平野山の南端、標高190mから205mの舌状に張り出した尾根筋に位置し、木の沢集落を南裾に控える。橋は4つの郭に分けられ、主郭は東部の郭で、南北30m・東西20mの梢円形を呈し、西側に腰郭を付帯する。さらに西に30m四方の方形の郭を持ち、比高差2~3mで南側に一段低い郭が続く。方形の郭の西側には尾根を切って掘切が設けられ、郭の内側は土塁状になる。掘切の西30mが橋の最高部で小郭がある。さらに西側尾根にも掘切が設けられている。

(高橋慎示)



木の沢橋略測図

や ち じ ょ う 谷地城

321-001

所在地 河北町谷地内堀（旧町一円）

築城者 白鳥十郎長久

築城時期 戦国期

史 料 「工藤弥次右衛門手控」「普住院由緒書」「字限図」「谷地本郷八ヶ村簡絵図」

参考文献 『中條備前守と白鳥十郎公』『河北町の歴史』『出羽の武将』

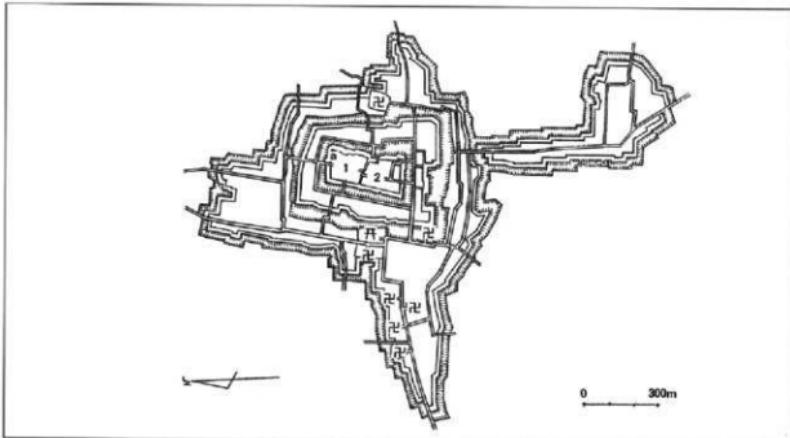
概 要

谷地内堀を中心にして築かれた平城であり、三ノ丸までを構成する。本丸の規模は、南北 260m、東西 120m の長方形をなすが、中央部は土塁を以て二分する。主郭 1 は、約 1ha の面積があり、検地帳に残る屋形家敷…2 反 1 畝 21 歩の在った所でもある。その前衛的役割をなす副郭 2 は、2.1ha 程あり、近從家敷や兵器庫の立ち並ぶ防御区域と推定される。

本丸を巡る土塁 a は、底部の幅で 14m あり、その高さは 2m 程であるが、崩壊のあったことは否めない。核所への口は、南面する大手口が 2 門と夫々の東西北側に 1 門ずつ在った事が字限図等に拠り裏付けされる。また、これ等を取り巻く水堀は、最大幅で 50m であるがその多くは 30m 前後と計測され、横矢掛りを設定している。二ノ丸の規模は、南北が 450~500m、東西が約 350m の長方形をなす。本丸堀に沿って道路をとり、それに面して家並みを配置していた。該区への口も 5 箇所想定され、何れも二ノ丸堀を渡った所に設けられる土塁に囲まれていた。堀幅は、最大で 50m、最小 10m である。三ノ丸は、旧谷地本郷をほぼ閉鎖し、水堀跡の低地を今に残している。

谷地城の創建は、弘治年間頃に中条長昌によって行われたが、その後、白鳥十郎の支配するところとなり、天正 10 年頃まで外堀構築が進められたものと推定される。その後間もなく、天正 12 年 6 月 7 日に上義光に攻められ、同月 10 日に落城した。

（鈴木聖雄）



谷地城（字限図による復元図）

みぞのべじょう
溝延城 321-002

所在地 河北町大字溝延

築城者 大江茂信

築城時期 南北朝期

史料 宝林坊文書「慈恩寺舞童帳」、寺司文書「はとう物収納の覚」

参考文献 今田信一「河北町の歴史」、仲沢茂治郎「溝延郷土読本」、清野正司所蔵「溝延古地図」

概要

溝延地内本丸を中心に築かれた平城で、三の丸まで構成される。本丸の規模は東西145m・南北160m、二の丸は東西312m・南北300mでほぼ方形をなすが、三の丸の堀跡は北側は柏川に沿い、南側は現在明確には跡づけることが出来ない。二の丸・三の丸の南北角、同じく三の丸北西角に土壙跡が認められ、本丸北東にも戦後まで土壙跡があった。城域ものちに拡大整備されたものであろう。天正12年大江氏の滅亡とともに廃城か。



溝延城（村古絵図による復元図）

（北畠教爾）

さかいすけ じ ろう や しき
境介次郎屋敷 321-003

所在地 河北町西里天満

築城者（境介次郎）

築城時期（室町期）

概要

天満集落内にあり、境介次郎屋敷として伝承され、現在は数軒の家が建っている。南側と東側には狭い排水溝①②が残っており、北側③は水田の排水路で、西側は畑でその中に境界柱④が立っている。介次郎の子孫は明治初年に塙釜に移住し、現在は不明である。介次郎は布阿安芸守配下の豪族であったと思われるが、介次郎が奉祀していた熊野神社に、社領田畠5反の最上義光の安堵状が現存している。字切図からみて、斜線の部分が当初の堀跡であったと推測される。（横清哉）



境介次郎屋敷推測図

おおつかたて や ち かりじょう さたぐち の たて
大塚館（谷地仮城）（北口ノ館）

321-004

所在地 河北町谷地東

築城者 中条長昌

築城時期 戦国期

史料 「工藤弥次右衛門手控」「善住院由
緒書」「字限図」

参考文献 『中条備前守と白鳥十郎公』『河北
町の歴史』『出羽の武将』

概要

当館の現状は、水田及び道路に戻っている
が字限図より復元すると、南北260m、東西
190mの矩形館跡を概観することができる。
館周には、7~10mの幅で土塁が回り、更に
その外周を幅15m~18mの水堀が巡ってい
た。大手口は、北口地区に連絡するもの多

く、他方、搦手口は最上川面に向いていた。構築年代を天文年間後期に遡ることができ、築城者は、
中条家6代長昌に比定されている。これより以前は、堀口の館が同氏の居館であった。（鈴木聖雄）



大塚館（字限図による復元図）

ほりぐちたてあと
堀口館跡 321-005

所在地 河北町谷地

築城者 中条（秀長）

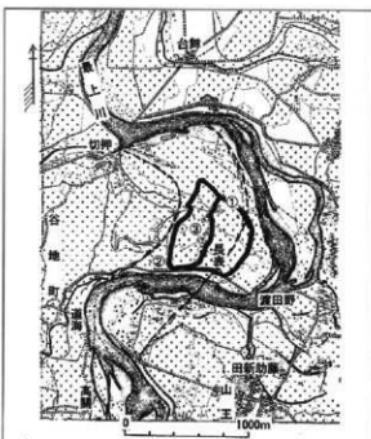
築城時期 室町期

史料 「善住院文書」「大町念佛講帳」「堀
米家地図」

参考文献 『河北町の歴史』上巻

概要

「河北町の歴史」では、明徳頃中条氏が谷地
に入部して、最初に構築した館であるとして
いる。古い記録と地図からみると、館跡は元
屋敷と呼ばれた実線①の区画であった。その
西南部②に八幡宮があり、③が八幡宮の朱印
地で、②の附近から昭和11年の最上川改修
工事の時、五輪塔5組と板碑3枚が出土して
いる。その時、川は点線のように改修された
ので、館跡の大部分は河川敷となり、川の東
側に僅に館跡の一部が残るだけとなつた。



堀口館跡推測図

(横 潤哉)

わ わ やままで
根際山櫓 321-006

所在地 河北町西里字根際山

築城者 不明

築城時期 〈室町期〉

概 要

地元には櫓があったという伝承は伝わっていないが、根際集落の北側一帯には曲輪が続いている。その中心となる部分には、毘沙門堂①・子安鏡音②・三宝荒神③・荷渡山石塔④が記されている。町営野球場の南側標高200mの所⑤に詰の城と思われる所があり、その西方の土入は古い遺跡で石器土器が出土している。土入の水田と畑を囲んで、その西方や南方にも曲輪があり、その西方曲沢⑥からも石器土器が出土している。(横 清哉)



根際山櫓略測図

わ だて やままで
和橋山櫓 321-007

所在地 河北町西里字和橋

築城者 (布阿安芸守)

築城時期 〈室町期〉

史 料 旧「西村山神社誌」
「両所神社社伝」

概 要

和橋山櫓は布阿安芸守が築いた櫓であると伝えられてきた。主席は①で、現在町の配水池がつくられ、籠からの比高は50mで、周囲には多くの曲輪がある。大手口は②、搦手口は③で、西側には空堀④が残っている。副席⑤⑥があり、その西方の⑦⑧も重要な一席で、主席との間を根岸道が通っている。現在の西部農免道路の西部にも、詰の城と思われる場所⑨がある。浦田⑩と両所神社周辺⑪が根小屋であったと思われ、附近から土器が出土している。(横 清哉)



和橋山櫓略測図

だてのじょう
伊達城

321-008

所在地 河北町大字吉田花の木 1338-1、2 他

築城者 不明

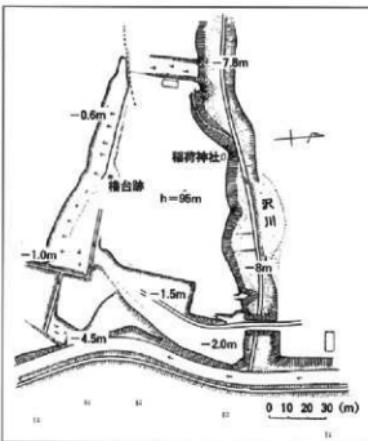
築城時期 室町期

史料 字限図

概要

新吉田集落の南に位置し、東側の最上川河岸段丘と、北側沢川の段丘崖を利用した館跡である。西側と南側には幅約5m～7mの土塁と幅約8m程の堀をめぐらせ、南北約97m、東西約115m（いずれもほゞ中央線）の規模をもつ。山陰中納言10余代の後裔伊達某が城を構えたとの伝承があるが、永正17年伊達稙宗の最上征伐後の守備軍駐留に比定する考え方もある。附近に鍛冶屋敷跡などもあり、この館との関連も想定しなければならない。

（北島教爾）



伊達城略測図（作図者：高橋慎示）

むつあいたて ようがい
睦合櫓 (要害) 322-003

所在地 西川町睦合字上ノ台

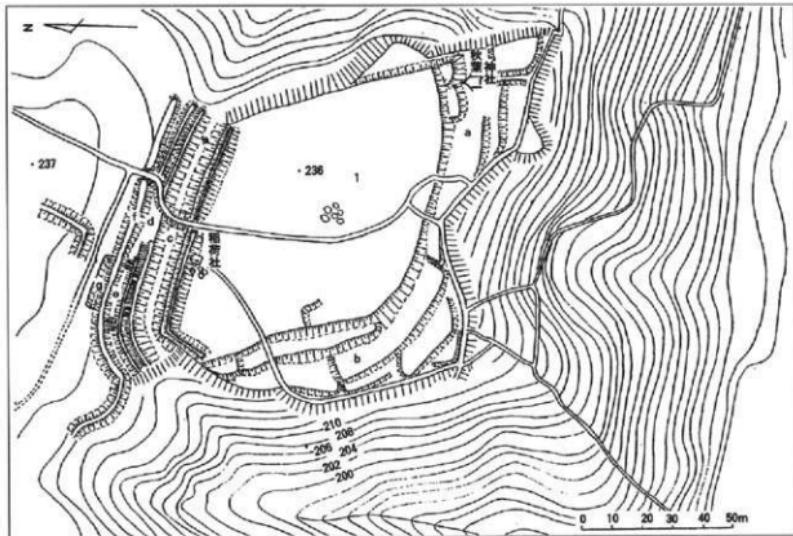
築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

睦合小学校の背後で標高 236m に位置する。学校周辺との比高は 72m であり、左右両側は、自然の沢で分断されている。大手口は、学校裏よりと長流寺境内裏手より登るものがあり、前者の場合は南の曲輪群 a へ辿りつく。この場所は 8 段より構成され、概ね 1~2m の段差であるが、主郭部 1 との比高では 6m を有する。また、後者の場合は、西側斜面に設けられた曲輪群 b に到達し、10 節のテラスを構築している。主郭部の面積は約 60a で、全くの平坦部である。中央部には礎石のような石群も見い出される。一方の搦手側には、土塁を巡らしており長さ 91m、幅 6m、高さ 1.4m を計測することが出来る。この主郭部を北側で遮断するため 3 条よりなる空堀を築く。空堀との規模は、長さ 85m、堀底より土塁頂部までの高さが 6m と巨大である。d, e の場合も長さは同様であるものの、幅、深さを減少させ、その分障子堀を構成している。これ等の構造物は、木橋を以って越えていたと考えられ、稻荷社の脇には、石橋の跡が残る。一方の北側にも土塁 f が巡らされ、空堀 g なども見受けられる。文献や伝承には表れて来ないため明らかでないが、隣接する長登櫓が白岩備前守光広の治める櫓とあることから、該所もそのように考えられる。

(鈴木聖雄)



睦合櫓略測図

所在地 西川町海味字海ノ宿

築城者 (大江政広)

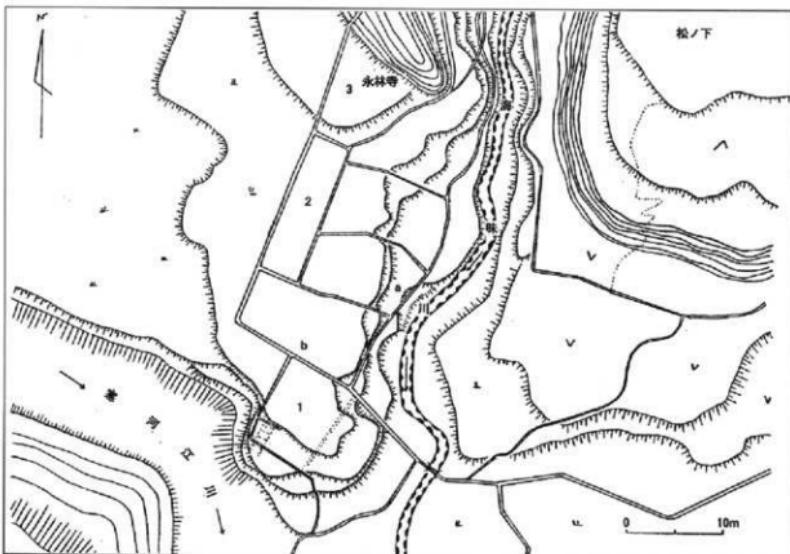
築城時期 戦国期

参考文献 『奥羽軍談』『寒河江大江氏』『出羽諸城の研究』

概要

当館は、南面する寒河江川と、東面する海味川に分断され、寒河江川に突き出た舌状台地に築成されている。その規模、南北450m、東西約200mには、出丸1、副郭2、主郭3が築かれ、寒河江川河敷より登った所が馬出しとも見える出丸である。水田との比高は20mあり、海味川に面しては3段の腰曲輪aを持つ。大手口bより背後200mまでが副郭部とみられ、旧家が軒を連ねる。また、同所にも海味川の河岸段丘を利用した腰曲輪を3段築き、東側を防いでいる。一方の西側にも1段の自然落差が見られるが、この所も沢水を留めた水堀であった可能性が高い。主郭部は、現在の国道より一部南側を含む旧愛宕神社境内と永林寺境内とに仮定される。その面積は、南北100m、東西100~150mの規模であるが、山裾になるほど広がりをもつ。また、現愛宕神社のある頂丘が詰の丸と考えられ、背後に曲輪状の段差が僅かに残っている。頂丘と主郭部との比高は、15~20mあり、峰伝いに太郎山橋へ至ることも出来る。築城者を白岩城主大江政広とするむきもあるが、対岸の吉川館が大江親広に拠る可能性も高いことから、創建年代は鎌倉時代まで遡るものとも考えられる。

(鈴木聖雄)



海味館略図

た ろうやまたて
太郎山櫓 322-007

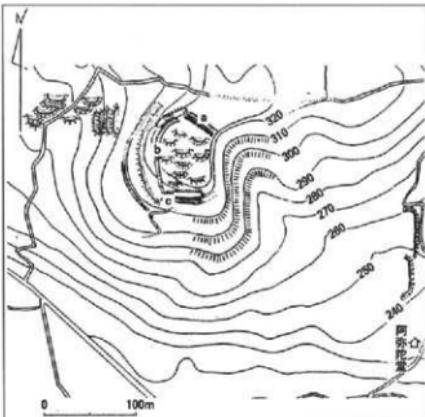
所在地 西川町海味字太郎山

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

海味太郎集落の背後、標高 319m の頂丘に造られている。西側を間沢川で分断し、また、正面南側は寒河江川によって区分されている。主郭部は、北側平坦部を堀切 a で画し、その規模は長さ 38m、深さ 2.5m、堀幅 4.5m の薬研底である。更に西側に付随する空堀 b は 98m と長いが、途中より帯曲輪に変っている。その下部先端には虎口 c を設け、楔形を構成する。海味館の支城として、その西側を守るために間沢川奥の集落を守るために構築されたものである。
(鈴木聖雄)



太郎山櫓略測図

よう せい ざわて
要害沢櫓 322-009

所在地 西川町網取字立目

築城者 (生田九右エ門)

築城時期 戦国期

参考文献 『奥羽軍談』『最上四十八櫓の研究』
『神都岩根澤之面影』

概 要

大里沢西側の舌状高地に築かれている。主郭部に至る途中には、L 型に曲折した堀切 a が、また、その北隣りにも沢に面して 2 段の曲輪 b が造られている。主郭 1 は、標高 333m の頂上部に形成され、長さ 100m、横幅 45m の楕円形であるが、やや北側が高くなっている。これより東側には、長さ 74m、幅 5~8m の曲輪群 c が階段状に続き、南東方向にも大小 7 段の曲輪群 d が横たわる。該館は、網取櫓の詰の城としてその背後に構築されたものであり、軍記にも所載する。
(鈴木聖雄)



要害沢櫓略測図

所在地 西川町間沢字東

築城者 不明

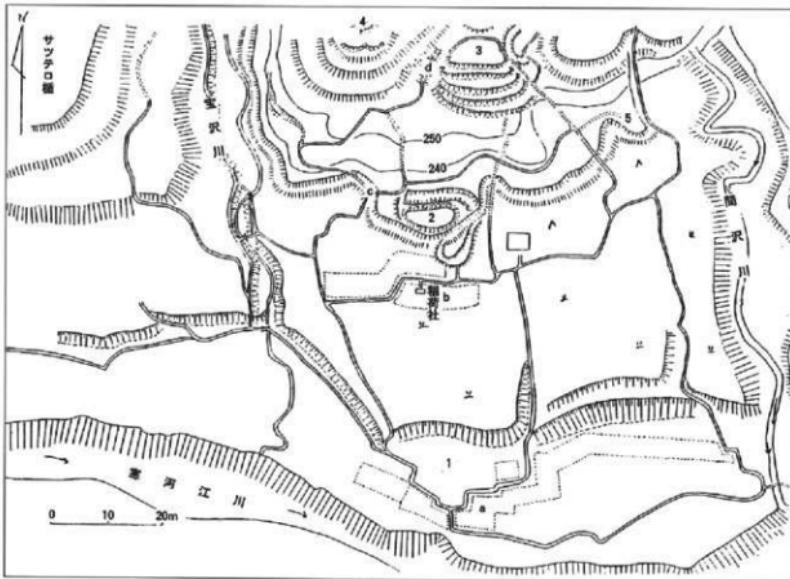
築城時期 戦国期

史 料 「間沢村鹿絵図」(元禄2年7月)

概要

間沢川と宝沢川で断ち切られた間沢本郷に所在する。居館1は、水堀aで囲まれた一画と推定される。また水堀周辺の小字を下堀と呼び、水の手を宝沢川に求めて要害城までを取り囲んでいたものと想定される。居館からは、数本の道で背後の山城を結ぶが、西側金堀よりのものがよく痕跡を留めている。おくまん堂2がその中心をなし、此所は、南北50m、東西190mの自然丘を利用したもので、後方を長さ107m、幅17~20m、深さ1~3mで堀切っている。虎口cよりは、馬捨場dを通って詰の丸3へ至る。馬捨場は大手口の異称であるが、西側の山頂(物見4)とに挟まれた空堀状の場所である。詰の丸へは、このほか東の物見であるテッショ山5や、要害坂から登るものもある。高度285mの該所は、約20aの緩斜面となり、周囲を5段の曲輪群で巻いている。本町内でも吉川地区に次ぐ平坦部をもつこの地域は、比較的早くから開発されたものと考えられる。築城者は不明であるが旧家のなかには佐藤姓が多い。かつては、隣接するサツテロや枝郷の鶴部、大平、下屋敷にも支城を擁していた。

(鈴木聖雄)



間沢館略測図

なべくらたて たてやま
鍋倉櫛 (櫛山) 322-013

所在地 西川町網取字鍋倉

築城者 (東海林隼人佐昌種)

築城時期 戦国期

概 要

網取川を挟んで沼ノ平館の東側に位置し、長径 20m、短径 10m よりなる楕円形の小規模単丘である。周辺との比高は 2~3m のみであるが、虎口には石積も見うけられる。標高 505m の高所にあって、沼ノ平館の前衛的性格を帯び、周辺には火焚き森、木戸口、的場山などが点在する。これ等の防備も該館と共に本城沼ノ平館の絶構えの内と考えられ、鶴部や大方面からの守りとみられる。



(鈴木聖雄)

たてやまとて 櫛山櫛 322-014

所在地 西川町岩根沢上ノ平 (櫛山)

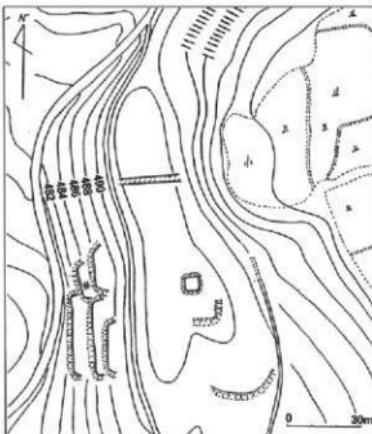
築城者 (東海林二郎昌勝)

築城時期 戦国期

参考文献 『奥羽軍談』『神都岩根澤之面影』

概 要

岩根沢三山神社の境内地、及び要害神社境内、そしてお清水周辺の上の平地区と、深沢より北側の俗称櫛山の頂丘部周辺とに残る。前者には、比高 5m を越す曲輪を数段残し、これ等の背後に続くのが当該櫛山である。該所は、一辺が 5m の方形土壇を中心にその北側を長さ 30m、幅 2m、深さ 1.5m の空堀で分断し、西側は 3 段の曲輪で防備している。軍記には、天正 15 年 4~5 月に起った最上勢との合戦に際し構築されたとしている。



櫛山櫛略測図

(鈴木聖雄)

所在地 西川町綱取字上ノ山

築城者 東海林隼人佐昌種

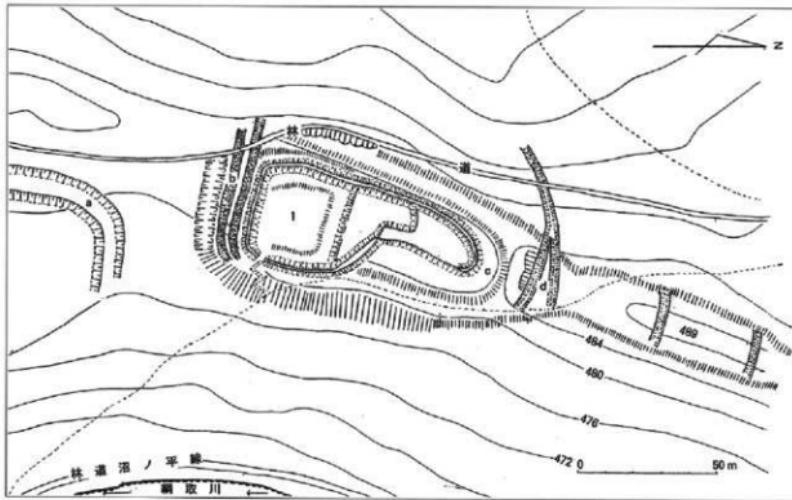
築城時期 戦国期

参考文献 『奥羽軍談』『神都岩根澤之面影』

概 要

国道 112 号を 2km 程北上し、沼ノ平集落に入いると背後の上ノ山一帯に分布する。西側を龍神沼より流れ落ちる川と東側を綱取川で隔離された舌状の地形にある。主郭 1 は、標高 480m の馬の背状の峯に築かれ、集落との比高は約 84m である。大手口は、集落からの 5 箇所と、西側山裾よりの 2 箇所、そして、綱取川相元からの 1 箇所で都合 8 箇所から伸びている。その周辺には、折りを伴った腰曲輪をよく構築している。曲輪は、さらに裾野部を 2~3 段で一周し、山中までにも見受けられる。最頂部の曲輪 a は、主郭を守るもので 1 段の長さは 60m 前後である。また、下方には 30a 程の緩斜面も広がり、かつての山小屋跡と仮定される区域である。主郭部両側には、二重の空堀 b を設け、長さ 33~35m、深さ 1.5~3m の 2 本で尾根を分断している。主郭の規模は、南北 60m、東西 27m の梢円形をなし、約 10a 程の面積であり、周囲を高さ 1.6m、幅 2m の土塁で囲んでいる。また、後方は、一段高い尾根筋 c まで延びるが、それより先は 2 条の堀切 d によって断たれる。軍記類では、東海林隼人佐昌種の居城とし、その年代を天正期以降とするが、庄内越えの間道として考えると、それ以前から築かれていたものと思われる。

(鈴木聖雄)



沼ノ平館略測図

ようがいもりたて
要害森櫓 322-016

所在地 西川町岩根沢字要害

築城者 (東海林昌盛)

築城時期 戦国期

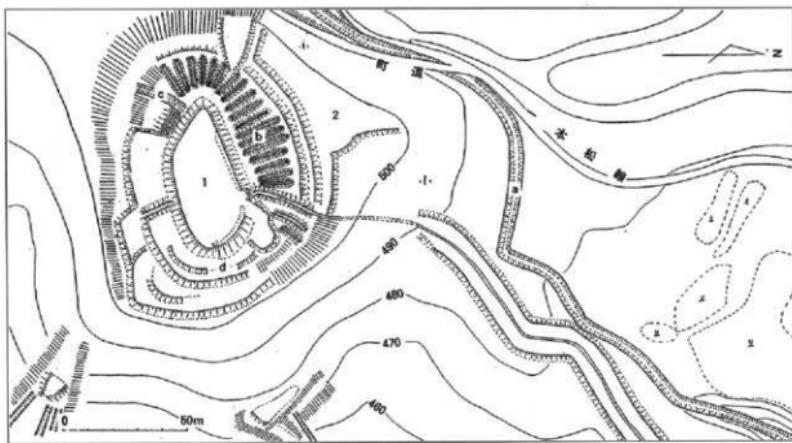
史 料 「要害森寄附証文」

参考文献 「奥羽軍談」「神都岩根澤之面影」

概要

町道一本杉・岩根沢線に接し、背後を水沢川で断った標高 517.6m の単丘上に築成する。大手口は、セイバからイチノウジを登り上げるもので、後者には水堀 a の痕跡も窺える。虎口手前の東側は、副郭的な広場 2 になっており、その規模は、南北 52m、東西 23m を計測することが出来る。副郭上部には、19 条よりなる畠塁堀 b が構築され、最長 17m、平均 15m である。また、堀底までの深さは 1.6m 程度あり、畠の峰は、今なお尖っている。これ等の背後には、堀切 c が造られ、その規模は、長さ 20m、開口幅 4m と中規模のものである。そのなか、西側と南側には数段の曲輪 d を築き、頂丘部を取り巻いている。全部で 9 段よりなり、各段との差は 0.5~1.0m であるが、やや傾斜地にあるため、上部と下部との比高は 12m 程ある。主郭 1 へは、坂虎口を通るもの一本で造られ、該所にはまた、樹形の形跡も存在する。主郭部の規模は、南北に 33.6m、東西に 28m 程の台形であり、虎口周辺には土壠痕も認められる。築城者を沼ノ平館、東海林隼人の弟とする説があり、それ等のことからも築城期は、戦国末期に修築したものと考えられる。

(鈴木聖雄)



要害森櫓略測図

所在地 西川町水沢字上ノ山

築城者 (水戸太郎左衛門)

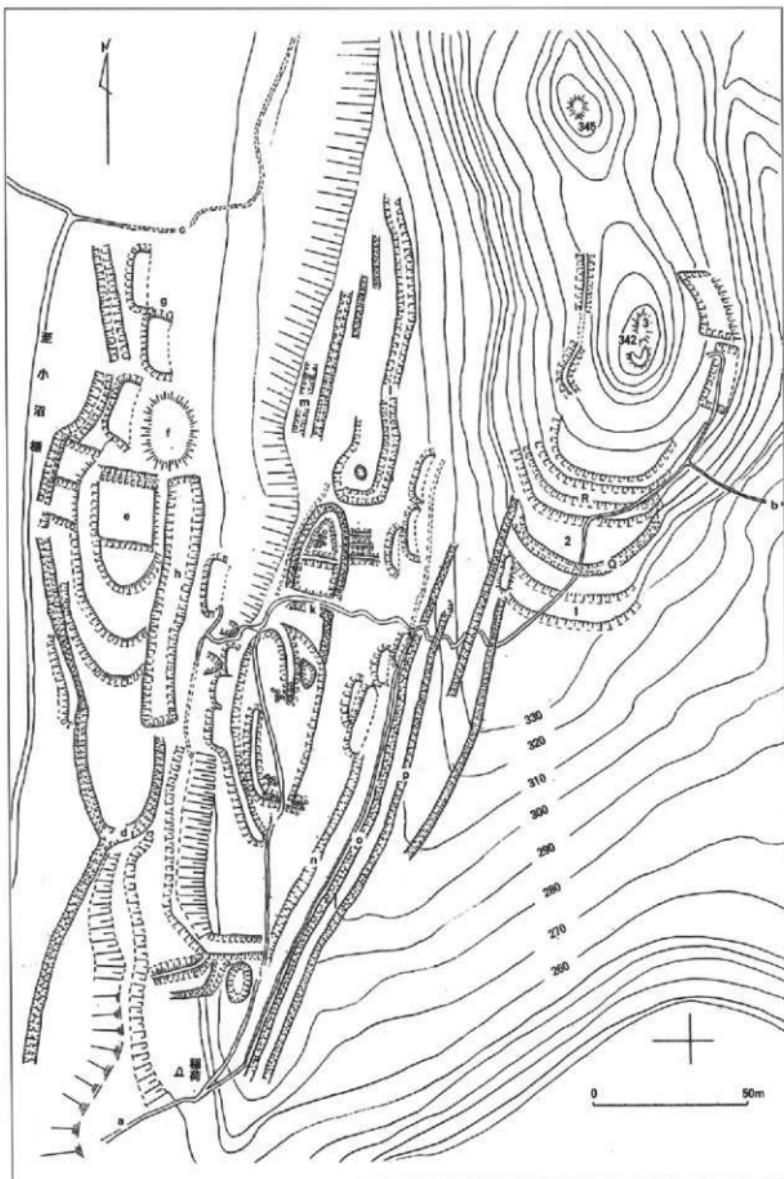
築城時期 戦国期

参考文献 『奥羽軍誌』

概要

国道 112 号、水沢トンネル尾根から南北に延びるこの遺構は、南面の寒河江川と東面する水沢川に挟まれた舌状部に展開する。結構えは、現在の集落である上原と遺構を取り巻く(沼頭、水中屋敷、籠屋敷、皿屋敷一円であるが、隣接する石倉楯や龍沼寺裏の上ノ台までも含めて考えることが必要である。水中屋敷は、石倉楯と当館に囲まれた山裾に位置し、籠屋敷は、その上手高台に設営されている。一方の皿屋敷は、龍沼寺左側一帯をいうが、何れも原野や水田に復している。なお、居館の擬定地を水沢小学校から西部中学校周辺に置くことが出来、かつて月山神社が祠られていたことなどその遠因と推測される。集落より主郭への道は、中学校裏より墓地を登ると、皿屋敷からの b があるが、全体の機能からみて前者が大手口である。或いはまた、現スキー場道路も籠屋敷や沼沼に至るもの、一部は当館の西側 c に回り込んでいる。構築された防備は実に多様であるが、大別して下層、中層、上層に区分することが出来る。下層部は標高 250m 前後であり、集落との比高は、10m 前後である。まず、スキー場道路より郭内に入いると、空堀 d に当たり途中で二又に分かれる。下手の長さは 150m と長く、上手にもその長さ 38m、幅 5~7m、深さ 2~4m のものが築かれている。更に左手の空堀は、全長 190m に及ぶが、途中地滑りにより寸断されている。下層の中心は曲輪群 e である。該所は長さ 110m、横幅 15~40m の緩斜面を 5 段に築成し、背後を空堀で断っている。また、その後方にも小丘 f や曲輪 g を備えて中層への侵攻を防いでいる。同様に水堀 h も次階への登り口を塞ぐものだが、同時に前者の曲輪を守るためにものもある。この規模は、長さ 80m、幅 11m、深さ 1~2m であり、後年水田に転用されたため形を潰してもいる。中層部は、標高 290m 周辺に築かれ、構造的に整っているのはこの階層である。要害稻荷の建つ立目坂を直進すると虎口 i に至る。同所には、道のすぐ脇に落し堀や空堀をしつらえ、楔形 j も二重の土塁を築く。また、これより奥の空堀群 k や緩堀 l、そして障子堀 m などで中層を防護し、緩堀の規模は長さ 110m、堀幅 2~5m、深さ 3~4m と実に長大である。上層の備えは、標高 320m から 345m の頂丘部まで分布する。まず、下段の堀 n は長さ 72m、幅 2m、深さ 1~2m であるが、後方で中層からの侵攻に対する曲輪が設けられている。また、中段の堀 o は、長さ 186m、その幅 2~3m、深さ 1~2m と該区では最長である。更にこの 4~5m 隅でた上部には空堀 p が横たわり、長さ 165m、堀幅 2~3m、深さ 1~2m を測定することが出来る。副郭部 l は、緩やかな尾根上にあり、面積約 10a 程の広場である。背後を掘切 L とそれ等より続く緩堀で区画している。主郭 2 も 5a 程の平場であるが、背後の高台 R をも含めてみたほうが至当である。最上部の物見台 3 は、長軸 11m、短軸 5m の頂点であり、その周辺にも土塁や曲輪を備えている。築城主や築城時期について明らかにする史料はないが、軍記には、東海林隼人佐が水戸太郎左衛門を配して守らせたとし、その年代を天正 15 年 5 月の日吉姫春還戦と慶長 5 年 10 月の出羽合戦に所載している。

(鈴木聖雄)



水汎館略測図

いいくらたて

石倉櫛

322-019

所在地 西川町水沢字石倉

築城者 (水戸太郎左エ門)

築城時期 戦国期

概要

石倉集落の背後から水中屋敷にかけて構築された平山城であり、水沢館の一連とも考えられる。遺構は、国道112号で分断され、かつ一部は道路敷となっている。主郭1を標高267mの小丘に築き、その規模は長さ120m、幅5~35mを以ってする。背後の山丘とは水堀aで区分し、その長さは、175m、幅5~7mであり、現在水田に転用されている。そのほか、寒河江川と国道との間にも曲輪や空堀が多様に築かれ、対岸、入間館との関係を考慮する必要がある。

(鈴木聖雄)



石倉櫛略測図

いいくらたて

小沼櫛

322-020

所在地 西川町水沢字滝ノ沢

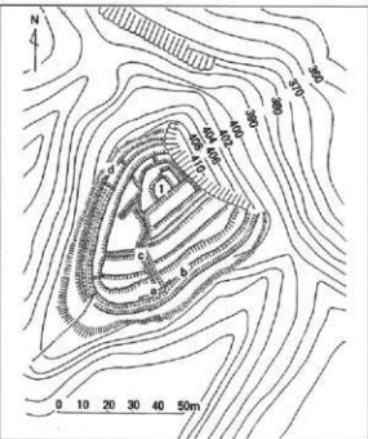
築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

下沼集落の南側に位置する標高420mの山頂を中心とした単丘形山城である。かつての該集落は、水沢川沿いの猫沢であり櫛の直下であった。虎口aは、空堀bに橋を掛けたものと考えられ、郭内道cへと続いている。空堀の規模は、長さ122m、掘幅5.5mの蕭研堀に始まり、後方で曲輪dに変形する。主郭1の面積は42平方メートルと狭小であり、また、櫛全体でも3500平方メートルと比較的小規模である。水沢館の支城と考えられ、該櫛とは連絡道で続いている。

(鈴木聖雄)



小沼櫛略測図

さかのうえたて ようがい
坂ノ上柵 (要害) 322-023

所在地 西川町本道寺字坂ノ上

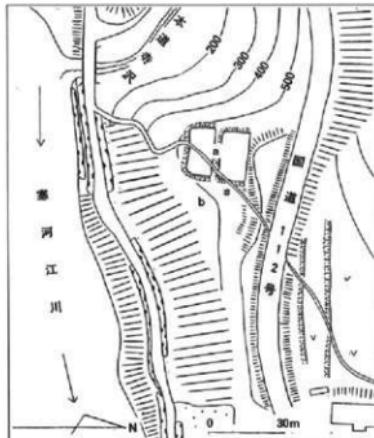
築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

本道寺沢が寒河江川に出会う所の舌状台地に築かれている。此所はまた、急斜面の旧道ともなっており、登り口との比高は42mを有する。現在計測出来るのは、2段よりなる曲輪のみであるが、国道112号にも多くの遺構が残っていたといわれる。曲輪aの規模は、南北25m、東西20mを2段にしてあり、そのほかにも平坦部bを使っている。本道寺館の前衛的防御地と考えられ、かつ烽火場とも推測される。

(鈴木聖雄)



坂ノ上柵略測図

かやのたて ようがいやま うえのゆしき
萱野柵 (要害山) (上ノ屋敷) 322-030

所在地 西川町大井沢字萱野

築城者 (志田弾正子孫)

築城時期 戦国期

概要

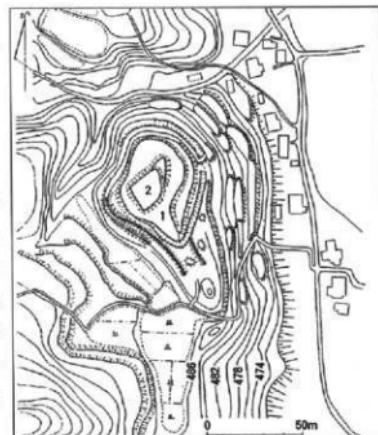
萱野集落のすぐ裏手に比高30mをもって構築されている。大手口は、志田正^{ひで}元^{つる}屋敷から登るもので、南向きに虎口を備える。北側背後を豆粉沢で取り巻き、残った西側を水堀で補っている。主郭1は、長辺40m、短辺30mの頂丘であるが、中央部2に15m四方の台地を備える。二重の空堀や曲輪類も多様にして濃密に造られた柵跡という事が出来る。

伝承では、志田弾正の息子兄弟が守ったもの

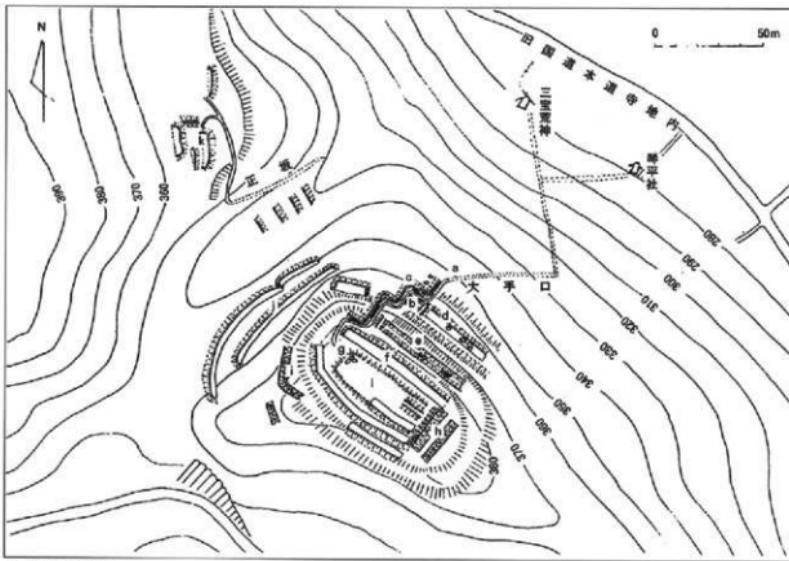
と伝えるが、現存するものは、後年に修築さ

れた姿であろう。

(鈴木聖雄)



萱野柵略測図



本道寺館略図

ほんどうじたて
本道寺館 322-024

所在地 西川町本道寺字要害

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『奥羽軍談』

概要

本道寺集落の背後で、現在の国道112号に挟まれた要害山一帯に築成する。該所はまた、寒河江川が蛇行し、西、南、東を取り巻く状況にもなっている。大手口aは、山裾の琴平社や三宝荒神堂より登るものであるが現在は消滅している。樹形bは傾斜地に造られ、間口9m、奥行4mの広さである。その右側は石垣cで高め、また、正面左側は曲輪dで防備する。曲輪の構造は、長さ44m、幅5~6m、高さ4mあり、樹形との境には土塁を設けている。その上部には横堀eが平行して走り、その規模は長さ44.3m、堀幅5~6m、深さ3.5~4mを計測する事が出来る。加えて、堀の入口周辺には、石積みの痕跡も残っている。更にその上部には曲輪fが長さ56m、幅4~5mをもって横たわり、実城部を守っている。虎口gは急斜面よりなり、狭い道を主郭1に入いる。主郭は、標高389mの頂上を平坦にしたもので、長辺50m、短辺15mの長方形である。また、掘手側には土塁を築き、すぐ脇を2本の堀切hで断っている。そのほか、両側や北東方向にも堀切iや帶曲輪j等を構築し、右手の正板より登った広場kと共に存在している。軍記類にも該館の所在が載り、その築城者を東海林隼人としているから、永禄から天正にかけての構築と考えられる。

(鈴木聖雄)

なかむらたて ようがい たて
中村館 (要害) (櫓) 322-029

所在地 西川町大井沢字中村

築城者 (志田弾正)

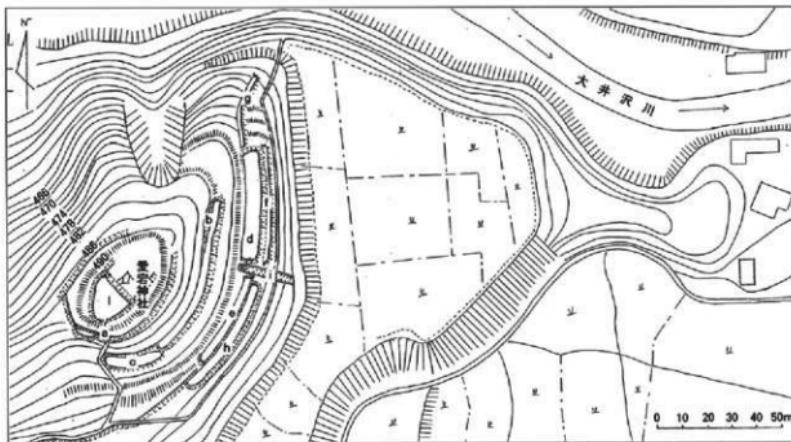
築城時期 不明

史料 「西川町史編集史料第3号」

概要

大井沢本郷に所在する館であり、東側を寒河江川で、北側を大井沢川で断った舌状頂丘部に形成する。大手口は、湯殿山神社脇から延びるものと大井沢川から郭内を通って至るもの二通りがある。また、虎口aは急斜面よりなり、その左手には、迎え討つ際のテラスを備える。主郭1の規模は、長軸48m、短軸16mの楕円状であるが、中央には高さ50cmの落差を設けている。一の曲輪bは、長さ57m、その幅3mで東側から北側へ回っていたとみられるが、途中崩落もしている。二の曲輪cも前者bに続くものであったが、特に1mの段差をもって造られている。また、三の曲輪dも長さ43m、幅6mと長大であり、接続する六の曲輪gとは同一の高さにある。更に四の曲輪eと下段の七の曲輪hとの比高は2mあり、共に左側を守っている。一方、五の帶曲輪fは、長さ43m、幅2mで右側下段を取り囲み、前記七の曲輪hとは縦堀iで分断している。大井沢の開村は、天慶の乱で敗れた志田弾正が落居したことによるものとされ、その年代を10世紀半ばにおいている。現在の湯殿山神社境内は、当初の居館と考えられ、今日の遺構はその跡の城であり、また、その直前に広がる字「櫓」の高台は、副郭的性格の屋敷跡とみられる。

(鈴木聖雄)



中村館略測図

なかがみたて
中上橋

322-031

所在地 西川町大井沢字中上

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

寒河江川に突き出た坂ノ上地区に所在する。主郭部1は、現在共有墓地となり複雑な水堀で取り囲まれている。その面積は40a程度であり南北に長い館である。西側には土塁の痕跡も残し、これに則して水堀跡を辿ることが出来る。その幅は、b地点で4~5mであり、c地点では5~10mである。また、副郭の2には、数段の曲輪と石垣が築かれている。なお、中上集落の背後にも堂屋敷（堂庭）と呼ばれる高台があって、かつての山小屋跡であった。

（鈴木聖雄）



中上橋略測図

あつけたて
見附橋

322-032

所在地 西川町大井沢字見附

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

見附集落の西側背後単丘上に築成する。東側が急斜面なため、大手口を見附沢に求めている。虎口aは傾斜が激しく崩落も起しているが、駆の腰曲輪は2段を以って現存する。物見台3は、5m四方の僅かな場所であり、掘切bを置いて主郭部1と区分する。主郭も平地とは比高35mを保つ馬の背状の峯であるが、副郭2はやや平坦である。該所は、置賜からの木川越えや貫見、左沢からの峠越えに対する見張所であって、中村館の支城と考えられる。

（鈴木聖雄）



見附橋略測図

ねぎわたり
根際櫛 822-034

所在地 西川町吉川字根際

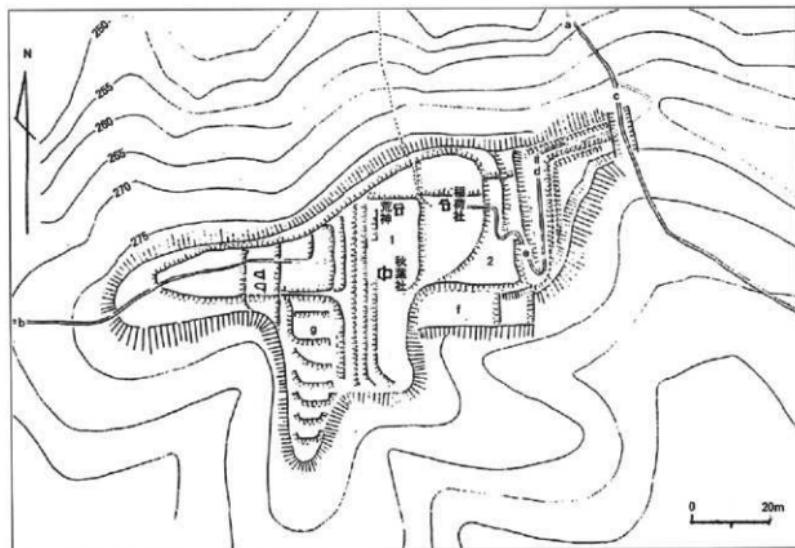
築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

根際集落南側の丘陵を松本沢で分断し築いている。主郭部への道は、集落中央部より垂直に登る口aと松本沢より陡峻を登るものbがある。その比高は100mあり、フクノロ口cを大手にしていたとみられる。またこの大手口は、峰を断ち切って堀切としているため、樹形dへは波継して到ったと思われる。その構造は、両脇を土塁で囲み、或いは虎口斜面の比高5mを以って構築している。副郭2の規模は、間口20m、奥行11mの緩やかな斜面であり、両脇に曲輪も備える。特に一の曲輪fは、格差を6m下げた所に築き、長辺17m、短辺7mで南東部を守っている。中央頂丘が主郭1であり、南北10.6m、東西25.5mの規模をもつ。郭内には、高さ1m前後の帯曲輪が多様し、搦手側からの侵攻に備えている。更にその下部4.5mの所に造作された副郭gも郭内道を含めて南北22m、東西12mの規模にある。このほか、集落背後の山腹野にも3~4段の腰曲輪を残し、稻沢トンネル周辺にまで続く。当館の性格は、吉川館の出城として、城の前衛的役割りを担って構築されたものであり、歴史的にも吉川本城と共に歩んで来たものと考えられる。

(鈴木聖雄)



根際櫛略測図

よしかわだて たて
吉川館 (櫓) 322-035

所在地 西川町吉川字櫓

築城者 不明

築城時期 戦国期

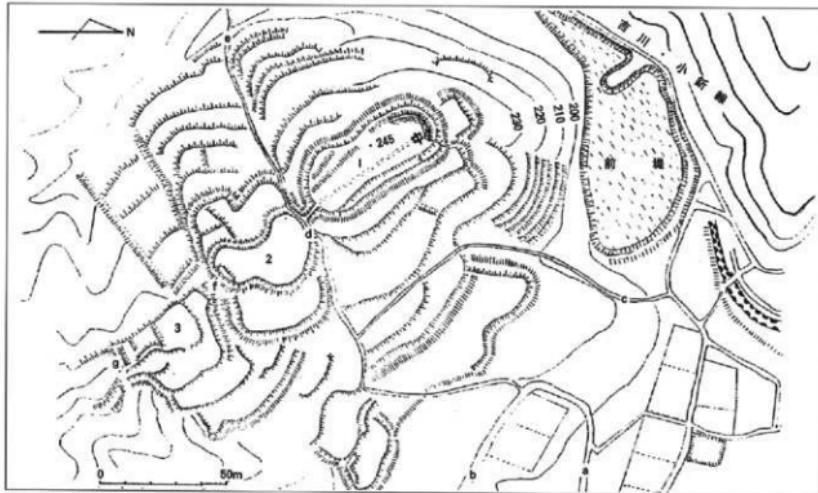
史料 「安中坊系譜」「高橋家系図」「宇隈図」

参考文献 『寒河江大江氏』『大江町史』

概要

吉川地内の別当屋敷、撫屋敷、元屋敷、櫓、小月山にわたって広がる。特に別当屋敷は、安中坊とも呼ばれて、大江宗家としての居館であった。背後の山城へは、各大手口 a、b、c より登るが、何れも郭内で合流する。虎口 d 付近は、急斜面よりなり、しかも主郭部 1 との比高は 8.5m を有する。主郭は長さ 55m、横幅 24m の椿円形であり、北側端には、高さ 1.5m の石壁を築く、搦手 e の方向に下って、西側一帯は 7 段の曲輪で構成するが、これより北側は水堀となる。一方、虎口の南側にも頂丘を利用した副郭 2 があり、自然地形を利用して横矢掛けも備える。また、該郭と下段との比高は 9m と高く、斜面も 90 度に近い。更にその南側にも掘切 f を隔てた副郭が築かれ、南端を自然の沢に手を加え掘切 g している。当館の特徴は、高度 245m の舌状丘陵を 3 区画に分断して造っている点にある。図 1、2、3 の頂部は、もともと同じ峰続きであったが、これを切り通し、並郭式に配置したものである。現存する遺構は、戦国期に修築されたものと考えられるが、当初の構築を大江親広入部の承久 3 年頃とも推考される。また、その築城者を大江家の目代であった多田仁綱と擬定することも出来る。

(鈴木聖雄)



吉川館略測図

ぬきやまとて ようがい
沼山城 (沼山要害城)

322-038

所在地 西川町沼山字元組

築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

当館の絶構えは、高瀬の登り坂を大手口として、その東側の要害山、そして右手の龍源寺裏山から古屋敷、北立目、立目、林中までの一带である。特に該館は、標高 252m の舌状単丘を利用した山城で、元組集落の詰の城であった。主郭部 1 は、東西 23m、南北 13m の梢円をなし、更に副郭 2 へ通ずる。南側は自然の急斜面であるが、東側や北側には数段の曲輪を構築し防御している。古来、川土居村の本拠は、沼山地区との説があり、此所も向中岫を擁護した前衛であったものと推測される。

(鈴木聖雄)



沼山城略測図

むこうなかめきて なかめきて
向中岫城 (中岫城)

322-039

所在地 西川町沼山字向中岫

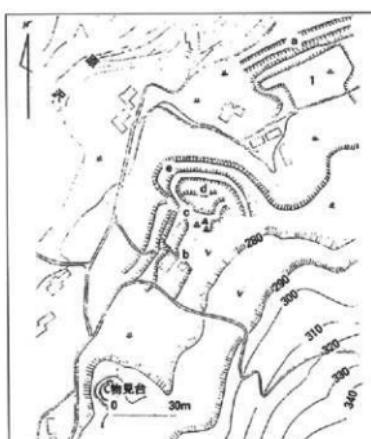
築城者 (大江親広)

築城時期 不明

史料 「農業補習学校史料」

概要

向中岫の元屋敷 1 がかつての居館跡と思われるが、当所においては掘跡 a のみを残す。また、その南側高台遺構には、虎口 b と思われる曲輪群と土塁に挟まれた水堀跡を残している。土塁 c の長さは 60m で水堀 d を取り巻き、その高さも 2m 前後である。また、後方には、自然傾斜を利用して曲輪 e を廻すが、その規模は長さ 75m、幅 5~7m と長大である。該所は、大江親広が承久の乱で逃避潜伏した所と伝え、その歴史を鎌倉初期に遡ることが出来る。なお、元屋敷からは、須恵器の破片が採集されている。



向中岫城略測図

(鈴木聖雄)

あじねまたたて
芦沼田櫛

322-40

所在地 西川町芦沼田字ノ屋敷

築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

芦沼田集落入口の高台にあって、現在墓地として存在する。以前は、この上にも構跡があつたらしいが、水田のため江戸期に消滅している。虎口aを入いると副郭部2に到り、その規模は長さ35m、横幅11mの緩斜面より成り立つ。上部に主郭状の円形テラス1があつて、その径は15mを計測することが出来る。周りを低地の水田と曲輪状段差で取り囲むが、かつての遺構とみるべきであろう。該地は、大江親広が潜居したとされる向中嶋櫛の西隣りとなり、創建時においては、そうした事由も背景にしていると考えられる。

(鈴木聖雄)



芦沼田櫛略測図

ひかげたて

日影櫛 322-042

所在地 西川町入間字日影

築城者 不明

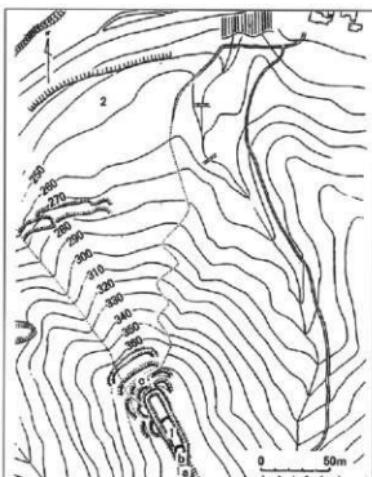
築城時期 戦国期

史料 「農業補習学校史料」

概要

日影集落の南側背後の鞍線上に築かれる。主郭1は、長さ41m、幅7~8mの長楕円であり、標高400mの峰に位置する。後方には一段高い曲輪aが存在するが、長さ11m、深さ3m、開口部9mの掘切bをもって区分する。虎口は2箇所よりなり、その周辺には曲輪群cが多出する。また、裾部にも、根小屋跡と思われる平坦部2があり、その面積は10aと計測される。なお、主郭からは、対岸の水沢館や沼ノ平館が一望出来、隣館である入間館の物見櫛であった可能性が高い。

(鈴木聖雄)



日影櫛略測図

いりまなで
入間館 322-043

所在地 西川町入間字中下

築城者 入間右衛門尉基春

築城時期 鎌倉初期

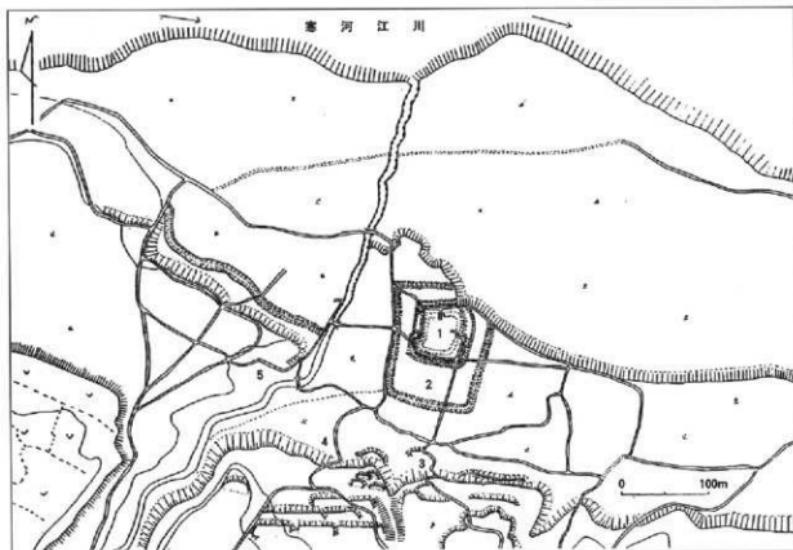
史料 「佐藤家系図」「字限図」「農業補習学校史料」

概要

居館1を中心とする南北200m~600m、東西1000~1200mの幅をもつ中下平坦部とその背後の丘陵地帯に構築されている。中央居館の規模は、南北50m、東西60mの概ね方形状からなり、一部二重の水堀を巡らしていたものと考えられる。一重目の内堀は、幅10m前後であり、宅地北側と西側にその形跡をとどめる。特に西側のものは、裏堀と呼んで今日なお使用している。また、北東角には隅欠きが現存し、東南角には折りが築かれていた。通称、堀向いと呼ばれる2もほぼ同様の面積であるが、副郭的役割を担ったものと推測される。居館からの道路は、上の平3、上の山4、そして、内城5へと連なり山城との関係を示している。上の平は、居館との比高が47mあり、南北60m、東西40~70m、面積50aの平坦部である。正面の斜面には3段の曲輪が築かれ、虎口部には平場も存在する。一方の上ノ山にも多くの曲輪が残っており、根小の屋敷跡を窺わせている。

内城地区も高取集落とは比高約15mあり、段丘振部には水堀跡も残っている。なお、略測図の破線は復元を示している。該館は、承久の変で敗れた大江親広が、吉川の山中、向中嶠に潜居した際にそれを守るために、隨從した佐藤基春が築いたものと考えられている。また、天正12年6月28日には、
当代の勝訓が貫見村にて大江高基と共に自刃している。

(鈴木聖雄)



入間館略測図

すがやちたて
菅谷地柵

322-044

所在地 西川町小山字菅谷地

築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

小山集落の入口、比高17mの台地に木戸口の性格を以って構築する。現在熊野神社の建つ頂丘部1は、長辺130m、短辺25mの矩形であり、大手口を中心に4段の曲輪を持つ。南側の学校敷地より延びる台地との間に、空堀跡aと思われる水田が走り、その幅は最小で10m、最大で30mである。また、これ等に対した向側にも比高39mの観音山2があり、周辺枝村への烽火場であった可能性が高い。本来、接続する澄又集落とは、守りを一緒にするものであった。

(鈴木聖雄)



菅谷地柵略測図

すみまたて
澄又柵

322-045

所在地 西川町小山字澄又

築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

菅谷地に接続し、同一繩張内の館跡が澄又地区といえよう。山の神神社より始まる自然土手は、集落の西側を巡り、かつた東側の白山神社までも延びている。館跡1は、現在の教員住宅を虎口aにして、その西側一帯の50aと考えられる。また、居館によく植えられるという白茶の老木までが副郭部とみられ、旧家も存在する。該地は、入間の枝郷にあって、隣郷の貫見や沢口へ通ずる重要な山間地点であった。慶長年間には、朝日軍道につながる朝日街道として緊張をはらんだ。

(鈴木聖雄)



澄又柵略測図

ふるやしきたて
古屋敷櫓

322-046

所在地 西川町征矢形字古屋敷

築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

小山からの旧道上、集落入口に位置する。西より流れる早坂川と南より流れる征矢形川に囲まれた比高50mの山上にあたる。つづら折りの大手道を登りあげると坂虎口aに到る。主郭1は、縦横約20mの方形であるが、各辺の中央部には3m前後の折りbを張り出す土壙をもつ。周辺には山田も残るが小字等から、かつての山小屋跡であった可能性も窺え、旧入間村の枝郷として、また、貫見や七ツ畠への往還上、重要な場所であった。



古屋敷櫓略測図

(鈴木聖雄)

そやがたて
征矢形櫓

322-047

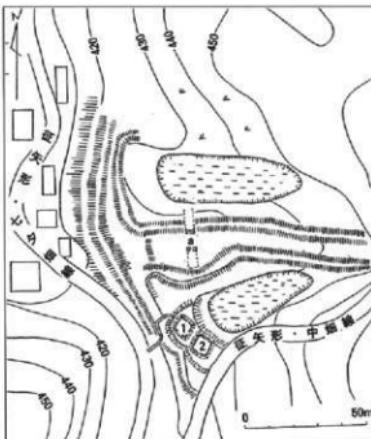
所在地 西川町征矢形字裏山

築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

集落の南口に位置し、比高6~7mの小丘上に築城する。熊野社や観音堂への登り道がかつての大手道と考えられる。該所は、七ツ畠や中畠への山道に挟まれていることから、物見台の性格が強い。下段の熊野社境内1は、5m×4.5m、上段の観音堂境内2が5m×6mとごく小規模である。また、集落背後の峰には、堀切aが築かれ、その規模は、長さ11m、堀幅3~4m、深さ2m弱である。



征矢形櫓略測図

(鈴木聖雄)

だいのくら うえのやま
台ノ倉櫓（上ノ山櫓） 322-048

所在地 西川町月岡字台ノ倉

築城者 不明

築城時期 戦国期

概要

小水ヶ沢と寒河江川に挟まれた標高335.5mの単丘上に構築される物見台である。樹形aを小水ヶ沢瀬にして、比高60mを登り詰めるに南北11m、東西16mの石積み頂上1に至る。坂虎口bは急斜面なため崩落が激しいが、一の曲輪cで平坦になる。二の曲輪dは、大手口周辺にのみ平場が見られ、両脇は斜面に戻っている。その下段の空堀eは、長さ54m、上部幅が2.5mであり、dとの比高も6~7mと高い。本道寺館と水沢館の連絡用として築かれている。

(鈴木聖雄)



台ノ倉櫓略測図

根子櫓 322-050

所在地 西川町大井沢字根子

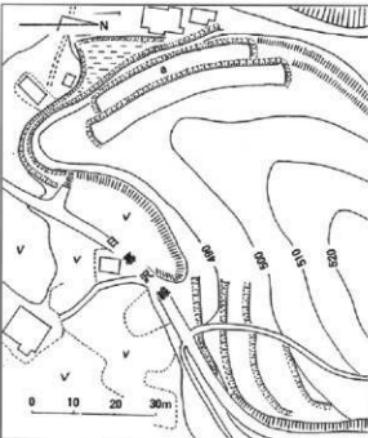
築城者 不明

築城時期 不明

概要

根子川と根子沢に挟まれた舌状部に残る。根子沢に面しては、2段よりなる曲輪が築かれ、一の曲輪aは長さ50m、その幅4~5mである。また、これ等の裾部を湿地が取り囲むが、これは、当時の水堀跡とも考えられよう。日暮沢旧道沿いにも屋敷跡が点在し、今日墓地となっている。ただ、頂丘部には何も構築されず、段丘を利用して根子の屢敷であった可能性が高い。この地はまた、貢見の松田某が開村したとの伝承があり、このことからも対岸の大井沢志田氏とは異なる系統の櫓であった。

(鈴木聖雄)



根子櫓略測図

きる だ だて おお や きたたて
猿田楯 (大谷北楯) 323-001

所在地 朝日町大字大谷字猿田

築城者 不明

築城時期 〈戦国期〉

史料 「大谷村北楯略図」

参考文献 「猿田越ヲ探ル記」

概要

大谷の北東 1.2km の連立丘陵の猿田山に位置する。城館跡は標高 237m の山頂を中心とし、長軸 170m 短軸 100m の山域である。20m × 10m の長方形テラスを主郭とし南側を除き長さ 80m 幅 3~8m 深さ 5m の空堀で囲繞し、その外側は土塁、囲りには幅 3m の帯曲輪、北西部は馬蹄形状で、曲輪東端から東側尾根に 5 箇所小腰曲輪、端に 7m~20m た



猿田楯略測図

て堀 2 条、その東北部に不整な曲輪が長く構築。主郭部の南急峻。南西に真木山城南東に秋葉山城が眺望できる。
(鈴木治郎・登坂高典)

たて き だて
立木楯 323-002

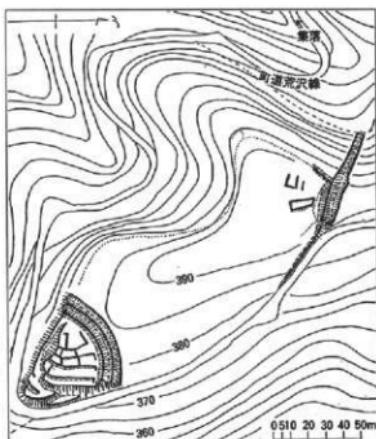
所在地 朝日町大字立木字裏山

築城者 不明

築城時期 〈戦国期〉

概要

立木集落の北側に位置する裏山に、標高 390m の山頂を中心に築かれた山城である。朝日川からの比高は 150m で、町道荒沢線に囲繞され、東西 260m、南北 110m 程にわたり造構がある。南・西側は急峻で東側は沢となる。本丸は 134m² 程で、西側は三角形の頂点部となり、東南へ梢円の扇形に順次円弧状に曲輪が続いている。北側には薬研堀の二条の空堀がある。本丸の北西約 260m の所に、箱堀の堀切が築かれている。



立木楯略測図

(登坂高典・鈴木治郎)

所在地 朝日町大字大谷字秋葉山

築城者 不明

築城時期 〔戦国期〕

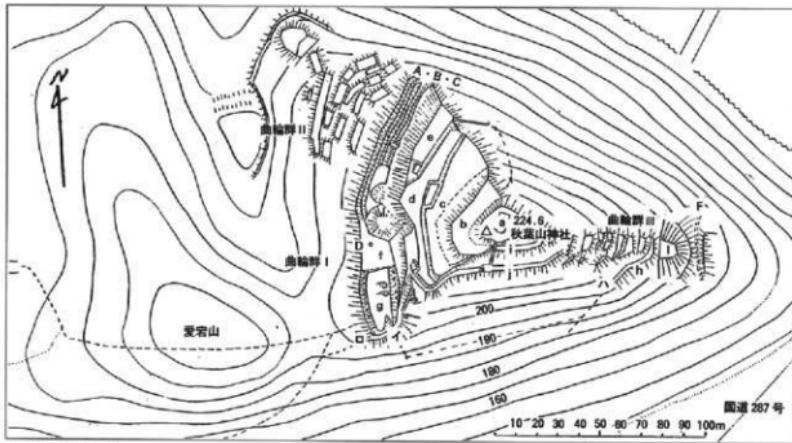
参考文献 『私たちの村一大谷風土記』

概要

本館跡は、大谷の東1.3kmの秋葉山・愛岩山連山の標高224.6mの秋葉山頂を中心とし、西北部尾根へ140m、東部尾根へ100m、西南部へ70mの距離で、山頂から山麓への比高差70mにわたり分布している。即ち山頂の長軸25m 短軸17m 広さ290m²の主郭aを中心としそれを囲繞する様に北西・西・西南部へ地形に沿い、山麓部へ層状に曲輪群I 曲輪b・c・d・e・f・gと畝状に横掘A・B・Cを南北に配し、Aの外側高部は南部から長さ140mの土塁D(虎口ロ)となり、その北西へ尾根上に曲輪群II 腰曲輪17箇を多用している。又主郭南側に2条の帯曲輪i・jを配置、東部尾根へ曲輪群IIIで腰曲輪が多用し、帯曲輪hは長さ40m 幅4mである。帯曲輪hには虎口ハが付随し、特松駒形曲輪1を最下端としてその下位部に深さ10m、底幅5m、長さ15mの堀切Fを構築している。南からの虎口イ、ロから曲輪群Iに入る。この城の西南1.7kmに真木山城、北西1.5kmに猿田城があり、曲輪cに石祠1、曲輪fに石塔建立、山頂に秋葉山神社碑が建立されている。

山形県の「担い手育成基盤整備事業」で、秋葉山城跡の有効活用のため、主郭部に展望四阿建設が計画されたので、平成7年11月遺構保存のため、主郭部を発掘調査の結果、柱穴3基が検出され、保存された。

(鈴木治郎・登坂高典)



秋葉山城略図

所在地 朝日町大字三中字八ツ沼

築城者 〈五百川若狭守藏人〉原越後守頼貞

築城時期 〈平安期〉戰國期

史料 八ツ沼城絵図

参考文献 『編年西村山郡史』『東五百川村郷土誌』『米沢市史』『上山市史』『大江町史』『朝日町の歴史』『山形市史』『乱補出羽国風土略記』『最上四十八館の研究』『出羽諸城の研究』『角川日本地名大辞典』『日本歴史地名大系6』

概要

八ツ沼城は、朝日町西五百川・三中地区の最上川左岸、八ツ沼集落と春日沼の間にある通称櫛山（標高 286m）の丘陵を利用して築城した山城である。三中地区は、西は最上川、東側は朝日連峰、南を西置賜に接する、西五百川の中心的な位置を占めてきたところである。

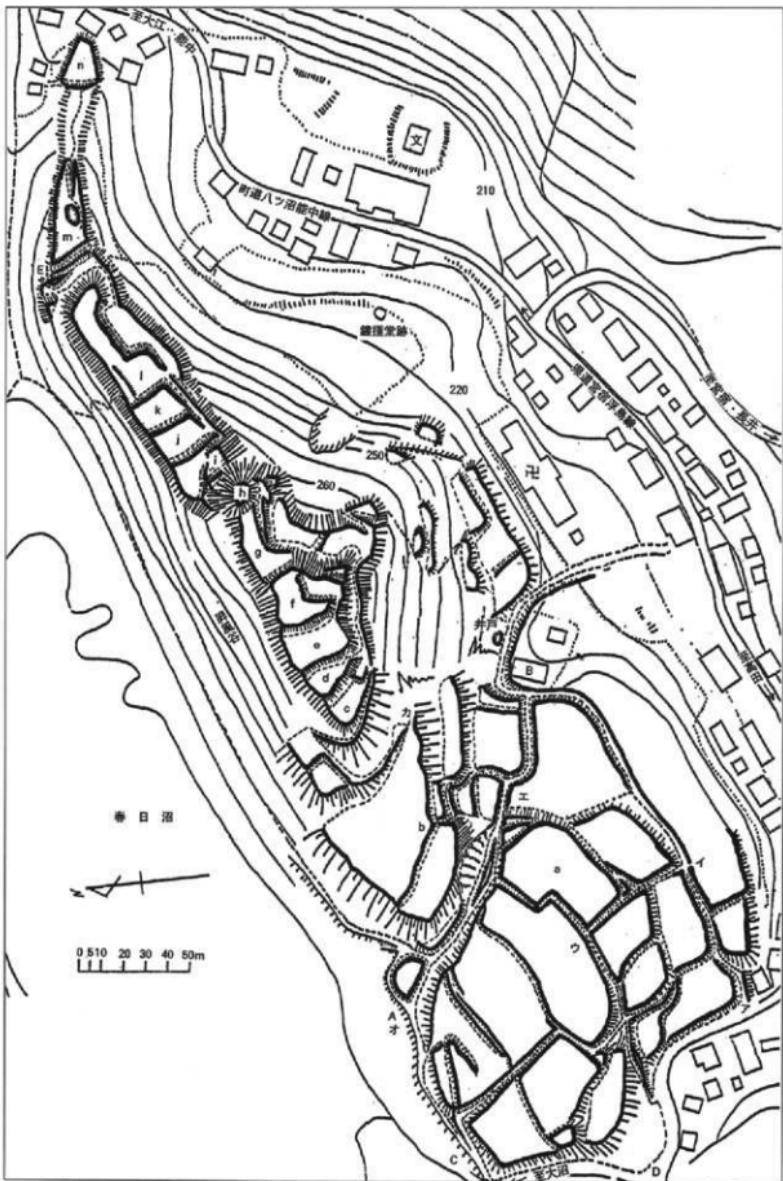
最上川周辺集落から比高 100m 強の独立丘に、東西 700m 南北 250m の範囲で築かれており、何段階かの改変・崩落などはあるものの、かなり人工的で防衛的な施設を遺構として残している。この櫛山の周辺には同じ程度の高さをもつ丘陵が 2~3 並立しているが、とりわけ櫛山は北側が急峻で通称屏風谷といい、すぐ北西に春日沼があり、最上川対岸の眺望も良く、また西舟渡から雪谷にかけての渡しも視界にあることと、水の便が良いことなどからこの地を選定したものと思われる。

前ハツ沼城は、長さ 120m 程の A~B 空堀より a を中心とした南西側曲輪群に位置し、比較的広い削平地で、現在は一帯に畑作地となっており、後世においてかなりの改変が加えられている。(C~D にかけては堀切が見られ、大堀端と呼ばれ、オからの入口のところは、西門口と呼ばれている。家臣家敷址（打返）の地名を残し、小松加賀・阿部周防等の居館があった曲輪群である。アが坂虎口（大手口）で、イ～ウの御前坂の折れはやや深く先の見通しがきかず、エの虎口周辺には防衛の施設が集中している。エから迫り着いた b はかなり広い曲輪で、防衛の最前線になっている。b 周辺の曲輪群は比較的以前の形状を保っている。カをあがると C の曲輪に達する。c の曲輪の南側を f の曲輪の下まで繋がる通路がある。c~f の曲輪が大手方面の主たる核となる部分で、それぞれ 2~5m 程度の階段状をなし、幅 15m 程あり、e の曲輪は奥行 30m 程ある。f の曲輪から 5m 程下がって g の曲輪が続き、旗立森と呼ばれる h がある。豊龍館・鳥屋カ森城・前田沢橋が一望できる。h と i に 15m 程の段差があり、i には七ツ井戸と呼ばれる直列に並んだ穴がある。直径 30~40cm、深さ 50cm~60cm 程あり、等間隔で、柱穴と推定される。北東側に j~l と三段の曲輪があり、通路が通っている。E は二重堀で、堀切の深さは 3m あり堀底は広く、長さは 20m 程である。曲輪 m~n は、要害場と呼ばれているところである。m の曲輪には人見穴があり、深さ 3m 程の窪地である。現在観音堂のある n の曲輪は矢引場と呼ばれている。

ハツ沼城は、北東から南西にかけて一直線上に並ぶ陪郭式の縦張りであるが、A~B の空堀より h の旗立森までは曲輪の段差が大きく離然としているのに対して、h より n の曲輪までは整然として、土塁・虎口・堀切が防衛的に関連している。

境目之城々の間に築かれたこの城は、戦闘に対応する軍事拠点として、また荒砥街道の大瀬口をはじめ大蔵口・左沢口・朝日軍道の交通監視施設として重要なところである。永禄 8 年（1565）最上義光の攻略で落城、慶長 5 年（1600）上杉景勝軍の攻略で又落城している。上杉軍直江氏の出羽からの撤退と共に山形城主最上義光の領国化にさらされ、山野辺城主忠志の領知のもと、最上氏の支城の一つとして一国一城令で廢城に至るまで存続したと思われる。

（豊坂高典・鈴木治郎）



八ツ沼城略測図

たろうだて
太郎楯 323-005

所在地 朝日町大字太郎字楯坂

築城者 (長岡修理之助定澄)

築城時期 〈平安期〉

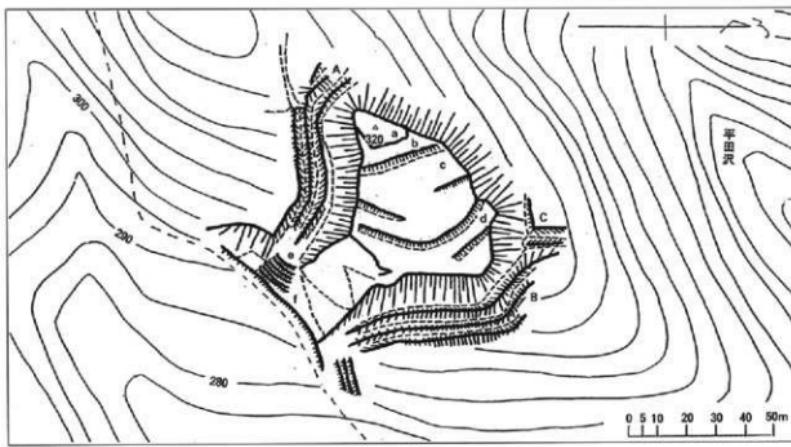
史料 「宇限図」

参考文献 『太郎記』

概要

西五百川地区・朝日川右岸の太郎楯坂に位置する標高320mの山腹に築かれた山城である。太郎集落からの比高は90mで、東西・南北共に150mの範囲内に遺構が確認される。北西部は極めて急峻な斜面で、南は山頂方向へと続く丘陵の突端を利用して構築したようである。主郭aからの曲輪の面積は、aが約111m²、bが172m²で斜に三角状をなし、その北東側に2~3mの段差下りで弧形状cの曲輪約727m²と次のdの曲輪約6.53m²が築かれ防御している。その南側にeの六段で段差をつけ、最下段は長さ60m程のfの帯曲輪を築いている。本丸の西南Aには三条の雄大な空堀が長さ60~70mで構築され、更に北東方向Bに同様の空堀が尾根方向に続いている。曲輪側の空堀の北部Cは、又状の掘切で急斜面断崖へと繋がっている。楯の北西部には旧寺屋敷があり、その東南方向には平田沢があり、西方は湿地で水には不便を感じない地域である。『太郎記』中に永正10年(1513)、権主長岡内蔵之丞勝治、家老に阿急津太夫長岡九郎次郎兩人と共に君を守護すと記され、多くの伝承をのこしている。水口橋・宇津野館、西には風切山(標高573m)を望むことができる。

(登坂高典・鈴木治郎)



太郎楯略測図

みなくちだて

水口櫛 323-006

所在地 朝日町大字常盤字櫛

築城者 不明

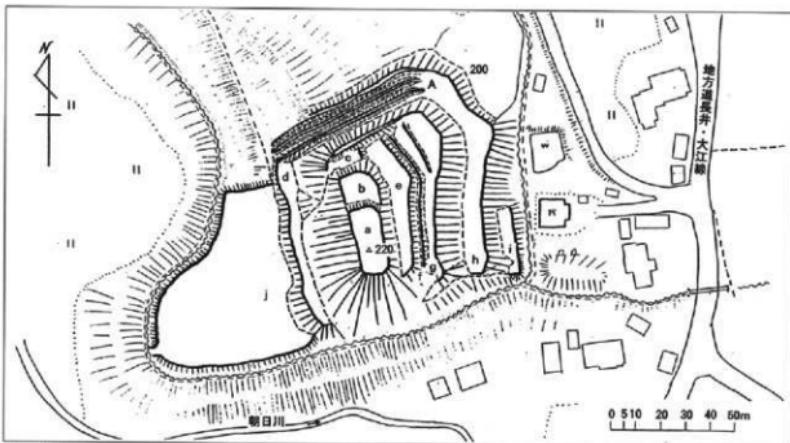
築城時期 〈戦国期〉

史料 「字限図」

概要

常盤水口十一面觀音堂の裏山に位置し、通称櫛（標高 220m）の山頂を中心に東西・南北各々約 100m の範囲で築かれた山城である。a の本丸は南北に長方形状に $12 \times 18m$ の曲輪で、北側に段差下り b $196m^2$ の曲輪と、c $4 \times 15m$ の長方形状の曲輪がある。その西側に d $5 \times 70m$ の帯曲輪へと道で繋がっている。ab の東へ不整形些か弧状に e 長さ 60m・巾 4~10m の曲輪と、その下に f $11 \times 60m$ の帯曲輪がある。さらに段差下り長さ 70m・巾 3~15m の g の曲輪と、又それを周縁するように h の曲輪が長さ 100m・巾 8~12m の広巾帯状の形で防護している。i は麓の最も低地の曲輪で南端より登り道が通じている。本丸北側には三条の薬研堀の A 空堀が長さ 65m・巾 4~5m・深さ 2~3m で防護している。觀音堂は前に西側の j 葡萄畠に建立されていた由、最上義光の軍勢がハッ沼城攻撃の際、一夜宿ったとの伝えがある。この櫛の南西側は断崖で朝日川に面し、東側は主要地方道長井・大江線が走り、南側に皆生沢橋・松程橋、東に宇津野館、西に太郎橋を眺望できる。

（登坂高典・鈴木治郎）



水口櫛略測図

おおふな 朝日
大船木櫓 323-007
所在地 朝日町大字大船木字タテノ山
(旧三中甲字タテノ山)

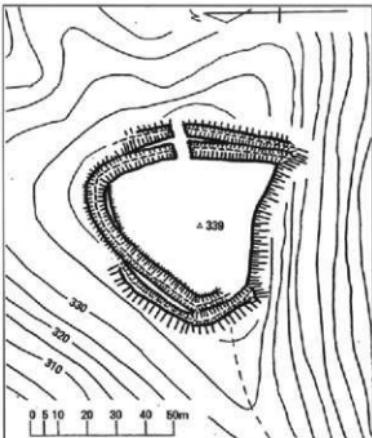
築城者 不明

築城時期 不明

史料 「字限図」

概要

大船木集落の最北西部に位置する通称櫓山の標高339mの山頂を中心に、東西約70m、南北70mの北を底辺とする逆三角形で構築されている。最上川からの比高は180mで、主郭の面積は約1700m²である。南側の最も急峻な斜面の上部約50mを除き、周囲は西北側に長さ約120mと約60m、又東側に約60m程の二重の空堀に囲繞されており、曲輪の真東に道を築いている。切立橋・宇津野館・鳥屋カ森城・杉山櫓が眺望できる。(登坂高典)



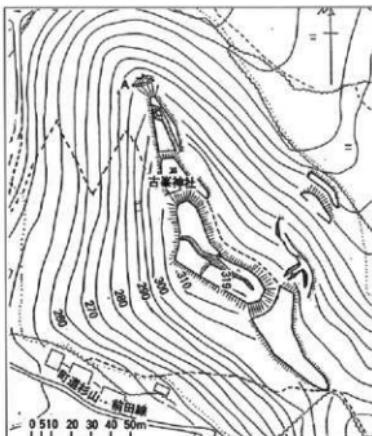
大船木櫓略測図

すぎやまだて
杉山櫓 323-008
所在地 朝日町大字杉山字タテ
築城者 不明
築城時期 〔戦国期〕
史料 「字限図」
参考文献 『角川日本地名大辞典』

概要

杉山集落の東側に接続して位置するもので、通称櫓の山と称されている。城館跡は標高319mの山頂を中心に構築され、30m-15mの回状テラスを主郭とするもので、北側へ下る尾根に100mにわたり6箇の曲輪を配し、北端に掘切Aを構築する。更に主郭南東部に短軸15m長軸50mの不整三角形状の曲輪と、主郭東北部に3箇の腰曲輪が削平されている。小規模な山城で、小規模主郭から想定すれば物見台、烽火台の性格のものか。

(鈴木治郎・登坂高典)



杉山櫓略測図

まえ た ざわでて
前田沢城

323-009

所在地 朝日町大字宮宿字前森

築城者 (岸美作守義満)

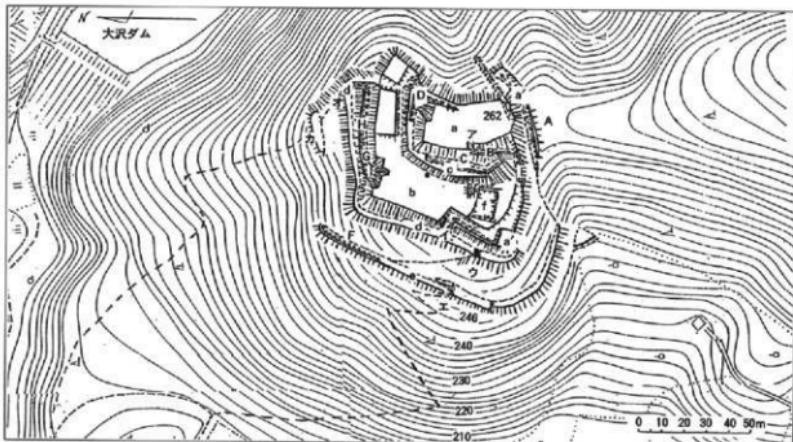
築城時期 (戦国期)

史料 「字限図」

概要

朝日町新宿鳥屋カ森城の北西に地続きの標高 262m 地点、宮宿字前森地内に、東西、南北共 113m 軸で、主郭 a との比高差 25m の範囲に造構が構築された櫓である。東側一帯は急斜面、南東は鳥屋カ森城へ登りの尾根である。主郭 a は南北に長軸 40m 東西に短軸 20m の不整多辺形で、城館跡東南最高部に位置し、橹台 a' 南側に巨大な掘切 A、北西部を团籠する様に空堀 B、C、D、曲輪 b 帯曲輪 c、d を三段に、その下段西南部に帶曲輪 e を配している。主郭西側略中央の虎口アから南へ空堀 B 土塁 E が形成され逐次、西・北・西へ屈折し、北西部を团籠する長さ 135m 幅 5m の帶曲輪 d に通ずる石積垣形虎口イに達する。又この帶曲輪 d と比高差 8m 下の西南部には北端に土塁 F を構築する長さ 135m 幅 5m の帶曲輪 I があり虎口エを附隨する。主郭西側下段に南北に堀 C 土塁その下方に帶曲輪 C その東北端部が空堀 D となり、北西部に 1625m² の曲輪 b が削平され、水田跡 f 井戸小台地が配され、その北部下に空堀 G、土塁 H が構築され、その北西部は長さ 135m 幅 5m の帶曲輪 d で虎口ウ、オを附隨する。鳥屋カ森城の北西部一帯防備のため構築されたのがこの前田沢城で、鳥屋カ森城の支城と考えられる。

(鈴木治郎・登坂高典)



前田沢城略図

ま き やまとじょう

真木山城

323-010

所在地 朝日町大字大谷字真木山

築城者 大谷彦次郎元秀

築城時期 戦国期

史 料 「字限図」

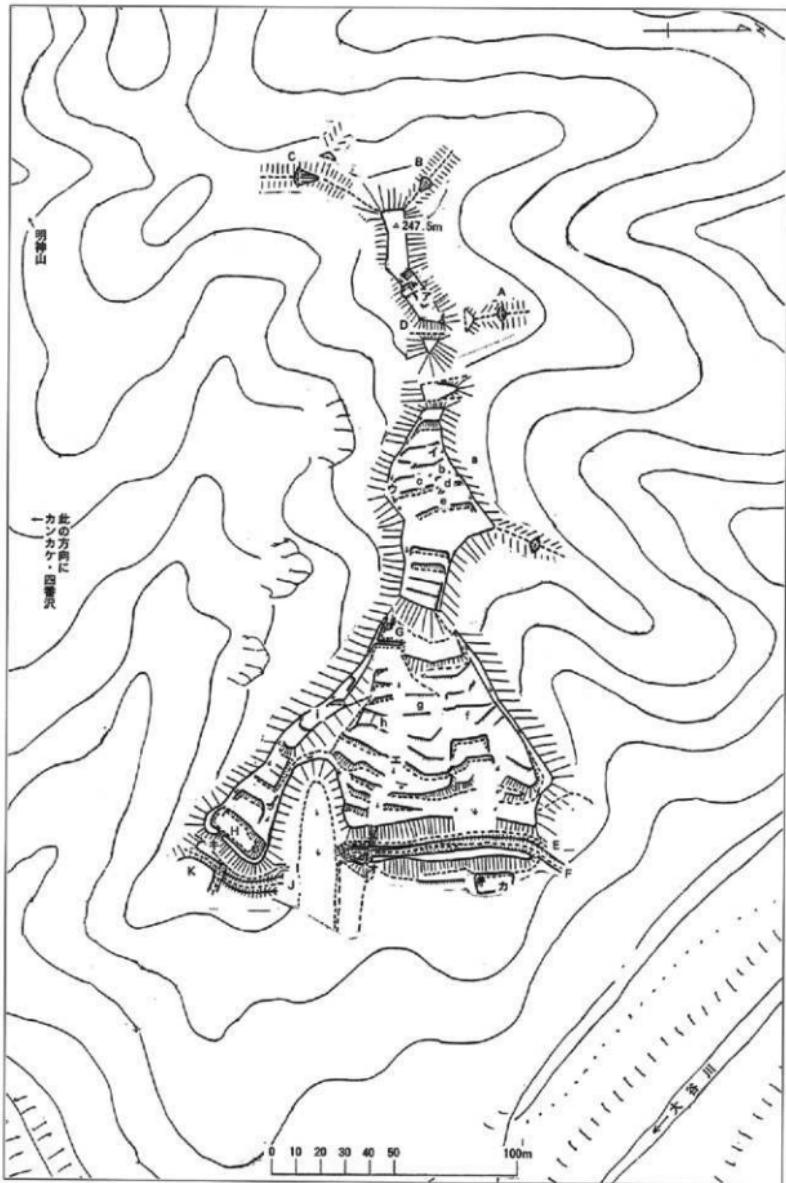
参考文献 『朝日町の歴史』『私たちの村・大谷風土記』『日本歴史地名大系 6』『角川日本地名大辞典』

概 要

大谷集落の南西標高 247.5m の山地に主郭をもつ城館跡で、大谷川により鶯谷を隔て、大谷盆地にぐっと突出し、南西には断崖による沢・四番沢を隔て、高野、カンカケ、明神等の峯を外壁の如く続らす自然要害を形成する地勢で、防壁を形成しているところに、東西 300m 南北 140m の範囲で、山頂より東の尾根へ未広がりに不整三角形状に、3 つのグループに大別されて曲輪、空堀、堀切が存在する。第 1 の曲輪群は、頂上部八幡座に山の神アがまつられ、長軸 50m 短軸 10m の主郭で北西、南西、東北に 1 ずつの小堀切 B・C・A、東に大堀切 D を配する。その東側に第 2 の曲輪群が東西長軸 90m 南北短軸 45m の不整菱形 a で、主郭より 16m の比高差に大小のテラスが東へ下りながら配されている。曲輪 b、c、d、e は交互に削平され、全部で 13 倍、両端は道路イ・ウとなっている。第 3 の曲輪群はこの尾根最大の曲輪群で、東西 80m 南北最大巾 90m 比高差 20m の緩斜面に、西側を上部に東側を底部に不整台形状に曲輪が連続している。即ち北側に略 2 列か 3 列に階段上にテラス f、g を設け、南側の道路エをはさみ更に西東に 11 のテラス h が階段状に構築されている。第 3 曲輪群の東端には長さ 90m の空堀 E、F 本が南端に虎口オを付随しており、この堀の東は比高差 5m の断崖となり東北部に井戸（泉）カがある。この第 3 曲輪群の南側に頂部を共有し、東西にのびる尾根上に東西 120m、南北最大幅 30m の不整長方形を頂角とする長三角形形状に曲輪群 i が構成されている。即ち頂部にト状の土壘 G を構築し、東下部に 8 段の曲輪 i が削平され最東端は深さ 5m 南北に長軸 30m 東西に短軸 10m の空堀 H が虎口キを付隨している。その東北には 2 本の空堀 I・J が南北にその南へ一字型縦堀連続の空堀 K が配されている。

この城は本丸であり、頂上は八幡座に当たり、本丸はいわゆる詰めの丸としての意義を持つものであったから、事変の時だけ此處に立こもり、平常の居館は別に山麓の方にあったと考えられており、この本丸の外の別丸として、東方 2.5km にある秋葉山城、北東 1.6km の位置にある猿田城と本城を結べば三角形となり、その中点に居館があったことになると考えられる。

（鈴木治郎・登板高典）



真木山略測図

おおぬまだて
大沼楯 323-011

所在地 朝日町大字大沼字楯山

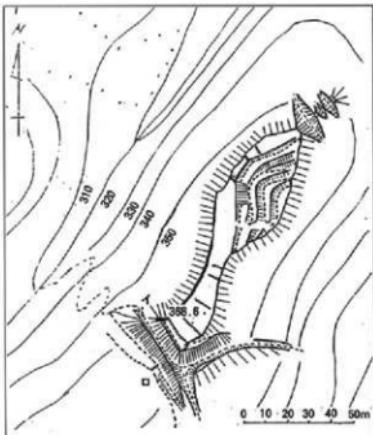
築城者 不明

築城時期 〈戦国期〉

史料 「字限図」

概要

大沼集落の南 800m 地点、標高 368.6m の
楯山（比高差 30m）に 150m × 60m の城域を
有する。山頂は南北に長く西に円弧状をなし
75m × 最大幅 15m の平坦地である。また南
端は T 字状空堀が長さ 45m 程、深さ 4m で
遮断されるが、堀底は虎口通路イ・ロでもある。
郭の北東はく字形で腰曲輪 5段ほどが段
差 1~3m で設けられる。物見台、狼火台的性
格の小規模山城か。（鈴木治郎・登坂高典）



大沼楯略測図

きつたてだて
切立楯 323-012

所在地 朝日町大字太郎字切立

築城者 不明

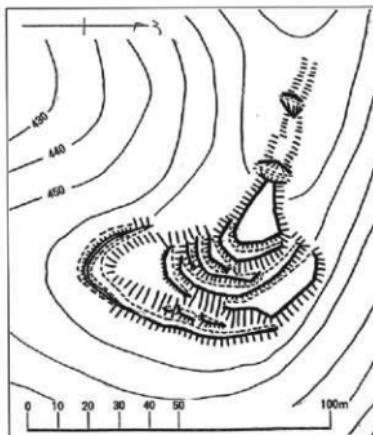
築城時期 〈江戸期〉

史料 「字限図」

参考文献 『郷土のあしあと』

概要

朝日町太郎、風切山の南側の小山に位置す
る標高 490m の山腹に削平構築された山城で
ある。本丸部は、標高 480~470m 部に西を頂
点とする長三角形 160 m 程で削平されてお
り、西側先端のすぐ西北に堀切があり、又そ
の先に堀切が構築され防衛している。東南に
は、段差 2m 程宛で大小 6 箇の腰曲輪、帯曲
輪が弧を描くよう築かれている。最下部の曲
輪は、陵線に沿い土星が盛られ、北側へ帯曲
輪で伸び連なっている。



切立楯略測図

（登坂高典・鈴木治郎）

所在地 朝日町大字上郷字ヒデリ田

築城者 不明

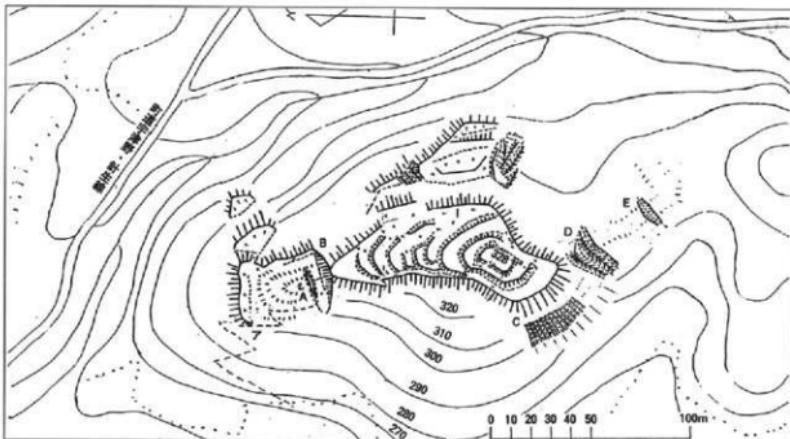
築城時期 〈概図期〉

参考文献 『東五百川村郷土誌』『日本歴史地名大系 6』

概要

上郷字津野集落から西南方約600mに位置するもので、通称插の山と称されている。城跡は標高328mの山頂を中心に構築され、15m~8mの長方形テラスを主郭とし、それを囲繞するように2段、そしてその下北側にも尾根に沿い7段の連続腰曲輪を配し、主郭を入れ、長軸115m 短軸40mの曲輪群Iを構成、その深さは北端は深さ10m 幅5m 長30mの堀切Bで、北側に土塁Aが配されており、統いて長軸南北に50m 短軸東西に30mの緩斜曲輪を成し虎口Aが付随する。又その曲輪の東側に2段に層状曲輪が比高差20mに2箇削平され、主郭曲輪群の東部に段差20mで不整三角状曲輪が2箇構築、その両脇それぞれ3条の畝状たて堀が東西に配されている。そして主郭部の曲輪群Iの南西には、13条の畝状たて堀Cが比高差10mにわたり構築され、主郭部南東には3条の空堀Dが20m~30m深さ5m 幅5~7mで堀切状に東西に構築され、その南東を堀切Eで防御している。北東に鳥麗カ森城、南西に杉山城（西置賜郡と境の地）がある。付近から板状土偶・石棒が出土している。

（鈴木治郎・登坂高典）



宇津野館略測図

とやがもりじょう
鳥屋力森城 323-014

所在地 朝日町大字新宿字タテ

築城者 岸美作守義忠、義満

築城時期 戦国期

史料 「字限図」

参考文献 『編年西村山郡史』『朝日町の歴史』『出羽諸城の研究』『日本歴史地名大系6』『角川日本地名大辞典』『米沢市史』『東五百川村郷土誌』外

概要

本館跡は、朝日町宮宿の東方1500mの新宿字タテ、標高400.2mの通称館山にあり、東南北の三面は深谷を以て囲まれ、西は傾斜をなして、山裾は集落新宿に迫る。頂上に長軸60m、短軸20m面積802m²程の広さを持つ南西部方形形状で、東北端の丸い長舌状形の主郭部が構築され、主郭より北西へ220m、北東へ300m、南東へ150m、南西へ180m、頂上からの比高差100mの範囲に造構が分布し、曲輪群の構成から4つのグループに大別される山城である。

第Iの曲輪群は主郭a北西部の広大な尾根一帯で、純い階段状にテラスが多様している。略中央部に頂上から末広がりに大小12、南西部に比較的大きい不整形のものが配され、中段の北側に長さ20m巾5~7m深さ5mの空堀が北西の方向に4条に配されており、比高差50mで海拔300mのところまで腰曲輪6箇が削平され、最下段には虎口アが付随しその虎口から東、北の二方向に登り道、東35m程で北より曲折の登り道と合体、この曲輪群の西側を頂上へ延長登攀するが、中頃より数次に曲折した堀底道となっている。登りつめた頂上部南側には矢竹が植栽されている。又この曲輪群の中段南側には4m×4m深さ1.5mの不整形の穴が存在する。

第IIの曲輪群は、第Iの曲輪群の西側の緩い凹部に大小(715m²~61m²)11個の腰曲輪が階段状に削平され、下位部にはヒメシャガが繁茂し、曲輪群の上部は急峻で頂上はタテと称され、その南方続きの峯をカネツキドウアトと称されている。

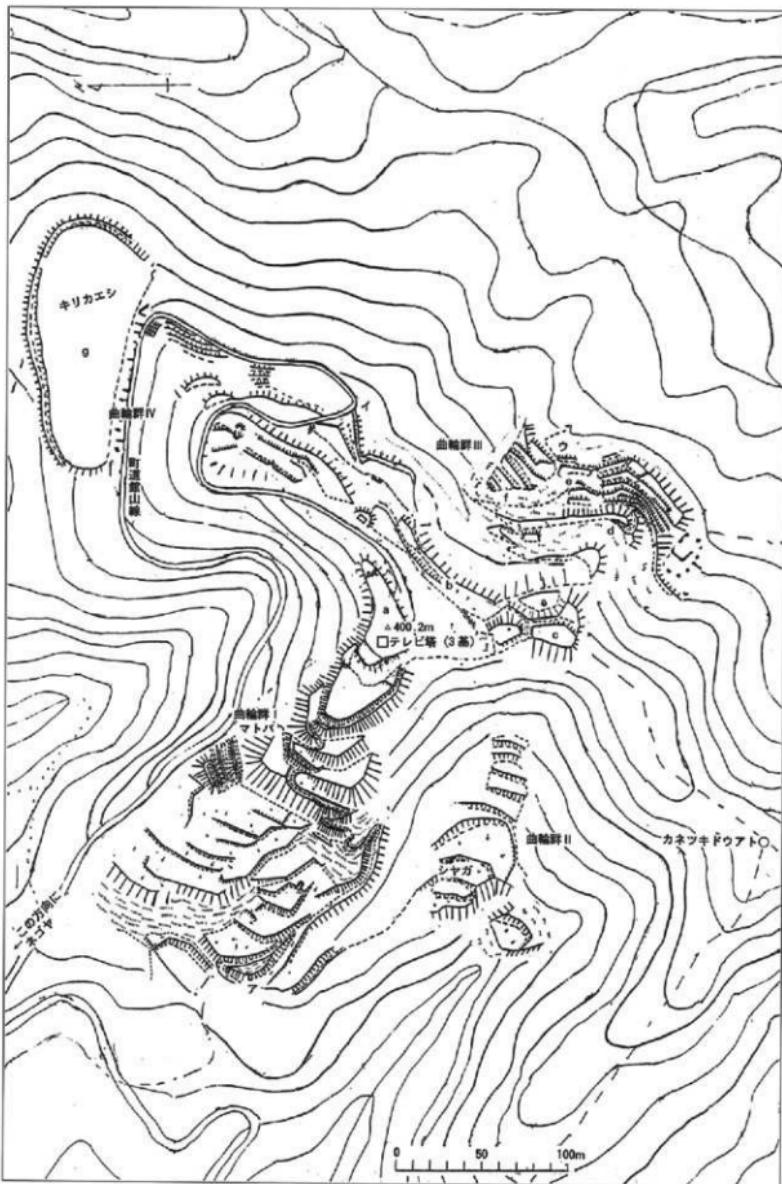
第IIIの曲輪群は、主郭の南東部に90mにわたる帶曲輪bその南西部に4箇の腰曲輪c北東部へ長さ80m幅3mの道帶曲輪に虎口イを付随する。その南側一帯に7段にわたり長さ50m幅4m程の帶曲輪dとその北に4箇の腰曲輪eとその北側に6箇の腰曲輪fで囲繞fには虎口ウを付随する。

第IVの曲輪群は主郭の東と北東間に数多くの曲輪が構築されている。主郭を囲繞する様に帯状丘陵部に構えられ、北東より東部へ斜面の中比高差3mで数段配されている。穴、台部もあり、その下位部は腰曲輪、帶曲輪が多様しており、主郭の北東約130m、主郭からの比高差60mのところに、長軸135m、短軸45mの左足靴形の広大な腰曲輪が巾4~8mの帶曲輪に縁どられながら存在する。通称キリカエシと称している。主郭の西北680m標高200mのところにネゴヤがある。

主郭を中心と西側の尾根に曲輪が多様し、それを鍵うが如くに頂上付近まで登り道、途中堀底道となり南東、東、北東を大小の曲輪が多様し、北東の下位部に広大な腰曲輪を配しているのが特徴といえる。支城が北西地続きに前田沢城、西に豊龍館、東北3.6kmを隔て、東村山郡山辺町荒谷東館、西館が存在(天正10年頃1582構築と山辺町教育委員会で推定)し、岸美作守の館と推定している。

戦国時代岸美作守義忠が構築し、永禄8年(1565)最上義光の攻略で落城、慶長5年(1600)上杉景勝軍の攻略で落城している。昭和42年(1967)主郭部にテレビ放送塔建設のため削平時出土したものは、焼き米5合程度、日時計1萬、柱の跡穴角5寸程、丸柱の残、陶磁器(弯曲したもの)、油砥石等である。(新宿 佐藤孝太郎氏談大正13年(1924)生れ。)

(鈴木治郎・登坂高典)



鳥居力森城略測図

日うりゅうだて
豊龍館 323-015

所在地 朝日町大字宮宿字経ヶ崎

築城者 (岸美作守義忠)

築城時期 戦国期

史料 「羽州川通絵図」

参考文献 「東五百川村郷土誌」

概要

最上川の上流部右岸の宮宿経ヶ崎に川から
の比高 60m、長軸東西に 400m 短軸南北に
200m 標高 189m の舌状台地がこの城館跡で
ある。主郭は長軸 150m 短軸 70m の東部を
底辺、北西部を先端とする舌状形で、北端に
土堀跡、東部に北高差 5m で 2 本の空堀の一
部が残る。空堀の南側斜面を起点に比高差 10
m 下に幅 2-3m でこの館の中腰を西北部へ



豊龍館略測図

舌状に帯曲輪が約 300m 囲繞している。鳥屋
カ森城が本城、前田沢橋と共に支城。

(鈴木治郎・登坂高典)

所在地 大江町大字左沢字樅山

築城者 大江元時

築城時期 南北朝期

史料 尊卑分脈、天文本大江系図、大江姓安中坊系図

参考文献 沖津常太郎著『寒河江城を語る』、新人物往来社刊『圖説中世城郭事典』左沢城村田修三編

概要

正平 11 年 (1356 延文元年) 足利尊氏の一族斯波兼頼が山形に入部した。兼頼は足利泰氏から見れば 5 代の孫であり、尊氏は 4 代の孫である。当時の勢力を制圧するために兼頼が派遣された訳である。寒河江大江氏は当然北朝勢の進攻に備えなければならなかった。大江時茂は白岩、柴橋、寒河江、左沢、溝延、小泉、高屋、荻窪、見附などに城を築かせたという (『金中山眼明阿弥陀尊略縁起』)。この時時茂の長子時信 (茂信ともいいう) は溝延に築城、次の元時は左沢に築城した。尊卑分脈には元時の頭に「左沢」と記されている。この左沢は文献に出てくる最初の記録と思われる。

元時は最上川の天險と舟運の利用、更に最上川に接続する山地の険峻を利用して築城した。今日残っている地名と曲輪、並びに防御態勢から次の四地区に区分される。本丸、二の丸、三の丸及び三の丸北高地である。全体合わせると、東西 1300m、南北 600m に及ぶ広さである。

1. 本丸 左沢 5 万分の 1 地図の左沢線鉄道トンネル北の 222m の高地を中心とした一帯の山城である。ここには柱穴 3 箇が見当っているから城の建物があったことは確かである。また、八幡座の名称も伝わっているから寒河江八幡神社の分神が祭られていた。更に本丸の東北の鬼門の一角に寺屋敷があるから「巨海院縁起書」による城中に一院を設くとある巨海院が置かれたと思われる。本丸の水は桧木沢川の利用もあるが、地層は左沢層の上を冲積層が覆っているので隨所に水を求めることが出来る。道路も寒河江、白岩、荻窪に通ずることが出来る。この本丸は二の丸、三の丸等を含めてこそより強い機能を果すことが出来る。

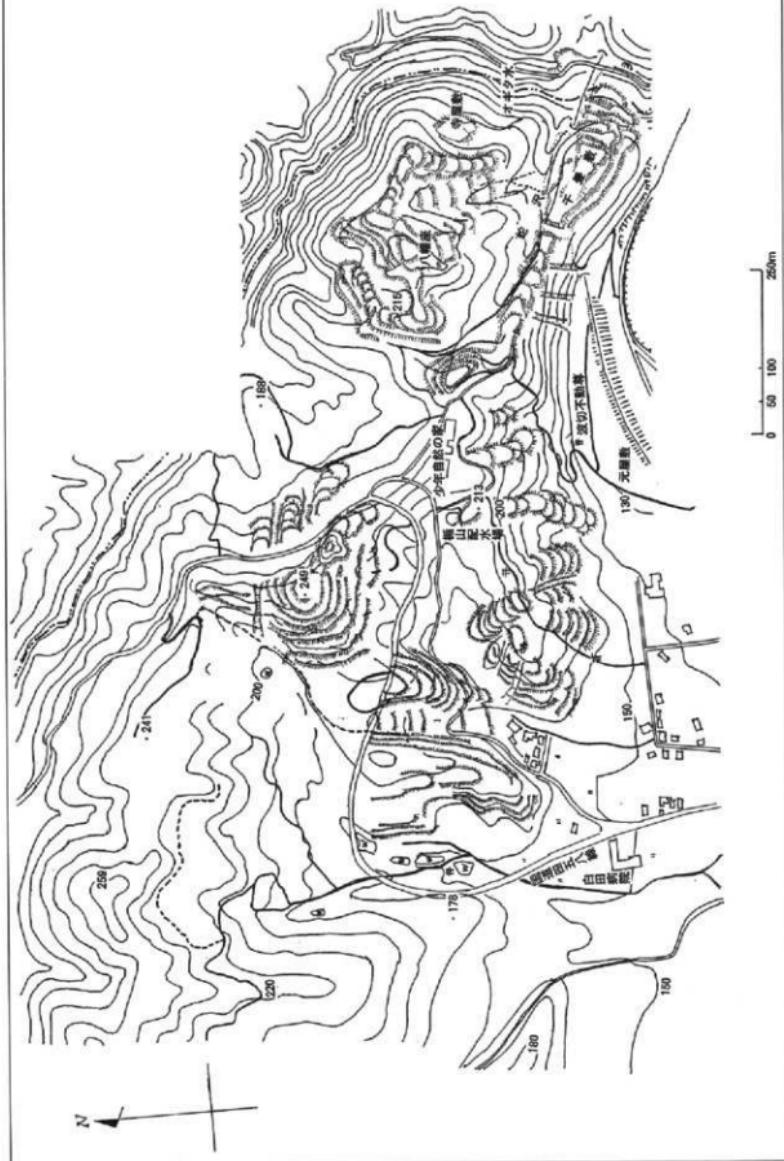
2. 二の丸 鉄道トンネルのある高地である。山上には「千畳敷」という平且地がある。二段になっているが 700 畝は敷ける広さである。眺望も良いし、防御には最適の城である。見方によつては「詰めの城」とも見られる城である。本丸の方の斜面には住居跡らしい所と水を求めた場所がある。

3. 三の丸 二の丸とは現在も道路になつていて区別されている。この道路は左沢より寒河江、谷地、大石田に通ずる主要道路であった。この三の丸は東西に長く伸びており、その中央に「八幡平」があり、本丸より移された八幡神を祭った場所である。三の丸の南斜面には城下帯にかけて、東より浪切不動尊、巨海院、称念寺、実相院が置かれていた。その宗教施設がその痕跡であるが今日まで続いている。また三の丸の西端には実相院で祭っている愛宕神社、虚空蔵尊、秋葉神社が一堂に集められた形で現在に至っている。恐らく天満宮もこの一帯にあったのであろうと推察される。

4. 三の丸北 この城は三の丸に統一していた城の一角で、この高地を無視すれば三の丸はその意義を失うことになる。但し、この城の部分は最上氏治下の城であろうとされている。

5. 結び この左沢城は正平 23 年 (1368) 淩川の戦いで大江時信、元時等一類 63 名が自刃し、左沢政周は永正 11 年 (1514) 長谷堂の戦で最上勢と共に伊達宗宗と戦って討死したり、天正 12 年 (1584) 大江氏は最上義光に攻撃され滅亡した。その都度城郭が変っている。

(高山法彦)



左沢城山城略測図

とみさわじょう

富沢城 324-002

所在地 大江町大字富沢小字裏山

築城者 大江親広

築城時期 錬倉期

史料 天文本大江系図、朝日町大谷白田氏家譜、羽州長崎村古城主中山玄蕃頭系図

参考文献『大江町史』『柴橋村史』『出羽諸城の研究』沼館愛三

概要

承久の乱に敗れ下り親広が一時潜居した城で大江氏当初の城として重要であり富沢太郎三郎が城主と見られる。本丸郭は左沢から置賜街道の要地を占め、最上川対岸三郷地区及び月布川沿いの多くの城の要である。城の中心は割に小規模であるがたて堀・空堀・土塁(堀型あり)があり、周辺の手白山・大山・沼

富沢城略測図

沢地を含め考える必要がある。東断崖下が富沢集落で居館があり、天満宮は大谷の南朝方白田氏と関係がある。町内当初の城として重要。

(松田 進)



ごしんじだく

護真寺館 324-003

所在地 大江町大字三郷内(伏熊)小字裏山
(3871、1165の境界)

築城者 中山忠義

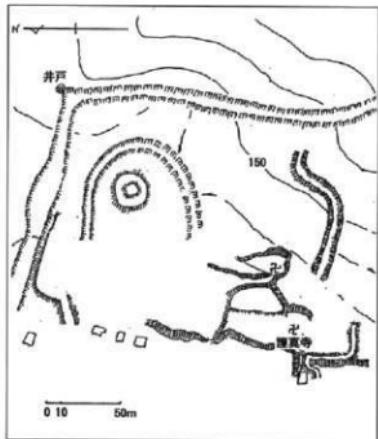
築城時期 錬倉期

史料 大江姓安中坊系図、羽州長崎村古城主中山玄蕃頭系図

参考文献『大江町史』『大谷風土記』沖津常太郎、『柴橋村史』『歴史の道～最上川～』山形県教育委員会

概要

大江親広が承久の乱に敗れ当地方に下り一時富沢に潜居し、家臣中山忠義が最上川対岸の護真寺付近で警護に当った據である。三郷地区は最上川右岸で左岸の富沢城と共に、左沢から置賜方面への街道を扼し、また東方の山辺(北朝方)への備えの位置を占めている。



護真寺館略測図

複式の据で、共に空堀を巡らし、たて堀があり、土塁と居館跡もある。東方の山続きにも据がある。伏熊集落には上屋敷・下屋敷・堀の水・カネヤマの地名がある。

(松田 進)

た ざわやまだて たてやま
田沢山櫛 (櫛山)

324-004

所在地 大江町大字三郷内(伏熊) 小字田沢山

築城者 中山忠義

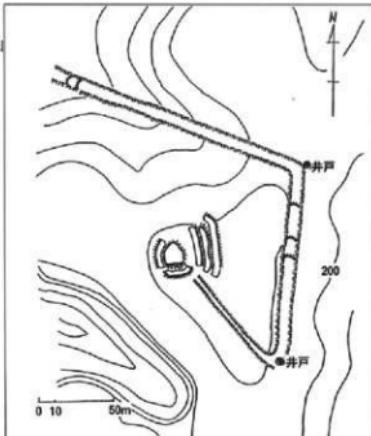
築城時期 錬倉期

史料 寒河江大江氏諸系図

参考文献『大江町史』『大谷風土記』沖津常太郎、『柴橋村史』「歴史の道~最上川~」山形県教育委員会

概要

大江親広と共に当地に下った中山忠義の護真寺館の支城と見られる。親広潜居の富沢城を中心にして、最上川対岸三郷地区の護真寺館を始め多くの櫛と関連する。伏熊~中山~山辺の道を扼する要地を占め護真寺館と一緒にあって機能し両櫛下に伏熊集落がある。南北



田沢山櫛略測図

への山続きを北から東へ空堀で区切り、南は沢で、一つの山形に頂上の曲輪と山を取巻く腰曲輪が3段、空堀に掘底道、また湧水が山下に櫛の水として湧いている。たて堀も見られる。(松田 進)

ふかさわだて たてやま
深沢櫛 (櫛山)

324-005

所在地 大江町三郷乙字前山

築城者 中山忠義

築城時期 錬倉期

概要

大江親広の家臣中山忠義当時伏熊館の支城と思われる。富沢城の守りの監視役を果した櫛と見られこの櫛から最上川の水面まで望見される。頂上はやや細長く40m程あり平地で北西に本丸より5mと4mの2段差で腰曲輪があり、馬場までつづき広い傾斜地となっている。東方西方とも沢が流れ深く天然の防備をなしている。地名として「馬櫛」「櫛の下」「中丸」など通称として残っている。沢をはさんで南に急峻な三百山櫛が並んでいる。



深沢櫛略測図

(斎藤高治)

用大丈堀 (大丈) 324-006

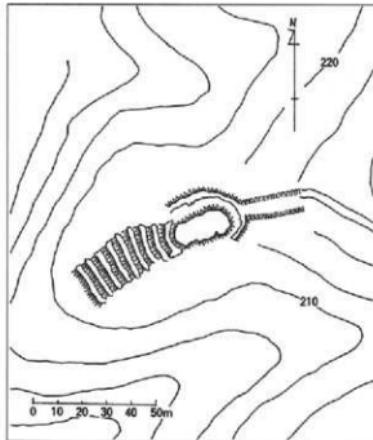
所在地 大江町大字三郷甲字大丈

築城者 中山忠義

築城時期 錦倉期

概 要

大江親広が潜居した富沢城を守るために監視の役を果した堀とみられる。急な崖の中段に突出した様な形で本丸があり北方に薬研堀の空堀が認められる。南方には九段にも及ぶ段階状の腰曲輪が見られる。東方西方とも断崖状で下に湧沢川があり、北方は山焼きという天然の要害地形である。南方にある南山堀と共に下方の中山・山辺への道をはさんで通る敵を攻撃したという伝承もある。又東側の湯外の沢はここで湯治をしたともいわれる。



用大丈堀略測図

(斎藤高治)

荻袋城 324-007

所在地 大江町大字荻野字上平

築城者 左沢元時の次男 冬政

築城時期 南北朝期

史 料 尊卑分脈大江系図

参考文献 吉川安中坊藏「阿弥陀尊略縁起」

『大江町史』

概 要

大江と最上との対立が激化し、一族は一層の防備強化を図り、元時は堀山城の出城として次男冬政が荻袋に封じ築城した。山形五百川方面よりの侵入路猿田越を押える、軍事交通上の要衝と考えた。当時荻袋は諏訪原と地続きで舌状に張り出した台地で、月布川が曲流して囲み西方から猿田川がそゝぎ水堀となる天然の要害である。水路道路の改修や果樹園造成、寺宅地化などで遺構はほとんど消失している。漆川古戦場一族終焉の地と認められた。



荻袋城略測図

(林精一郎)

（くさわだて ひがしたて）
葛沢橋（東橋） 324-008

所在地 大江町大字本郷甲字東橋

築城者 大江廣顯

築城時期 錬倉期

史料 尊卑分脈大江系図

参考文献 大沼大行院大江系図

概要

広顯号小沢は、小沢（現立見公園葛沢）に築城、地形上本城を守るために、他の一族の城番との連携大井沢街道の守備又は吉川に通ずる軽井沢越の坪景道の防備のため、又は本城のつめの橋として築城したものと考えられる。橋に通ずる道は、本城の東方沢を渡り東橋の北方の縦堀、曲輪を伝っての道と南方の断崖の東方の傾斜地を上っての道があり、こ



葛沢橋略測図

の途中に湧水がある。橋の東北の縦堀の入口に折形が見られる。西北方への防備の構築が多い。

（林精一郎）

（こよしじょう おざわじょう）
顔好城（小沢城） 324-009

所在地 大江町大字本郷甲字顔好表

築城者 大江廣顯

築城時期 錬倉期

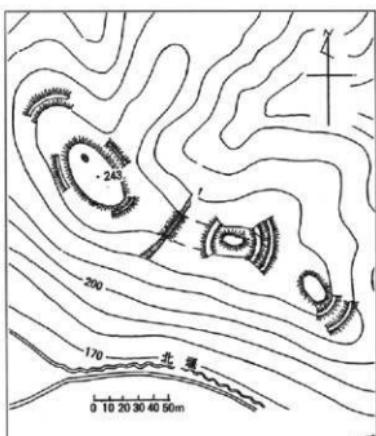
史料 尊卑分脈大江系図

参考文献 大沼大行院大江系図

概要

広顯号小沢、広顯は又源好吉と称したことから顔好となったといい伝えこれから顔好城が広顯の城と考えたが調査して、小沢城は現葛沢立見公園の地が城跡と見られる。顔好城も葛沢橋（東橋）も小沢城と一緒にもの（連絡路、東橋の地名、機能等から）と見られ、公園として又畠、植林、神社等城跡として、空堀、曲輪の一部（梵字川側に確認されるのみであるが）地理的に最も適地である。顔好城は見張り狼煙台（石墨跡あり）であったと見られる。

（林精一郎）



顔好城略測図

わかもつやまとて

若松山城(さまとやま) 324-010

所在地 大江町大字橋上小字若松山

(俗称さまとやま との城)

築城者 大江広順

築城時期 鎌倉期

史料 寒河江大江氏諸系図、尊卑分脈

参考文献 『大江町史』、『寒河江大江氏』

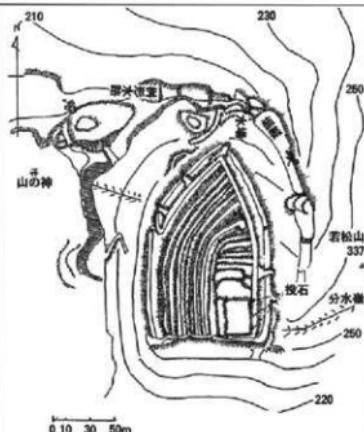
阿部西喜夫、『寒河城を語る』

沖津常太郎

概要

若松山城・頬好城・葛沢城は連郭のように続く。史料では広順は小沢と号し頬好と解せられ頬好城が本城であるが、規模は若松山城が最大で榮城も複数。月布川対岸の左沢～大井沢街道を望み道沿いの十八才城、西川町への道の小新堀と共に守りを堅める。本丸には

深い堀切沿いに投石を集めた3ヶ所があり、堀切に続くたて堀に段差、堀底道・泉・桥形・堀切がある。山腹を巻く11段の腰曲輪と連絡道もある。城戸口・馬場・要害などの地名がある。(松田 進)



若松山城略測図

さいもくじょう

材木城 324-011

所在地 大江町大字材木西浦

築城者 大江公廣

築城時期 鎌倉期

史料 尊卑分脈大江系図

参考文献 『大江町史』大沼大行院大江系図

概要

尊卑分脈に公廣号西目とある。元顯寒河江下向の頃に下向し、西目(現材木、さいもく)と号したと考えられる。一族の防備を堅めるため、朝日町に通する交通の要衝、天然の要害に囲まれたこの地に築城し、支城所部堀を深い沢の対岸急峻な山上に築き模様見田越の守りと見張の城とした。城域は東西1.5南北1キロに本丸二ノ丸三ノ丸、南方に壮大な深い空堀で通路をしゃ断し、周囲には縦堀空堀曲輪が築かれ、門口・馬場道・的場・干場などもある。

(林精一郎)



材木城略測図

おぐらさんだて
小倉山城 324-012

所在地 大江町大字十八才甲字橋前

築城者 大江親元

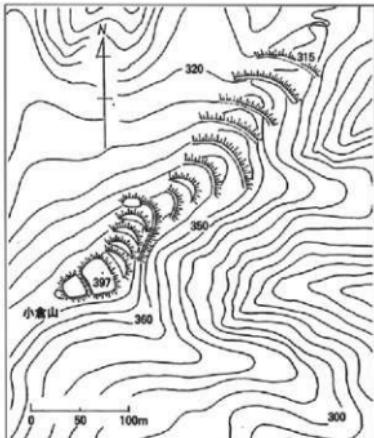
築城時期 錬倉期

史料 尊卑分脈大江系図

参考文献 「大江町史」大沼大行院大江系図

概要

大江親元が古河に築城のとき支城又は見張りの城として築いたものと見られる。小倉山頂にあり東方へ向き腰曲輪も東方の防備と見られ、左沢橋山、寒河江方面又地区数ヶ所の城も展望できる。軍事上の要衝であったと思われる。背後の中腹に本城があり十八才城と一緒に構成で、中腹に湧水もある。



小倉山城略測図

結んだ通路があり、根小屋は橋上地区にあったものと考えられる。一族の材木城へ通ずる道もある。

(林精一郎)

じゅうはっさいじょう
十八才城 324-013

所在地 大江町大字十八才甲字品袋

築城者 大江親元

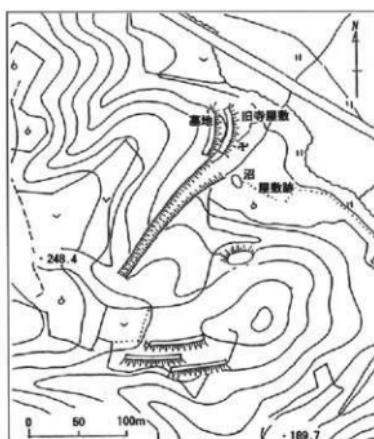
築城時期 錬倉期

史料 尊卑分脈大江系図

参考文献 大沼大行院大江系図

概要

古河と号した大江親元は、現十八才（古河は古名、近くに古河口の地名あり）に築城し潜居したと考えられ、小倉山の中腹に城館跡があり、本丸附近はスキー場畠地に造成されて不明であるが、麓の入口に縦堀、虎口、馬出し、附近に湧水、寺跡、家敷跡、曲輪等の一部が認められ、東方は深い沢で橋上に接し、北方は月布川の断崖にさえぎられ、底地を大井沢街道が東西に走る。又対岸には西川町吉川に通ずる道があり軍事上、交通上の要衝である。



十八才城略測図

(林精一郎)

だいじょう

大城

324-014

所在地 大江町大字月布小字大城

築城者 大江高廣（大江高基の弟）

築城時期 鎌倉期

史料 寒河江大江氏諸系図 大城古絵図、
徳蔵院伝記、伝五輪塔

参考文献 『大江町史』、『寒河江大江氏』

阿部西喜夫

概要

徳蔵院伝記に開基は高広で居城を寺とする
とある。築城年代は明確でないが御館山城と
同時期か。伝記に境内の範囲地名が書かれ、
支配の範囲と見られ、西は御館山城東は
十八才城北は橋山柄に近接し、左沢へ大井沢
街道を眼下にした位置を占める。南は山続き
で西北東を月布川が迂回し要害をなし、空
堀・腰曲輪・土塁・井戸が残っている。伝記
に、五輪塔・門石・松の大木・井戸があると

書かれ、古絵図に五輪塔が見られる。壕端・馬場の地名もある。

(松田 進)



大城略測図

ようがいじょう

要害城

324-015

所在地 大江町大字貫見小字要害

築城者 大江政顥

築城時期 正応5年(1292)頃

史料 寒河江大江氏諸系図、大江高基十二家臣の墓、貫見村古文書、貫見村古絵図

参考文献 『大江町史』、「大江高基公について」松田進、「寒河江大江氏」阿部西喜夫、「大江高基公400回忌にあたって」松田進、「寒河江城を語る」沖津常太郎

概要

「安中坊縁起」に政顥が「要害城に住す」と
あり、築城の時期と見る。御館山城山麓下に
あり同様に交通の要衝で、その根小屋または
居館と見られる。城は丘陵状の地にあり、北
と西に川があり、他に、曲輪・腰曲輪・空堀
の備えがある。御館山城と西の館山柄を見渡せ三城一体となって機能し、城下町として貫見村があつたと見られる。「貫見文書」に、十二家臣がこの地で防戦の中に高基が御館山に登り三家臣と自刃した
とあり、12基の墓がある。



要害城略測図

所在地 大江町大字貫見小字迎田

築城者 大江懶顯

築城時期 正応5年(1292)頃

史料 寒河江大江氏諸系図 貫見村古文書 貫見村古絵図 石碑

参考文献 『西村山郡史』『寒河江大江氏』阿部西喜夫 「大江高基公について」松田進、『大江町史』
『寒河江城を語る』沖津常太郎 「大江高基公 400回忌にあたって」松田進

概要

寒河江大江氏の当町に於ける歴史は深い。南朝方大江氏第一代親広が承久の乱に敗れ下り、一時富沢に潜居した事に始まり、町内に大江氏の27余の柵跡が見られ、北朝方最上義光の攻撃により高基の貫見に於ける最後で、400年も続いた寒河江大江氏は滅亡した。

貫見に於ける歴史は、大江氏系図に「大江懶顯貫見橋に住す」「政顯要害橋に住す」(正応5年)を始めとし、その他の一族が貫見に生れ、住み、死んでいる。最上義光の攻撃により、高基は甥で貫見城主の松田彦次郎を頼って来て貫見の戦で衆寡敵せざ自刃した。西村山郡史・貫見古文書・大江家系図などに高基の記載がある。(例えば高基自刃の場所その他に相違はあるが、現在の研究では御館山上自害と見ている)。

西村山郡史に「文久2年庚7月県令林伊太郎手附佐藤駒之助ニオホセテ、貫見ナル旧記タシラヘ、カツ墳墓見分有り、修理オロソカニスヘカラスト嚴シク里人ニ命セラレタル事アリ」とある。それに答えた報告書に、貫見での戦況、高基自害の状況、墓所、供養の状況、修理状態など詳しく記録された古文書が遺されており、当時組頭として任に当った鹿股市郎右エ門家に保管されている。

貫見文書によれば、高基は十二家臣が山麓で防戦している間に御館山に登り三家臣と共に自害したとある。現在、文久2年建立の石碑、昭和期の五輪塔と昔の土壇に記り、高基公350回忌・400回忌・410回忌の法要と関係者を招き行っており、毎年命日に供養し、大切にしている。

家臣松田彦次郎は、主君の遺言により「明王堂」を建て菩提を弔ったといい、堂内に高基・彦次郎の位牌が祀られ、境内に彦次郎の石碑があり改刻されて高基・彦次郎の事跡が記されている。

「光学院」は高基の菩提寺で、高基・彦次郎・十二家臣の位牌、伝高基自刃の短刀・伝彦次郎の強弓が遺されている。鹿股家には高基外十九将の掛図もある。山麓の「要害」に十二家臣の自然石の石碑が祀られている。現在の学校建築の際に人骨が出て貫見の戦のものかとも言われている。高基逃亡の経路を意味する伝説の「地名」が御館山東側の月布方面に伝えられている。

御館山城は西向いの館山橋と共に高い縄で、龍の要害城と合わせ三対の防備の橋と見られる。即ち左沢へ大井沢、朝日町へ貫見へ西川町と十字路の要衝に位置し、北に最上川、西と北は急峻、南と東は沢を挟んで山統きと自然の要塞をなし、その為か大きい城の割に領域の複雑さがあまり見られない。頂上の曲輪、中腹の腰曲輪・空堀・たて堀、山下から沢を利用して虎口・枡形・たて堀・堀底道、山腹に井戸跡も遺っている。安中坊縁起にある「見附」即ち見張りの役があったと思われる。城下町として貫見村が形成され、根小屋或いは居館として、山麓の「要害」と高台で寺のある「平」が考えられる。東方に、高基の弟高広の居城「大城」があり、高基と同時期に自害したと古文書にある。

寒河江大江氏滅亡の最後の地として、古文書・遺跡・遺物・地名なども残り、歴史の地として貫見では大切にし、現在、頂上の300m近くまで車道を拓き駐車場を設け案内標を立て、年1~2回は補修・清掃し保存に努め、今後は歴史公園にしたいものと貫見村民は希望している。
(松田進)



御館山城略測図

たてやまだて
館山櫓

324-017

所在地 大江町大字貫見小字生板

築城者 松田彦次郎（貫見館主）

築城者 鎌倉期

史料 寒河江大江氏諸系図 貫見村古

絵図 貫見村古文書

参考文献 「大江町史」「出羽諸城の研究」

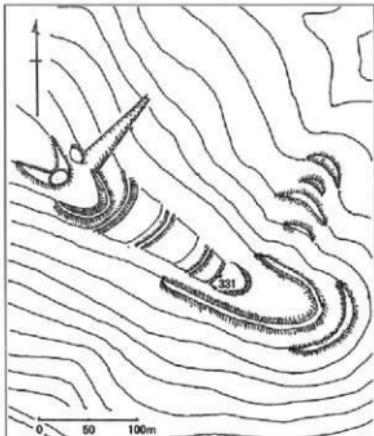
沼船愛三

概要

この櫓は御館山城・要害城と一体のものとして貫見の居館及び城下町を囲んでおり、大井沢・西方の沢口橋方向への見通しがあり、特に西方への守りの櫓である。この館山は大きく北方の黒森櫓（たんばすず）と東方の虎空櫓があり北方への守りも堅めている。この櫓は南北への峠続きにあり、南に月布川を

望み東西両面が急峻で北方へ山越きである。曲輪・腰曲輪・空堀と石塁も少し造っておりたて掘が城下町貫見方面にあり村人も道を覚えている。

（松田 進）



館山櫓略測図

くろもりだて たんば す ず
黒森櫓 (丹波清水)

324-018

所在地 大江町大字黒森小字横手

築城者 大庭丹波

築城時期 〈南北朝期〉

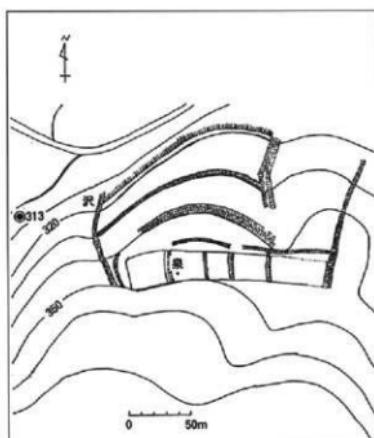
史料 寒河江大江氏諸系図

参考文献 「山形県の地名」平凡社、

「歴史大辞典」

概要

大庭丹波は景親の子孫で関ヶ原の戦に出陣したといい沢口村に子孫と伝える家がある。館山の北面の櫓で南の館山櫓東の虚空蔵櫓の中で北方への防備と見られる（貫見より北の西川町への道がある）南の急峻な山下の割に平地で泉の付近に曲輪（5区画段差あり）、北方に対しての四重の空堀と2本のたて掘がある。黒森の八幡神社と中の畑の雷神社には大江高基寄進の土地がある。山麓には、馬場・的場などの地名もある。伝大庭丹波の槍がある。



黒森櫓略測図

（松田 進）

さんびゅくやまだて
三百山櫓（三百山）

所在地 大江町大字三郷乙字前山

築城者 中山忠義

築城時期 錢倉期

概 要

大江親広の家臣中山忠義当時の伏熊櫓の支城と思われる。北の沢境にして深沢櫓と共に山辺に通ずる道路を警備したものと見られる。南は断崖で沢となり北は四段西は六段の自然岩山を利用した曲輪があり小さく段々に築かれている。本丸南の土塁空堀より西に山麓まで縦堀が走り、四段下の曲輪より8m下に土塁空堀が80m西へとのびて腰曲輪となり縦堀へづく、一つの櫓として土塁空堀・曲輪・縦堀・枡形・虎口と種々遺構が残され

ている。

（斎藤高治）



三百山櫓略測図

みなみやまだて
南山櫓（南山） 324-021

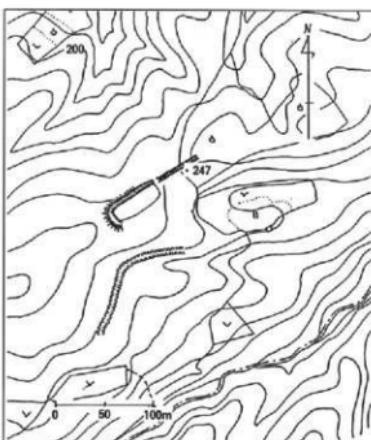
所在地 大江町大字三郷甲字南山

築城者 中山忠義

築城時期 錢倉期

概 要

大江親広が潜居した富沢城の守りの櫓の一つと見られ、伏熊櫓の支城として築城されて中山（南朝）山辺（北朝）への道を警備するものとして機能したと思われる。頂上本丸と見られる部分は櫓円形で西方に空堀があり東方は崖であるが、下方にも一つの櫓が見られ西方に空堀が櫓をまいている。北の大丈櫓と共に下方の中山・山辺への道を通る敵を攻撃したという伝承もある。今も「うつごし」「とやくち」などの俗称地名が残っている。



南山櫓略測図

（斎藤高治）

いわきだて
岩木櫓 324-023

所在地 大江町大字荻野字岩木 (ゆわあき)

築城者 大江冬政

築城時期 南北朝期

史料 尊卑分脈大江系図

参考文献 安中坊藏「阿弥陀尊略縁起」

『大江町史』

概要

荻野城主冬政は本城の守備を強化するため、猿田沢口、大山の中腹岩木山に猿田越街道の押えのために築いたものと考えられる。本城の南方、月布川の対岸で指揮の間にあり、櫓の構造は主として猿田越の道路に面して築かれている。谷から數本の縦堀・空堀・土塁・曲輪、背後に湧水がある。東方猿田沢



岩木櫓略測図

川の右岸に橋への通路の入口、枡形の跡があり、中間斜面や中腹の平地は果樹園に造成されている。

漆川の戦では戦場であったらしく近くから古刀が出土した。

(林精一郎)

ところよだて
所部櫓 324-024

所在地 大江町大字所部字タイゴ

築城者 大江公廣

築城時期 錆倉期

史料 尊卑分脈大江系図

参考文献 大沼大行院大江系図

概要

材木（西目、ざいもく）に本城を築いた広は、一族の城館や大井沢街道の眺望のきくここ高登屋の一角、本城を眼下に望む所に、見張りと、大谷に通ずる横様見田越の交通軍事的要衝に支城として築いたものと考えられる。多くの縦堀・空堀・腰曲輪や曲輪は総て東方に向き横様見田の道に向いている。櫓の南下にある高寺屋敷に湧水があり、現集落が

根小屋で城戸口がのこり、橋への道跡もある。西光寺の腰王神本尊を包んだ經典に北朝貞治3年とある。



所部櫓略測図

西光寺の腰王神本尊を包んだ經典に北朝貞治3年とある。

(林精一郎)

こじょうなだて 小新橋

324-025

所在地 大江町大字小新字岩城

築城者 大江親元

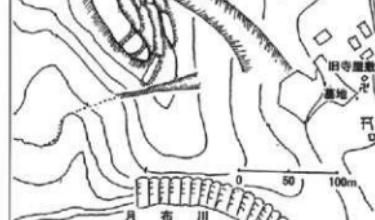
築城時期 錦倉期

史料 尊卑分脈大江系図

参考文献 大沼大行院大江系図

概要

親元十八才城を築いた頃、月布川の対岸小新岩城に支城として築いたと考えられる。この地は西川町吉川へ通ずる道が橋の東方沢と並行しており、交通軍事上重要な所で、橋の後方西北に櫛山橋に通じ、前面の沢の対岸に若松山橋と対している。月布川の断崖の上で自然の要害で、空堀がこの崖を下り久保へ通ずる。継堀・曲輪・水場があり、現集落が根



小新橋略測図

小屋であったと思われる。防衛施設は東方西川道に向いて築かれている。橋に關係する地名も多い。

(林精一郎)

ならやまだて 櫛山橋

324-026

所在地 大江町大字櫛山字横手

築城者 大江親元

築城時期 錦倉期

史料 尊卑分脈大江系図

参考文献 大沼大行院大江系図

概要

錦倉より下向し古河と号した親元は、十八才城を築城した。古河は十八才の古名と考えられ、櫛山橋は十八才城の支城として小倉、小新橋などと共に西川吉川橋に通ずる交通の要衝であり、対岸に大城橋もあり月布川に添って通る大井沢街道の守備など軍事上の要地である。山地が舌状に張り出した先端に築かれ、腰曲輪・継堀・堀切、本丸の一部が認められる。他は墓地、果樹園に造成されている。東方の山にも曲輪があり見張りの役目のものと見られる



櫛山橋略測図

(林精一郎)

こせいだて たて ろね
小清楯（楯の峯） 324-027

所在地 大江町大字小清小字斎後

築城者 〔佐竹氏〕

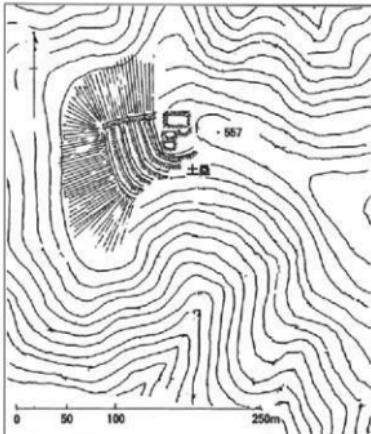
築城時期 〔南北朝期〕

参考文献 『大江町史』 伝佐竹氏系図

『七軒村史』 伝源氏の日の丸

概要

貫見城の支城と見られ、殿様居城の伝承のある小清村松保の近くの峯（楯の峯）に築かれている。源平の戦の伝承の「源氏畠」「毒水」が西山腹にある。西山下に小清村があり、貫見～小清～朝日町、小清～いろは峠～松保～朝日町へと交通の要地を占め、朝日岳・出羽三山行者のまた行政上の道路でもあった。東に天運山があり展望が良く、南北は急峻で、本丸曲輪は狭いが、小曲輪二つ、西方への腰曲輪6本、土壘・たて堀が遺っている。



小清楯略測図

(松田 進)

さわぐちだて
沢口楯 324-028

所在地 大江町大字沢口小字トガリ山

築城者 安彦吉内

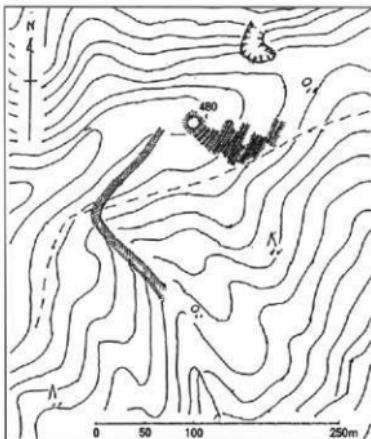
築城時期 南北朝期

史料 寒河江秘鑑 毛利出羽守大江高基
家中覚書

参考文献 『大江町史』
『山形県の地名』平凡社

概要

城主安彦吉内は大江高基家臣縁に「沢口住貫見ニテ生害」とあり、貫見村要害で自刃の十二家臣の一人である。御館山城の支城と見られ、東は館山楯西は柳川楯に近く、楯は南北の山続きに築かれ、西は断崖東に大瀧川が流れ、楯に曲輪と腰曲輪が10段余と長いた



沢口楯略測図

て堀があり、城下町沢口～道海、左沢～大井沢の街道を扼す。昔の朝日岳・出羽三山行者の通路でもあり、山麓に小姓戸の地名があり、所部の腰王神社、柳川の腰王権と共に越族の進出が見られる。

(松田 進)

所在地 大江町大字柳川小字櫻ノ腰

(ほか裏山・田府沢)

築城者 松田彦次郎

築城時期 南北朝期

参考文献 『大江町史』

概 要

貫見城の支城で柄主は貫見松田彦次郎。最も西方の支城で、左沢～大井沢（近く沢口橋あり）、越え西川町征矢形橋へ関連の橋か。南の月布川へ張出した舌状山地にあり、西は月布川の断崖東は沢、北は山続きでこの地点に橋が築かれ、北端を掘切で断ち南へ数段の腰曲輪があり征矢形道方面へも腰曲輪がある。腰曲輪間の連絡道も遺っている。この付近は「櫻ノ腰」の地名のごとく越族が進出し

たとも見られ、また、石器・土器類も多く出土している。



(松田 道)

6 北村山地区の中世城館の分布と特徴

6 北村山地区の中世城館の分布と特徴

鈴木 正一郎

北村山地区は、地理的に北は猿羽根・山刀切の両峠で最上郡に接し、東は奥羽山脈を隔てて陸奥国加美郡に、西は鳶山・月山の峻険が聳える。地区の南部は東村山と西村山地区に接する。

中世期、陸奥国加美郡は奥州探題の下で安定し、最上郡には最上氏の一族が分封されておったこと等から見ても、北・東・西からの外敵侵入を考慮する必要は少なかった。この事が中世城館の分布に大きく影響している。地区的分布上の特色として次のことがあげられよう。

一つは、境界領域に多く見られる山城群が少ないとある。この事は城館の絶対数を少なくしているといえよう。第二に、中世北村山は4つの勢力圏に分けることが出来るが、それぞれに中心となる大城館があった。回りにはいくつかの小城館が置かれ、部将が配置された。勢力圏と中心城館等をあげると次のようになる。

- 1、東根圏（現在の東根市域）――坂本氏支配領域――中心城館は東根城
- 2、河東圏（村山市河東市域）――樋岡氏支配領域――中心城館は樋岡城
- 3、河西圏（村山市河西地区と大石田町の一部）――白鳥氏支配領域――中心城館は白鳥城
- 4、尾花沢（尾花沢市と大石田町の大部分）――延沢氏支配領域――中心城館は延沢城

以上4つの中心城館に居した各氏が、周辺の土豪・家臣層を支配したのである。この4つの城館では小規模ながら城下町の形成も見られた。

城館の立地状況を見ると、河岸段丘立地が多い。東根市では野川、尾花沢市では丹生川沿いに河岸段丘が発達しており、段丘の特色を巧みに利用した築造が多い。もっとも段丘という地形上の制約もあって大規模なものは少なく、中小土豪の経営になるものが大部分である。一方平地城館は、比較的南部に多いが、これは同地域が成生莊に接しており、城館の成立が莊園支配と関係する要素のあることを示しているようである。平地城館は、尾花沢盆地にも見られる。兵沢遺跡、安久戸塚の内跡（非調査）、駒籠塚などである。いずれも古代発祥の城館とみられ、奈良～平安初期にかけての古代城館の形を備えている。前二者は『続日本紀』に記載されている大室塞（大室駅）、後者は同じく野尻駅に比定する説も有力である。これら平地城館の築城者・城主名が伝わっていないことも共通している。いずれも古時代に発祥したので、伝わらなかったということも出来よう。

北村山地区の中世史は、不明の部分が多い。南北朝期にこの地区を支配したのは最上氏である。同氏は一族を各地に分封した。樋岡・東根・蘆原・大久保・長瀬の各城館は最上一族によって築造されたものである。しかし、やがて宗家弱体化によって多くの中小土豪が割拠するようになる。これら土豪によって築造された城館は、若干の例外はあるが、多くは小城館であり、築造者の名が伝わっていないものが多い。築城者の勢力の強さや性格が、城館構造にどう反映するかについても当地区の場合は法則性が見られない。

やがて1570年代になると、最上宗家第8代の義光が村山統一にのりだすようになる。当時義光は天童家と対立していた。延沢・飯田・尾花沢・樋岡・六田・土生田等多くの北村山の諸城館の多くは天童派に属して最上義光の統一の前に立ち塞がったのである。所謂最上八塙同盟である。しかし1572年の天童合戦で、八塙の首領ともいべき延沢氏が最上家に臣属し、その結果北村山地区の諸城館は最上氏の支配下に入ることになる。北村山地区ではなばなしの戦火を経験した城館はない。いわば「静の歴史」を辿って近世に引き継がれて行ったと言えるのである。

7 北村山地区の城館遺跡の概要

とちゅう だたでやま

土生田楯山

208-001

所在地 村山市大字土生田字中田楯山

築城者 安食大和守

築城時期 慶長7年(1602)

参考資料 『袖崎の郷土誌』昭55

概要

土生田楯の北東にあり、標高193.8mの山稜を主郭とする山城である。楯山は奥羽山系の西辺に伸びた台地で、東西は深い谷、南は河川で、北方の尾根は深い掘切で区切っている。頂上部は南北に長い広場で、中ほどに掘切があり、その北部が本丸と考えられる。西側には低い尾根が続き、本城の土生田楯との通路が設定されていた。常住の館ではなく、本城の「結めの城」と考えられる。元和8年の最上氏改易で廃城となった。(佐藤幸作)



土生田楯山略測図

とちゅう だたて

土生田楯

208-002

所在地 村山市大字土生田字内楯

築城者 安食大和守

築城時期 不明

史料 発掘調査報告書『土生田楯』平1

参考資料 『袖崎の郷土誌』昭55

概要

奥州山系の西側にのびた舌状台地の先端にある平山城で、南・西・北の三方を堀で守り、東部は大掘切で尾根を断っている。南方と北方には自然河川があり、西側には二重の堀をめぐらしていた。主郭には柱跡が多く残っている所から、相当大きな建造物があったと推定されている。周囲には腰・帯曲輪が設定されている。この楯は居館で、「結めの城」として楯山が築かれたが、元和8年最上氏の改易で廃城となった。(佐藤幸作)



土生田楯略測図

たかだてやま
高館山

208-003

所在地 村山市大字本飯田字高館山

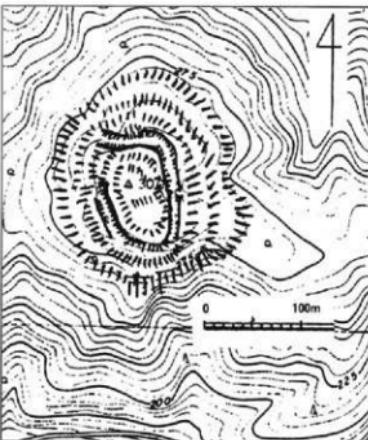
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

羽州街道に沿う本飯田部落の東方約1200m程の所にある標高300,8mの高館山山頂部に所在する。幅3m程の空堀に囲まれており、頂上部の平場は自然地形のままである。

飯田館の古柵とも考えられ、古い時代の創策であろうと考えられている。南に険しい谷を隔てて十字山がある。
（佐藤幸作）



高館山略測図

いいだて
飯田城

208-004

所在地 村山市大字本飯田字館

築城者 飯田播磨守

築城時期 天正年間（1573～92）

参考資料『袖崎の郷土誌』昭55

概 要

奥羽山系の西側にのびた舌状台地の先端に立地した平山城で、尾根を掘切で区切り、周囲の急斜面と谷川の地形を利用し、幾段にも曲輪を配置している。頂上部が主郭で、西側のすぐ下に居館があったと考えられる。

城の西側に諸士屋敷があり、城下と考えられる上丁口・表宿・元屋敷等の地名が残っている。東方約1kmの所に「詰の城」と見られる「十字山」城がある。領主飯田播磨は慶長5年の出羽合戦で戦死した。
（佐藤幸作）



飯田城略測図

ヒョウジヤマ
十字山 208-005

所在地 村山市大字本飯田字北沢

築城者 不明

築城時期 不明

概要

羽州街道に沿う飯田橋の北方約900m、高橋山南方450mにある標高247.4mの十字山にある。数段の腰曲輪、土壘、空堀などの跡が認められる。山頂の曲輪は相当広い。

飯田橋の古橋または「詰の城」と考えられる。
(佐藤幸作)



十字山略測図

みつけたて
見附橋 208-006

所在地 村山市大字横山

築城者 (前森今瀬)

築城時期 錦倉期(承元2年)

史料 「最上樋岡元祖記」延宝5

概要

大倉溜池北側の標高159.4mの孤立した丘にある。比高20m、溜池水面より15mほどの高さである。頂上は削平され、東西32.5m、南北23mほどの広さがある。三段ほどの帯、腰曲輪がめぐらされている。

史料には「前森今瀬承元2年横山橋を開城」とあり、錦倉期に築城したこと記してある。大倉溜池東南方にある横山橋と関連するもので、本・支城の関係とも、居館・詰の城の関係とも考えられる。
(佐藤幸作)



見附橋略測図

たもやまたて
檜山城

208-007

所在地 村山市大字檜山

築城者 (前森今嶺)

築城時期 錦倉期 (伝承元2年)

史 料 『最上樋岡元祖記』延宝5

概 要

大倉溜池の西側より南東に続く幅狭い尾根筋に築かれた山城で、上下二つの郭群より成る。頂上の曲輪には建造物のあったことも考えられ、その周囲に数段の腰曲輪が設定されている。下部の郭群は狭い尾根筋に数段にわたりて曲輪を設定したもので、尾根の両側は急な斜面となっている。上部の郭群の方が曲輪も広く、段差も大きい。

史料では、城は錦倉期の創建とされ、古い山城の一つに数えられよう。
(佐藤幸作)



檜山城略測図

かわしまやま
河島山

208-009

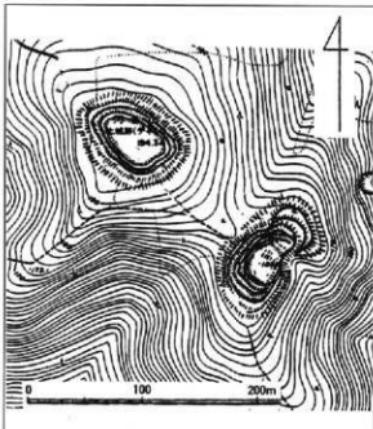
所在地 村山市大字河島

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

194.3倍の河島山山頂と、やや離れた東方山腹と二つの遺構がある。山頂は「チャシ址一の丸」と呼ばれる鉢巻式遺跡で、幅8倍、深さ3倍ほどの空堀と1倍高い土塁に閉まれたほぼ円形の曲輪。「チャシ址二の丸」は二重の空堀で囲まれ、曲輪は削平されず、自然地形のままである。両者の築城年代は異なるものと思われる。河島山はチャシ址とされてきたが、最近は中世城館跡として研究されている。昭和30年、県史跡に指定された。



河島山略測図

(佐藤幸作)

たておかじょう
楯岡城 208-008

所在地 村山市大字楯岡字楯山

築城者 (本庄氏)

築城時期 錬倉期 (弘長元年 1261)

史料 『最上楯岡元祖記』 村方差出明細帳

参考資料 『最上四十八櫓の研究』『村山市史』

概要

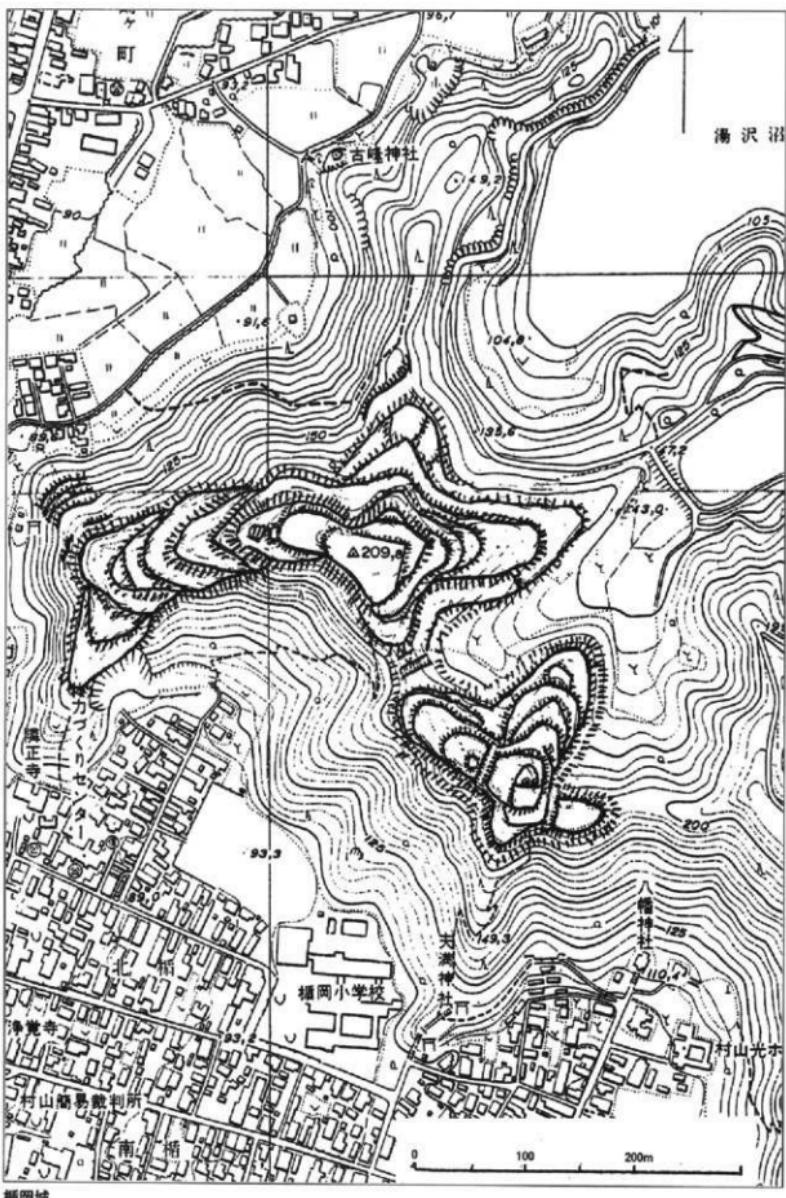
楯岡城は奥羽山系の西へのびた舌状台地の突端に築かれた山城で、西楯山と中楯山の二か所からなっている。両楯山とも標高 209.8m (比高 110m) で、270mほど離れている。両者とも岩山で、北・西・南の三方を展望できる要害の地である。

西楯山は、頂上でも凝灰岩が露出しており、山腹の傾斜は急である。三方にのびた尾根に大小の曲輪を段々に連続的に配置し、曲輪間の段差は 3~8m ほどである。頂上の曲輪は東西 73m、南北 30m ほどの広さで、建造物もあったと考えられる。その西方に続く曲輪には大きな岩が 3 個立っており、下の段差が 8.5m もあって、重要地点であったらしい。頂上曲輪に通ずる個所が 2m ほどの方形になっていて、虎口と思われるが、後代に改修されたものと思われる。

中楯山の頂上曲輪は平坦で、南東部には建造物跡がある。曲輪の東西は掘切で尾根を断っている。堀切の深さは 2m、幅 3m ほどで、きれいな断面を残している。東・西・北の 3 方向にのびた尾根に数段の曲輪が設定されており、東方の東沢方面への備えとして築かれたことを示している。城主の居館は、西楯山の南麓にあった。西楯山を背に、前方に三重の濠を巡らし、一族や重臣家老の屋敷は正門外の一の濠と二の濠との間にあった。二の濠と三の濠の間に諸士屋敷があり、その中を館本通りが貫いていた。今の南街道通りである。濠の外は城下本郷で、現在の笛田・荒町にあたり、笛田に大手門と番所があった。八幡神社のある東部は馬場で、その東側には米倉があった。楯岡城時代の交通路は、東根若宮八幡前より荷渡地蔵・六月坂を経て楯山の東を通り、湯沢へ通じていた。2か所の山城へは居館の背後にある七曲り道が用いられていた。

楯岡城の沿革について、『最上楯岡元祖記』には、承元 2 年 (1208) 横山月橋に開城した前森氏が 4 代にして没落、弘長元年 (1261) に奥州より里見氏が入部して楯岡を開城、本城と名付けたとある。応永 13 年 (1406) に至って山形より最上満国が入部し、楯岡氏を名乗って以後 7 代続く。楯岡城は最上氏にとって北進のための重要な拠点であった。両楯山が城下とともに整備されたのは 7 代満茂と 8 代光直の時代、慶長・元和の頃といわれている。最後の城主楯岡光直は最上義光の実弟で 1 万 7 千石を領したが、元和 8 年 (1622) の最上氏改易に連座、そのため楯岡城は廃城となった。

廃城後 138 年を経た宝曆 10 年 (1760) の『村方差出明細帳』には、「古跡東西縦五百間余、南北横三百二十間余、懸廻り千六十間、高さ百二十間余」と記録している。
(佐藤幸作)



橋岡城

とろなみたて おにかぶとじょう
富並城 (鬼甲城) 208-010

所在地 村山市大字富並字橋山

築城者 不明

築城時期 戦国期

史料 新庄領村鑑

参考資料 「出羽諸城の研究」「村山市史」

概要

南方に最上川の急流、難所があり、西方には深い渓谷、北は富並川の断崖に面した堅固な山城である。蝦夷館の特色を持つ古い城塞との説もあるが、遺構は完全に戦国期のもので、数次にわたって改造・拡張されている。

本丸である山頂曲輪の東側には数段にわたって帯・腰曲輪が設定されており、南東部に虎口があったと考えられる。南側には、二の丸・三の丸と呼ばれている広い曲輪が構築されており、大きな段差で守られている。西側にも大きな段差のある腰曲輪があり、下段には空堀があった。北側は富並川の断崖である。比高30mほどの独立丘でありながら堅固な山城であったと考えられる。

城の南麓に1か所、西の深沢集落には2か所の寺屋敷跡がある。いずれも古く、また東の山麓には山王神社跡もある。

(高橋欣二)



富並城略測図

山の内橋 (泥又城) 208-011

所在地 村山市大字雪の観音郷

築城者 不明

築城時期 不明

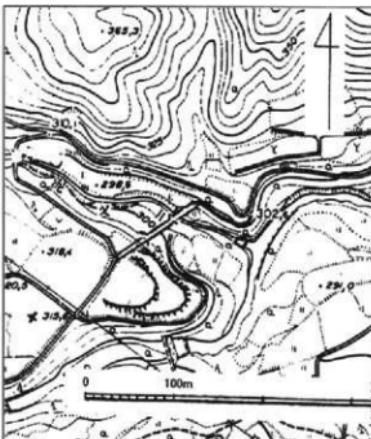
参考資料『北村山地方の伝説と民話』昭43

概要

富並川と泥又川の合流点の段丘につくられた単郭の跡である。腰曲輪と思われる跡がわずかに残るだけで、遺構のほとんどが消滅している。城主について、泥又兵庫守の伝承が残っている。(前九年・後三年の役時代)

西南方約2kmに本屋敷の地名があり、かつては方形の礎石が散在し、墓地跡も残っていた所があり、今は富並にある西念寺の屋敷跡といわれている。

(佐藤幸作)



山の内橋略測図

柏木森 208-012

所在地 村山市大字白鳥字宮下

築城者 不明

築城時期 不明

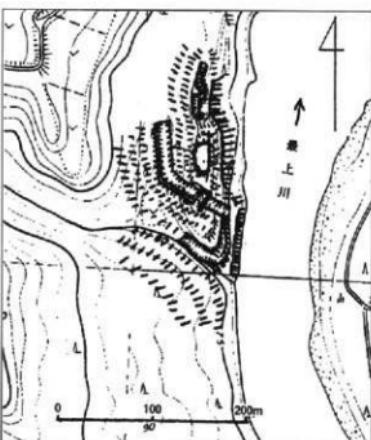
参考資料『最上四十八館の研究』

『白鳥長久公』昭56

概要

最上川の大曲折部、三ヶ瀬と早房の瀬の中間、長島集落西端の対岸、最上川を俯瞰する断崖上にある。標高104.8mの柏木森山頂に自然地形のままの曲輪がある。東側は最上川の断崖になっていて、西側には幅6m、深さ3~4mほどの空堀が65m程掘られている。中央部に方形の平場があり、虎口と考えられる。かぎ伏の屈折した通路が北方に続く。

白鳥城の支城で、最上川水運を監視する役割も果していたと考えられる。(佐藤幸作)



柏木森略測図

けぐらもり
毛倉森 208-013

所在地 村山市大字白鳥字毛倉森

築城者 不明

築城時期 不明

参考資料 「最上四十八館の研究」

概要

白鳥氏の居館のあった宮下部落の南方、標高226.5mの毛倉森山頂にある。比高100m、北方・東方を展望できる。白鳥城まで1,500m、北方の柏木森までも1,500mで、防衛的には白鳥城と柏木森をつなぐ役割を担っており、白鳥城の古城とも考えられる。

頂上は自然地形のままであるが、2段の帯曲輪で囲まれ、西南部の尾根と北東の下部に続く尾根が掘切で断たれている。宮下観音堂から急な上り道がある。

(高橋欣二)



毛倉森略測図

所在地 村山市大字白鳥字土海在家

築城者 白鳥氏（名不詳）

築城時期 戦国期中期

参考資料 『最上四十八櫓の研究』昭 19

『白鳥長久公』昭 56

概要

奥州安倍氏の子孫が土着して築城したといわれる古い山城である。白鳥土海在家地区の西、標高183.4mの台地に築城され、頂上の本丸曲輪は東西30m、南北25mの広さがある。北西にのびた台地は三段階となって本丸に統一している。本丸西側に大堀切があり、尾根筋を断っている。本丸の北、東側は、大きな段差で守られている。南側には数段の帯・腰曲輪がある。

本丸東側山麓は二の丸と呼ばれ、数段の曲輪があり、諸土屋敷のあった所といわれている。本丸の北西部に虎口があり、本丸南の台地にあった三の丸に通じていた。搦手口は本丸の北側に、大手門は現戸沢小学校南端にあったといわれる。

居館のあった宮下地区には、鐘倉期の創立による宝鏡印塔と六面幢各一基があり、また八幡宮・別当円福寺・善住院跡地がある。これらは永禄年間1558~69)、白鳥長久の代に本拠を谷地に移した際に遷宮したものである。白鳥氏の谷地築城後、白鳥城をはじめ、いくつかの支城は廃止されたものを見られる。なお白鳥氏は、天正12年(1584)最上義光によって滅ぼされた。

(高橋欣二)



白鳥城略測図

くまの やまとて ゆの さわだて
熊野山櫓 湯野沢館 208-015~016

所在地 村山市大字湯野沢字館及び院内

築城者 熊野三郎

築城時期 建久年間（1190～98）

史料 新庄領村鑑 天正最上軍記

参考資料『湯野沢略史』明35『富本村史』大6

概要

湯野沢館は、北側を流れる湯の入川と南側を流れる院内川の間の台地にある。館は東西100m、南北150mほどの広さで、北側に4～5mほどの高さの土塁が築かれ、その外は湿地帯となっている。二つの川と土塁に囲まれた屋敷型居館である。東側に下小路と呼ばれる所があり、別名を雜兵屋敷と呼ぶところから、配下の武士の居宅があったものと考えられる。

居館から西北1kmのところに熊野山櫓があり、湯野沢館の「詰めの城」と考えられる。現在熊野神社境内地となっており、神社の背後にある南・中・北の三つの嶺の頂上に、それぞれ曲輪がつくられている。比高100mほどのこれらの嶺は、東・北・西の三方を見渡せる要害の地である。山櫓付近には旧弘法寺や長松院があり、また、葉山修驗の常業院など6院が湯の入川上流にあった、との伝承もあり、熊野山を中心にして集落があったものと思われる。櫓主熊野三郎は、鎌倉期の建久年間に集落を押領して土豪化したといわれ、子孫は谷地白鳥氏に属し、最上氏に滅ぼされたという。

居館部は江戸時代に庄屋屋敷として、山櫓部は神社境内地として残った。

(高橋欣二)



熊野山櫓略測図



湯野沢館略測図

おおくぼ く ば じょう　おおくぼじょう　208-017
大久保城（大窪城）

所在地 村山市大字白鳥字毛倉森

築城者 不明

築城時期 不明

参考資料『最上四十八館の研究』

概要

千座川の左岸段丘台地を利用した平城。現在は、村山市立大久保小学校敷地となっている。西と北の水濠は現在も残っているが、東部の水濠は埋立てによって消失した。北東隅の北口と呼ばれている個所が虎口と考えられ、東側の一段低い所は二の丸と思われる。西南部に湧井があり、城内用水として用いられた。

この城は、天正年間、大久保主馬の築城とされ、元和最上氏改易で廃城となった。 (高橋欣二)

おおくぼ く ば こ じょう　おおくぼしじょう　208-018
大久保古城（大窪城）

所在地 村山市大字大久保字東

築城者 大庭満頼（斯波兼頼曾孫）

築城時期 〈応永2年（1395）〉

史料 新庄領村鑑

参考資料『最上四十八館の研究』

概要

大久保古城は、宝鏡寺（曹洞宗）敷地にある。大窪（大久保）満頼の築城といわれ、北朝側の一拠点であった。

東側は急斜面、北側は湿地帯で、南・西側に空堀があった。最上川西岸にあり、南朝勢力を阻むに重要な位置に立地していた。しかし、軍事的には弱点が多く、短期間で放棄されたと考えられる。

その跡に文明年間（1469～86）黒滝向川寺末の宝鏡寺が建立された。 (高橋欣二)

せきやまやすみいしたて さくらがわたて
関山休石櫓（桜川櫓） 211-001

所在地 東根市大字関山字休石

築城者 不明

築城時期 錄倉期

文献資料 「高崎村誌」昭 33

概要

国道 48 号線に沿う、中世の豪族居館跡である。現在国道は台地上を走っているが、近世までは堂木沢川に沿って、低地にあったため、居館跡は高台の要地であった。単郭の土塁で囲っていたが、現在は消滅している。

室町時代に本願寺蓮如上人の高弟菅生願正坊が、布教のため出羽国に入り、宿りしたとされる地が近くにある。
(佐藤好次郎)

ぬまざわようがいだて
沼沢要害櫓 211-002

所在地 東根市大字沼沢字出戸

築城者 不明

築城時期 不明

研究資料 「東郷村史」昭 29

概要

沼沢字出戸と字蛇木との中间、沼沢川と標高を同じくする田圃面から約 30m 程小高い岡の上にあった。近世期からの畠地造成で、遺構は消滅している。

この地は、成生荘の北東縁にあたり、高野立(奥野)、半在家の地名も残っているため、櫓跡も成生荘と関係づけて考える必要がある。
(奥山敬三)

たてはただて
楯畠櫓 211-003

所在地 東根市大字猪野沢字楯畠

築城者 不明

築城時期 不明

文献資料 「東郷村史」昭 29

概要

楯畠集落の北部、猪野沢川の小河岸段丘を利用した居館址である。現在、月山神社の境内地・畠地・住宅地などとなってしまっており、遺構はわずかに曲輪と空堀の一部が確認されるだけで、大部分が消滅してしまっている。

天童城主、天童頼澄の家臣草刈兵庫頭が居住したとの伝承があり、また近くの水晶山水精山神社の北登山口にあたることから、大和寺(のちの法善寺)との関係が考えられる。
(佐藤好次郎)

野川橋 (野川要害橋) 211-004

所在地 東根市大字觀音寺要害

同 野川字夕害

築城者 二階堂直藤 (大清水城主)

築城時期 延文元年 (1356)

史料 奥羽水慶軍記

文献資料 野川村差出明細帳 (元禄2年)

『東郷村史』昭29

概要

野川集落の東端、丘陵突端部にある。東方に白山と称する小山があり、南方に村山野川が流れる要害の地である。曲輪・土塁・空堀等が遺構として残存しているが、城館の南側部分は国道工事のため破壊された。

二階堂氏は1394年に東根城主坂本頼高によって追放され、橋は東根城の支城となった。後天正年間、7代頼景の臣里見景佐が権主となり、景佐が東根城主となった後は鈴木新左衛門が権主となつた。

(佐藤好次郎)

沢渡館 211-005

所在地 東根市大字泉郷字上野台金黒沢

築城者 阿部 義資

築城時期 延文元年 (1356)

文献資料 『東郷村史』(昭29)

概要

上野台集落の西方、金黒沢の南側、白水川の小河岸段丘の微高地を利用して作られた豪族居館である。南側に段丘を利用した3段の曲輪があり、関所跡地の名が伝わるだけで、ほとんど破壊され、居館範囲を特定することも困難である。

築城者阿部義資は山形城主斯波兼頼の臣で350貫を領したという。8代孫顯胤の代、天正年間に蟹沢に居を移し、沢渡橋は廃止された。

(奥山敬三)

二階堂屋敷 (野川長者屋敷、長者壇) 211-006

所在地 東根市大字野川字本郷

築城者 不明

築城時期 戦国期

文献資料 『東郷村史』(昭29)

概要

野川橋の西方500m離れた畠地に長者屋敷と呼ばれる40×25mの屋敷跡、さらにその西方に500m離れて90×40mの長者壇と呼ばれる元墓地があり、両者を総称して二階堂屋敷といわれる。屋敷の回りは土塁で囲っていたが、果樹園造成のためほとんど残っていない。

坂本氏によって野川要害から追放された二階堂直藤の隠居屋敷といわれ、屋敷面積が16間四方だったため十六間屋敷の小字が残る

(奥山敬三)

なか の め なたて
中野目楯 211-007

所在地 東根市大字東根字中の目

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

東根市街地の東方、日塔川左岸の畠地にある平城である。楯跡の一角に「楯の腰稻荷」が祀られ、東南部には日塔薬師寺廃寺跡と思われる板碑状石碑が残るだけである。城館の正確な範囲、性格、遺構、歴史などすべて不明である。東方に「無空師地蔵」が祀られている。
(佐藤好次郎)

くろとりやまだて
黒鳥山楯 211-008

所在地 東根市大字東根字黒鳥山

築城者 不明

築城時期 不明

文献資料 『東根市史』別巻上 (平1)

概 要

市街地の東南方、最上三十三観音霊場の一つ、黒鳥観音のある黒鳥山山頂に作られた円形曲輪をもつ砦である。空堀に沿って土塁があり、曲輪を囲んでいる。

防衛上から見ても弱体であり、独立の城館とは思われない。先住民族のチャシ説、観音堂の旧敷地説、「千人がくれ」という、住民の逃散場所説等があり、確定していない。
(奥山敬三)

ろく た だて
六田楯 (小田島楯) 211-014

所在地 東根市大字蟹沢字長谷

築城者 不明

築城時期 不明

文献資料 『出羽諸城の研究』

『東根市史』別巻上 (平1)

概 要

蟹沢駅西側に所在、畠地から水田に変わった扇状地末端部に立地する単郭の平城で、平地における地方豪族の居館。1954年頃までは、土塁・空堀が残っていたが、畠・基盤整備の田地、国道バイパス用地となつたため、大部分が破壊されてしまい、北と南側にわずかに塹跡を残すだけである。

楯主は、天童八楯の一つ、六田兵衛の可能性が高いが、代々の楯主は明らかでない。
(奥山敬三)

おおもりじょう　おおもりやまじょう
大森城（大森山城） 211-009

所在地 東根市大字東根字大森山

築城者 不明

築城時期 不明

文献資料 東根市史資料

概要

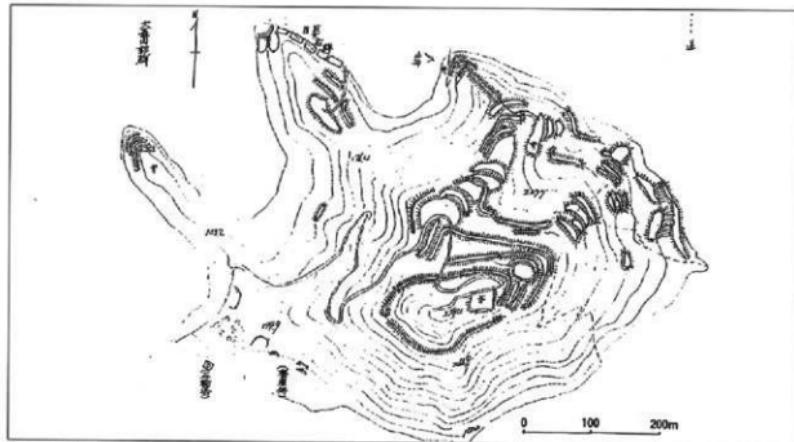
村山野川扇状地の北岸にある孤峰大森山（独立丘陵）にある。標高 280m、比高約 140m。曲輪は北・東・南の緩傾斜面上部に見られ、北東の斜面には十数段の曲輪群、北西斜面には幅約 4m の帯曲輪と切岸、北から東へ山頂を取り巻く二重の帯曲輪、山頂の南西から南に幅約 3m、深さ約 50cm 程の空堀跡がみられる。なお西側にのびる山麓の諏訪神社の周辺にも帯曲輪の跡がみられる。

古来から大森山は、地方民にモリノヤマ信頼の靈地と仰がれ、平安期と思われる南山麓の磨崖仏、山頂付近の経塚群がある。経塚からは須恵器系陶器の外容器 5、經筒 6、鏡 1、刀剣等 30 点が発掘されており、城郭よりも宗教的遺跡として知られている。

山麓南側には磨崖仏、少し離れて基壇の上にある大型五輪塔（タイバラ）、西側に数個の塚跡がみられる。

伝承では、天長 4 年（827）大森城主壬生宰相秀重が南西に秀重院を建立、祈願所万善寺を東北に建立したという。また諏訪神社は康平 5 年（1062）源頼義の勧請といわれ、文禄年間（1592～96）には常福寺が南麓にあったとされるが、諏訪神社以外の寺社は残っていない。位置も不明である。

（奥山 敬三）



大森城略測図

ひがし ねじょう おだしまじょう
東根城（小田島城） 211-010

所在地 東根市大字東根字東根本丸

築城者 小田島 長義

築城時期 正平2年（1347）

史料 正保城繪図東根城（内閣文庫蔵）

文献資料『出羽諸城の研究』『日本城郭大系』『東根市史』『日本地名大事典』

概要

乱川扇状地の北東部、白水川・日塔川の右岸、河岸段丘上に立地する。標高約130m、比高は5~7mの台地上に築かれた平台城。本丸は現在東根小学校の校舎敷地となっており、西側には推定樹齢1500年以上の「東根の大ケヤキ」がある。自然の段丘地形と沼地を巧みに利用して設定されている。

正保年間の「東根城繪図」によると、本丸の周囲は石垣や土塁の上に櫓がめぐらされており、東北隅には一層二重の櫓があり、さらに東南隅と西北隅、大手門の近くにも櫓がある。大手門は本丸の西北（大ケヤキの北側）にあり、ほかに本丸に3か所、二の丸に4か所、二の丸から三の丸に出る門が3か所ある。城の周辺には寺社が配置され、鬼門にある北東の方角には若宮八幡神社が鎮座され、その西に清朝寺（現在廃寺）、東隣の三の丸に養源寺、西の三の丸に龍興寺、その北西に西光寺、沼をへだてた北方に光専寺、北東に本照寺がある。本丸を中心にして西、北、東に大きな堀と、幅約2mの堀を二の丸・三の丸に配している。本丸の規模は、南北約47m、東西は長い所で約110m。西側、南側の台地の縁に土塁をめぐらし、台地下には水堀（一部空堀）で囲んだ二の丸がある。

本丸の北側の小堀に二の丸跡、西側の西堀には三の丸跡と注記があり、小堀地区の二の丸跡は東西約140m、南北約240mの方形で、幅約10~5mの土塁が、深さ2mの水堀で囲まれている。西堀の三の丸跡は東西約190m、南北約300mの規模で、西側に出口形門があり、その南方に「薬研堀」の名で堀が残っている。城の南方、段丘下は町屋が主体で、その中に秀重院、称善寺、淨国寺がある。

東根城は、城郭部と城下町を総合した大規模広大なもので、完成までには相当の期間を必要としたものと思われる。歴代城主の事蹟から見て、その完成は天正・慶長頃であろう。南北朝時代の正平2年（1347）、小田島長義が初めて築城したと伝え、同時に若宮八幡神社に「神璽宮銘」や同11年（1356）「普光寺の梵鐘」にその名が残る。応永2年（1395）、最上氏一族天童頼直の四男坂本頼高が城主となつた。永享12年（1440）歿。東根坂本氏は天正9年（1581）まで7代続き、この間に東根城は拡張整備され、出城として兵備山橋（№211-012）、堂の前橋（№211-013）等が置かれた。その後城主は里見氏に代わり、最上氏の城将として1万7千石を領した。里見氏は城郭部に寺院を移転建立するなど東根本町の町作りを行い、城下町屋を整備した。

元和8年（1622）の最上氏改易により、里見氏は阿波國蜂須賀家にお預けとなり、東根城には陣屋が置かれたが、寛文元年（1661）に破却された。

（奥山敬三）



東根城略測図

やくし やまたで 薬師山櫓 (薬師山裏山櫓)

211-011

所在地 東根市大字東根字薬師山

築城者 不明

築城時期 不明

文献資料 「東根市史」

概要

東根市街地の東部、若宮八幡宮と真宗法蓮寺の間に標高 178.2m の薬師山がある。平地からの比高は 40m、山頂は東西に長く、桜円状に曲輪が設定されている。独立の城ではなく、東根城の哨堡と考えられる。

宗教的には、山全体が南麓にある薬師堂の寺地で、山頂の平場には経塼があった。石垣・須恵器系壺・鏡・線刻阿弥陀像などが発掘されている。
(佐藤好次郎)



薬師山櫓略測図

ながとろじょう かりがねじょう
長瀬城 (雁城) 211-015

所在地 東根市大字長瀬字櫓の内

築城者 西根氏

築城時期 鎌倉中期

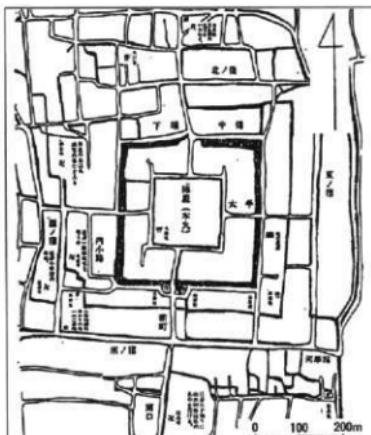
研究資料 『出羽諸城の研究』『日本城郭大系』
『東根市史』『日本地名大事典』

概要

乱川扇状地末端の微高地、標高 90m の平地に築かれた輪郭方式の平城。東西 85m、南北 130m の本丸を囲んで二の丸・三の丸・四の丸まで有する大規模な城郭である。

城の創建は建長年間 (1249~55) とされるが、後に最上満家が居住したとされ、遺構はそれ以後、江戸初期までに整えられたものと見られる。江戸期には代官陣屋が置かれ、寛政 10 年 (1798) 以後は長瀬藩米津氏の陣屋となった。二の丸水濠は良く原型をとどめる。

(奥山敬三)



長瀬城絵図

ながとろもとだてたて
長瀬本楯館 211-016

所在地 東根市大字長瀬字本楯

築城者 斯波満家

築城時期 室町初期

文献資料 『東根市史』別巻上(平元)

概 要

最上川の自然堤防上の微高地(比高3m)を利用した単郭方形式の平城。堀は南・東・北の三方に配され、「土手の上」と呼ばれる柵内部を囲んでいる。

柵の構造は単純。水堀をもつ兵農一致式の古い形式で、構築後短期日のうちに廃止されたものと考えられ、斯波(最上)満家(応永30=1423死?)居館跡の可能性が高い。

村山市の河島山柵は、本柵の「詰めの城」

的性格の柵といわれる。(奥山敬三)



長瀬本楯館略測図

かにさわひたて
蟹沢柵 211-017

所在地 東根市大字蟹沢字柵

築城者 最上兼直

築城時期 室町初期

文献資料 『東根市史』『最上四十八柵の研究』

概 要

乱川扇状地末端の微高地、標高90mの平地に築かれた輪郭式の平城。四重の濠によって固められたといわれるが、現在はわずかに濠跡が残存するのみで、城郭の構造は明らかでない。

応永年間(1394~1428)に最上直家の五男兼直が築いたと伝えられる。後天文年間に阿部氏が沢渡柵から移り、最上氏改易後は土着帰農したという。

(奥山敬三)

の だ な て の だ し ち た て
野田柵 (野田七の柵) 211-018

所在地 東根市大字野田字七の柵

築城者 不明

築城時期 不明

研究資料 『最上四十八柵の研究』『日本城郭大系』

概 要

国道287号線新野田橋の近く、東北方にある単郭・矩形状の平城。土塁、空堀のほとんどは農業基盤整備のため破壊された。

一説では、最上義光家臣小栗頼母が衛主であったともいうが、むしろこの地は古代村山郡衙の比定地に近く、郡衙との関係が深いものと思われる。

(奥山敬三)

は にゅうたて
羽入櫓 211-019

所在地 東根市大字羽入

築城者 不明

築城時期 不明

文献資料 『日本城郭大系』

概要

山形空港南端より西へ約1.5km、乱川扇状地の扇端、乱川右岸の果樹園の中にあった単郭の平城であったが、すでに消滅している。

文献資料に「羽入館 東根市羽入 かって空堀、土塁があった」と記されている。

この地は、文化的には「タイバラ」といわれる大型五輪塔3基の外、板碑が多数立てられている。

墓地の近くには土塁があり、西側に河川跡を利用したとみられる水堀があった。 (佐藤好次郎)

みなみさわきて
南沢櫛

212-001

所在地 尾花沢市大字南沢字古館

築城者 不明

築城時期 不明

概要

南沢集落の入口、名木沢川べりにある小櫛である。一段の曲輪が残るのみで、他は消滅している。櫛の規模から見て、土豪の居館があつたものと思われる。東海林景由が櫛主名として伝えられている。

(大類誠)



南沢櫛略測図

いわやさわきて
岩谷沢櫛

212-002

所在地 尾花沢市大字岩谷沢字裏山・櫛の腰

築城者 不明

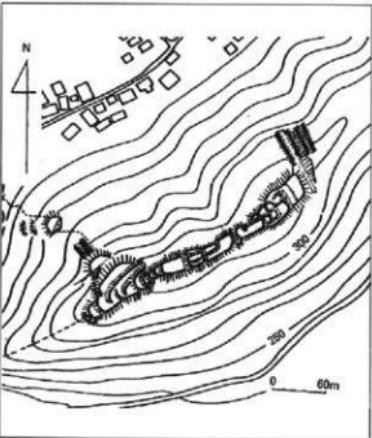
築城時期 不明

概要

名称は「岩谷沢櫛」であるが、実際は市野々集落の北端にある。険しい山城で、背坂峠道と山刀切峠道の両者を抑える好位置にあり、標高334メートル、平地との標高差は120メートルもある。山頂稜線に沿って帯状に曲輪が配置され、主郭は最高部ピークにある。山腹には畝状堅堀を数条掘って防備を固めている。

赤井川沿いに附属施設があり、この櫛はこの地域の中心城館と見られるが、櫛主名などは伝わっていない。

(大類誠)



岩谷沢櫛略測図

も たいだて おちあいたて
母袋櫛 (落合櫛) 212-003

所在地 尾花沢市大字母袋字上ノ代

築城者 落合伯毛守

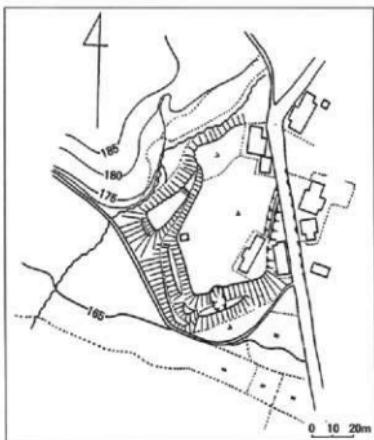
築城時期 戦国期

文献資料 『庄内考古学』17号

概要

母袋集落の最西端、標高740メートルの二ツ森の裾野が丹生川に落ち込む段丘先端に所在する。中央部は国道347号建設のため破壊された。櫛は小規模で、単郭の簡素な構造である。

母袋集落は、東北南の三方向は二ツ森と母袋川が天然の要害となっており、西も前面に丹生川があって、厳重な防備施設は不需要であったと思われる。櫛主落合伯毛守は延沢家の家臣だったが、元和年間の最上氏改易後は帰農・土着したとされる。
(大類誠)



母袋櫛略測図

や こじたて
矢越櫛 212-005

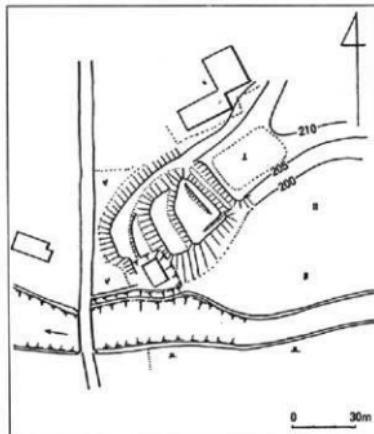
所在地 尾花沢市大字矢起字谷地

築城者 不明

築城時期 不明

概要

高橋集落の北端、曹洞宗東照寺境内地にある。県道尾花沢・最上線に接し、赤井川に近く東から流れる小沢に沿った丘陵先端に立地する。ごく小規模な櫛にすぎず、曲輪、堀切などが構築されてはいるものの、きわめて簡素である。
(大類誠)



矢越櫛略測図

おきりかで
押切城 212-006

所在地 尾花沢市大字押切字浦山

築城者 不明

築城時期 不明

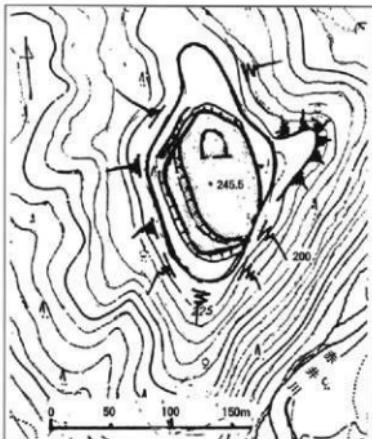
概 要

押切集落の北、標高 245.5m (比高 90m) の丘陵に造られた山城である。山裾を赤井川が流れ、山頂に椿円形の曲輪が造られ、南西斜面は二段となっている。標高約 225m の線に沿って横堀が曲輪を囲んでいる。

城の構造から見て、独立の城館とは考えられず、非常の際に村人が一時避難・居住した施設と考えられる。

すぐ西南に「天子塚」と呼ばれる修驗遺跡がある。

(横山右一)



押切城略測図 (作図者: 保角里志)

なみさわで
行沢城 212-007

所在地 尾花沢市大字行沢字本丸

築城者 行沢 式部

築城時期 戦国期

文献資料 『日本城郭大系』3

『最上四十八館の研究』

概 要

行沢集落の東南、丹生川に沿う丘陵の先端にある山城。標高 196.1m、丹生川からの比高約 53m。丘陵を削平して、東西二つの曲輪を置く。東は主郭で、西曲輪より一段高く設定されている。北側山腹は、急斜面で深い沢で区切られている。曲輪との間に空堀を配し、北斜面には曲輪群が連々と築かれている。



行沢城略測図

城主行沢式部は最上氏の家臣で、知行 1000 石。小国郷の細川氏対策としてこの地に配置されたものと見られる。

(横山右一)

ひょうざわいせき 兵沢遺跡 212-008

所在地 尾花沢市大字原田（旧名玉野）

築城者 不明

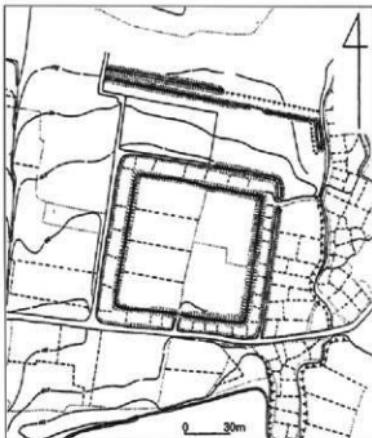
築城時期 不明

文献資料 「玉野村史」昭2

概要

玉野原のほぼ中央、下原田と鶴巻田集落の中間にあり、古代の様式をもつ方形の平城。二重の堀と土塁をめぐらしており、遺跡内郭の広さは約110m四方である。平地に明瞭な遺構を残しているため、古代の大室塞に比定する見方もあるが、内郭からは建造物跡や遺物が発見されず、規模や構造から中世城跡と見られる。兵沢の地は延沢城に近く、城の北方防御のための武器や兵糧倉庫が置かれていた、との見方もある。

（大類誠）



兵沢遺跡略測図

きたこうたて 北郷柵 212-009

所在地 尾花沢市大字北郷字東原

築城者 不明

築城時期 戦国期

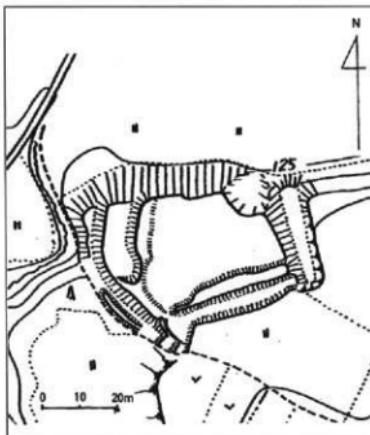
文献資料 「日本城郭大系」3

概要

二面袋掘の東約2km、丹生川の河岸段丘が網木川によって浸食された急崖上に立地する単郭の柵である。土塁、空堀の跡が明瞭に残る。柵内は東西68m、南北60mの広さがあり、村人の一時避難のための施設と見られる。

近世まで北郷集落は、現在地ではなく、丹生川の氾濫原、つまり段丘下にあったので、この柵は洪水時期の避難所としても機能したものと思われる。近くに土壤があり、板碑が1基立っている。

（大類誠）



北郷柵略測図

すなやまとて

砂山楯

212-010

所在地 尾花沢市大字丹生字三吉原

築城者 不明

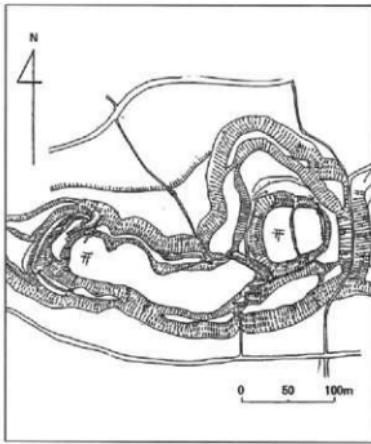
築城時期 不明

文献資料 『庄内考古学』14号

概要

丹生集落の中、丹生親音堂と愛后神社の寺社地が楯の区域である。頂上部に都合3つの曲輪があり、周囲は帶曲輪で補強されている。楯中央部に、南北を結ぶ通路が屈曲して通じ、楯を東西に分断している。部落を挟んで北にある八幡楯よりは規模も大きく、防御力も強化されている。城館の構造から見て、居館が西郭にあったと思われるが、楯主や城の由来などの伝承はない。

(石井浩幸)



砂山楯略測図

丹生八幡楯

212-011

所在地 尾花沢市大字丹生字三吉原、長場沢

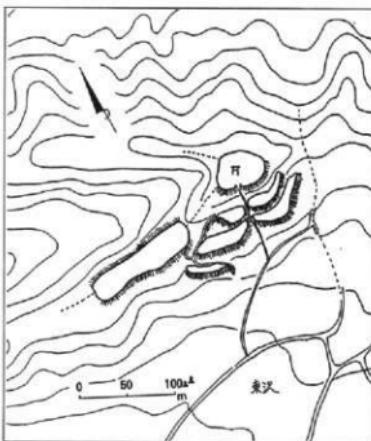
築城者 不明

築城時期 不明

概要

丹生集落の北、八幡神社の社地全体が楯の区域となる。曲輪は南側に配置され、神社の場所が本丸と考えられるが、規模は小さく、独立の城郭とは考えられない。沢を挟んだ南方に砂山楯があり、その出張砦と思われる。

(石井浩幸)



丹生八幡楯略測図

こぼうのたて
牛房野櫓 212-012

所在地 尾花沢市大字牛房野字館山

築城者 牛房野三七

築城時期 戦国期

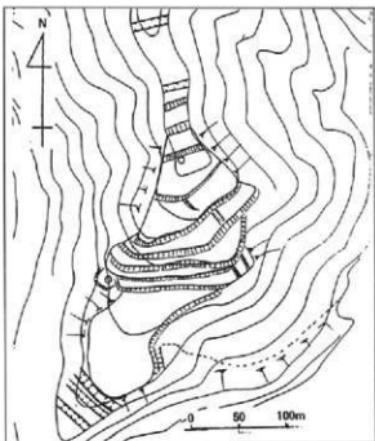
文献資料 『庄内考古学』17号

『最上四十八館の研究』

概 要

牛房野集落の西、奥羽山系の山並みが舌状に張り出した尖端につくられた山城。最高点は標高 260m (比高 120m) で、本丸が置かれ、削平された稜線に沿って南方に 6段の曲輪がある。稜線の南端は 3 本の空堀によって断ち切り、一方本丸の北側の稜線にも 2 本の空堀を掘って、防備を固めている。郭内には井戸跡、虎口も確認されている。

櫓は最上二十五館の一つで、一時は尾花沢も配下にしたといわれる。
(大類 誠)



牛房野櫓略測図 (作図者: 保角里志)

にとうなくろだて
二藤袋櫓 212-013

所在地 尾花沢市大字二藤袋

築城者 不明

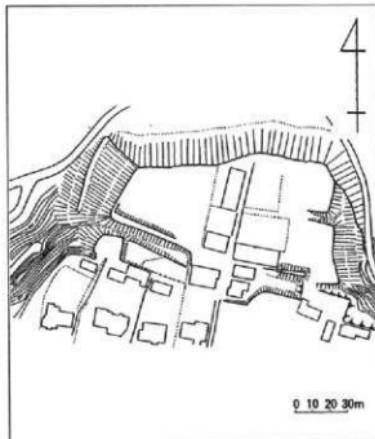
築城時期 不明

概 要

二藤袋集落の北、丹生川の河岸段丘が大きく迫り出した急崖上の平地に立地した単郭の櫓で、大堀河内守が櫓主という。あるいは非常の際に村人が一時的に避難・居住した砦・櫓跡とも考えられる。

土塁、空堀の跡がすこし残っているが、主防衛は丹生川に向かって落ち込む急崖(河岸段丘)に頼っている。

近くに経塚や墳墓群があり、経塚からは一字一石経石約 5 万点が出土した。
(大類 誠)



二藤袋櫓略測図

あらだて

荒橋 212-014

所在地 尾花沢市大字尾花沢字荒橋山

築城者 新館 十郎

築城時期 戦国期

史料 野邊沢軍記

文献資料 『最上四十八館の研究』

概要

鶴見川の南、荒橋山の一部を削平してつくられた山城で、曲輪、土塁、空堀等遺構残存状態は良好である。主曲輪の標高は 178.4m、斜面に沿って 8 段の曲輪を確認できる。主曲輪には居館があったものと思われる。

防御上は西側が弱点であり、守護神として大聖不動明王を祀った。築城者新館十郎は最上氏臣家、天童落城後尾花沢郡代として派遣された。「尾花沢ノ東ノ山ニ要害ヲ見立、屋形ヲ建住居シタリ」と軍記にある。(大類誠)



荒橋略測図 (作図者: 保角里志)

大沢橋 (源内橋、大類館) 212-015

所在地 尾花沢市大字牛房野字大沢

築城者 不明

築城時期 不明

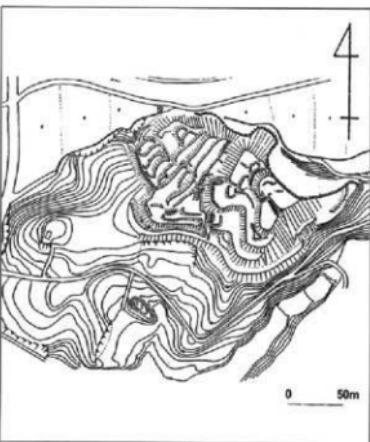
概要

牛房野字田沢の西、牛房野川の対岸にある山城で、標高 200m の山頂部に主曲輪があり、南にさらに二段の曲輪を持つ。規模は小さいが連邦構造で、土塁、空堀も確認できる。

位置的には牛房野橋と森岡山橋の中間で、所在地の田沢は牛房野の支村である。この關係から、牛房野橋の出張砦と思われる。

権主名として大類源内の名が伝わっている。

(大類誠)



大沢橋略測図

所在地 尾花沢市大字丹生字森岡山

築城者 不明

築城時期 不明

丹生川本流に、北から牛房野川が合流する東側に独立丘陵があり、山頂に三吉神社が祀られている。

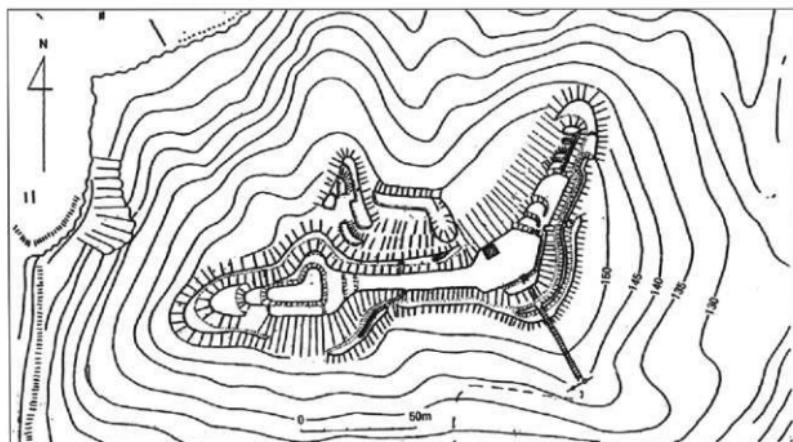
標高165m、比高約60mで、宗教的靈地として地方民の信仰を集めている森岡山頂に立地する。

森岡山には2つのピークがあり、削平されて計約100haの平坦地となっている。両ピークの南側山腹に、ピークを囲むように、空堀・土塁が延々と続き、途中に段違いがある。内側に空堀、外側に土塁があり、空堀の下幅約3m、高さ1m、土塁の下幅は約1mの規模である。

西へ下る尾根には3段の小郭が連なる。北側には人工を加えず、急峻な地形をそのまま利用しているが、東北へ下る尾根にはかすかな連郭があり、空堀・土塁はそれを囲むように下りながら先端まで巻いている。東ピークは、神社建築に伴う変形が見られる。

この城には伝承もなく、年代や性格も不明である。牛房野川の上流2.5kmにある牛房野城との関連が考えられる。城の構造は戦国時代を思わせるが、西ピークの方はそれより古いとされる茶臼山タイプとされる。

(大類 誠)



森岡山城略測図

てらうちはちせんたて
寺内八幡橋 212-017

所在地 尾花沢市大字寺内字八幡橋・別当沢

築城者 不明

築城時期 不明

文献資料 『庄内考古学』17号

概 要

寺内集落の北東にあり、主郭部の標高200m（比高80m）の山城。山頂部は削平され、20×100mの単郭の曲輪がある。北にある標高302.5mの通称八幡平に続く尾根は2本の空堀で断ち切っている。

寺内、南沢両集落には計4つの中世城郭址が確認されるが、城主が判明しているのは野尻城だけである。この城も野尻氏と関係する施設の一つと考えられる。

（大類 誠）



寺内八幡橋略測図（作図者：保角里志）

てらうちはちせんたて
寺内古橋 212-018

所在地 尾花沢市大字寺内字古館

築城者 不明

築城時期 不明

文献資料 『庄内考古学』17号

概 要

寺内から南沢へ通ずる県道の北、寺内集落から1キロ北西方向にある。奥羽山系に続く丘陵の先端部で、標高約200m。

頂上部に楕円形、約100mの広さの曲輪があり、一段下がって東に腰曲輪、南に二の丸見られる曲輪が配置されている。頂上曲輪から西南に、南の曲輪から東南に縦堀がある。

寺内地内の八幡橋と同時期に存在したか、又は古橋・新橋の関係にあるか不明である。

（大類 誠）



寺内古橋略測図（作図者：保角里志）

のじりたて
野尻櫓 212-019

所在地 尾花沢市大字寺内字野尻

築城者 野尻右馬之丞

築城時期 戦国期

史 料 字野尻全図 明治 21 年

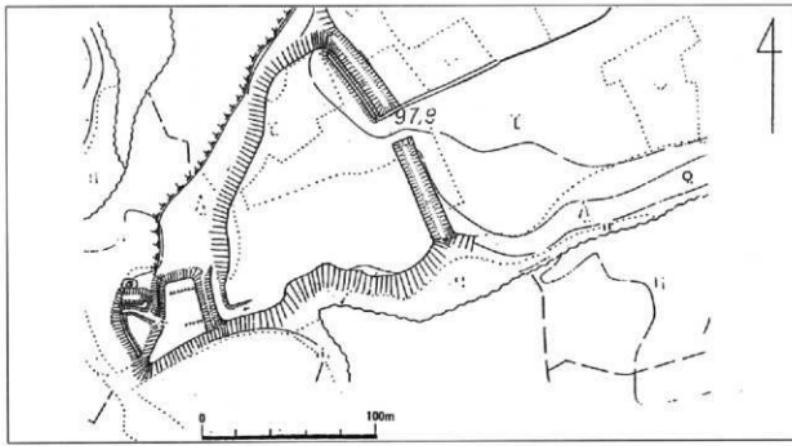
文献資料 『日本城郭大系』3

概 要

野尻川右岸の河岸段丘を利用した平城で、標高約 95m、野尻川からの比高約 10m にある。寺内集落の南西部、野黒沢との間に立地する。河岸段丘が舌状に張り出し、その先端部が平地に続くところを 1 本の空堀・土塁で断ち切って曲輪をつくっている。空堀の形状は「箱堀」で、下幅約 6m、深さ約 2m で、堀りあげた土がそのまま土塁に用いられている。台地の鋭角状の突端にも短い空堀があり、2 つの副郭をつくり、その間に虎口がある。櫓内に建造物の跡は確認できない。櫓内の広さは東西約 110m、南北約 130m である。全体が空堀・土塁を底辺とする三角形をなしているが、他の 2 辺は自然状態のままである。

かって、櫓跡からは、元祐通宝・聖宋元宝などの北宋銭が採集され、櫓の南側段丘下に元屋敷の地名があり、多数の小型五輪塔があったという。(そのうちの一基が寺内意蓮寺に移されている。)

権主野尻右馬之丞は旧地名「野後」を名乗った土豪であったが、延沢氏に追われ、最上郡に退去した後、桂延氏に従ったといわれる。
(大類 誠)



野尻櫓略測図

おばなさわたて
尾花沢櫛

212-020

所在地 尾花沢市大字尾花沢

築城者 尾花沢藤左衛門

築城時期 戦国期

史料 延沢軍記

文献資料 尾花沢村絵図（文政期）

概要

市街地の西北端、小学校地であり、河岸段丘の先端を利用した平城で、沢潟地の複雑な沢地を堀に利用している。先端部は本丸曲輪で、櫓主体部とは深い空堀で区分し、また堀の東側には水濠のあったことなどが文政期の村絵図に描かれている。

『延沢軍記』によると、天正天童合戦に戸童方に与した尾花沢館主が山形側に与した延沢氏に攻略されたとある。近世期には尾花沢代官所陣屋が置かれた。

（大類 誠）



尾花沢櫛略測図

なまきさわたて オリベタテ
名木沢櫛（織部櫛）

212-021

所在地 尾花沢市大字名木沢字上の原

築城者 国分五郎胤臣

築城時期 戦国期

文献資料 『日本城郭大系』

名木沢櫛跡調査説明資料 平4

概要

最上川と名木沢川の合流点の南側、標高約30m（最上川との比高約30m）の河岸段丘上に立地する。主郭は最上川を背にした急崖上にあり、北方にある副郭との間に空堀・土塁を配置している。櫓主一族の墓も櫛内にある。

近世になって「佐竹道路」の名で羽州街道が櫛内を通るようになり、櫛の一部が破壊された。櫛西麓部の発掘結果によると、多数の柱穴、土坑などとともに井戸跡も発見されている。

（大類 誠）



名木沢櫛略測図

あしきわひで けぐらひで 芦沢楯 (毛倉楯) 212-022

所在地 尾花沢市大字芦沢字毛倉山

築城者 不明

築城時期 不明

文献資料 『庄内考古学』17号

概要

段丘上にある芦沢集落の北端、最上川の氾濫原の中に標高 77m の独立した段丘があり、毛倉楯となっている。最上川の増水時に、楯は完全に孤立するため、村とは船で出入りしたといわれる。段丘上は広く削平されて曲輪が作られ、空堀、土塁が遺構として残る。

楯主は芦沢織部と伝えられている。

最上川の氾濫原である大海平を隔てて名木沢楯と対峙する位置にある。

(大類 誠) 芦沢楯平面図



かみやなぎわたり どだて なかはしだて 上柳渡戸楯 (高橋楯) 212-023

所在地 尾花沢市大字上柳渡戸字要害

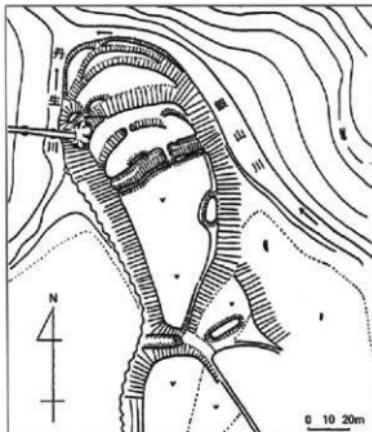
築城者 高橋石見

築城時期 戦国期

概要

上柳渡戸集落の北、丹生川と銀山川の合流点に突き出した台地を利用している。東西南北の三面は二つの川に囲まれ、南方だけが平地と繋がっているため、空堀と土塁で遮断している。土塁・空堀間の平場が主郭で、北東へ順下がりに4段の曲輪が続いている。

楯主高橋石見は延沢家の重臣で、仙台道と延沢銀山を扼するこの地に配された。楯の防御が簡素なのは、延沢城からの素早い援軍到着が期待できたからと思われる。



(大類 誠) 上柳渡戸楯略測図

のべきわじょう もりやまとじょう
延沢城（霧山城） 212-025

所在地 尾花沢市大字延沢字古城山

築城者 野邊沢蘿摩守満重

築城時期 戦国期

史料 野邊沢軍記 奥羽軍談

文献資料 日本城郭大系

概要

尾花沢盆地の東南、奥羽山脈から派生する丘陵の中の一きわ高い霧山（古城山）にある。山頂を削平整地して城郭主要部を配し、西麓の狭い谷に城下集落を配置した。現在も三日町、九日町、荒町等の地名が残る。霧山の南は一段低い峠となっており、常盤越えと呼ばれているが、北東へ行けば経井沢越えを経て陸奥へ通じ、南は山形盆地へ、西北は尾花沢へ通ずる。

城郭は天文16年（1547）、野邊沢蘿摩守満重が築城し、以後能登守満延、遠江守光昌と野邊沢氏3代の拠点となった。同氏は天童合戦（天正12=1584）以後山形最上氏に従い、その城将として活躍する。

一般に延沢城は、野邊沢氏時代の中世城郭とされているが、現状はほとんど近世的改変がなされている。石垣をほとんど用いないで土造り、土塁造りをしている点は中世的築城とされるが、東国では近世城郭が土造りであることは珍しくない。曲輪の縁や土塁は整然と直線的に区画されているし、完成された構形があることなどは近世的特徴である。

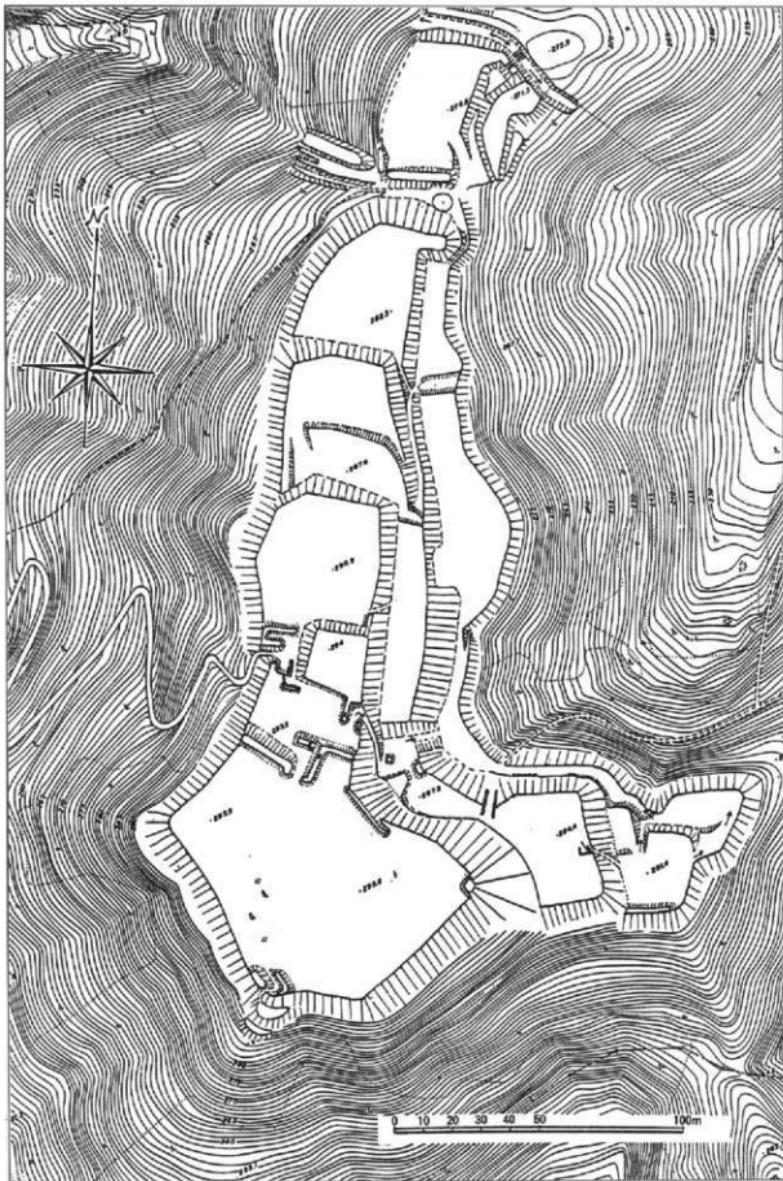
本丸は標高297.1mの霧山山頂にあり、城郭の南端となる。そこから北へ段下がりに6つの曲輪が連郭状につらなる。長さは260mあるが、標高差は20mに足りない。山麓から遠望すると直線状に見える。連郭部分の東側には二段の腰曲輪が添い、外郭（低段）のものは馬場、内郭（高段）の一部を台所と呼んでいる。その東南延長部分の尾根にも二段の曲輪がある。

連郭部分の北端に大堀切があり、堀切の東側急斜面には2本の堅堀が走っている。堀切の北にも曲輪があり、全体で11曲輪となる。城郭全体ではL字形に広がり、水の手は中間の谷である。大堀切には天入水といわれる湧水があり、豊富で良質の水が供給された。

本丸曲輪は、東西110mに及ぶ広大なもので、東端に方形の権台、南端に折形状の土塁囲みがあり、ここにも櫓が乗っていたと思われる。北面の土塁開口部は見事な折形門で、石段や石垣の崩れた跡がある。土塁の折れによって形作られた横矢折形から折形門に対して強力な横矢がかかる。この門を下りた所が大手曲輪で、西北は折形の大手門、東は喰い違い虎口の摺手門を開く。大手曲輪の北に1m程高い方形の曲輪があり、この3つが延沢城の主要曲輪となる。

なお延沢地方は豪雪地のため、冬季は南館と称した山麓の居館に居住したものと思われる。野邊沢氏は城将とはいえ、約3万石の領地を支配し、それに相応しい威容を誇ったものであったが、元和8年（1662）の最上氏改易に連座し、城は寛文7年（1667）に廃城とされた。

（大類誠）



延沢城略測図

いるかい橋

212-024

所在地 尾花沢市大字鶴存字いるかい

築城者 不明

築城時期 不明

研究資料 『いるかい遺跡発掘調査報告書』

(1983)

概 要

新鶴子ダムのすぐ下流、現森のホテル御所山の地にあった館である。「いるかい〇〇守」「見張り台」「船」などの伝承が残る。

昭和30年代に開墾のため大部分が破壊され、1983年の発掘調査では台地突端を矩形に切断する600mの曲輪、V字状の空堀等が確認できた。延沢氏が、山への出入りを監視するために設けた見張り台と考えられている。

新鶴子ダムの土砂採掘のため、すべて破壊された。

(大類 誠)

はなざわたて
烟沢橋

212-026

所在地 尾花沢市大字烟沢

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

下烟沢の旧徳専寺（昭56施寺）南部の丘陵全体が、階段状の曲輪を有する標跡となっており、「山橋」「荒屋敷」の地名も残されている。現在民家が建ち、下部は破壊されてしまっているが、残存遺構は曲輪が4段、最高部の標高は220m（比高30%）である。

延沢から背炙鉢を経て橋岡へ通ずる道筋を扼する位置にあり、延沢氏によって、出城として築かれた可能性が高い。伝承では古瀬藤人が橋主とされる。

(大類 誠)

かなもりたて
金森橋

212-028

所在地 尾花沢市大字五十沢字前山

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

中五十沢集落の南西、五十沢川の対岸で、標高238mピークから東に派生する尾根の突端にある。南方と北方は沢が深く入り込んで、陥しい地形をなしている。一般に加工度が不十分で、曲輪は単郭、堀も堅堀も浅い加工となっている。

橋主として金森藤十郎の名が伝わっている。集落内にある喜覚寺（真宗）、五十沢觀音の伝承と一緒に性があり、在野の橋と考えるのが妥当であろう。

(大類 誠)

いさざわたて いなばやま
五十沢橋（稻葉山） 212-027

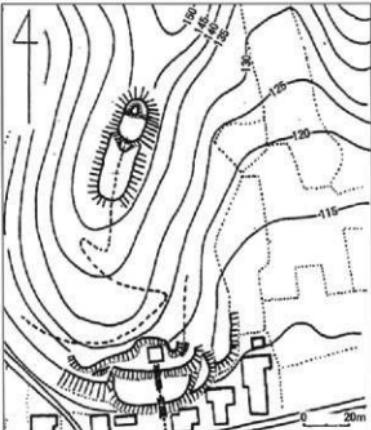
所在地 尾花沢市大字五十沢字高坊野

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

国道 13 号から分かれて五十沢川沿いに 2
ヶ所通った所が五十沢集落である。集落の人口、左手に山の神神社があり、山そのものが「御神体」であるとともに插跡である。神社のある平地が最下段の曲輪で、稜線沿いの上に向かって 3 段の曲輪がある。最高部の標高は 170m (比高 60m) である。 (大類 誠)



五十沢橋略測図

たか て たて
鷹巣館

341-001

所在地 北村山郡大石田町大字鷹巣字樋の内

築城者 伝天童頼種

築城時期 室町初期

文献資料 『最上四十八館の研究』

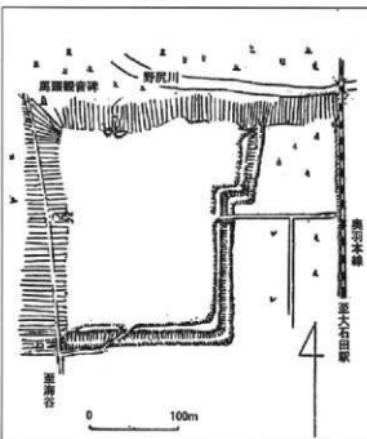
概 要

北に野尻川が西流し、その河岸段丘上に立地する。西側には断崖があり、東と南は空堀と土塁で区画した一辺約200mの単郭方形館である。

東側に大手の虎口があり、土橋が架けられ、通称秋田街道へ通ずる。

城主は、天童頼種が「鷹巣殿」と呼称されていることから同氏と思われるが、事跡や廃城時期なども明らかでない。

(板垣一雄)



こまごめたて
駒籠館

341-002

所在地 北村山郡大石田町大字駒籠

築城者 不明

築城時期 不明

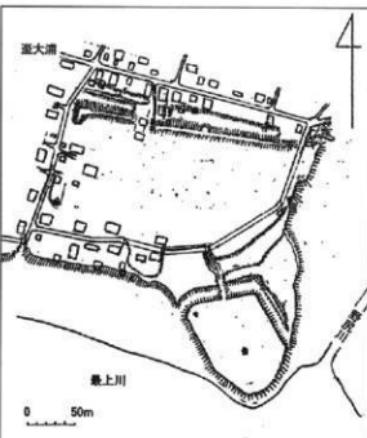
文献資料 『大石田町史』昭60

概 要

最上川と野尻川の合流点に張り出した河岸段丘上に位置するほぼ方形館様の主郭と、空堀により分断された出丸様の副郭から成る館である。南は最上川、東は野尻川を利用し、主郭の北側と西側は堀・土塁で囲まれている。北側には唯一の虎口があり、その東側土塁には、横矢折形の造構がある。

この館を古代の野後駅に比定する説があり、又鷹巣館と同時期の築城を思わせる伝承もあるが、解明されていない。

(板垣一雄)



駒籠館略測図

かわせたて
川前館 341-003

所在地 北村山郡大石田町大字川前

字ハケツ山

築城者 不明

築城時期 不明

概要

最上川と川前川の間のハケツ山全山である。尾根沿いに連絡道があり、小曲輪が配される。主郭は標高145mの山頂で、南北82m、東西20m²、その南に副郭がある。主郭の東側には帯・腰曲輪が発達し、尾根の末端に4本の堀切がある。西側にも多くの曲輪があり、その南西縁から道が下り、虎口を通過して城外へ出る。なお、発達した畠堀や畠状緑堀がある。

南端に川前觀音堂があり、宗教的靈地でもあった。
(板垣一雄)



川前館略測図

いわたて
井出館 341-004

所在地 北村山郡大石田町大字大石田字古橋

築城者 太田 佐仲

築城時期 永正年間（1504~21）

史料 御巡見様御下向ニ付御案内留帳

文献資料 「大石田町誌」昭16

概要

丹生川の河岸段丘上に立地した単郭の平台城。館の北端から北西側は断崖で比高差は10mもある。南東から南西の面は、段丘が北側に張出した舌状台地を利用し、空堀で断切っている。堀の幅は4~6m、深さ3~4m程度で、原形が損なわれている。南側中央には虎口及び土橋状の遺構が認められる。

館主は当地方を地主である太田佐仲で、子息の外記の代、天正13年（1585）最上氏によって滅ぼされた。
(板垣一雄)



井出館略測図

じねんごたて　ぎいやじょう
次年子館（台屋城） 341-005

所在地 北村山郡大石田町大字次年子

築城者 不明

築城時期 不明

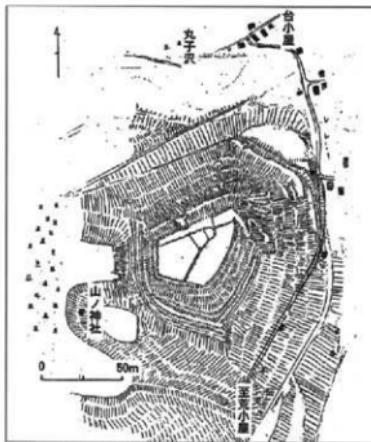
文献資料 『次年子』成生荘研究会 平成4

概要

次年子集落の西方にある、比較的小規模の単郭の山城である。舌状台地を利用し、西側を3条の敵堀（堀切）で断ち、北東隅には大きな3条の敵状縦堀があり、北側緩斜面には全面にわたり敵状縦堀を29条も多様するなど、きびしい防御施設を備えており、戦国期の館の特色を示している。中心曲輪は傾斜40度以上の急崖の上にある。

次年子集落の伝承では、森家の先祖が築城

したと言い伝えている。（清水助太郎）



次年子館略測図

くろたきたて
黒滝館 341-006

所在地 北村山郡大石田町大字横山字黒滝

築城者 不明

築城時期 不明

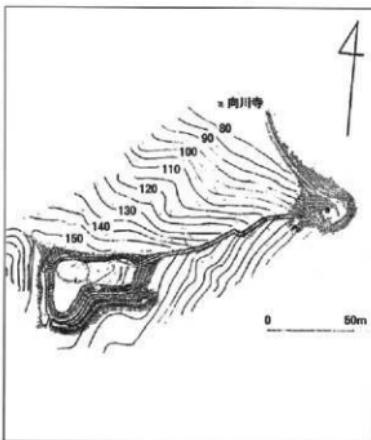
史料 御巡見様御下向ニ付御案内留帳

文献資料 (宝暦11年)

概要

向川寺の後背にある山城で、主郭と副郭からなり、両郭は尾根道で連なる。主郭は比高約100mの山頂にあって、西面から南面にわたり空堀をめぐらすが、西面の堀の外側には、広い馬踏み状の土塁があり、主郭壁に繋がる土橋様の造構がある。南面に大きな敵堀があり、北西隅には虎口も見られ、未発達の敵状縦堀もある。副郭は、尾根の東端で比高30mの小さな平地である。この館は、非常の際の砦と見られる

（板垣一雄）



黒滝館略測図

よこやまたて
横山館 341-007

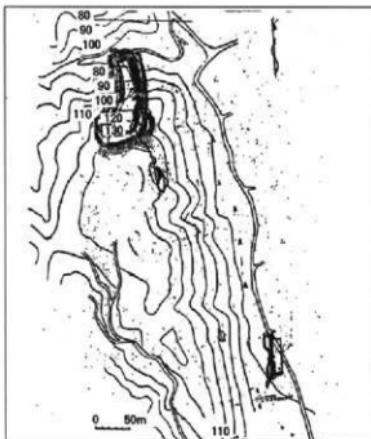
所在地 北村山郡大石田町大字横山

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

横山集落の西方約1°にある丘陵の尾根に造られた山城である。主郭は、標高140mの山頂部にあり、南北に長く、南側には空堀を有する。斜面がゆるやかな西側には、主郭に沿って外縁に土塁を有する空堀がある。主郭台下曲輪の西南隅に擔台様の遺構があり、そこから主郭台壁に連結する土橋状の遺構がある。なお、尾根沿いにも曲輪状遺構があり、東南の山裾平地は屋敷跡と見られる。



(板垣一雄)

らいこうじだて
来迎寺館 341-008

所在地 北村山郡大石田町大字横山字来迎寺

築城者 不明

築城時期 不明

史 料 『新庄古老覺書』

概 要

東迎寺集落の北端、最上川河畔の小さな台地に立地した単郭方形の居館。周囲は空堀で囲まれていたが、国道工事などによって破壊されてしまった。

「新庄古老覺書」によると、来迎寺殿という館主があり、延沢氏に滅ぼされ、その後延沢氏の家臣三四郎という者が在番していた、という。

地方土豪の居館と見るのが妥当であろう。

(清水助太郎)

しののさわたて
塩ノ沢館 341-009

所在地 北村山郡大石田町大字横山字平林

築城者 不明

築城時期 不明

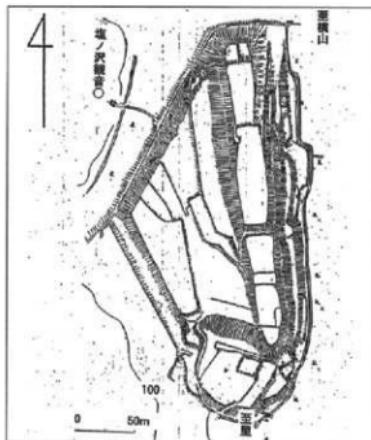
史料 谷地郷村謹

文献資料 『地図取調書』明治9

概要

里集落の北方約500mに、張出台地を大堀切で断った平山城。館の東部は南北に細長い台地となり、その台上に曲輪が配置されている。台地の西側には、曲輪群が広がる。南方には出丸様の郭があり、その西の壁下を虎口に至る道が通る。この郭の一帯に方形の櫓台様遺構があり、その北に東西に伸びる土塁がある。東部台地の東側山腹には茶曲輪があり、虎口は中央北寄りの山裾にある。

館主は日野備中守とされる。(清水助太郎)



塩ノ沢館略測図

こやたて こやだて
小屋館 (小屋立) 341-010

所在地 北村山郡大石田町大字今宿字小屋立

築城者 安食大和守

築城時期 戦国期末

史料 善翁寺淨土三部經抄題文

(慶長14)

文献資料 『最上四十八館の研究』昭19

概要

今宿の東方大森山に連なる比高45mの小峰にあり、南北約60mの細長い形状の梯郭様山城である。曲輪・土塁・空堀・敵堀・虎口等が残っているが、櫓としては小規模で、防御力も小さく、土生田館の枝城と考えられる。

今宿集落の伝承では、この館は安食大和守が晩年に、隠居所として築いたとされる。大石田が一望できる景勝の地にあり、今宿善翁寺(浄土宗)には大和守寄進の浄土三部經と同氏の墓(後年建立)もある。(板垣一雄)



小屋館略測図

III 市町村別城館遺跡一覧表

201 山形市

道跡番号	ムダモキ 名 称	所 在 地	占地状況	種別	残有状況	所有関係	現 況	遺構の状況	地図番号	備 考	掲載ページ
201-091	山影城二ノ丸	山形市置城町	平地	城館	良	公有地	公園	水塹・石垣・土塁・虎口		国史跡 置が城	21
201-092	山影城三ノ丸	山形市置城町	平地	城館	不良	公有地・寺社有地	神社境内	土塁		国史跡	23
201-093	南館	山形市南館	平地	館	消滅	寺社有地	寺社境内	塗			25
201-094	新塚館	山形市新塚	平地	館	消滅	寺社有地・私有地	寺社境内	水堀			25
201-095	福沢城	山形市福沢	平地	館	消滅	私有地	宅地・畠				26
201-096	村木沢城	山形市大字村木沢	独立台地	館	不良	私有地	畠・寺社	曲輪・井戸			26
201-097	台の上館	山形市大字村木沢	平地	館	やや良	私有地	畠・宅地	空堀・井戸			27
201-098	萬合館	山形市千歳	平地	館	不良	私有地	畠・宅地	水堀			27
201-099	若木館	山形市下若木	山頂	城館	良	私有地	畠・宅地	曲輪・空堀・泉池・道路			28
201-010	門伝館	山形市門伝	山頂	館	やや良	私有地	畠・宅地	曲輪・水堀・井戸			29
201-011	長谷堂城	山形市本沢	山頂	館城	良	私有地・寺社有地	山林・寺社跡・曲輪・塹・土塁・塗・井戸				30
201-012	喜沢山本陣跡	山形市喜沢	山頂	城跡	消滅	公有地・私有地	山林・畠	空堀・井戸			32
201-013	谷船館	山形市谷沢	丘陵		消滅	私有地	山林・畠				33
201-014	成沢城	山形市成沢	山頂	城館	やや良	私有地・寺社有地	山林・畠	曲輪・虎口・道路			34
201-015	原出塹	山形市成沢	平地	館	消滅	私有地	水田・畠・宅地				36
201-016	上野館	山形市上野	山頂	櫓	やや良	私有地	山林	曲輪・土塁・空堀・たて塹・虎口			37
201-017	新田館	山形市新田	山頂	櫓	やや良	寺社有地・私有地	山林	曲輪・虎口			39
201-018	山家館	山形市山家	山頂	櫓	不良	私有地	山林・畠	曲輪・土塁・空堀・たて塹			40
201-019	風間館	山形市風間	山頂	館	消滅	私有地				伝承	41
201-020	津山館	山形市津山	平地	館	消滅	私有地	水田・畠・宅地				42
201-021	伊達城	山形市伊達城	平地	館	消滅	国育地・私有地	宅地				42
201-022	三浦屋敷	山形市小白川	平地	館	消滅	公有地・私有地	宅地・学校敷地				43
201-023	荒廃	山形市荒堀	平地	館	消滅	私有地	宅地				43
201-024	若宮館	山形市吉原	平地	館	不良	私有地	水田・畠	空堀			44
201-025	古福	山形市古福	平地	館	不良	私有地	私有地	水堀・井戸			44
201-026	中野城	山形市中野	平地	城館	不良	公有地・私有地	宅地・学校敷地	土塁・空堀・井戸			45

201 山形市

遺跡番号	名 称	所 在 地	占地状況	種別	残存状況	所有関係	現 状	遺構の状況	地図番号	備 考	掲載ページ
201-027	中里館	山形市二本堂	山積	城館	良	私有地	山林	曲輪・土塁・たて掘・虎口・浜形			46
201-028	大ヶ崎館	山形市上東山	丘陵台地	城	不良	私有地	山林・畑	井戸			48
201-029	濱江館	山形市濱江	平地	館	消滅	寺社有地・私有地	水田・畑				48
201-030	大蘿館	山形市山寺	平地	館	消滅	寺社有地	寺社境内				49
201-031	西蔵小佐島屋敷	山形市宮町	平地	館	消滅	寺社有地	寺社境内				49
201-032	今宿宿	山形市今宿	平地	館	消滅	寺社有地・私有地	寺社境内・宅地				50
201-033	阿立心臓駄	山形市天神町	平地	館	消滅	寺社有地	寺社境内				50
201-034	局 望敷	山形市悪戸	平地	館	消滅	私有地	畠・宅地				51
201-035	金谷館	山形市小白川	平地	館	消滅	私有地	宅地	土塁			51
201-036	曲 錦山櫻	山形市柏倉	山積	城	良	私有地	山林	曲輪・土塁・堀切・虎口			52
201-037	滝の山櫻	山形市柏倉	山積	城	やや良	私有地	山林・畑	曲輪・土塁・虎口			53
201-038	オガタラ山櫻	山形市七つ松	山積	城	良	私有地	山林	曲輪・堀切・たて掘・虎口			54
201-039	岩波館	山形市岩波	山積	城	やや良	寺社有地・私有地	山林・寺社境内	曲輪・空堀・橋台・虎口・道路			55
201-040	内城	山形市鷲川町	平地	不明	不良	寺社有地	寺社境内・宅地				56
201-041	行沢館	山形市蒲川	山積	城	良	私有地	山林	曲輪			
201-042	平清水櫻	山形市平清水	山積	館	消滅	私有地	山林				56
201-043	福山櫻	山形市八森	山頂	不明	消滅	私有地	山林				
201-044	柏 直轄山櫻	山形市柏倉	山積	城	良	私有地	山林	曲輪・虎口・堀切			57
201-045	柏 倉館	山形市柏倉	丘陵上	館	不良	私有地	山林・畑・宅地	曲輪			58
201-046	浜田館	山形市大野目	平地	不明	消滅	私有地	水田・畑				59

207 上山市

遺跡番号	名 称	所 在 地	占地状況	種別	残有状況	所有関係	現 況	遺構の状況	地図番号	備 考	掲載ページ
207-001	中山城	上山市中山	山頂	城館	良	私有地	山林	白塗・土墨・虎口・櫓台・櫓形・馬出・井戸・道路			60
207-002	上ノ山城	上山市館	山頂	要塞	不良	私有地	山林・堀	曲輪			62
207-003	御見山城	上山市中山	山頂	墻壁	やや良	私有地	山林	曲輪			62
207-004	細谷城	上山市細谷	平地	館	消滅	私有地	水田				64
207-005	岸山城	上山市阿努陀地	山頂	館	やや良	私有地	山林・烟	曲輪・空塹・たて掘・虎口			63
207-006	月岡城	上山市元城内	平地	館	不良	寺社有地・寺社有地・私有地	烟・寺社境内	曲輪・空塹・虎口			64
207-007	船越城	上山市中川	山頂	城牆	不良	私有地	山林	曲輪			
207-008	立山城	上山市永野	山頂			私有地	山林			伝承	
207-009	橋下城	上山市橋下	丘陵	館城	消滅	私有地	水田・烟				65
207-010	元瀬駿城	上山市瀬森	山頂	館	不良	寺社有地・私有地	寺社境内	曲輪			65
207-011	高瀬城	上山市松山	山頂	館	良	寺社有地・私有地	山林・群木・水田・寺社有地	白塗・土墨・空塹・大土塁・櫓台・虎口・堀・櫓形・馬出・井戸・道路			66

210 天童市

遺跡番号	名 称	所 在 地	占地状況	種別	残有状況	所有関係	現 態	造構の状況	地図番号	備 考	掲載ページ
210-001	三輪堂跡	天童市大字大清水	平地	居館跡	やや良	私有地	畠地	壁がめぐる方形館			68
210-002	高木館	天童市大字高木	平地	館跡	消滅	私有地	畠地 社地	塗			68
210-003	成生館	天童市大字成生	平地	平成	不良	私有地	畠地	土塁、塗			69
210-004	中船館	天童市大字川原子	山麓	館跡	良	私有地	山林	塗、曲輪			70
210-005	下山口跡	天童市大字山口	平地	居館跡	消滅	私有地	水田	壁がめぐる方形館	堀内館		70
210-006	浅間跡	天童市大字山口	丘陵	館跡	不良	寺社有地 私有地	社地 山林	塗、曲輪			71
210-007	小山家城	天童市大字	丘陵	丘城	良	私有地	畠地	塗、曲輪			71
210-008	蔵増城	天童市大字蔵増	平地	平城	不良	寺社有地 私有地	寺地 宅地	塗	倉津館		72
210-009	中島館	天童市大字賀津	平地	居館跡	不良	私有地	畠地 水田	塗			73
210-010	山崎山館	天童市大字賀津	丘陵	物見	良	私有地	山林	曲輪			73
210-011	新城山館	天童市大字賀津	山地	山城	良	私有地	山林	塗、曲輪			74
210-012	天童鶴岳館	天童市大字天童	平地	平城	消滅	私有地	宅地 社地	土塁、水塗	面館		74
210-013	天童古城	天童市大字城山・北目	丘陵	山城	やや良	公有地 寺社有地 私有地	山林 公園	曲輪	岡山山城 一帯櫛屋 天童城		75
210-014	寺津城	天童市大字寺津	平地	平城	不良	私有地	宅地 畠地	水塗			76
210-015	福の城	天童市大字芳賀	平地	居館跡	消滅	私有地	畠地	塗			76
210-016	高瀬城	天童市大字高瀬	平地	平城	不良	寺社有地 私有地	宅地 畠地	水塗			77
210-017	伊連城	天童市大字清池	平地	居館跡	消滅	私有地	宅地 畠地	塗、土塁	庄家川をせきんで 塙山伊連城あり		78
210-018	石倉跡	天童市大字下萩野戸	平地	居館跡	消滅	私有地	宅地 畠地	塗、土塁			78
210-019	長者屋敷	天童市大字荒谷	平地	居館跡	消滅		畠地		北島屋敷		79

301 山辺町

地籍番号	土地名	所在地	占地状況	種別	残有状況	所有關係	現況	道構の状況	地図番号	備考	開載ページ
301-001	山辺の草場	山辺町大字北山	山頂	畠	やや良	区有地、私有地	山林	テラス、空堀			80
301-002	山辺の水田	山辺町大字大藪	山頂	畠	やや良	私有地	山林、畑	テラス、空堀			80
301-003	山辺の荒谷地	山辺町大字大藪	山頂	畠	西郭 やや良 東郭 潟底	私有地	山林、畑	西郭二重掘 東郭掘（ゴルフコース）			81
301-004	山辺の大畑	山辺町大字北作	山麓平坦部	畠	消滅	私有地	田、畑				81
301-005	山辺の福山館	山辺町大字北作	山頂	畠	やや良	私有地、寺院有地	山林、畠、宅地	テラス、空堀 南側内			82
301-006	山辺の畠	山辺町大字北作	山頂	畠	やや良	私有地	畠、山林、曲輪、宅地				83
301-007	山辺の武田所	山辺町大字北作	平地	陣所	やや良	私有地	杉林	空堀			83
301-008	山辺の畠谷	山辺町大字畠谷	山頂、平地	城	やや良	区有地、私有地	山林、畠、空堀、堅堀、廢切り、曲輪、土塁、				84
301-009	山辺の坂陣所	山辺町大字畠谷	山頂	陣所	不良	私有地	山林、畠	土塁、空堀			85
301-010	山辺の三輪山見張所	山辺町大字畠谷	山頂	哨堡	不良	国有地	山林	土塁			86
301-011	山辺の西光山城	山辺町大字大寺	山頂	畠	消滅	私有地	畠	曲輪			87
301-012	山辺の新館	山辺町大字大寺	平地	館	消滅	私有地	田、畠				87
301-013	山辺の高瀬城	山辺町大字山辺	小丘陵、平地	城	やや良	私有地、神社有地	飛地、斜坡内 堅堀、堅	曲輪、水堀、テラス、			88
301-014	山辺の山野邊城	山辺町大字山辺	小丘陵、平地	城	不良	公有地、私有地	堅堀、公有地合 寺社有地、学校、宅地、道路	曲輪、水堀、土塁			89
301-015	山辺の内山城	山辺町大字根原	平地	哨堡	不良	私有地	山林、畠	土塁			90
301-016	山辺の植村城	山辺町大字要害	平地	館	消滅	私有地	宅地、果樹園、田、畠				90
301-017	佐藤理兵衛座敷	山辺町大字要害	平地	居宅	良	私有地	宅地、畠				

302 中山町

遺跡 番号	名 称	所 在 地	占地状況	種別	残存状況	所有関係	現 況	遺構の状況	地図 番号	備 考	掲載 ページ
302-001	瓦崎櫛	中山町大字長崎	平地	館	不良	寺社有地 私有地	寺社境内 宅地	水堀、井戸		歴史跡	91
302-002	鍋屋敷	中山町大字金沢	平地	館	地上遺構 消滅	私有地	宅地				91
302-003	谷木沢櫛	中山町大字柳沢	山頂	柵	やや良	私有地	山林、畑	曲輪、土堤、たて堀、 泉池、道路		歴史跡 八木沢櫛	92
302-004	松下屋敷	中山町大字達磨寺	平地	館	地上遺構 消滅	国有地 私有地	国道 水田			庭田・松下	94
302-005	物見台	中山町大字長崎	自然堤防	筑壝	地上遺構 消滅	国有地	高速道路			歴史跡 一眼鏡台跡	94
302-006	金屋敷	中山町大字土橋	平地	館	地上遺構 消滅	私有地	水田				95
302-007	竹ノ花	中山町大字金沢	平地	館	地上遺構 消滅	私有地	水田、畑			歴史跡 -都筑園古跡-	96
302-008	竹ノ花	中山町大字岡	平地	館	地上遺構 消滅	私有地	水田、畑 宅地				96
302-009	篠原・横戸	中山町大字土橋	山頂 平地	柵	地上遺構 消滅	私有地	山林、畑 宅地				96
302-010	鹿嶺山	中山町大字小堀	山頂	柵	地上遺構 消滅	私有地	畑			歴史跡 鹿嶺山	97

206 寒河江市

遺跡番号	ムササビ名	所在地	占地状況	種別	残有状況	所有關係	現況	遺構の状況	地図番号	備考	開載ページ
206-001	寒河江城	寒河江市丸内	平地	館	不良	公有地、私有地 駐車場	宅地、学校 寺社	塗跡			105
206-002	長岡山城	寒河江市山岸、長岡山	丘陵	城砦	不良	公有地、私 有地	650m、剝離 壁グラウンド	塗跡、土壘 曲輪		幕末陣屋造成 含寒河八幡神社	105
206-003	本郷城	寒河江市本郷	平地	館	不良	私有地	宅地	塗跡、土壘			106
206-004	新田城	寒河江市日田	平地	館	不良	私有地	果樹園	塗跡			106
206-005	高麗山城	寒河江市高麗山	丘陵	城砦	不良	私有地	墓地、果樹 園				107
206-006	高麗城	寒河江市高麗	平地	館	不明	私有地	宅地				
206-007	落及長者原城	寒河江市落衣	平地	館	不良	私有地	果樹園	塗跡、土壘			107
206-008	柴園城	寒河江市柴園	平地	館	地上遺構 消滅	私有地	宅地、果樹 園				
206-009	高松南	寒河江市森柳	平地	館	地上遺構 消滅	私有地	墓地、水田				
206-010	山崎城	寒河江市平塚	丘陵	城砦	不良	私有地	果樹園	曲輪			108
206-011	中郡上原城	寒河江市中郡	平地	館	地上遺構 消滅	公有地	国道			鶴只遺跡、 発掘調査済	
206-012	中郡中原城	寒河江市中郡	平地	館	地上遺構 消滅	私有地	水田				
206-013	小福龍山	寒河江市中郷	山頂	番	不明	私有地	山林				
206-014	中郷駒の内	寒河江市中郷	平地	館	不良	私有地	宅地	塗跡			108
206-015	谷沢元照城	寒河江市谷沢	丘陵	館	地上遺構 消滅	私有地	水田			谷沢遺跡	
206-016	小京城	寒河江市入倉	平地	館	地上遺構 消滅	私有地	水田				
206-017	日和田城	寒河江市日和田	丘陵	城砦	やや良	私有地	山林、畑地	曲輪、堀切		慈恩寺城館 群	109
206-018	尾山城	寒河江市慈恩寺	丘陵	番	不良	私有地	公園	塗跡		慈恩寺城館 群	109
206-019	ゴロビツ城	寒河江市慈恩寺	丘陵	城砦	やや良	私有地	公園	曲輪、堀跡		慈恩寺城館 群	110
206-020	松城	寒河江市慈恩寺	丘陵	城砦	やや良	私有地	果樹園	曲輪		慈恩寺城館 群	111
206-021	肥前城	寒河江市慈恩寺	丘陵	城砦	不良	私有地	果樹園	塗跡		慈恩寺城館 群	112
206-022	田代要害	寒河江市慈恩寺	丘陵	城砦	やや良	私有地	宅地、果樹 園	曲輪		慈恩寺城館 群	112
206-023	箕輪上原城	寒河江市箕輪	平地	館	地上遺構 消滅	私有地	宅地				
206-024	箕輪下原城	寒河江市箕輪	平地	館	地上遺構 消滅	私有地	宅地				
206-025	箕輪新城	寒河江市箕輪	平地	館	不明	私有地	宅地				
206-026	陣ヶ峰城	寒河江市陣ヶ峰	丘陵	城砦	やや良	私有地	山林	曲輪		白岩城館群	113

206 寒河江市

道跡 番号	ムラノミ 名 称	所 在 地	占地状況	種別	疾有状況	所有関係	現 況	遺構の状況	地図 番号	備 考	掲載 ページ
206-027	寒河江市御ヶ峰 跡ヶ峰要塞	寒河江市御ヶ峰	丘陵	城砦	不明	私有地	山林			白岩城館群	
206-028	寒河江市白岩 白岩御角山城	寒河江市白岩	丘陵	城砦	やや良	私有地	果樹園、宅地	曲輪		白岩城館群	114
206-029	寒河江市白岩 白岩新宿	寒河江市白岩	丘陵	城砦	不明	私有地	山林、果樹園			白岩城館群	
206-030	寒河江市白岩 白岩山城	寒河江市白岩	丘陵	前	地上道路 消滅	公有地	学校敷地	曲輪		白岩城館群	
206-031	寒河江市白岩 白岩上権山	寒河江市白岩	丘陵	城砦	やや良	私有地	山林	曲輪		白岩城館群	115
206-032	寒河江市白岩 白岩八幡堀	寒河江市白岩	丘陵	城砦	やや良	私有地	畑地、公園、曲輪、土塁 神社			白岩城館群	116
206-033	寒河江市留場 留場跡	寒河江市留場	平地	館	やや良	私有地	山林	曲輪		白岩城館群	117
206-034	寒河江市留場 留場の跡	寒河江市留場	平地	館	不明	私有地	水田				
206-035	寒河江市田代 田代跡	寒河江市田代	平地	館	不明	私有地	墓地、山林				
206-036	寒河江市田代 日山城	寒河江市田代	丘陵	砦	不明	私有地	山林				
206-037	寒河江市宮内 宮内城	寒河江市宮内	丘陵	城砦	やや良	私有地	山林	曲輪、掘切			117
206-038	寒河江市幸生 幸生城	寒河江市幸生	丘陵	城砦	やや良	私有地	山林、墓地	曲輪			118
206-039	寒河江市柳沢 柳沢城	寒河江市柳沢	丘陵	砦	不明	私有地	山林				
206-040	寒河江市富山 富山城	寒河江市富山	丘陵	砦	不明	私有地	山林				
206-041	寒河江市松川 松川城	寒河江市松川	丘陵	砦	不明	私有地	山林、畠地				
206-042	寒河江市日田 日田城の内	寒河江市日田	平地	館	不良	私有地	宅地、畠地				119
206-043	寒河江市木の沢 木の沢城	寒河江市木の沢	丘陵	砦	やや良	私有地	山林	曲輪、掘切			119
206-044	寒河江市白岩 白岩大沢城	寒河江市白岩	丘陵	城砦	不明	私有地	山林			白岩城館群	

321 河北町

道跡番号	ムダヨリ名 称	所 在 地	占地状況	種別	私有状況	所有關係	現 況	遺構の状況	地図 番号	備 考	掲載 ページ
321-001	谷城	河北町谷地	平地	平城	不良	公有地、私 有地	宅地、官房	土堀、道路			120
321-002	溝延城	河北町大字溝延	平地	平城	不良	公有地、寺社 有地、私有地	宅地、畑、土塁 寺社境内				121
321-003	境介次郎庭城	河北町西里	平地	築	地上遺構 消滅	私有地	畑、宅地				121
321-004	大船越 (谷地坂城)	河北町谷地東	平地	築	地上遺構 消滅	私有地	水田				122
321-005	船口館跡	河北町谷地	平地	築	完全消滅	公有地 私有地	畑地 最上川河川敷				122
321-006	根島山城	河北町西里	山地	築	やや良	公有地、私 有地	畑 山林水田	曲輪、井戸、道路			123
321-007	和爾山城	河北町西里	山頂	築	良	公有地、私 有地	水郡地 山林、畑	曲輪、空堀、建物跡、 井戸、道路			123
321-008	伊達城	河北町大字新吉田	平地	築	やや良	私有地	畑	空堀			124

322 西川町

道路番号	名称	所在地	占地状況	種別	残有状況	所有関係	現況	造構の状況	地図番号	備考	開載ページ
322-001	熊野橋	西川町聯合	山頂・山腹・平地	城砦	地上造構 消滅	公有地・私有地	舗・細・集 昭和・築			開墾により	
322-002	長立橋	西川町聯合	山頂・山腹	城砦	地上造構 消滅	私有地	山林・畠・寺社境内	石垣・建物跡		開墾により	
322-003	鎌合橋	西川町聯合	山頂・山腹	城砦	やや良	私有地	山林	曲輪・土塁・空堀・虎口・橋台・井戸・道路			125
322-004	荷伏橋	西川町聯合	山腹	橋	地上造構 消滅	私有地	山林・水田			開墾により	
322-005	松ノ下橋	西川町海味	平地・山頂	城砦	地上造構 消滅	私有地	山林・水田			開墾により	
322-006	萬葉館	西川町海味	平地・山腹	館	不良	私有地・寺社有地	寺社境内	曲輪			126
322-007	太郎山橋	西川町海味	山頂・山腹	橋	やや良	私有地	山林・畠	曲輪・土塁・空堀・虎口・道路			127
322-008	下屋敷橋	西川町開沢	山腹・平地	W・疊 ・橋	地上造構 消滅	公有地・私有地	探査現場			鉱業所により	
322-009	要害沢橋	西川町開沢	山頂・山腹	橋	やや良	私有地	山林・畠	曲輪・空堀			127
322-010	間沢橋	西川町開沢	山頂・山腹・平地	館・橋	不整	私有地	山林・水田・畠 ・水堀・空堀・宅地・井戸	曲輪・空堀・道路 ・水堀跡			128
322-011	サッテロ橋	西川町開沢	山頂・山腹	橋	地上造構 消滅	公有地・私有地	スキー場			スキーリゾートにより	
322-012	剣取橋	西川町開沢	舌状台地	橋	地上造構 消滅	国有地・私有地	山林・水田・畠 ・水堀・空堀			開墾により	
322-013	鍋金橋 (樺山橋)	西川町岩根沢	山腹	橋	不良	私有地	水田・畠	曲輪・石積			129
322-014	南山橋	西川町岩根沢	山腹	橋	不良	私有地	山林	土塙・曲輪・空堀・井戸			129
322-015	沿の平路	西川町岩根沢	山頂・山腹	館・橋	やや良	私有地	山林・水田・畠 ・水堀・空堀・虎口・道路	曲輪・土塁・水堀・空堀・虎口・道路			130
322-016	要害森林橋	西川町岩根沢	山頂・山腹	橋	やや良	私有地	山林	曲輪・土塁・水堀・空堀・虎口・地形・道路・樹木			131
322-017	上ノ谷橋	西川町水沢	山頂	城砦	地上造構 消滅	私有地	採石場			採石場に上り	
322-018	水沢路	西川町水沢	山頂・山腹・平地	館・橋	やや良	私有地	山林・畠	曲輪・土塁・水堀・空堀・井戸・道路			132
322-019	石倉橋	西川町水沢	山頂・山腹・平地	橋	やや良	私有地	山林・水田	曲輪・土塁・水堀・道路			134
322-020	小浦橋	西川町水沢	山頂	橋	やや良	私有地	山林	曲輪・土塁・空堀・道路			134
322-021	横峰橋	西川町水沢	山頂	橋	地上造構 消滅	私有地	山林・畠			開墾により	
322-022	八重山橋	西川町水沢	山腹	城砦	地上造構 消滅	私有地	採石場			採石場により	
322-023	坂ノ上橋	西川町本道寺	山腹	橋	不整	私有地	山林・畠・国道	曲輪・井戸			135
322-024	本道寺橋	西川町本道寺	山頂・山腹	館・橋	やや良	私有地	山林・宅地	曲輪・土塁・空堀・虎口・地形・道路			136
322-025	月山洪橋	西川町月山沢	丘陵・山腹	橋	地上造構 消滅	公有地・寺社有地	寺社境内 ・ダム			水没により	
322-026	志津瀬橋	西川町志津			不明					戰記に所載	

322 西川町

遺跡番号	名 称	所 在 地	占地状況	種別	残有状況	所有関係	現 況	遺構の状況	地図番号	備 考	掲載ページ
322-027	西川町黒瀬	西川町黒瀬	山頂・山腹	城勢・砦	地上遺構 消滅	私有地	山林・畠・墓地			墓地に利用	
322-028	西川町原	西川町原	山腹	橋	地上遺構 消滅	私有地	山林・水田・畠・宅地・墓地			開墾により	
322-029	西川町中村	西川町中村	山頂・山腹	橋	やや良	私有地・寺社有地	山林・水田・畠・宅地・墓地	曲輪・空堀・たて堀・虎口・道路			137
322-030	西川町壹野	西川町壹野	山頂・平地	橋	やや良	公有地・私有地	山林・水田・畠・宅地	曲輪・土塁・水堀跡・空堀・虎口・道路			135
322-031	西川町中上	西川町中上	平地	橋	不良	公有地・私有地	山林・畠・宅地	曲輪・土塁・水堀・道路			138
322-032	西川町見附	西川町見附	山頂	橋・暗渠	やや良	私有地	山林	曲輪・空堀・虎口・道路			138
322-033	西川町宮川	西川町宮川	山腹・平地	橋	地上遺構 消滅	私有地	山林・畠・宅地			開墾により	
322-034	西川町吉川	西川町吉川	山頂・山腹・平地	橋	やや良	私有地	山林・畠・宅地	曲輪・土塁・水堀跡・空堀・たて堀・虎口・横形・道路			139
322-035	西川町吉川	西川町吉川	山頂・山腹・平地	橋	やや良	私有地	山林・宅地	曲輪・土塁・空堀・虎口・横形・井戸			140
322-036	西川町吉川	西川町吉川	山腹・平地	橋	地上遺構 消滅	公有地・私有地	浄水場・道路・畠			浄水場により	
322-037	西川町原	西川町原	山頂・山腹	暗渠	地上遺構 消滅	私有地	山林・塙内			開墾により	
322-038	西川町沿山	西川町沿山	山頂・山腹	橋	不良	公有地・私有地	山林・宅地・学校	曲輪・道路			141
322-039	西川町沿山	西川町沿山	丘陵・平地	橋	不良	私有地	山林・水田・畠・宅地	曲輪・土塁・水堀・虎口・横形・井戸・道路			141
322-040	西川町沿山	西川町沿山	山頂・山腹	橋	不良	共有地	山林・水田・墓地	曲輪・虎口			142
322-041	西川町沿山	丘陵	暗渠	地上遺構 消滅	私有地	畠				開墾により	
322-042	西川町入間	西川町入間	山腹	橋・暗渠	やや良	私有地	山林	曲輪・廻切			142
322-043	西川町入間	西川町入間	山頂・山腹・平地	橋・暗渠	不良	私有地	山林・宅地	曲輪・水堀			143
322-044	西川町入間	西川町入間	山頂・平地	橋・暗渠	不良	私有地・共有地	山林・畠・寺社境内	曲輪・水堀跡・寺社境内			144
322-045	西川町入間	西川町入間	平地	橋	不良	私有地	水田・畠・土塁・宅地				144
322-046	西川町入間	西川町入間	山腹	橋	やや良	私有地	山林・墓地・水田	曲輪・虎口・道路			145
322-047	西川町入間	西川町入間	山頂・山腹	暗渠	不良	私有地	山林・寺社境内	曲輪			145
322-048	西川町月岡	西川町月岡	山頂・山腹・平地	橋・暗渠	やや良	私有地	山林	曲輪・空堀・たて堀・虎口			146
322-049	西川町月岡	西川町月岡	山腹	橋	地上遺構 消滅	私有地	山林・水田			開田により	
322-050	西川町根子	西川町根子	山腹	橋	不良	私有地	山林・墓地	曲輪・造物跡			146

323 朝日町

道跡 番号	名 称	所 在 地	占地状況	種別	残有状況	所有関係	現 状	造構の状況	地図 番号	備 考	記載 ページ
323-001	猪田橋	朝日町大谷	山頂 山腹	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、土塁、空堀、たて堀、土壘		大谷北側	147
323-002	立木橋	朝日町立木	山頂	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、二重堀、たて堀、土壘			147
323-003	秋葉山橋	朝日町大谷	山頂 山腹	橋	やや良	公有地	山林	曲輪、土塁、虎口、堀切、三重堀			148
323-004	八ツ屋城	朝日町三中	山頂 山腹	館	やや良	私有地	山林・烟	曲輪、土塁、虎口、堀切、三重堀	五百川城		149
323-005	太郎堀	朝日町太郎	山腹	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、堀切、三重堀、たて堀			151
323-006	水口橋	朝日町常盤	山頂	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、三重堀、たて堀、土塁			152
323-007	大船木橋	朝日町大船木 (旧: 大字三中甲)	山頂	橋	不良	私有地	山林	曲輪、二重堀、土塁			153
323-008	杉山橋	朝日町杉山	山頂	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、堀切、空堀			153
323-009	前田家堀	朝日町宮宿	山腹	橋	良	私有地	山林	曲輪、堀切、空堀、土塁、聯合虎口、新松の櫓門、舟入戸			154
323-010	真木山城	朝日町大谷	山頂 山腹	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、虎口、堀切、三重堀、土塁、空堀、東治戸			155
323-011	大沼橋	朝日町大沼	山頂	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、三重堀(堀切)、たて堀			157
323-012	切立橋	朝日町太郎	山頂 山腹	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、堀切、土塁			157
323-013	宇津野橋	朝日町上郷	山頂	館	やや良	私有地	山林	曲輪、三重堀、歌たて堀、堀切			158
323-014	鳥屋ヶ森城	朝日町新宿	山頂 山腹	館	不良	公有地、私有地	原野 山林・烟	曲輪、三重堀、堀底道、たて堀			159
323-015	笠置橋	朝日町宮宿	山頂 山腹	館	不良	私有地	山林・公園	帶曲輪、二重堀、土塁			161
323-016	合合堀	朝日町和合	平地	館	地上造構 消滅	寺社有地、墓地・田畠	伝承			「朝日町の歴史」に記載	
323-017	松原橋	朝日町松原	台地	橋	地上造構 消滅	私有地	畠・宅地	伝承			
323-018	皆木武藏	朝日町松原 (旧: 字立)	台地	橋	地上造構 消滅	私有地	道路・田畠	伝承			
323-019	白倉石館	朝日町白倉字石館	山腹	地上造構 消滅	私有地	道路・山林	伝承				
323-020	八幡谷の堀	朝日町大谷字堤山 宇開山・字西ノ野	山頂 山腹		不良	寺社有地 私有地	山林	伝承			
323-021	タチノ山橋	朝日町常盤字タチノ 山	山頂	地上造構 消滅	私有地	烟・山林	伝承				
323-022	龍敷跡 (通称)	朝日町水本	山地		不明	私有地	山林・草地	伝承			
323-023	八幡橋 (通称)	朝日町立木字香ノ瀬	山頂		不明	私有地	山林	伝承			
323-024	送橋	朝日町送橋字タチ 山	山頂		不明	私有地	山林	伝承		「豪上四十八塙の研究」に記載	

324 大町町

登録番号	ムダガキ 名 称	所 在 地	占地状況	種別	権利状況	所有関係	現 況	造構の状況	地図 番号	備 考	掲載 ページ
324-001	左沢崩山城	大町町大字桶山	山頂	館	やや良	私有地、公有地 朝鮮南施 E.S.E., E.W.E.	曲輪、空堀、縄塀 虎口、建物跡	15		162	
324-002	富沢城	大町町大字富沢	山頂	館	良	私有地	山林	曲輪、土壠、空堀 虎口、樹形	15		164
324-003	龍興寺跡	大町町大字三郎丙	山頂	館	やや良	寺社有地	山林、墓地	曲輪、土壠、空堀 寺社境内	15		164
324-004	田沢山城	大町町大字三郎丙	山頂	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、空堀、縄塀 井戸、道路	15		165
324-005	深沢橋	大町町大字三郎乙	平地	橋	やや良	私有地	山林、畑	曲輪	15		165
324-006	角大丈堀	大町町大字三郎甲	山頂	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、空堀	15		166
324-007	薪袋城	大町町大字薪野	平地	館	不良	寺社有地 私有地	寺社境内、墓地 尾瀬、川原、畑	曲輪、水堀、虎口 井戸	15		166
324-008	嘉沢橋	大町町大字本郷甲	山頂	橋	やや良	寺社有地	寺社境内、畑	曲輪、空堀、橋 山林	15		167
324-009	越好城	大町町大字懶好乙	山頂	館	やや良	寺社有地 私有地	山林	曲輪、空堀、縄塀 井戸	15		167
324-010	若松山城	大町町大字懶好甲	山頂	橋	やや良	私有地	山林、畑	曲輪、空堀、縄塀 虎口、樹形、井戸	15		168
324-011	材木城	大町町大字材木	平地	館	やや良	私有地	山林	曲輪、土壠、空堀 縄塀、樹形	15		168
324-012	小倉山城	大町町大字十八才甲	山頂	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、縄塀	15		169
324-013	十八才城	大町町大字十八才甲 (中腹)	その他	館	不良	寺社有地 私有地	畑	縄塀、虎口、馬出し、 井戸	15		169
324-014	火城	大町町大字市布	山頂	館	やや良	私有地	宅地、山林	曲輪、土壠、空堀 建物跡、井戸	19		170
324-015	要吾子城	大町町大字要見	平地	館	やや良	私有地	水田、宅地	曲輪、空堀、道路	19		170
324-016	御旗山城	大町町大字要見	山頂	館	やや良	私有地	山林	曲輪、空堀、縄塀 虎口、樹形、井戸	19		171
324-017	鷹山城	大町町大字要見	山頂	城砦	やや良	私有地	山林	曲輪、空堀、縄塀 道路	19		173
324-018	黒森橋	大町町大字黒森	山頂	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、空堀、縄塀 井戸	19		173
324-019	日光山城	大町町大字富沢			不明				15		
324-020	三百山城	大町町大字三郎乙	山頂	橋	やや良	私有地	山林	曲輪、土壠、樹形 虎口、縄塀、井戸	15		174
324-021	南山城	大町町大字三郎甲	山頂	橋	やや良	私有地	山林	空堀、縄塀	26		174
324-022	宇白神	大町町大字小見			不明				15		
324-023	菅木橋	大町町大字薪野	山頂	城砦	やや良	私有地	山林	曲輪、縄塀、水の手 空堀、土壠、樹形	15		175
324-024	新村城	大町町大字新郎	山頂	橋	やや良	私有地	山林、畑	曲輪、縄塀、建物跡 井戸	15		175
324-025	小新橋	大町町大字小新 (山腹)	その他	橋	やや良	私有地	山林、畑	曲輪、空堀、縄塀 井戸	15		176
324-026	鶴山城	大町町大字桶山	山頂	橋	やや良	寺社有地	山林、墓地	曲輪、空堀、縄塀	19		176

324 大江町

道 路 番 号	名 称	所 在 地	占 地 状 況	種 別	確 有 状 況	所 有 関 係	現 況	道 構 の 状 況	地 図 番 号	備 考	掲載 ペジ
324-027	小滑瀬	大江町大字小滑瀬	山頂	権	やや良	私有地	山林	曲輪、土壁、礎石、井戸	19		177
324-028	沢口瀬	大江町大字沢口	山頂	権	やや良	私有地	山林	曲輪、礎石、井戸	19		177
324-029	柳川瀬	大江町大字柳川	山頂	権	やや良	私有地	山林、宅地、墓地	曲輪、空堀、道路	19		178

208 村山市

地 點 番 号	名 称	所 在 地	占 地 状 況	種 別	権 利 状 況	所 有 関 係	現 況	造 構 の 状 況	地圖 番 号	備 考	掲載 ページ
208-001	上生田山	村山市大字土生田	山頂	林	やや 良	私有地	山林	曲輪, 空堀			185
208-002	上生田山	村山市大字土生田	台地先端	館	不良	私有地 寺社有地	宅地, 畑 寺社境内	曲輪, 虎口 水・空堀, 土壠			185
208-003	高畠山	村山市大字本飯田	山頂	翁	やや 良	私有地	山林	曲輪, 空堀			186
208-004	本飯田	村山市大字本飯田	台地先端	雜	やや 良	私有地 寺社有地	山林, 畑 寺社境内	曲輪, 虎口, 池 空堀, たて掘			186
208-005	十字山	村山市大字本飯田	山頂	翁	やや 良	私有地	山林	曲輪			187
208-006	見附山	村山市大字龍山	孤立丘陵	哨 堡	やや 良	公有地	山林	曲輪			187
208-007	龍山	村山市大字龍山	山腹	館	やや 良	私有地	山林	曲輪, 虎口 空堀			188
208-008	龍頭城	村山市大字龍頭	山頂	雜	やや 良	私有地 公有地	山林, 畑 公有地	曲輪, 土壠 空堀, 桥形			189
208-009	河島山	村山市大字河島	山頂	翁	やや 良	共有地	山林	曲輪, 土壠 空堀			188
208-010	葛並橋	村山市大字葛並	山頂	館	やや 良	私有地	山林, 畑 空堀, 土壠 曲輪, 桥形		葛並城	191	
208-011	山の内堀	村山市大字山内	河岸段丘	翁	地上造構 消滅	私有地	水田, 畑 消滅	曲輪	山の内堀 北又城	192	
208-012	白木森	村山市大字白鳥	山頂	哨 堡	やや 良	共有地	山林	空堀, 土壠 曲輪, 虎口			192
208-013	毛倉森	村山市大字白鳥	山頂	翁	やや 良	私有地	山林	曲輪, 空堀			193
208-014	白鳥城	村山市大字白鳥	台地末端	館	やや 良	私有地	山林 知	曲輪, 土壠 空堀			194
208-015	熊野山	村山市大字熊野沢	山頂 山腹	翁	不良	私有地	山林	曲輪, 空堀			195
208-016	涌野沢	村山市大字涌野沢	台地末端	館	やや 良	寺社有地 私有地	畠 宅地	曲輪, 土壠 空堀, たて掘			195
208-017	大久保城	村山市大字大久保	平地	館	やや 良	公有地 寺社有地	小学校地 寺社境内	曲輪, 虎口 水空堀, 井戸	大久保城	196	
208-018	大久保古城	村山市大字大久保	平地	館	不良	寺社有地	寺社境内	空堀, 土壠			196

211 東根市

遺跡 番号	ふりがな 名 称	所 在 地	占地状況	種別	残存状況	所有関係	現 状	遺構の状況	地図 番号	備 考	掲載 ページ
211-001	開山休石柵	東根市大字開山	河岸段丘	館	不発	私有地	宅地	曲輪, 土塁		桜川柵	197
211-002	沼尻要害柵	東根市大字沼沢	河岸段丘	櫛	地上遺構 消滅	私有地	畠	曲輪			197
211-003	姫姫柵	東根市大字猪野沢	河岸段丘	館	不発	公有地	寺社境内 私有地	曲輪, 空堀			197
211-004	野川柵	東根市觀音寺 同野川	河岸段丘 崖端	前	やや 良	寺社用地 私有地	寺社境内 畠, 宅地	曲輪, 土塁 空堀		野川柵	198
211-005	武波柵	東根市大字京郡	河岸段丘 平地	館	地上遺構 消滅	私有地	水田	曲輪, 土塁			198
211-006	二輪谷柵	東根市大字野川	平地	館	地上遺構 消滅	私有地	畠	土塁			198
211-007	中野台柵	東根市大字東根	平地	櫛	地上遺構 消滅	私有地	畠	土塁			199
211-008	黒鳥山柵	東根市大字東根	山地中腹 山顶	苔	不良	公有地	山林	曲輪, 土塁 空堀			199
211-009	大森城	東根市大字東根	山地中腹 山顶	城	不発	私有地	山林, 畠 神社用地	曲輪, 土塁		大森山城	200
211-010	東根城	東根市大字東根	舌状地	館	やや 良	公有地	学校, 寺 社, 宅地	曲輪, 土塁 水・空堀, 桁形		小田島城	201
211-011	薬師山柵	東根市大字東根	山顶	櫛	不発	寺社用地	山林 寺社地	曲輪		薬師山裏山 柵	203
211-012	兵庫山柵	東根市大字東根	山顶	櫛	地上遺構 保	私有地	山林	曲輪			
211-013	笠の崩柵	東根市大字東根	山顶	隙 所	地上遺構 消滅	公有地	山林	曲輪			
211-014	六田柵	東根市大字蟹沢	平地	櫛	不発	私有地	水田 畠	曲輪, 土塁 空堀			199
211-015	長瀬城	東根市大字長瀬	平地	館	やや 良	公有地 私有地	宅地 公共用地	曲輪, 土塁 水堀			203
211-016	長瀬本柵跡	東根市大字長瀬	平地	館	やや 良	私有地	畠	空堀, 土塁 水田			204
211-017	藍坂柵	東根市大字蟹沢	平地	館	やや 良	公有地 私有地	宅地, 畠 水田 寺社境内	曲輪, 土塁 水・空堀			204
211-018	野田柵	東根市大字野田	平地	櫛	地上遺構 消滅	私有地	畠	空堀, 土塁			204
211-019	羽入柵	東根市大字羽入	平地	館	不明	私有地	畠 墓地	土塁			205

212 尾花沢市

道 路 番 号	メ リ ャ リ ッ 名 称	所 在 地	占 地 状 況	種 别	残 有 状 況	所 有 關 係	現 況	造 構 の 状 況	地図 番 号	備 考	掲 載 ペ ジ
212-001	南沢通	尾花沢市大字南沢	河岸段丘	館	不良	私有地	山林	曲輪			206
212-02	岩谷沢通	尾花沢市大字岩谷沢	山頂	橋	良	私有地	山林	曲輪、瞭望堅堀 掘切			206
212-003	母袋通	尾花沢市大字母袋	河岸段丘	館	やや 良	寺社有地 私有地	寺社境内 畠、宅地	曲輪、堅堀		落合瀬	207
212-004	豊又山通	尾花沢市大字丹生	山頂	橋	やや 良	私有地	山林	曲輪			
212-005	矢越通	尾花沢市大字矢越	山林 丘陵先端	井	良	私有地	宅地	曲輪、掘切			207
212-006	持切通	尾花沢市大字押切	山頂	橋	良	私有地	山林	曲輪、空堀			208
212-007	行武通	尾花沢市大字行沢	丘陵先端	橋	良	私有地	山林 畠	曲輪、土壘 空堀、堅堀			208
212-008	長沢通	尾花沢市大字原田	平地	井	やや 良	私有地	水田 畠、山林	土壘、水堀 土堀			209
212-009	北原通	尾花沢市大字北原	河岸段丘	橋	やや 良	公有地	山林	曲輪、空堀 土壘			209
212-010	移山通	尾花沢市大字丹生	山頂	橋	良	寺社有地	山林、畠 寺社境内	曲輪、土壘 空堀			210
212-011	月生八幡通	尾花沢市大字丹生	山頂	井	やや 良	寺社有地	寺社境内	曲輪			210
212-012	牛頭寺通	尾花沢市大字牛頭哥	山頂	館	良	私有地	畠 山林	空堀、土壘 曲輪、虎口			211
212-013	二藤坂	尾花沢市大字二藤岱	河岸段丘	館	やや 良	私有地	畠、山林 家畜舎	曲輪、土壘 空堀			211
212-014	鶴見通	尾花沢市大字鶴見	山頂	館	良	公有地 私有地	山林	曲輪、土壘 空堀			212
212-015	大沢通	尾花沢市大字牛頭哥	山頂	橋	良	私有地	山林	曲輪、土壘 空堀、虎口		源内瀬 大沢通	212
212-016	鎌岡山通	尾花沢市大字丹生	山頂	橋	良	私有地	山林 寺社境内	曲輪、土壘 空堀			213
212-017	寺内八幡通	尾花沢市大字寺内	山頂	橋	良	私有地	山林 寺社境内	曲輪、土壘 空堀			214
212-018	寺内古通	尾花沢市大字寺内	丘陵先端	橋	良	私有地	山林	曲輪、たて堀			214
212-019	野川通	尾花沢市大字寺内	河岸段丘	館	良	私有地	山林	曲輪、土壘 空堀、虎口			215
212-020	尾花沢通	尾花沢市大字尾花沢	河岸段丘	井	地上遺構 消滅	公有地	小学校地	曲輪、空堀			216
212-021	名木沢通	尾花沢市大字名木沢	河岸段丘	館	やや 良	私有地	山林	曲輪、土壘 空堀、虎口		御座瀬	216
212-022	芦沢通	尾花沢市大字芦沢	独立丘	橋	やや 良	寺社有地	畠 寺社境内	曲輪、空堀		毛鹿瀬	217
212-023	上藤渡戸通	尾花沢市大字上藤渡戸	台地尖端	橋	良	私有地	畠、山林	曲輪・土壘 空堀		高橋瀬	217
212-024	いるかい通	尾花沢市大字鶴子	丘陵中腹 里	井	地上遺構 消滅	公有地 敷地	ホタル 池	曲輪、空堀			220
212-025	延沢城	尾花沢市大字延沢	山頂	館	良	公有地 私有地	山林、井戸 庭、遺跡物	曲輪、土壘、井戸 庭		葛山城 田史跡	218
212-026	猪沢通	尾花沢市大字猪沢	丘陵	橋	不良	私有地	山林	曲輪			220

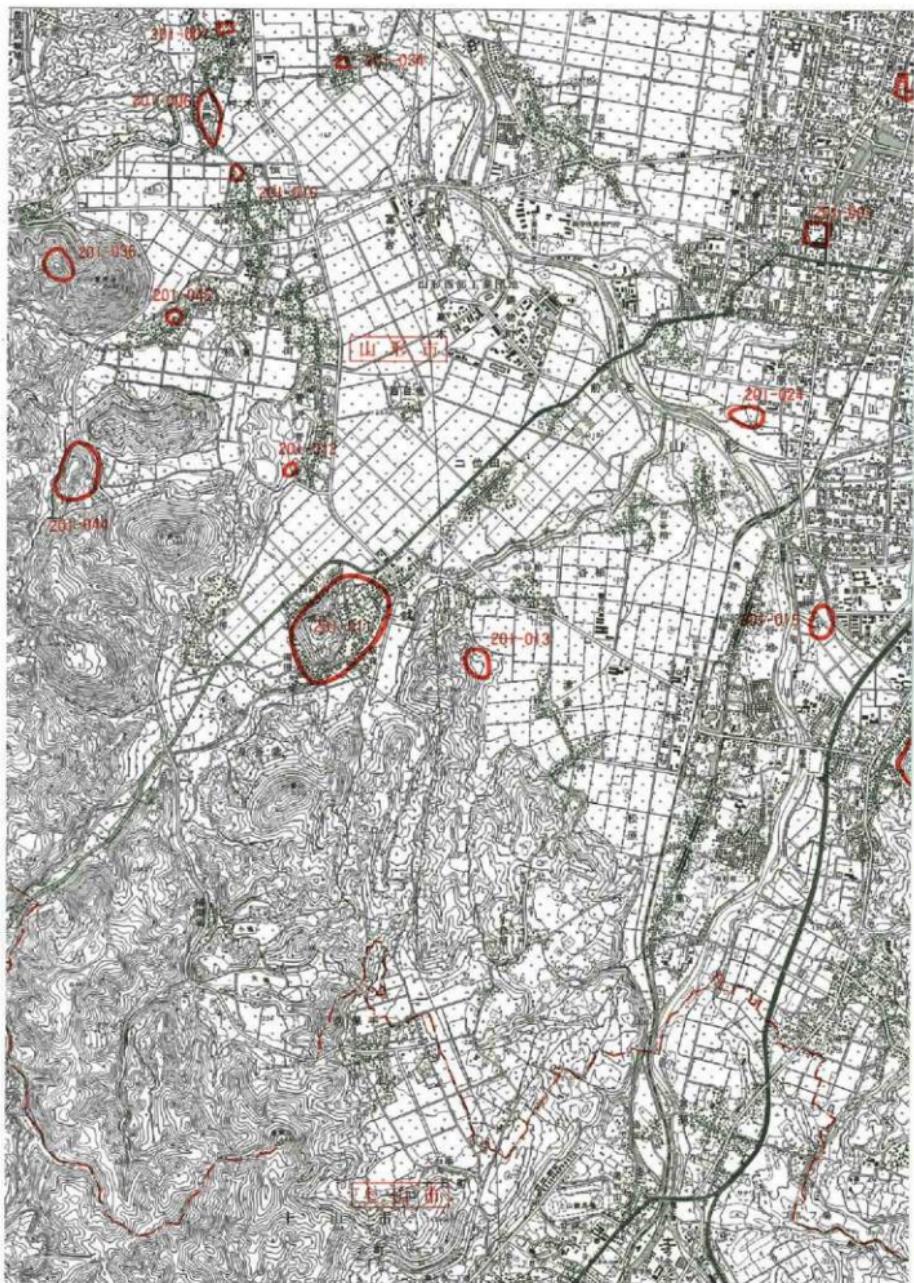
212 尾花沢市

道路 番号	ムラ名 称	所 在 地	占地状況	種別	現有状況	所有関係	現 況	道幅の状況	地図 番号	備 考	掲載 ページ
212-027	五十沢橋	尾花沢市大字五十沢 山頂	山地中腹 山頂	橋	良	寺社有地	寺社境内 山林	曲輪、豎堀			221
212-028	金森橋	尾花沢市大字五十沢 山頂	山頂	舊	廢	私有地	山林	曲輪、空堀 豎堀			220

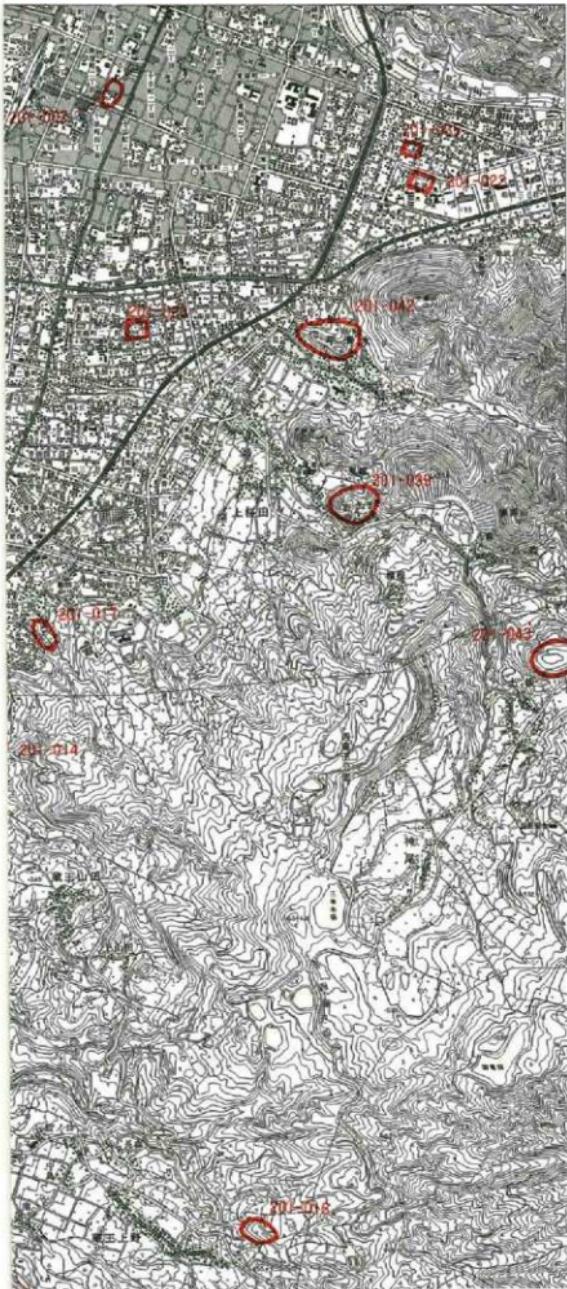
341 大石田町

地番 番号	地名 名称	所在 地	占地状況	種別	残有状況	所有關係	現況	造積の状況	地図 番号	備考	掲載 ページ
341-001	裏 崩鉢	大石田町大字蘿果	河岸段丘	館	やや 良	私有地	畠、水田	曲輪、虎口 空堀、土塁			222
341-002	前鉢館	大石田町大字蘿果	河岸段丘	館	やや 良	私有地	水田、畠	曲輪、空堀			222
341-003	川前館	大石田町大字川前	山頂	館	やや 良	寺社有地	山林 寺社境内	曲輪、空堀 土塁			223
341-004	井出館	大石田町大字大石田	河岸段丘	館	不良	私有地	変電所地 畠、宅地	曲輪、土塁 空堀、耕形			223
341-005	次平子館	大石田町大字次年子	独立丘	畠	良	私有地	山林、畠	曲輪、土塁 空・たて掘	合戸城		224
341-006	黒龍館	大石田町大字横山	山頂	皆	やや 良	寺社有地	山林、 寺社境内	曲輪			224
341-007	横山館	大石田町大字横山	山頂	皆	やや 良	私有地	山林	曲輪			225
341-008	来迎寺館	大石田町大字横山	平地	館	地上造構 消滅	私有地	畠、宅地 国道用地	空堀			225
341-009	塩ノ沢館	大石田町大字横山	台地末端	館	良	私有地	畠	曲輪、空堀 土塁			226
341-010	小屋館	大石田町大字今宿	独立丘	館	やや 良	私有地	山林	曲輪、空堀 土塁	小屋立		226

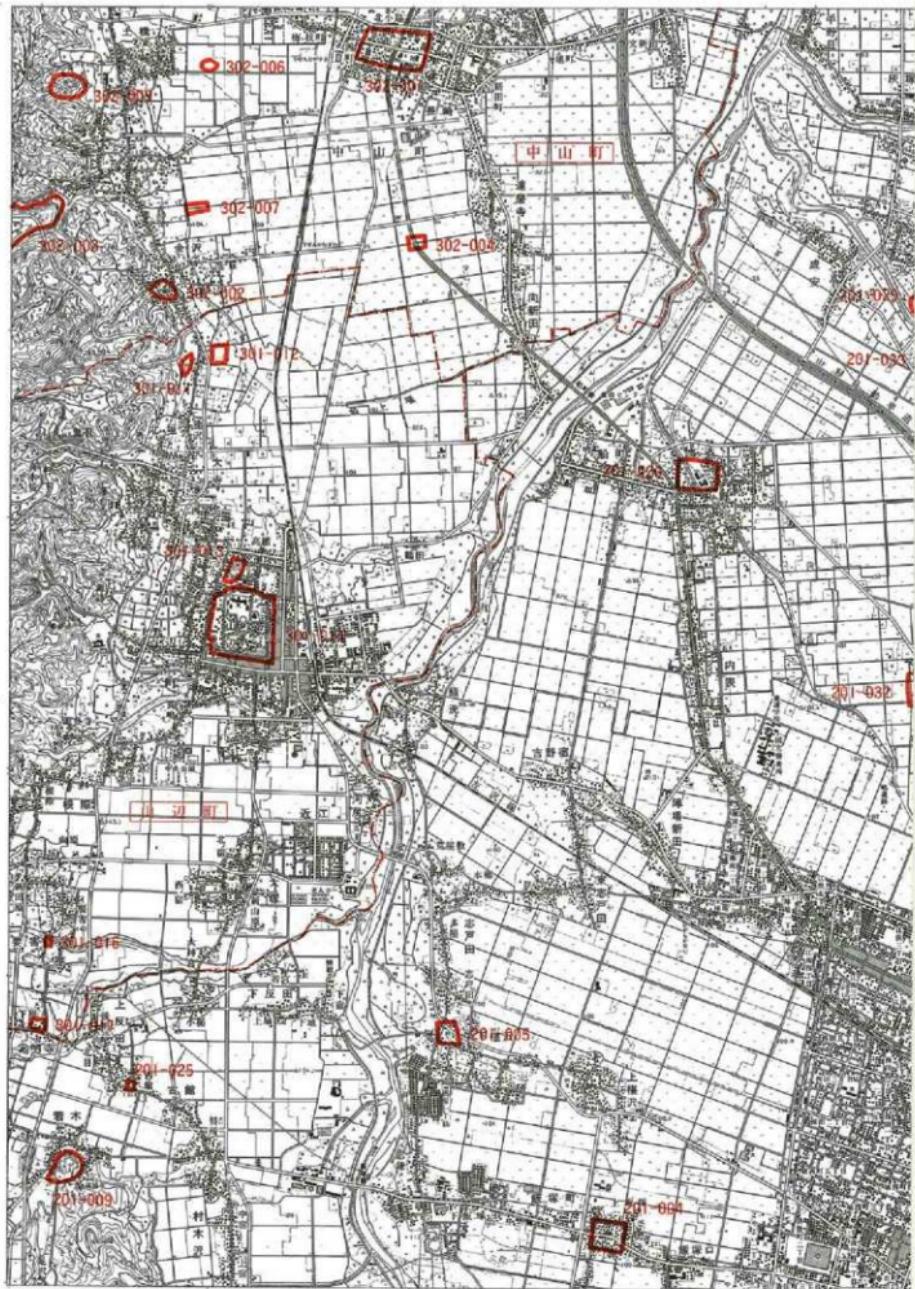
IV 城館遺跡分布図



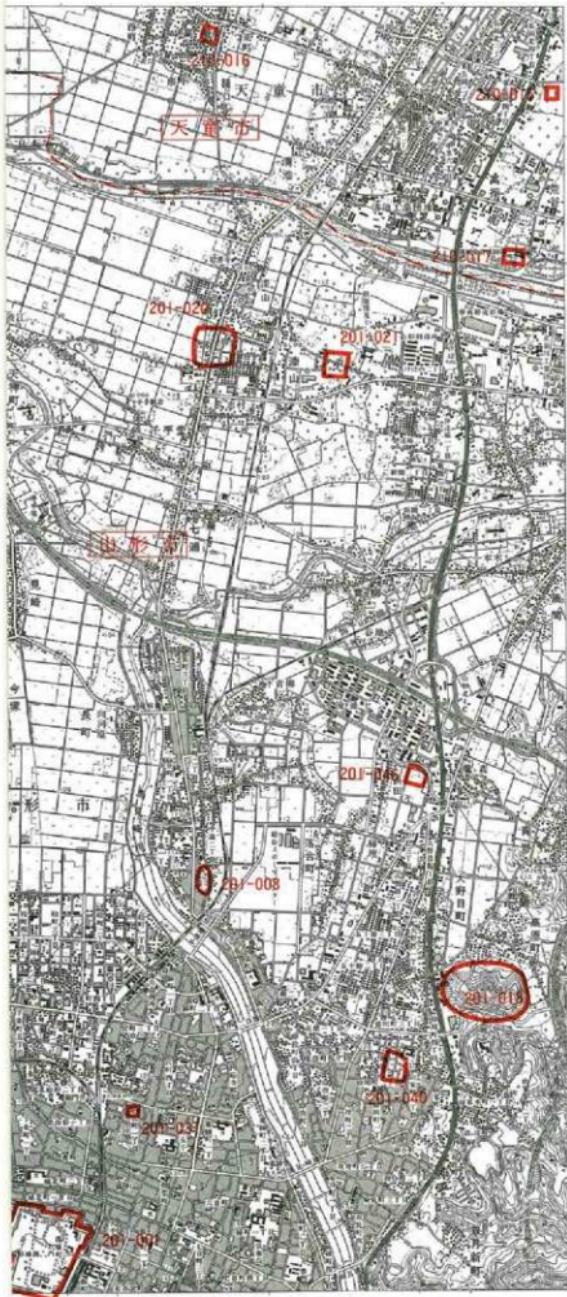
山形南部



- 201 山形市
- 201-002 山形城三ノ丸
- 201-003 南館
- 201-006 村木沢橋
- 201-007 台の上館
- 201-010 門伝館
- 201-011 長谷堂城
- 201-012 菅沢山本陣跡
- 201-013 谷柏館
- 201-014 成沢城
- 201-015 泉出城
- 201-016 上野館
- 201-017 飯田館
- 201-022 三浦屋敷
- 201-023 荒堀
- 201-024 若宮館
- 201-034 局屋敷
- 201-035 金谷館
- 201-036 曲森山城
- 201-039 岩波館
- 201-042 平清水館
- 201-043 横山堀
- 201-044 柏倉館山館
- 201-045 柏倉館



山形北部

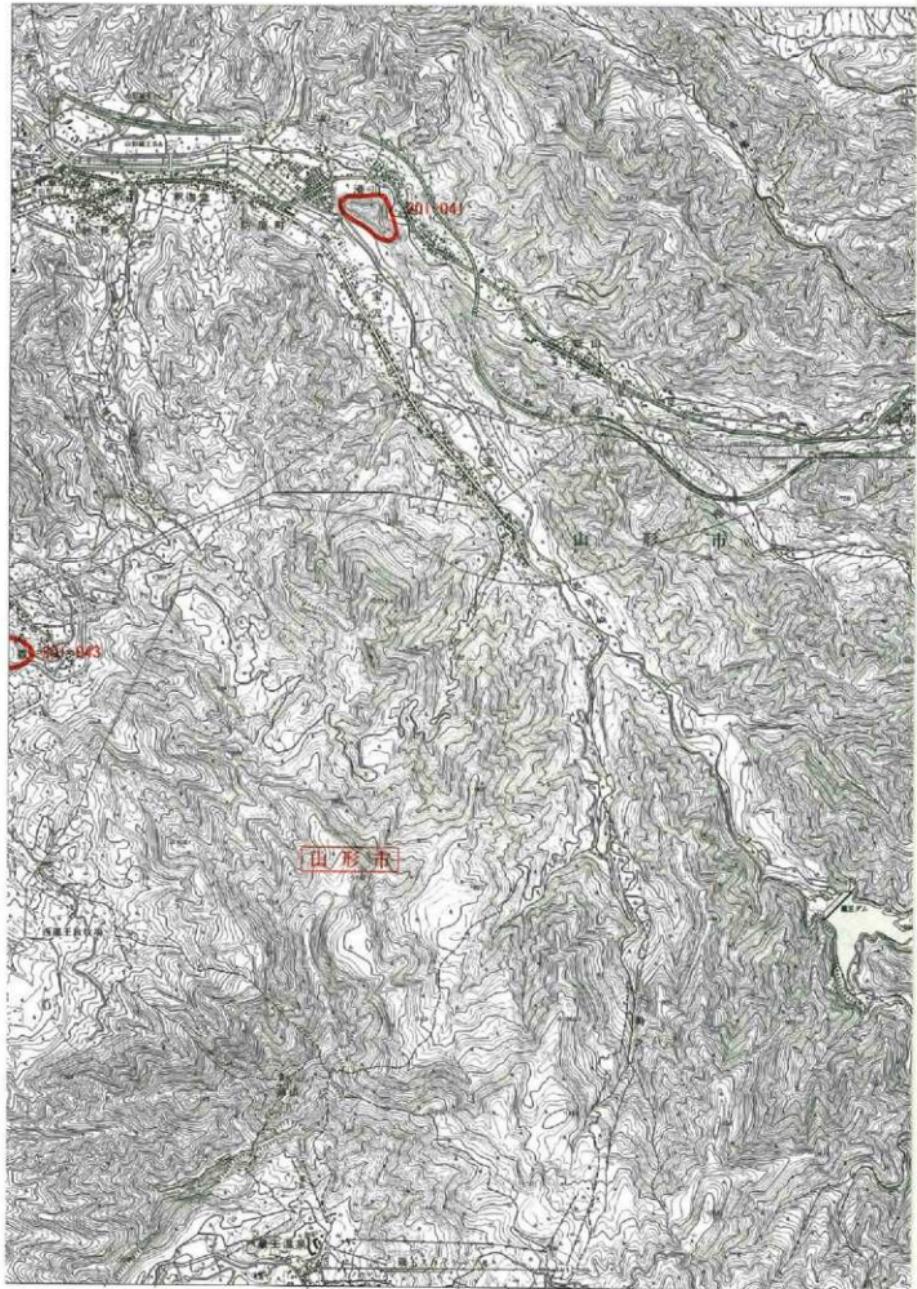


- 201 山形市
201-001 山形城二ノ丸
201-004 飯塚館
201-005 椿沢櫓
201-008 落合館
201-009 若木館
201-018 山家館
201-020 漆山館
201-021 伊達城
201-025 古櫓
201-026 中野城
201-029 渋江館
201-031 西根小倅馬屋敷
201-032 今塚櫓
201-033 同心屋敷
201-040 内城
201-046 浜田館

- 210 天童市
210-015 椿の城
210-016 高塙城
210-017 伊達城

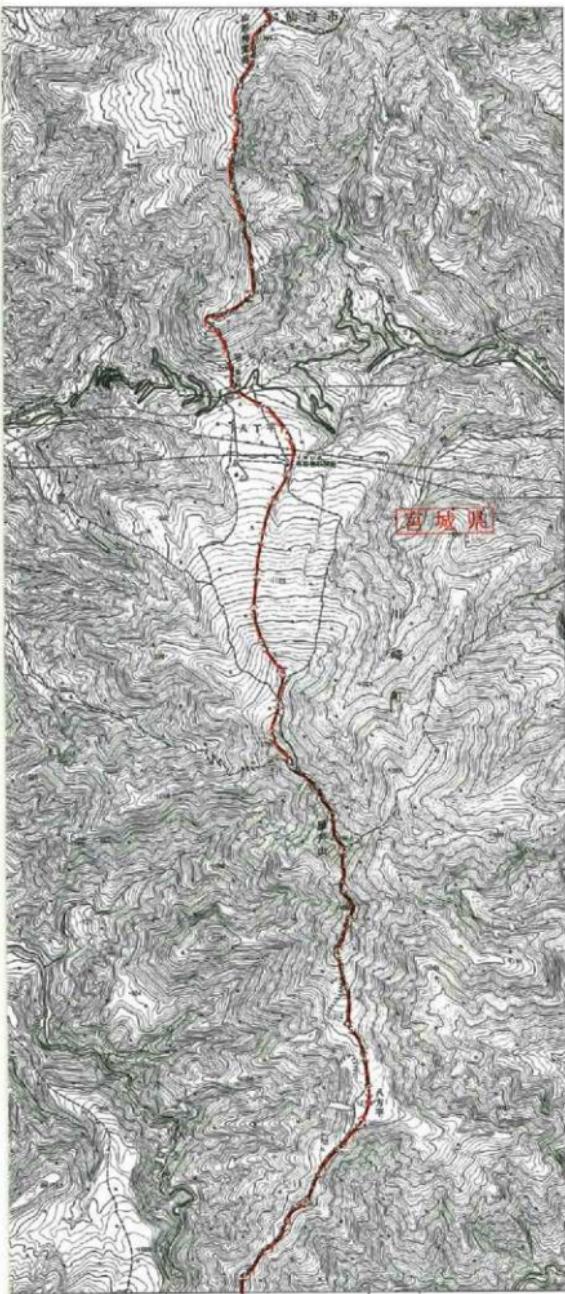
- 301 山辺町
301-011 西光山館
301-012 新館
301-013 高瀬城
301-014 山野辺城
301-016 稲幡城
301-017 佐藤理兵衛屋敷

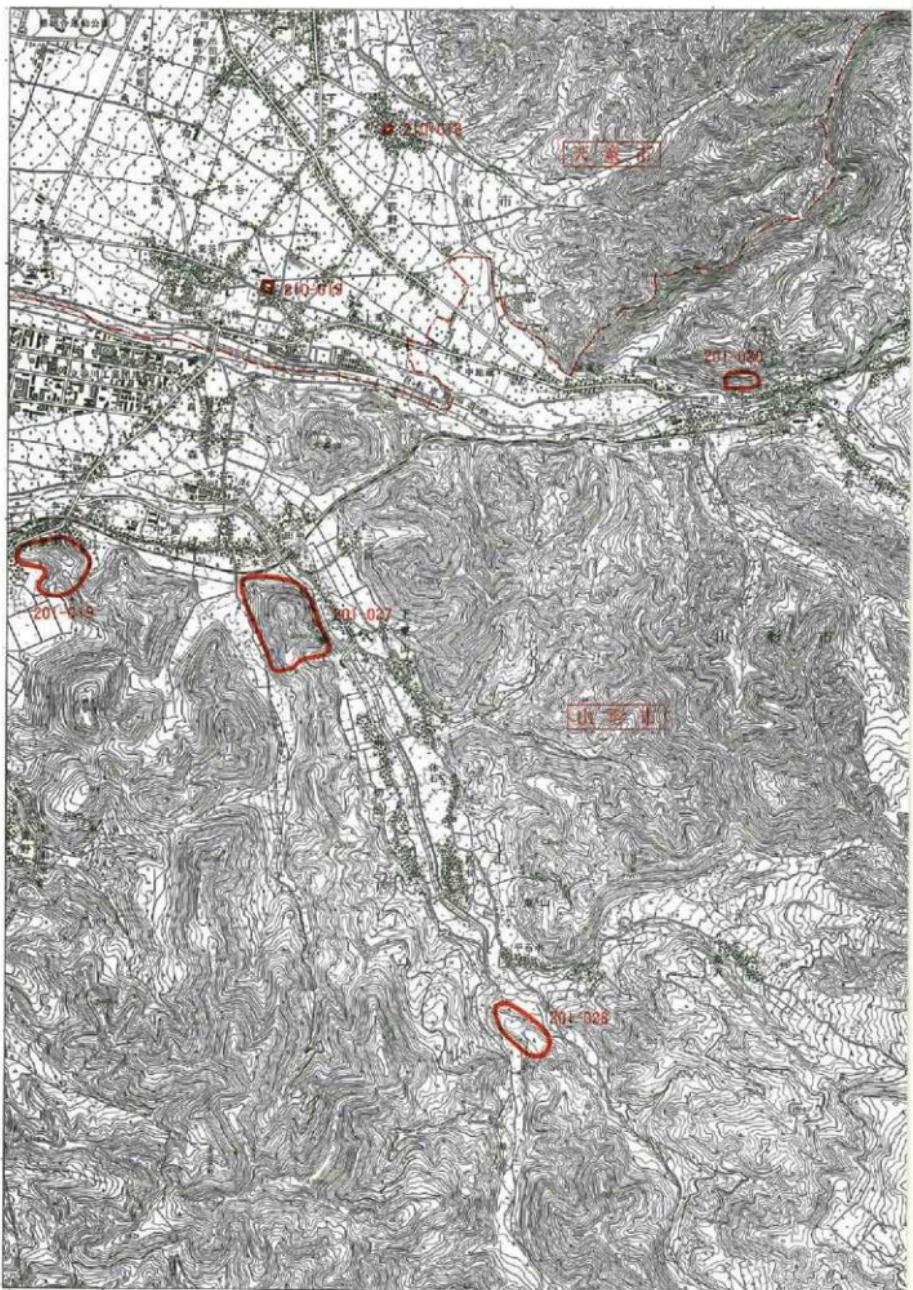
- 302 中山町
302-001 長崎櫓
302-002 鎌屋敷
302-003 谷木沢櫓
302-004 松下屋敷
302-006 金屋敷
302-007 竹ノ花
302-009 樋堂・樋戸



笹谷峠

201 山形市
201-041 行沢館
201-043 標山標



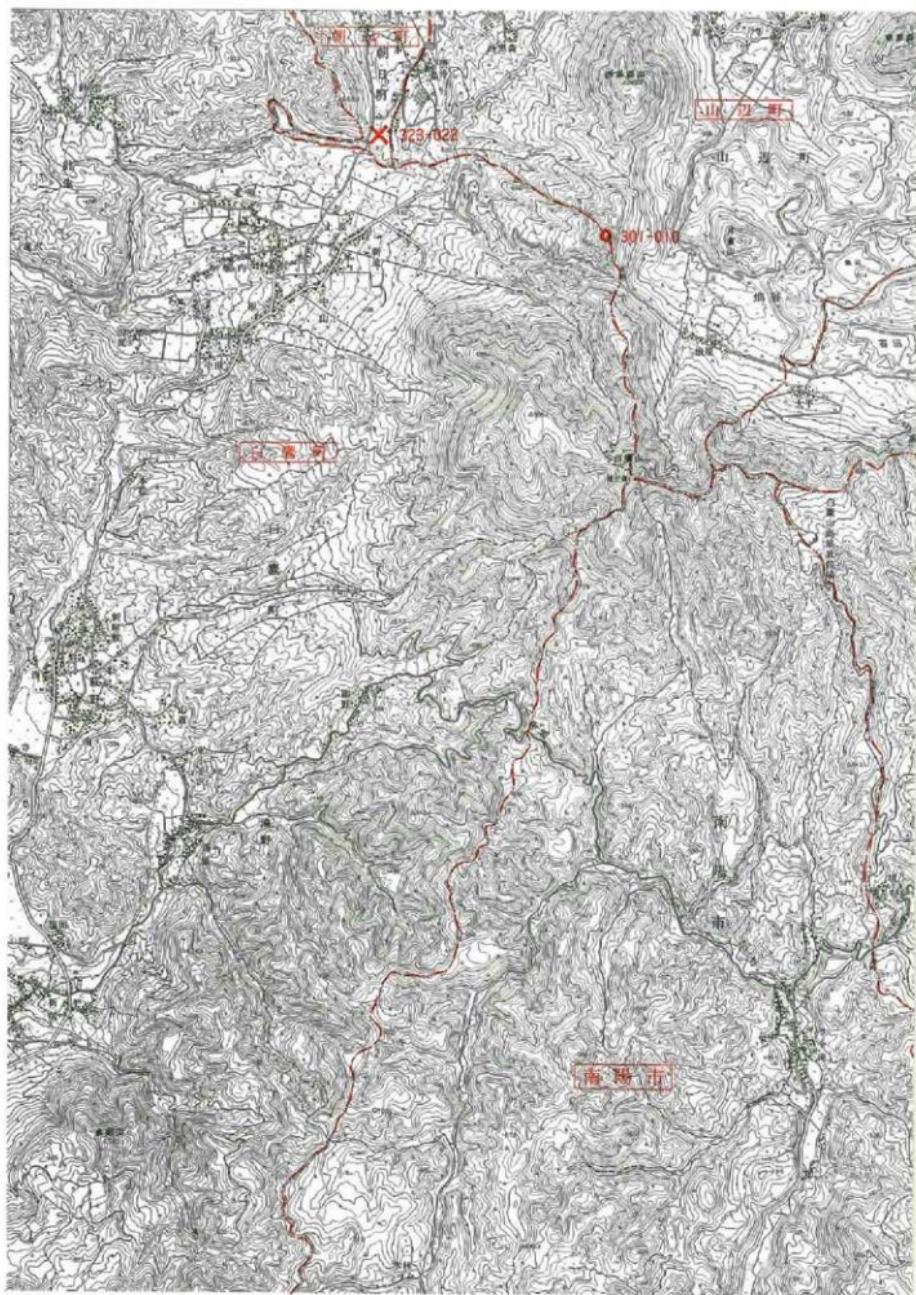


山寺

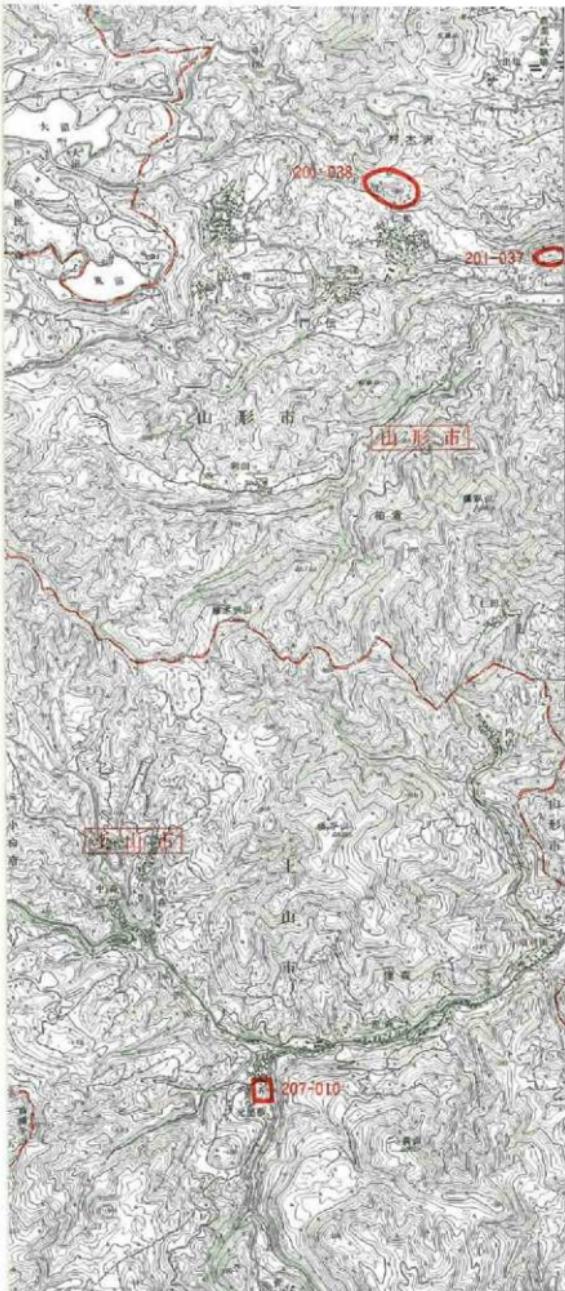
201 山形市
201-019 風間館
201-027 中里館
201-028 大ヶ峰館
201-030 大橋館

210 天童市
210-018 石倉館
210-019 長者屋敷





白鷹山

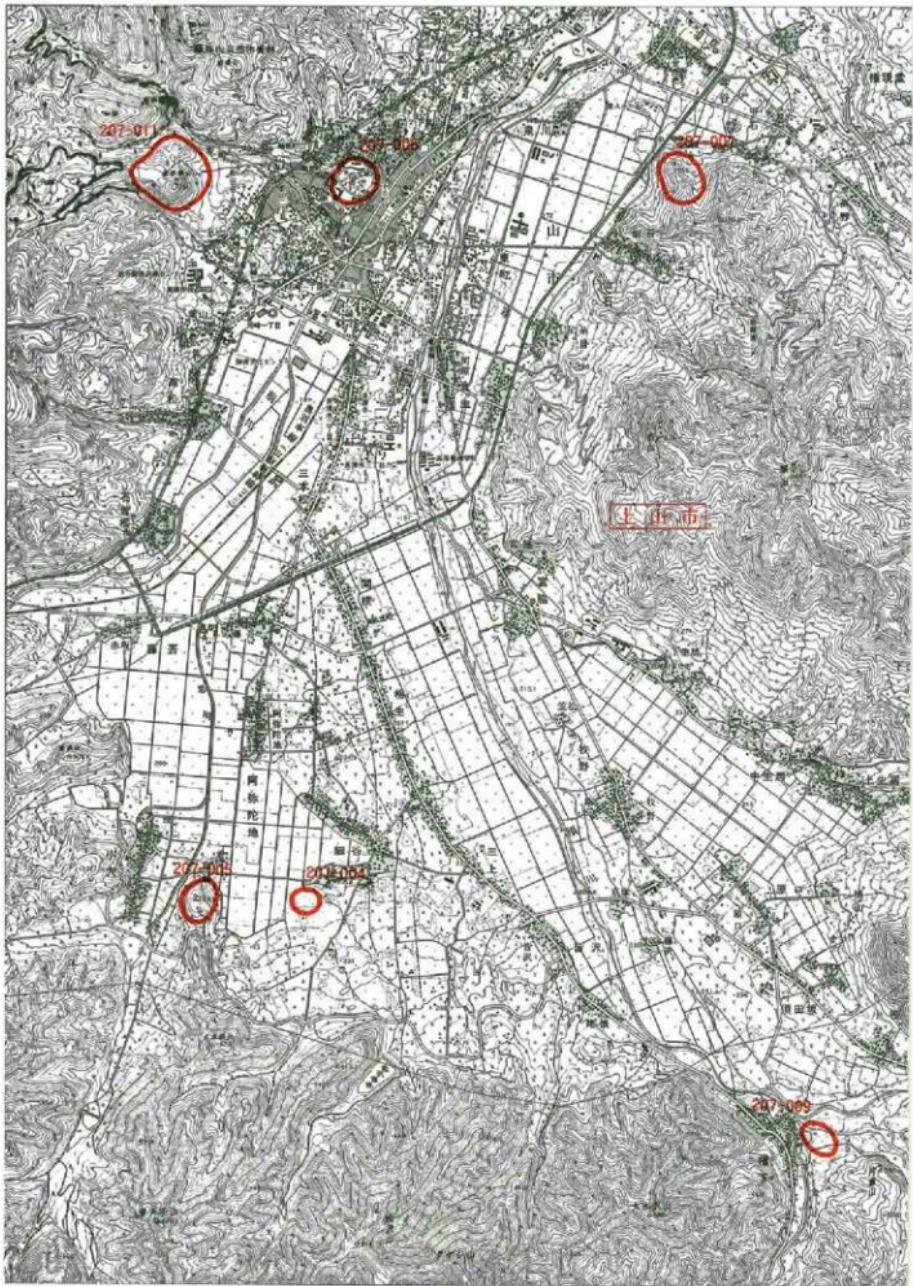


201 山形市
201-037 滝の山橋
201-038 オガグラ山橋

207 上山市
207-010 元屋敷館

301 山辺町
301-010 三森山見張所

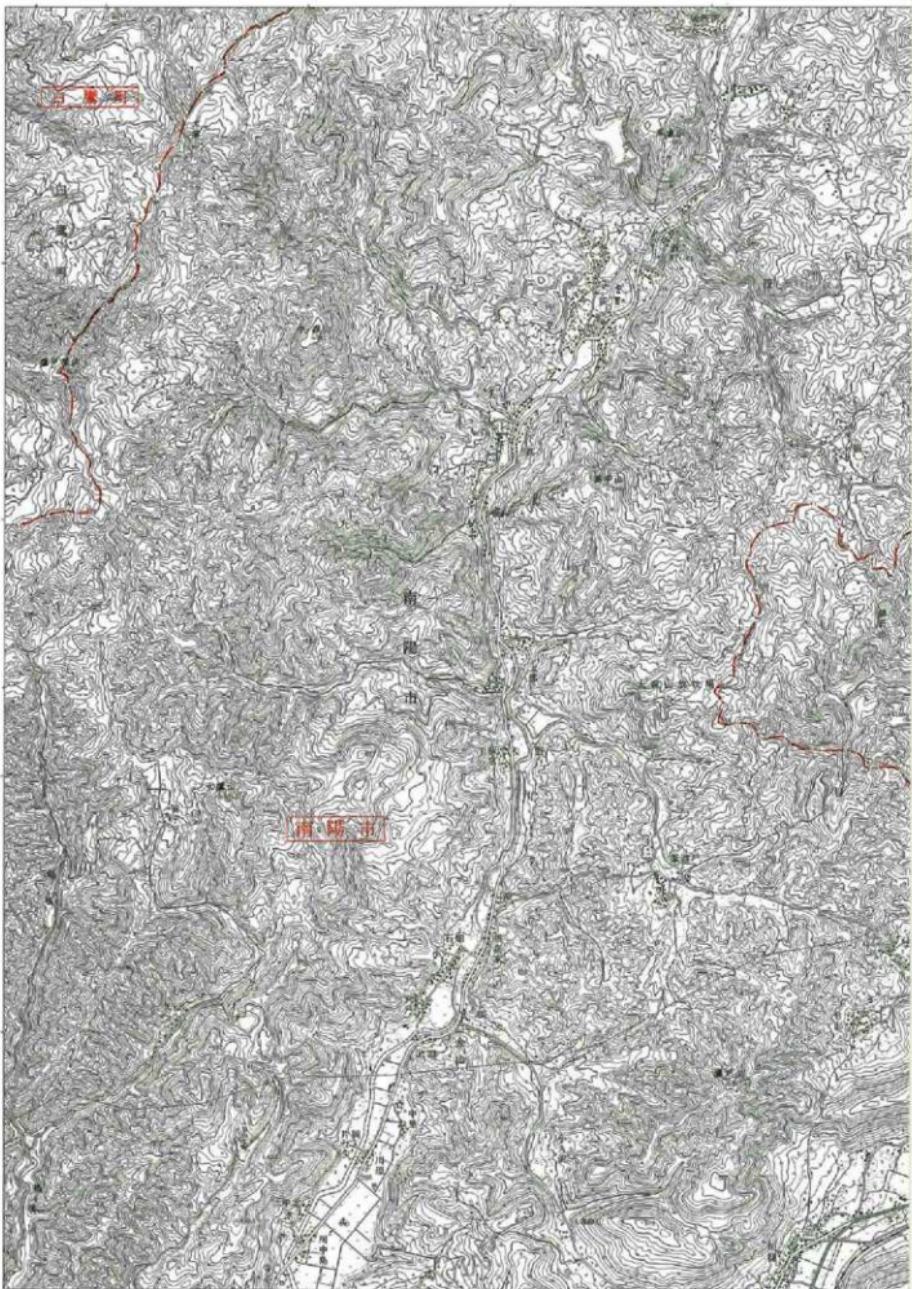
323 朝日町
323-022 里敷跡 (通称)



上山

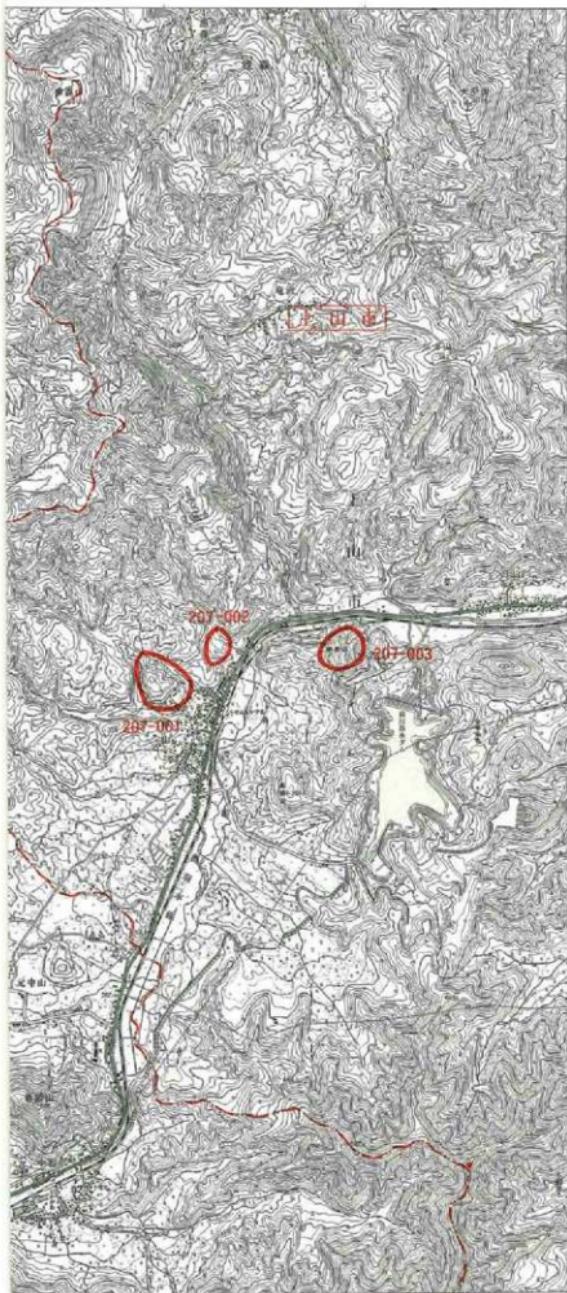
- 207 上山市
- 207-004 細谷館
- 207-005 陣山城
- 207-006 月岡城
- 207-007 遠館
- 207-008 立山館
- 207-009 橋下城
- 207-011 高橋城

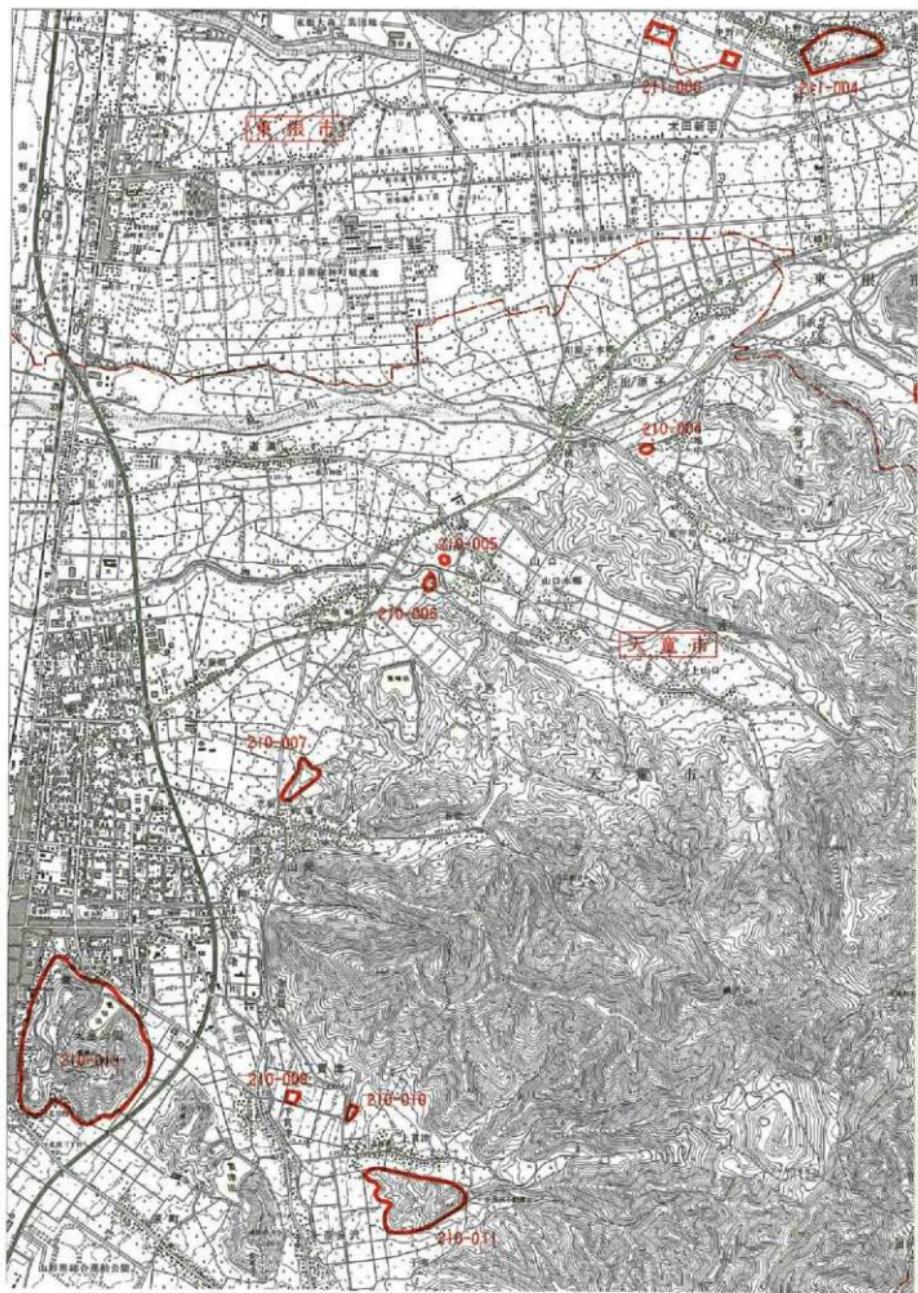




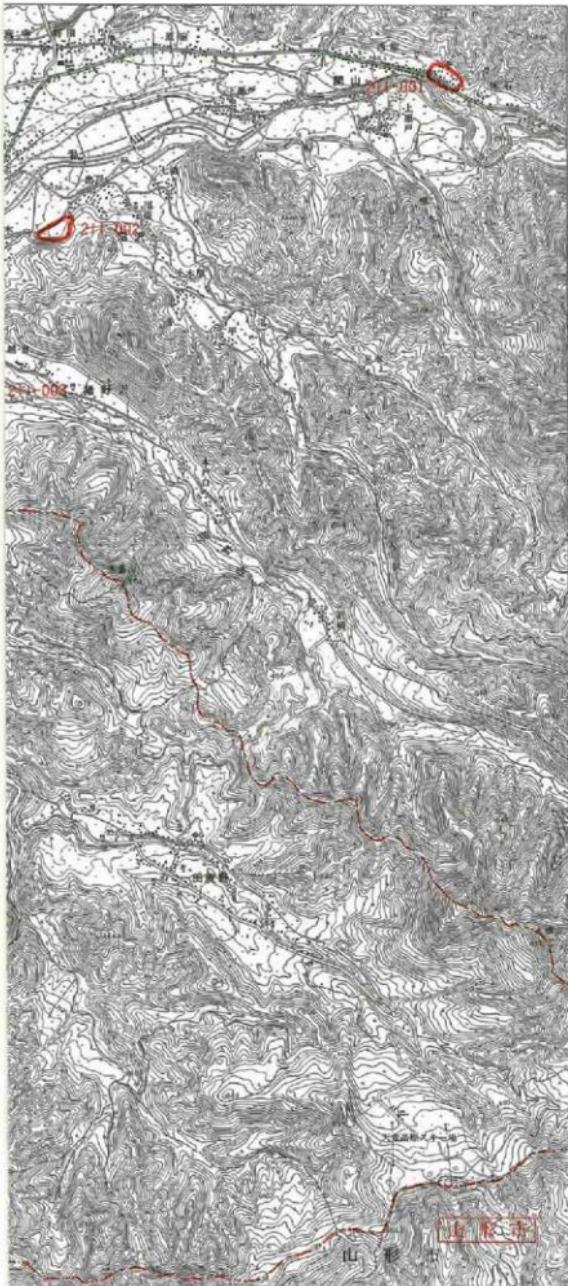
羽前中山

207 上山市
207-001 中山城
207-002 上ノ山館
207-003 物見山館





天童



210 天童市

210-004 中堀館

210-005 下山口館

210-006 浅岡館

210-007 小山家城

210-009 中島館

210-010 山崎山館

210-011 新城山館

210-013 天童古城

211 東根市

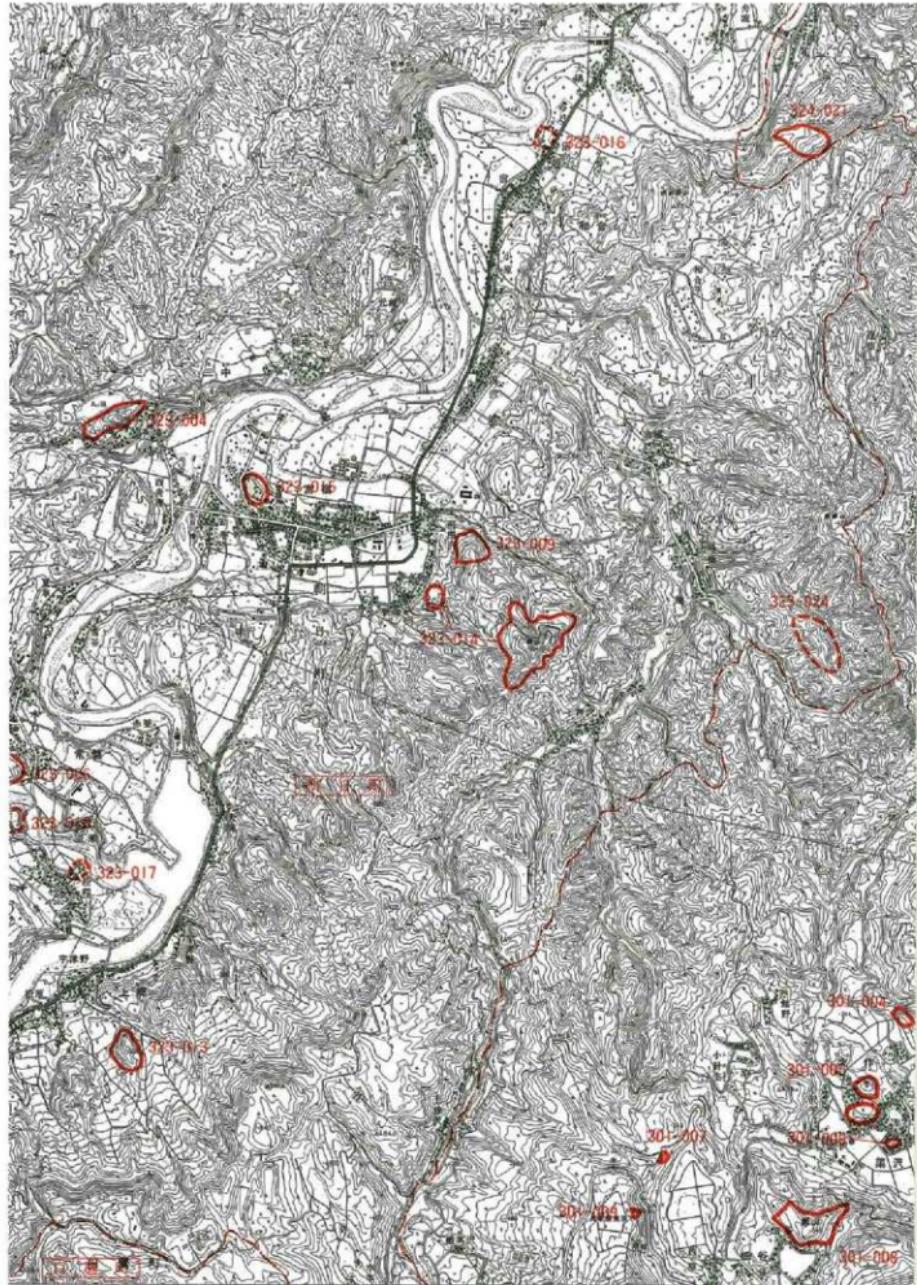
211-001 関山休石樋

211-002 沼沢要害樋

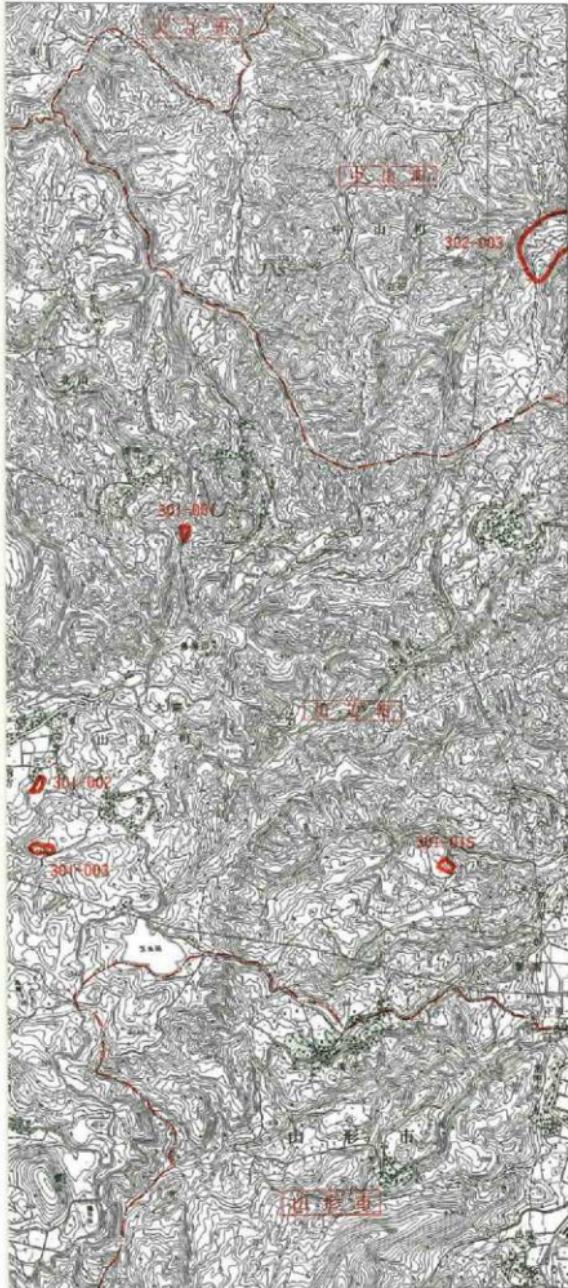
211-003 楠烟樋

211-004 野川樋

211-006 二階堂屋敷



宮宿

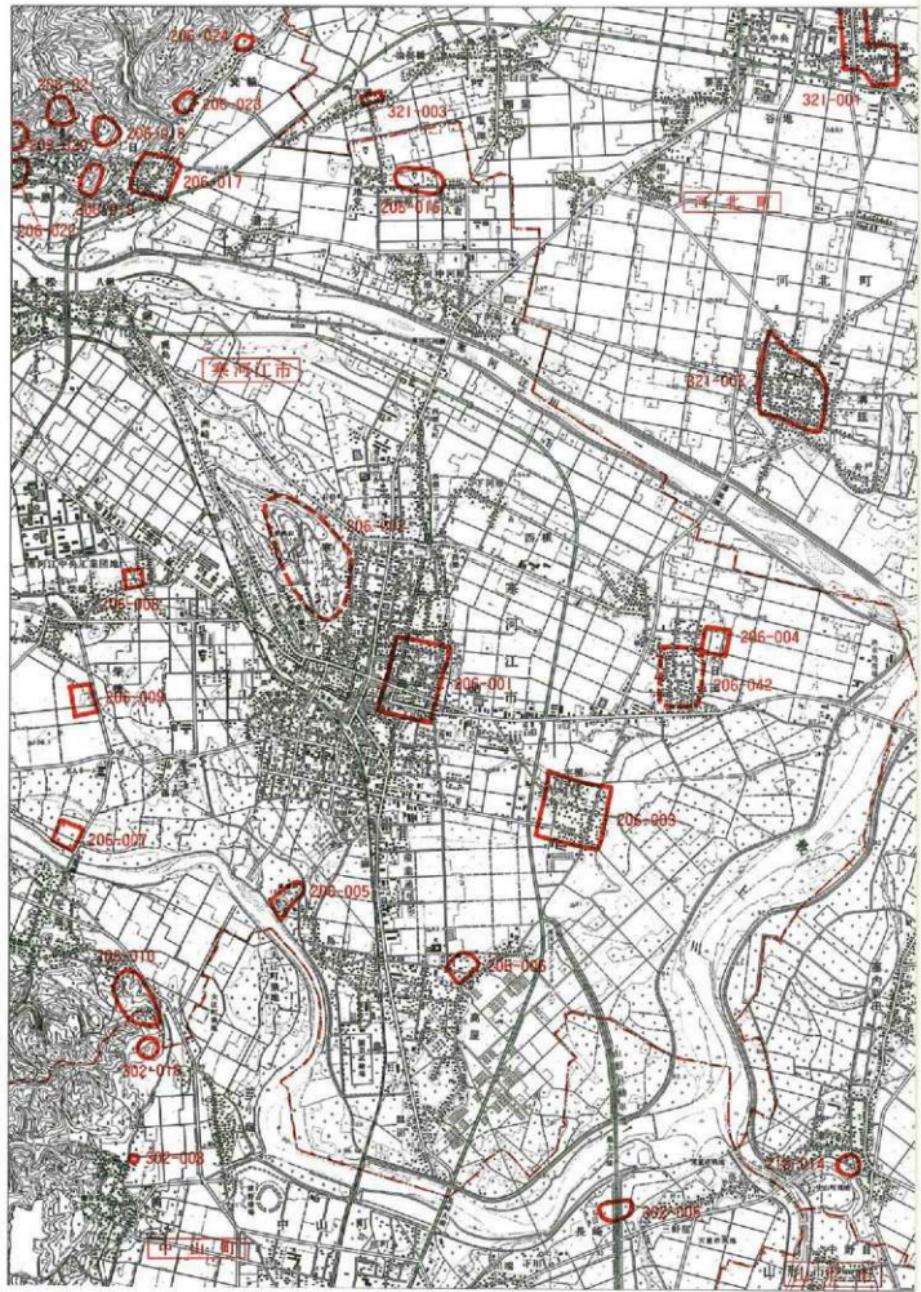


301 山辺町
301-001 標の峯館
301-002 蓋沢館
301-003 荒谷館
301-004 大畑館
301-005 橋山館
301-006 梁沢館
301-007 しだみ沢陣所
301-008 煙谷城
301-009 鎌板陣所土塁
301-010 藤内山柵

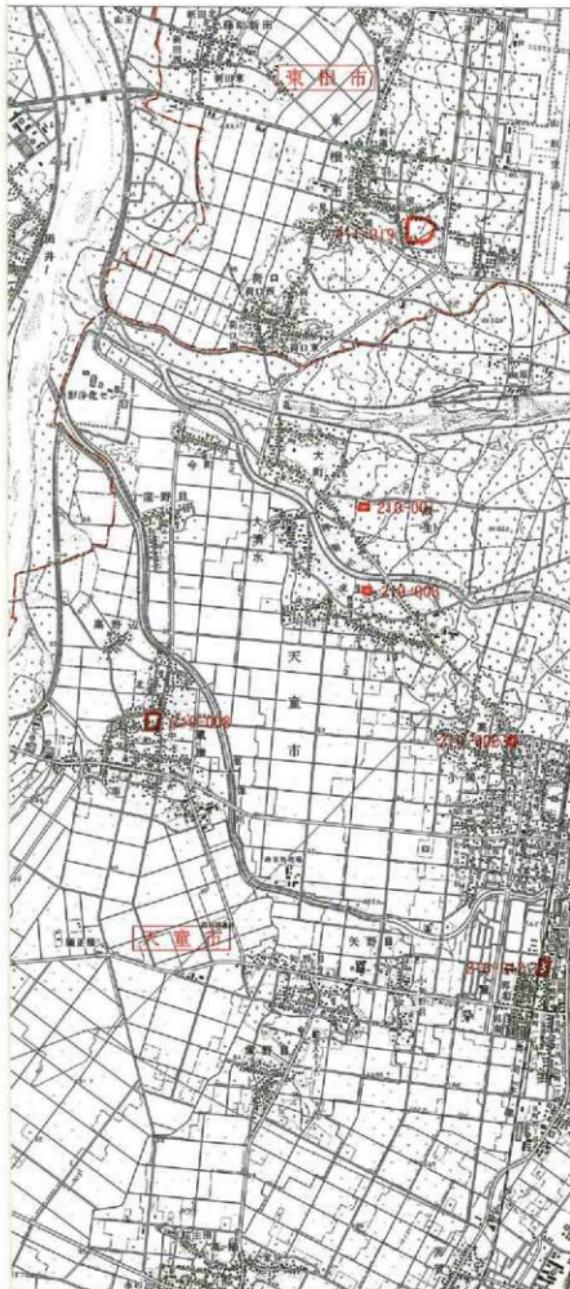
302 中山町
302-003 谷木沢柵

323 朝日町
323-004 八ツ沼城
323-006 水口柵
323-009 前田沢柵
323-013 宇津野館
323-014 鳥巣カ森城
323-015 豊龍館
323-016 和合館
323-017 松程柵
323-018 皆朱沢柵
323-024 送橋館

324 大江町
324-021 南山柵



寒河江



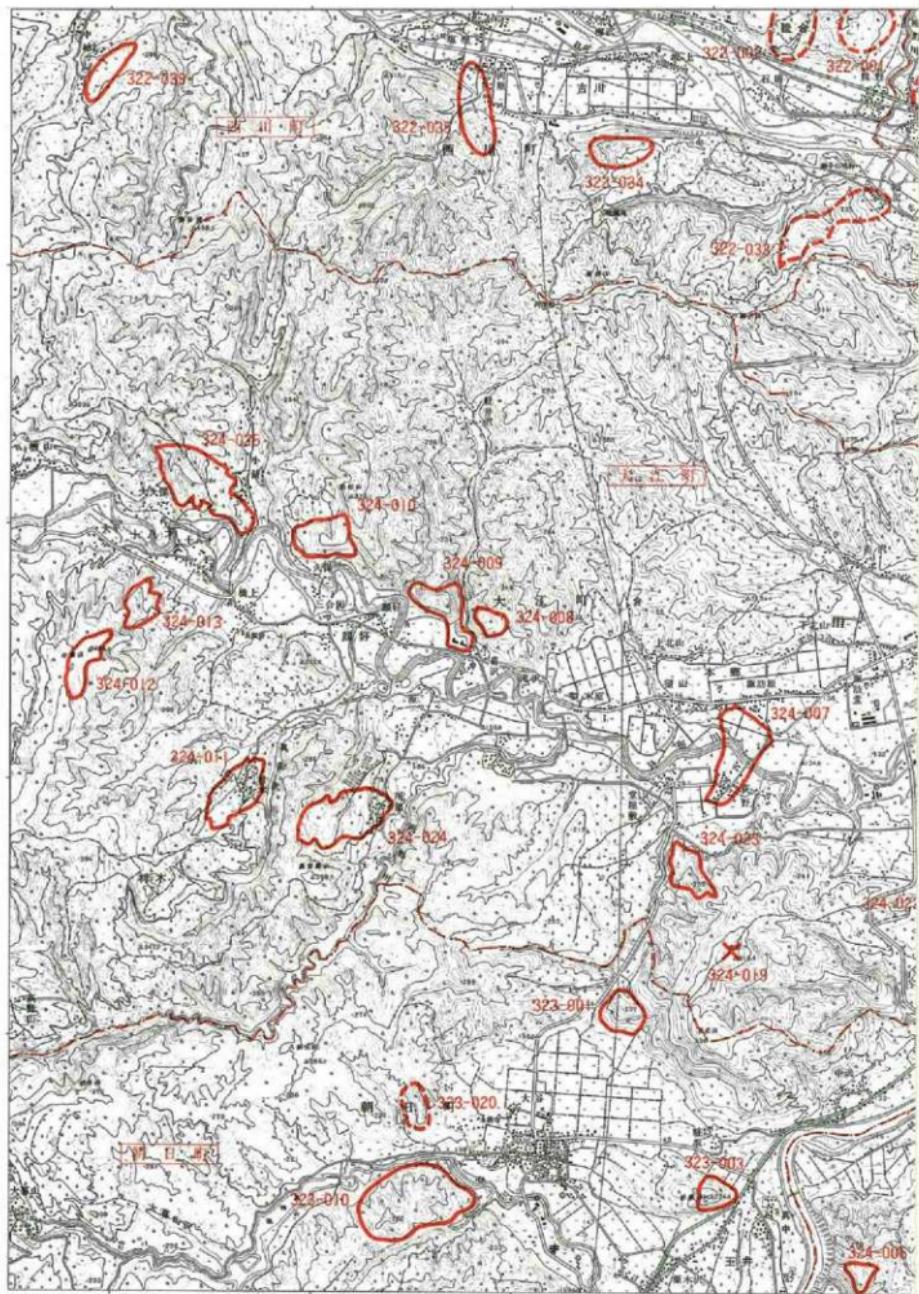
- 206 寒河江市
- 206-001 寒河江城
- 206-002 長岡山樋
- 206-003 本橋館
- 206-004 新田樋
- 206-005 高瀬山樋
- 206-006 高麗樋
- 206-007 落衣長者屋敷
- 206-008 柴橋樋
- 206-009 高松樋
- 206-010 山崎樋
- 206-016 小泉樋
- 206-017 日和田樋
- 206-018 尾山樋
- 206-019 ゴロビツ樋
- 209-020 松蔭樋
- 206-021 肥前樋
- 206-022 田沢要害
- 206-023 箕輪上屋敷
- 206-024 箕輪下屋敷
- 206-025 箕輪新樋
- 206-042 日田城の内

- 210 天童市
- 210-001 二階堂館
- 210-002 高木館
- 210-003 成生館
- 210-008 蔵増城
- 210-012 天童織田館
- 210-014 寺津城

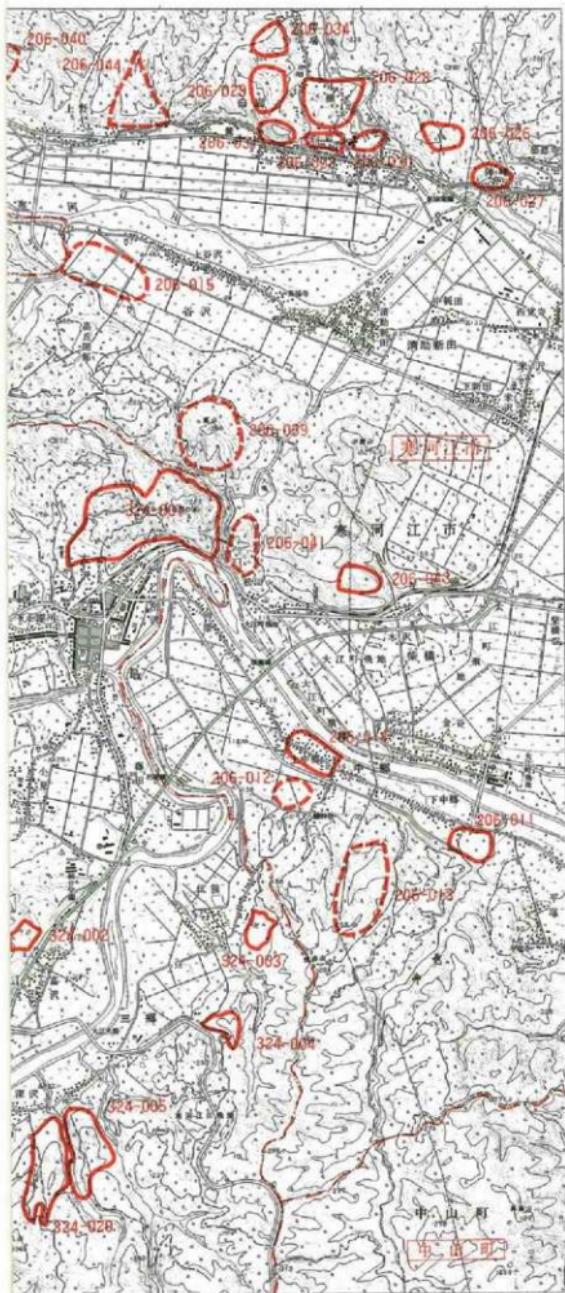
- 211 東根市
- 211-019 羽入樋

- 302 中山町
- 302-005 物見台
- 302-008 竹ノ花
- 302-010 殿森山

- 321 河北町
- 321-001 谷地城
- 321-002 溝延城
- 321-003 境介次郎屋敷



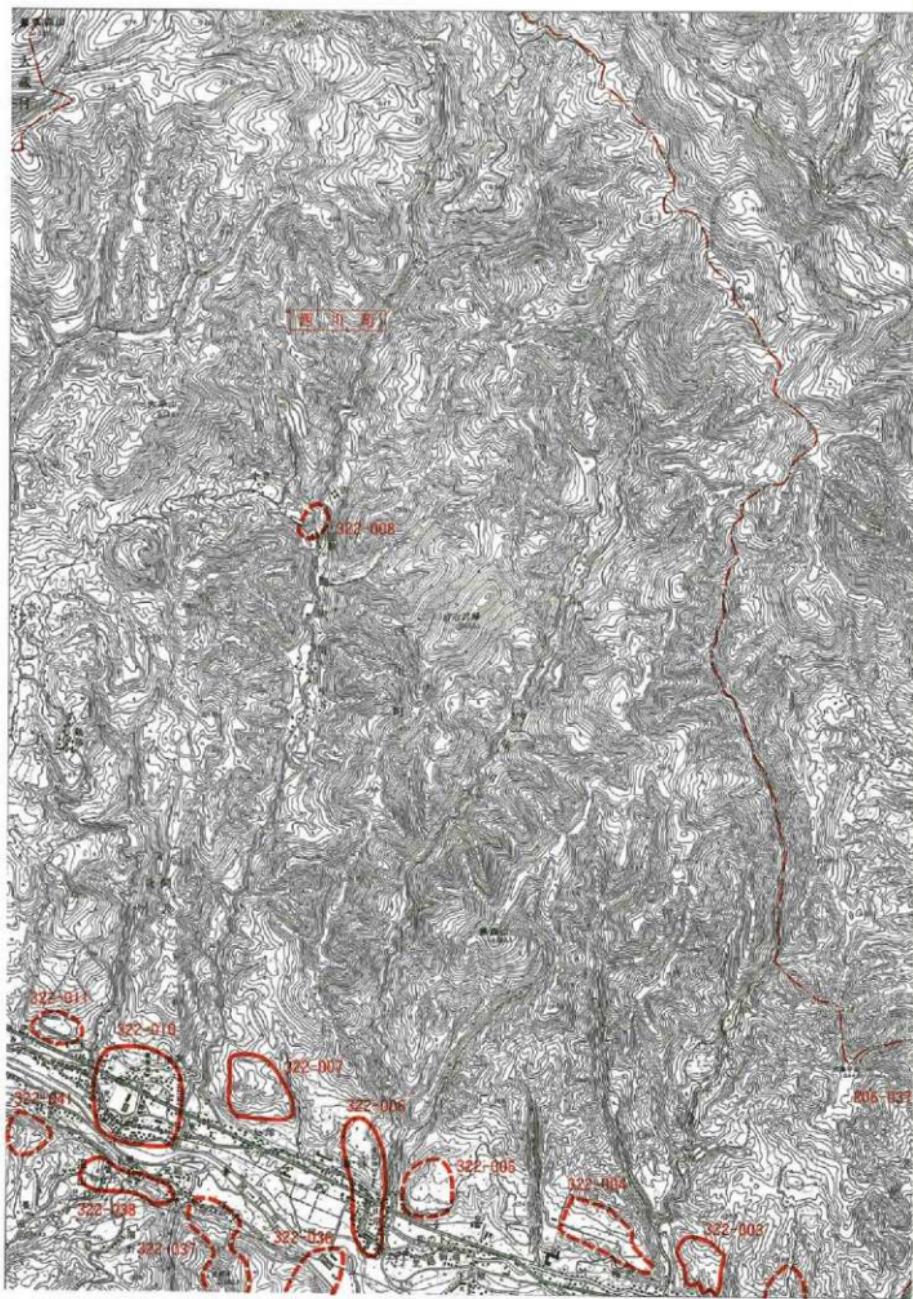
左 沢



- 206 寒河江市
 206-011 中郷本屋敷
 206-012 中郷中屋敷
 206-013 小屋館山
 206-014 中郷堤の内
 206-015 谷沢元屋敷
 206-026 陣ヶ峰樋
 206-027 陣ヶ峰要害
 206-028 白岩稻荷山樋
 206-029 白岩新樋
 206-030 白岩出城
 206-031 白岩上樋山
 206-032 白岩八幡樋
 206-034 留場の場
 206-039 柳沢樋
 206-040 富山樋
 206-041 松川樋
 206-043 木の沢樋
 206-044 白岩大沢樋
 324 大江町
 324-001 左沢堀山城
 324-002 富沢城
 324-003 護真寺館
 324-004 田沢山樋
 324-005 深沢樋
 324-006 用大丈樋
 324-007 萩袋城
 324-008 葛沢樋
 324-009 顔好城
 324-010 若松山樋
 324-011 材木城
 324-012 小倉山樋
 324-013 十八才城
 324-019 日光山樋
 324-020 三百山樋
 324-022 手白樋
 324-023 岩木樋
 324-024 所部樋
 324-025 小新樋

- 322 西川町
 322-001 熊野樋
 322-002 長登樋
 322-003 稲沢樋
 322-034 横際樋
 322-035 吉川館
 322-039 向牛崎樋 (中越樋)

- 323 朝日町
 323-001 猿田樋
 323-003 秋葉山樋
 323-010 真木山城
 323-020 八鉢台の壘

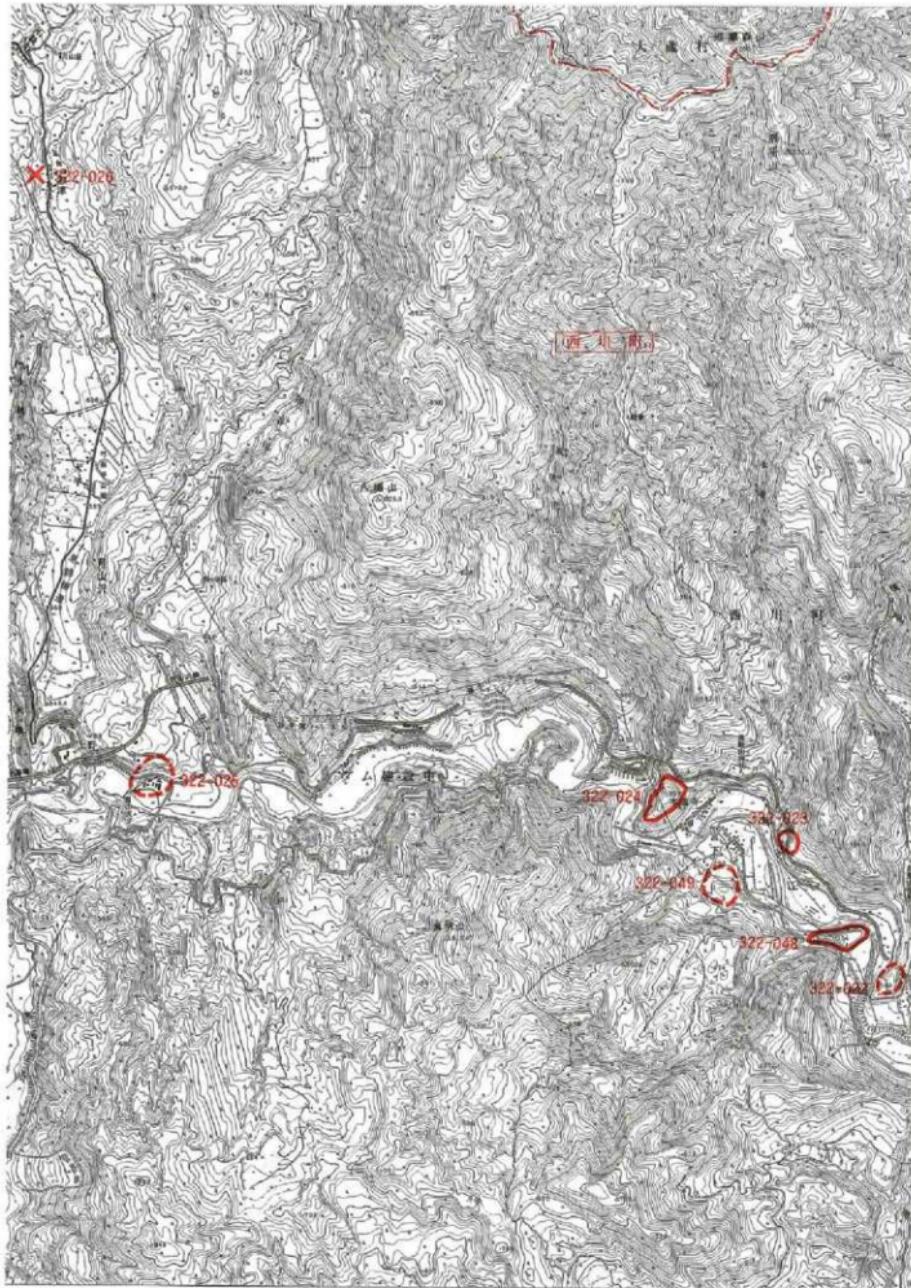


海味

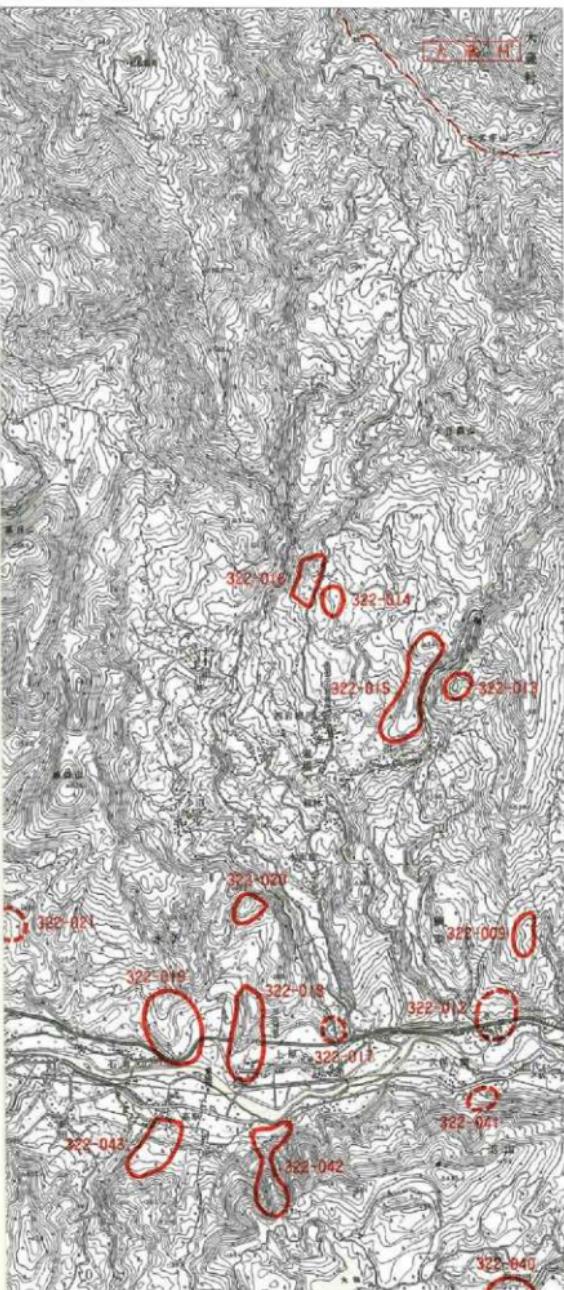
206 寒河江市
206-033 留場樋
206-035 田代樋
206-036 日山樋
206-037 宮内樋
206-038 東海林樋

322 西川町
322-003 鰐合樋
322-004 梅沢樋
322-005 松ノ下樋
322-006 海味館
322-007 太郎山樋
322-008 下屋敷樋
322-010 間沢樋
322-011 サッテロ樋
322-036 小月山樋
322-037 天狗山樋
322-038 泥山樋(要害樋)
322-041 田代樋

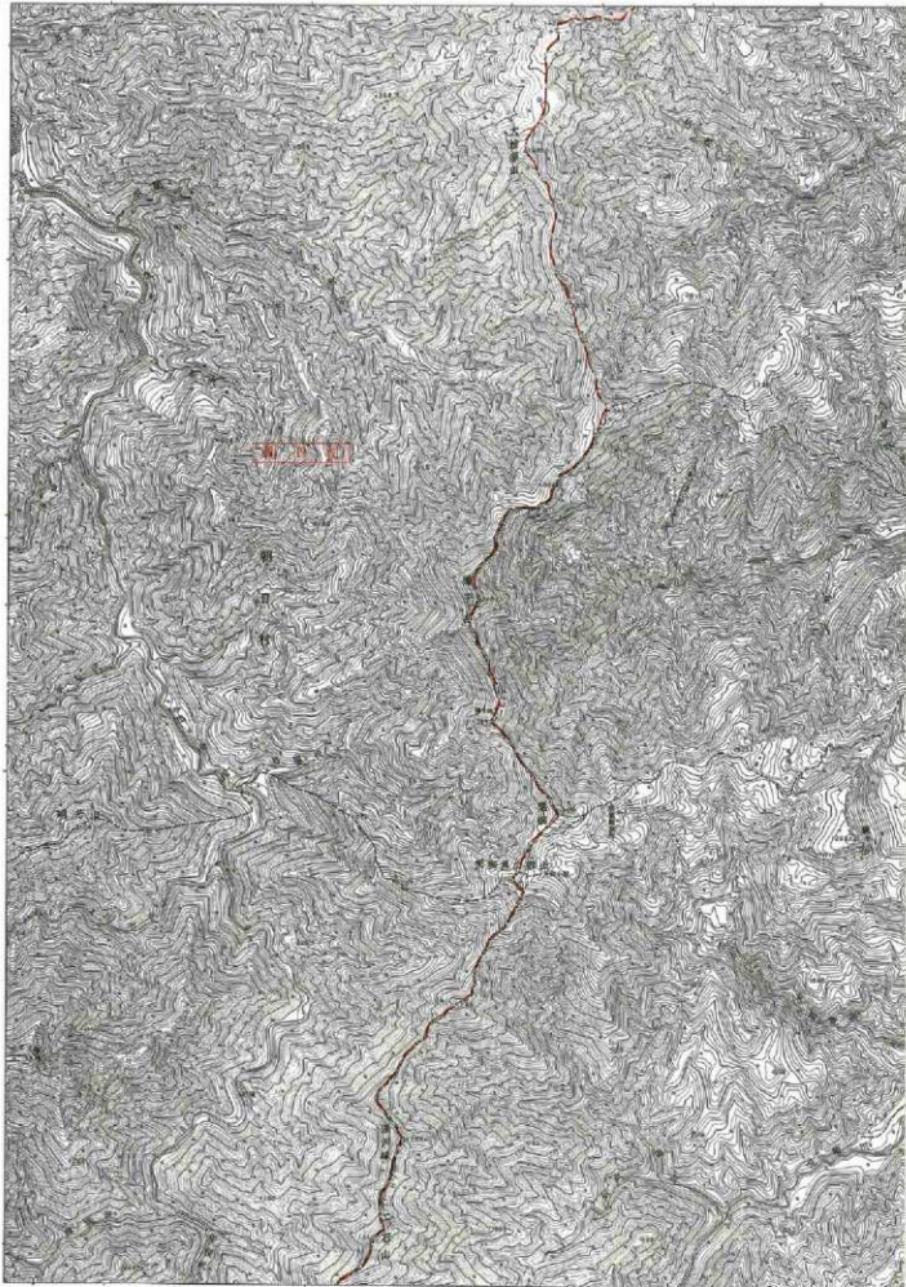




本道寺

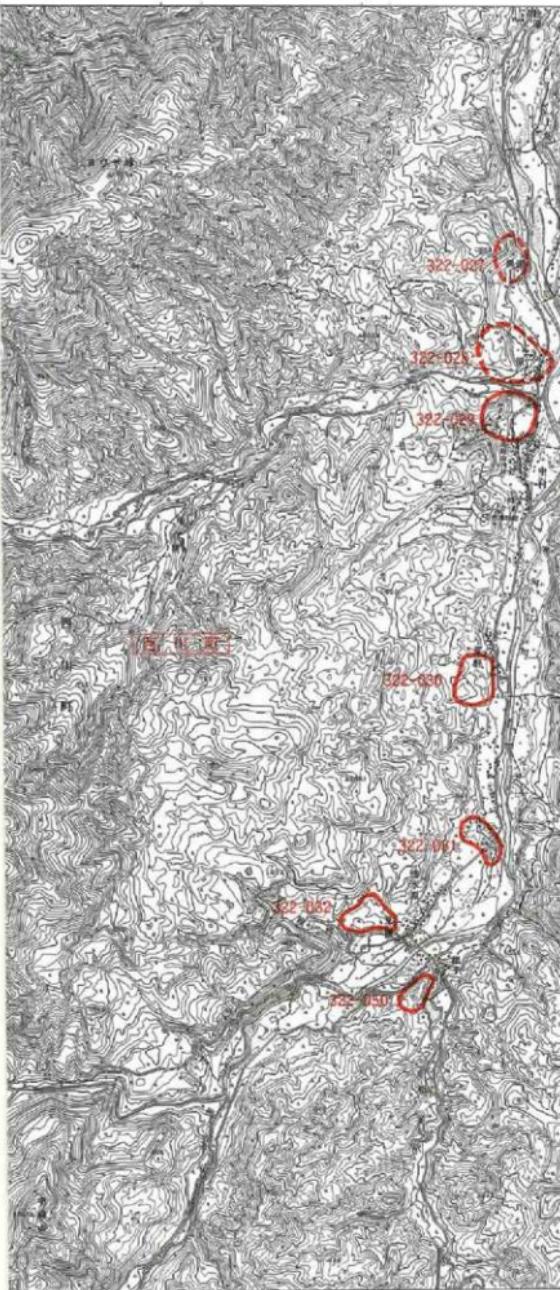


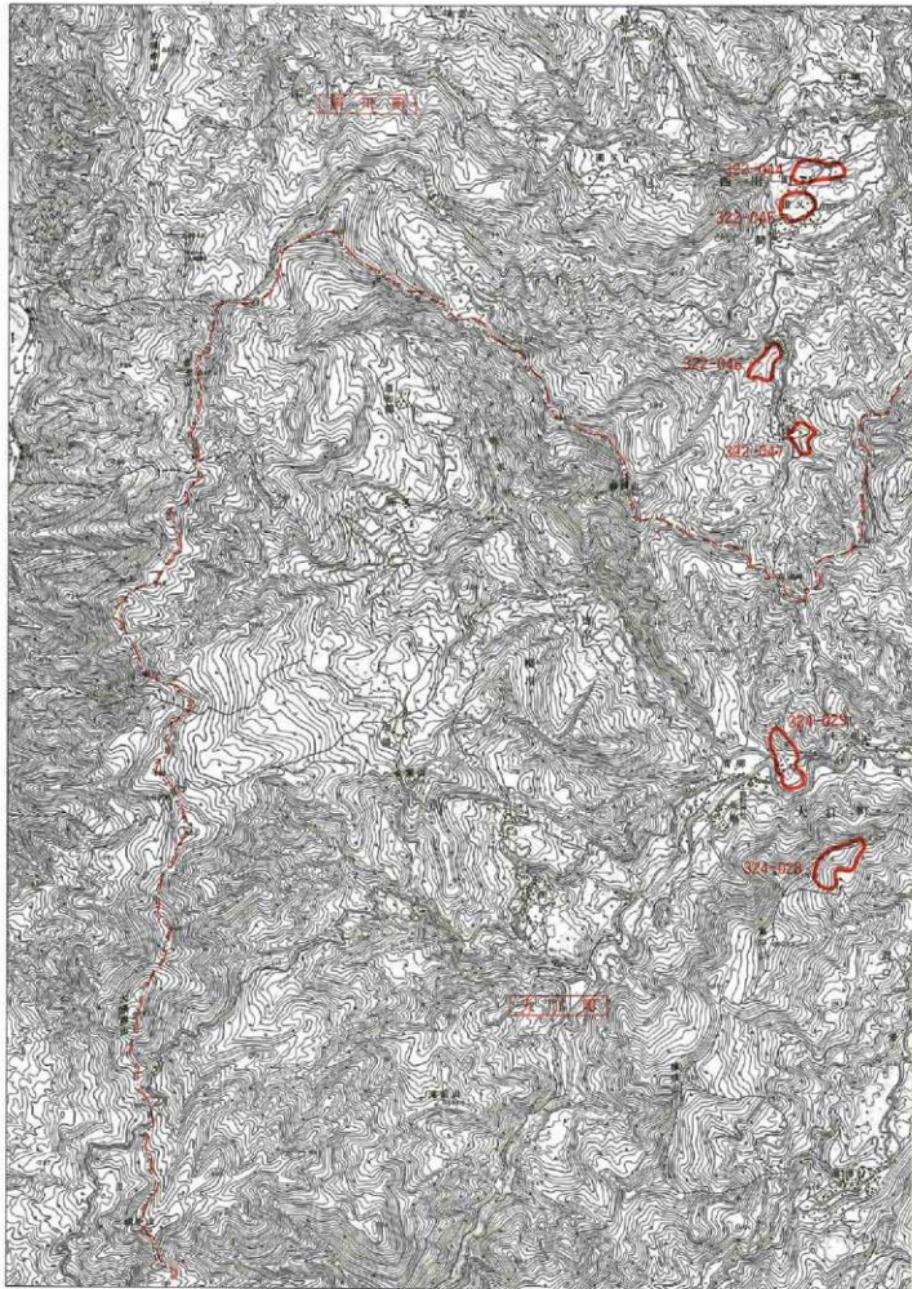
- 322 西川町
- 322-009 要害沢樋
- 322-012 網取樋
- 322-013 銀山樋 (銀山樋)
- 322-014 横山樋
- 322-015 沼の平館
- 322-016 要害森樋
- 322-017 上ノ台樋
- 322-018 水沢館
- 322-019 石倉樋
- 322-020 小沼樋
- 322-021 横嶋樋
- 322-022 八聖山樋
- 322-023 坂ノ上樋
- 322-024 本道寺館
- 322-025 月山沢樋
- 322-026 志津樋
- 322-040 芦沼田樋
- 322-041 田代樋
- 322-042 日影樋
- 322-043 入間館
- 322-048 台ノ倉樋
- 322-049 月岡樋



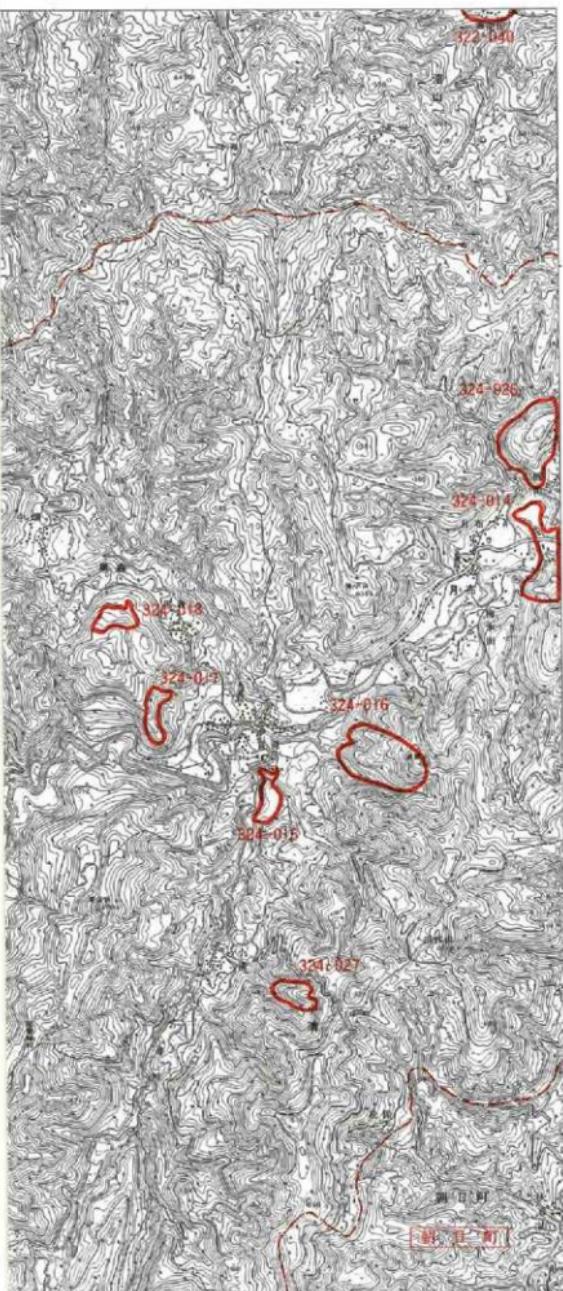
大井沢

- 322 西川町
- 322-027 黒滝樋
- 322-028 原樋
- 322-029 中村館
- 322-030 萱野樋
- 322-031 中上樋
- 322-032 見附樋
- 322-050 根子樋



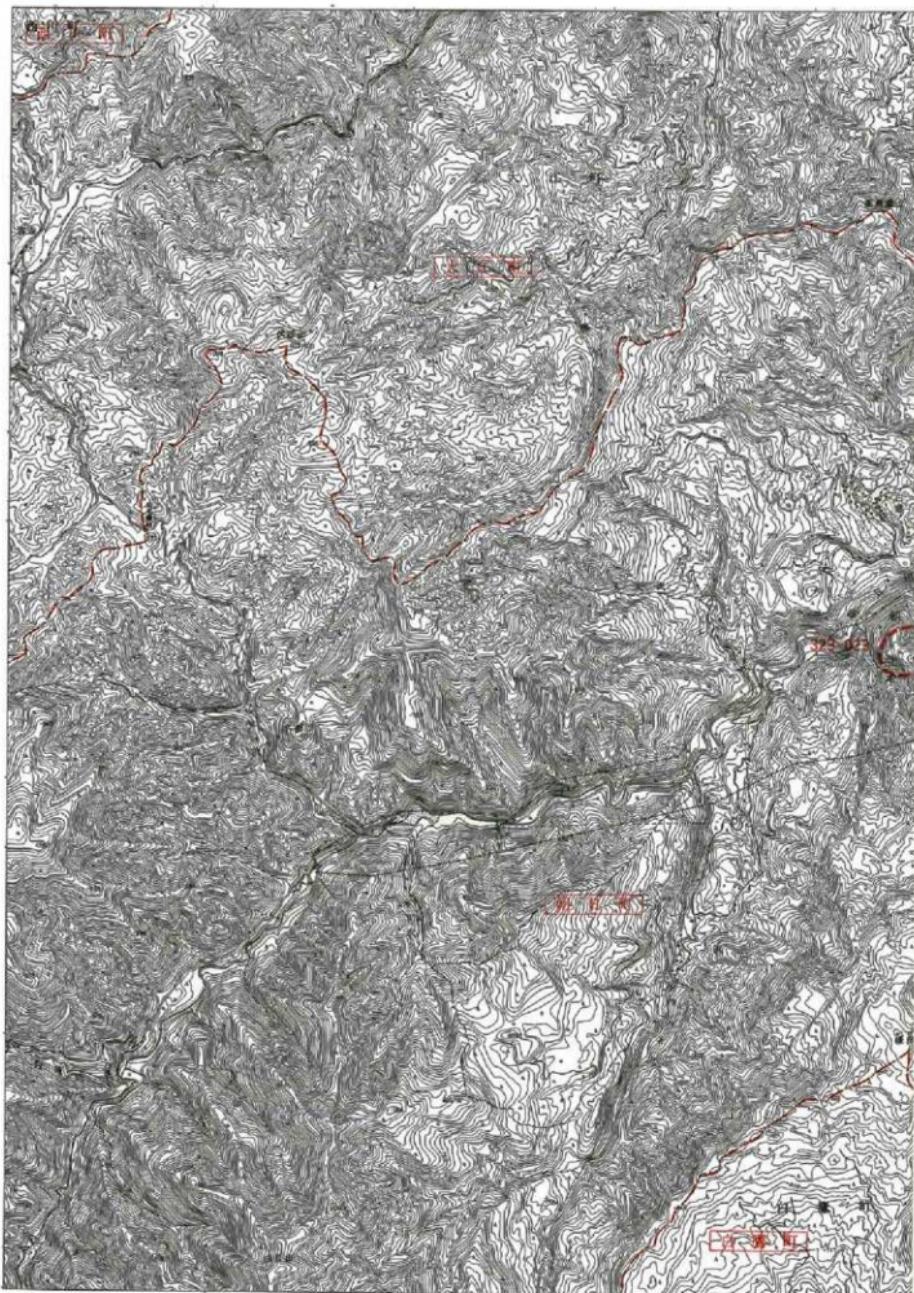


貰見



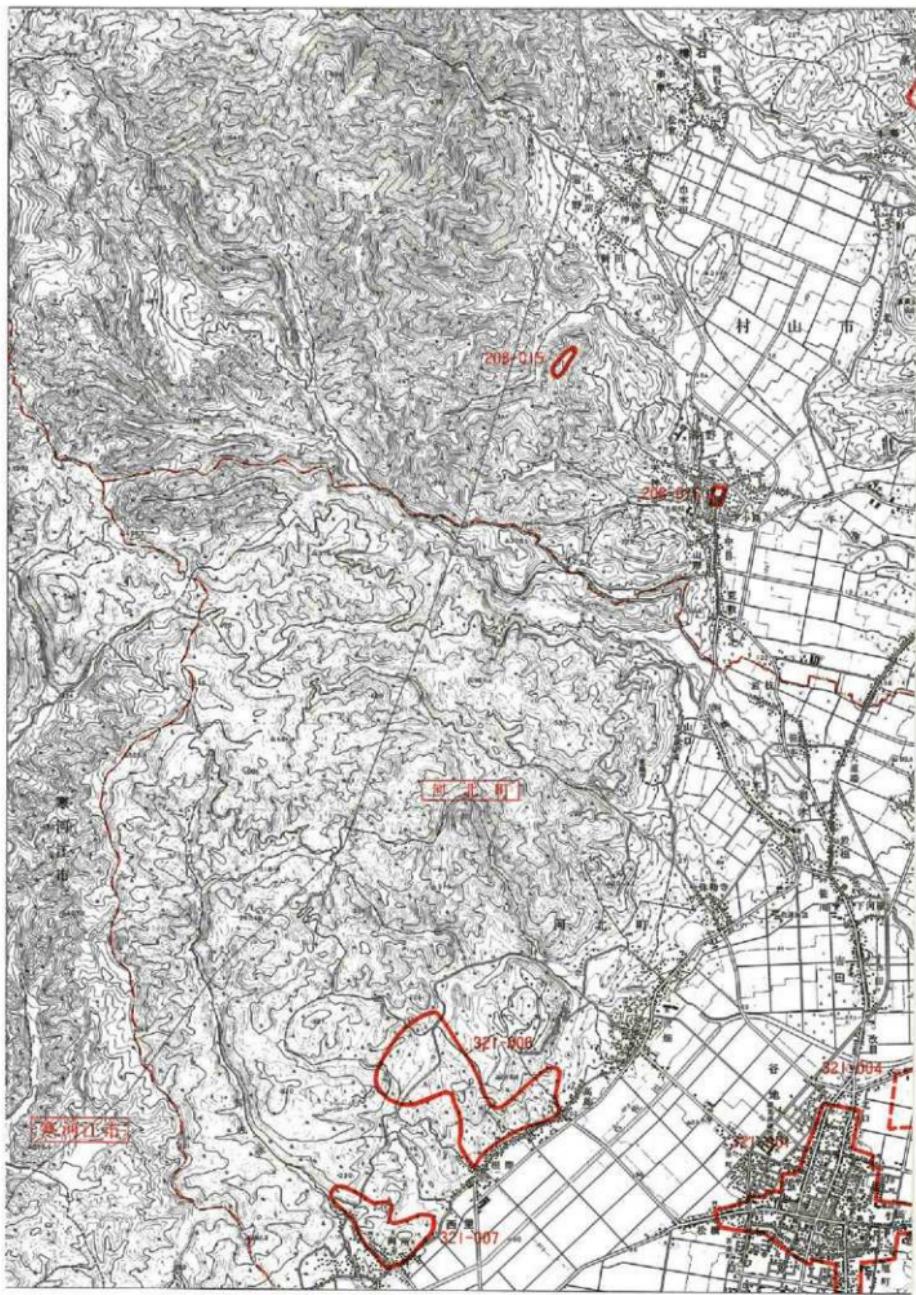
322 西川町
201-040 芦沼田柵
322-044 菅谷地柵
322-045 清又柵
322-046 古屋敷柵
322-047 征矢形柵

324 大江町
324-014 大城
324-015 壱善城
324-016 御館山城
324-017 館山柵
324-018 黒森柵
324-026 檜山柵
324-027 小清柵
324-028 津口柵
324-029 柳川柵

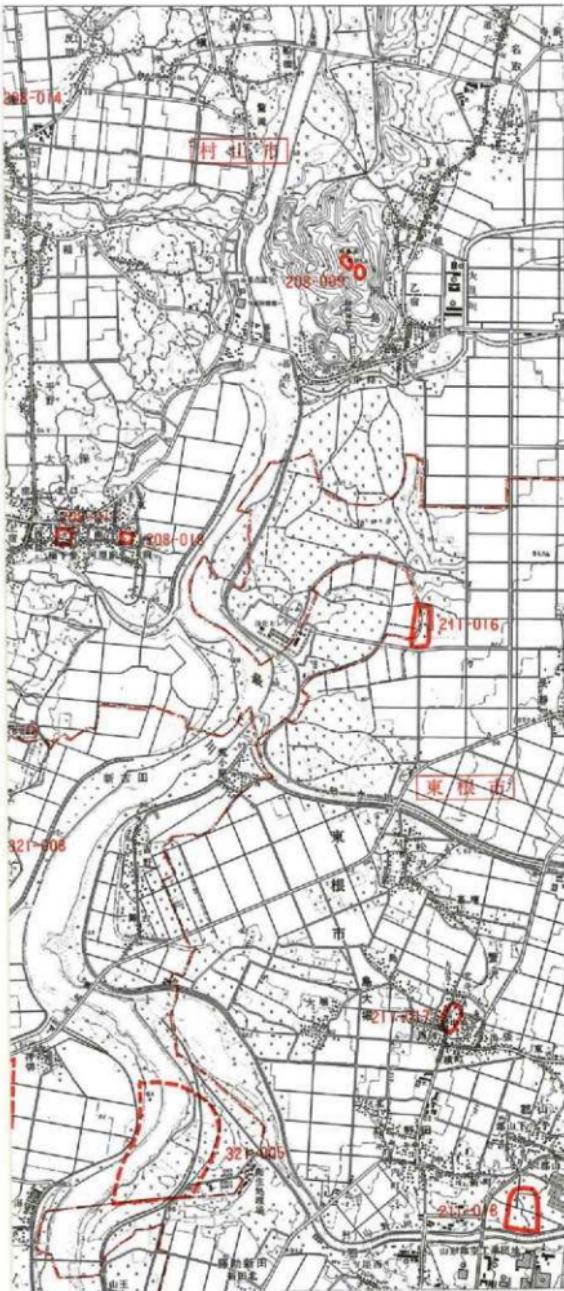


太郎

-
- 323 朝日町
 - 323-002 立木樋
 - 323-005 太郎樋
 - 323-006 水口樋
 - 323-007 大船木樋
 - 323-008 杉山樋
 - 323-011 大沼樋
 - 323-012 切立樋
 - 323-019 白倉石樋
 - 323-021 タテノ山樋
 - 323-023 八幡樋 (通称)



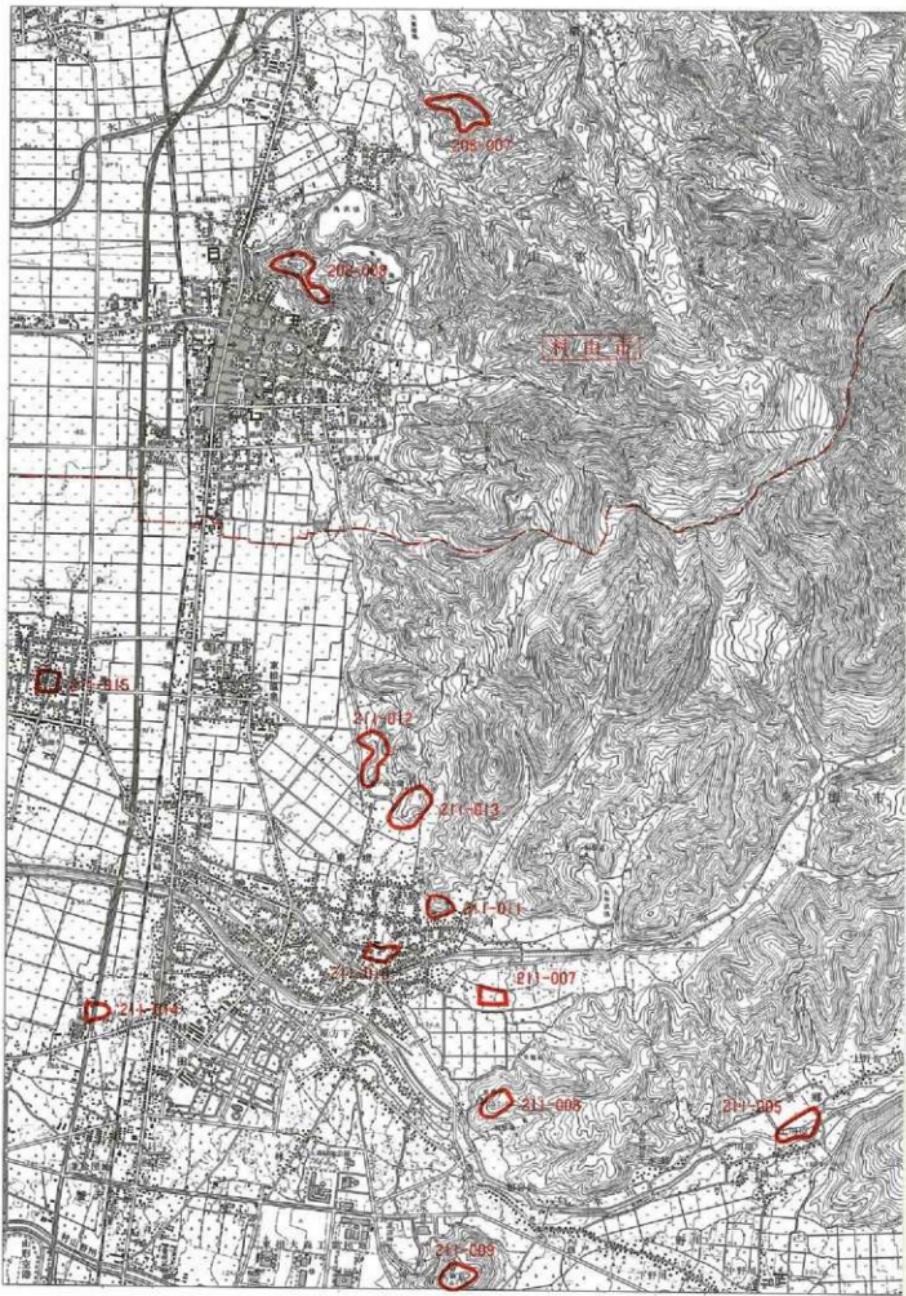
谷地



208 村山市
208-009 河島山
208-014 白鳥城
208-015 熊野山柵
208-016 湯野沢柵
208-017 大久保城
208-018 大久保古城

211 東根市
211-016 長瀬本柵館
211-017 蟹沢柵
211-018 野田柵

321 河北町
321-001 谷地城
321-004 大森館(谷地城跡)
321-005 堀口館跡
321-006 根際山柵
321-007 和柵山柵
321-008 伊達城

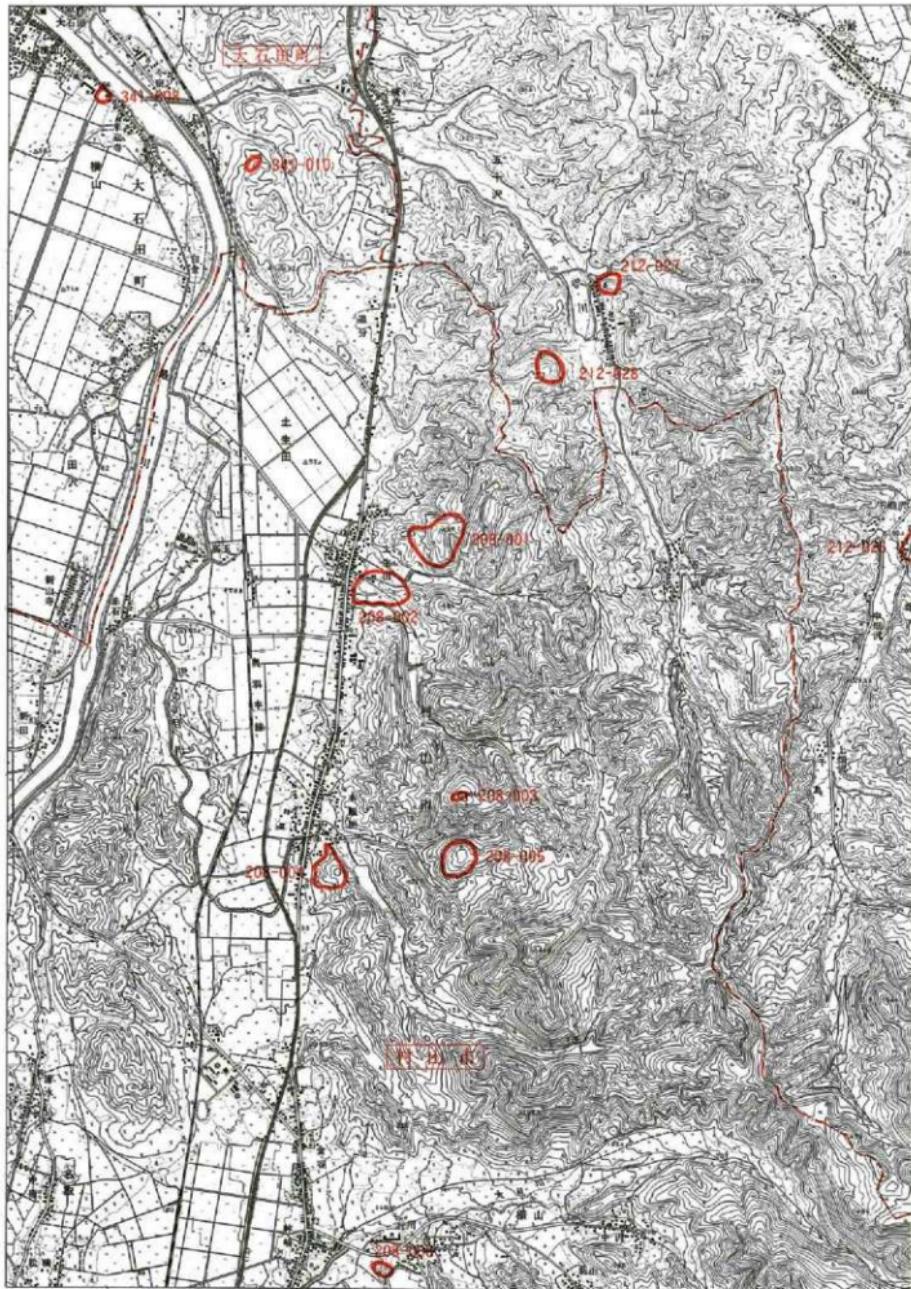


楯 岡

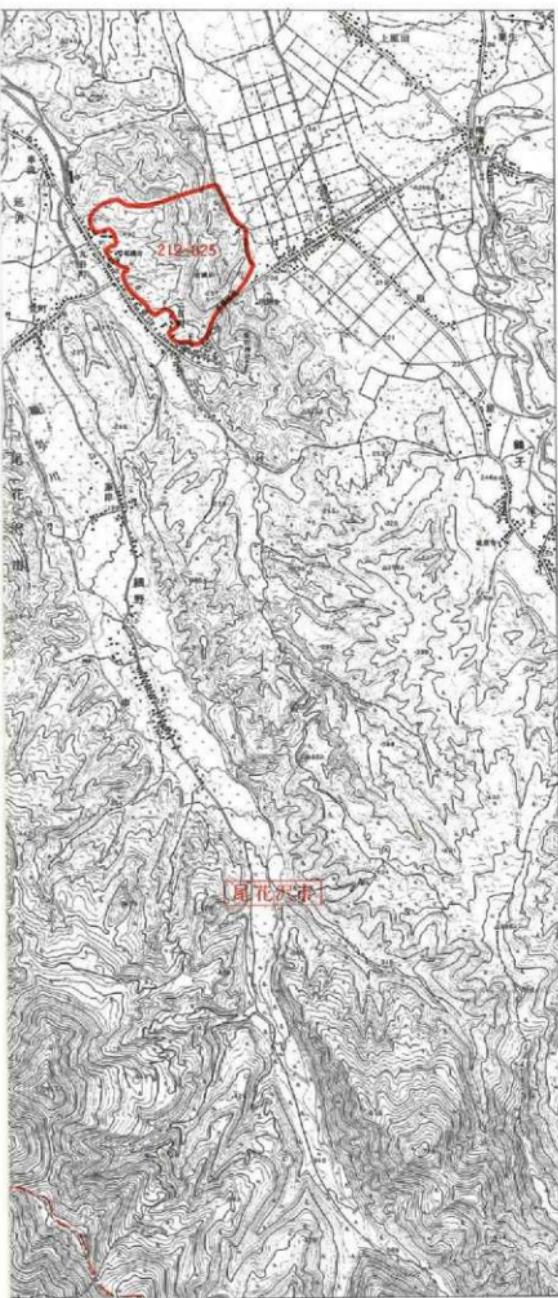
208 村山市
208-007 横山樋
208-008 横岡城

211 東根市
211-005 津渡樋
211-007 中野目樋
211-008 黒鳥山樋
211-009 大森城
211-010 東根城
211-011 栗師山樋
211-012 兵備山樋
211-013 堂の前樋
211-014 六田樋
211-015 長瀬城





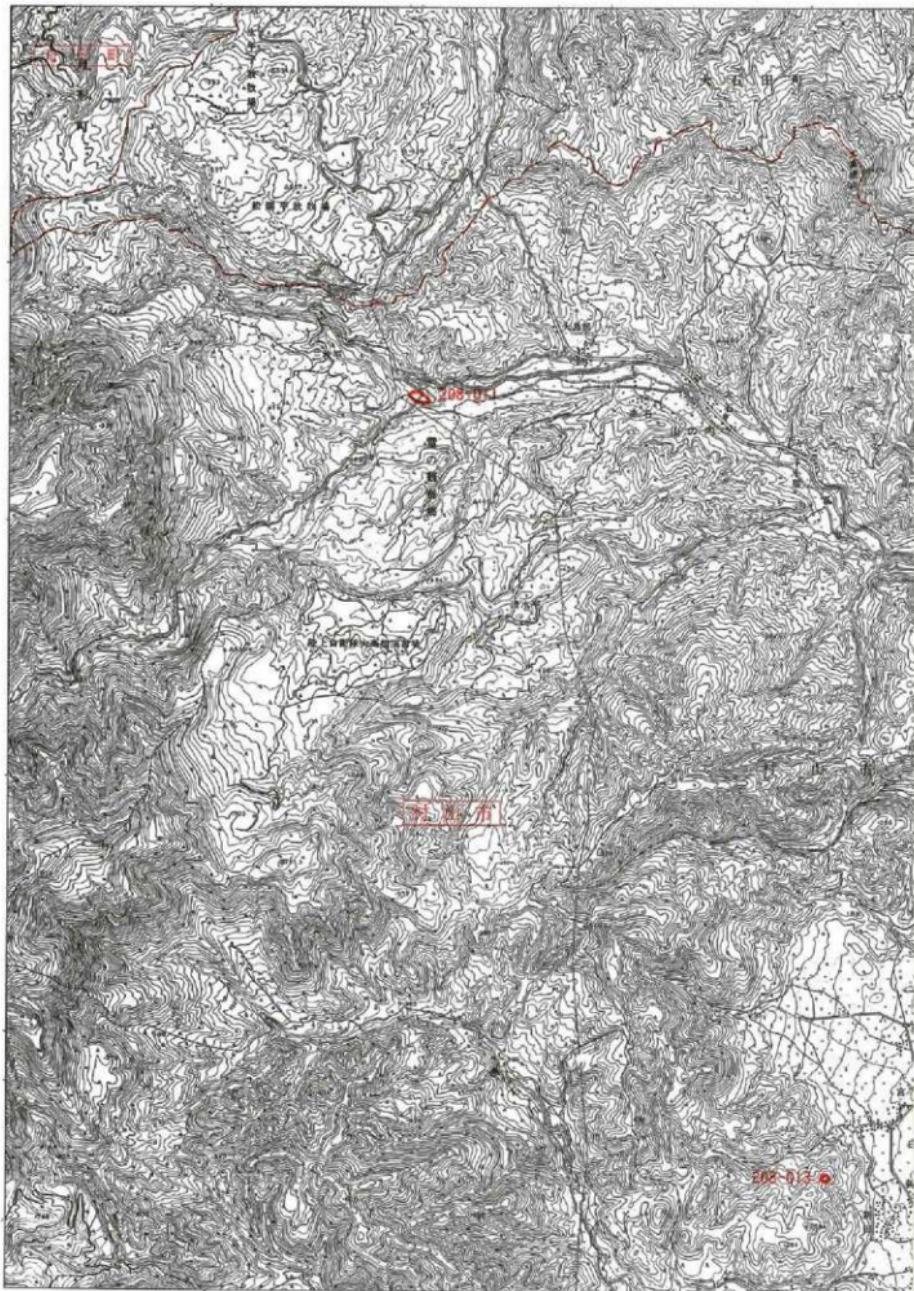
延沢



208 村山市
208-001 土生田橋山
208-002 土生田橋
208-003 高館山
208-004 飯田橋
208-005 十字山
208-006 見附橋

212 尾花沢市
212-025 延沢城
212-026 煙沢橋
212-027 五十沢橋
212-028 金森橋

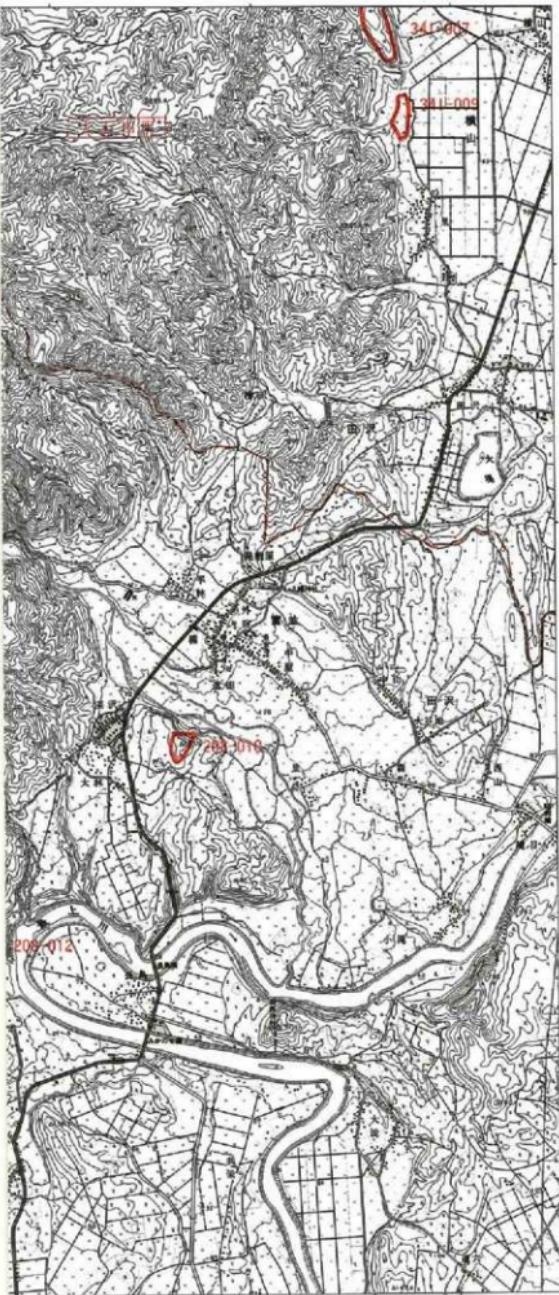
341 大石田町
341-008 来迎寺橋
341-010 小屋館

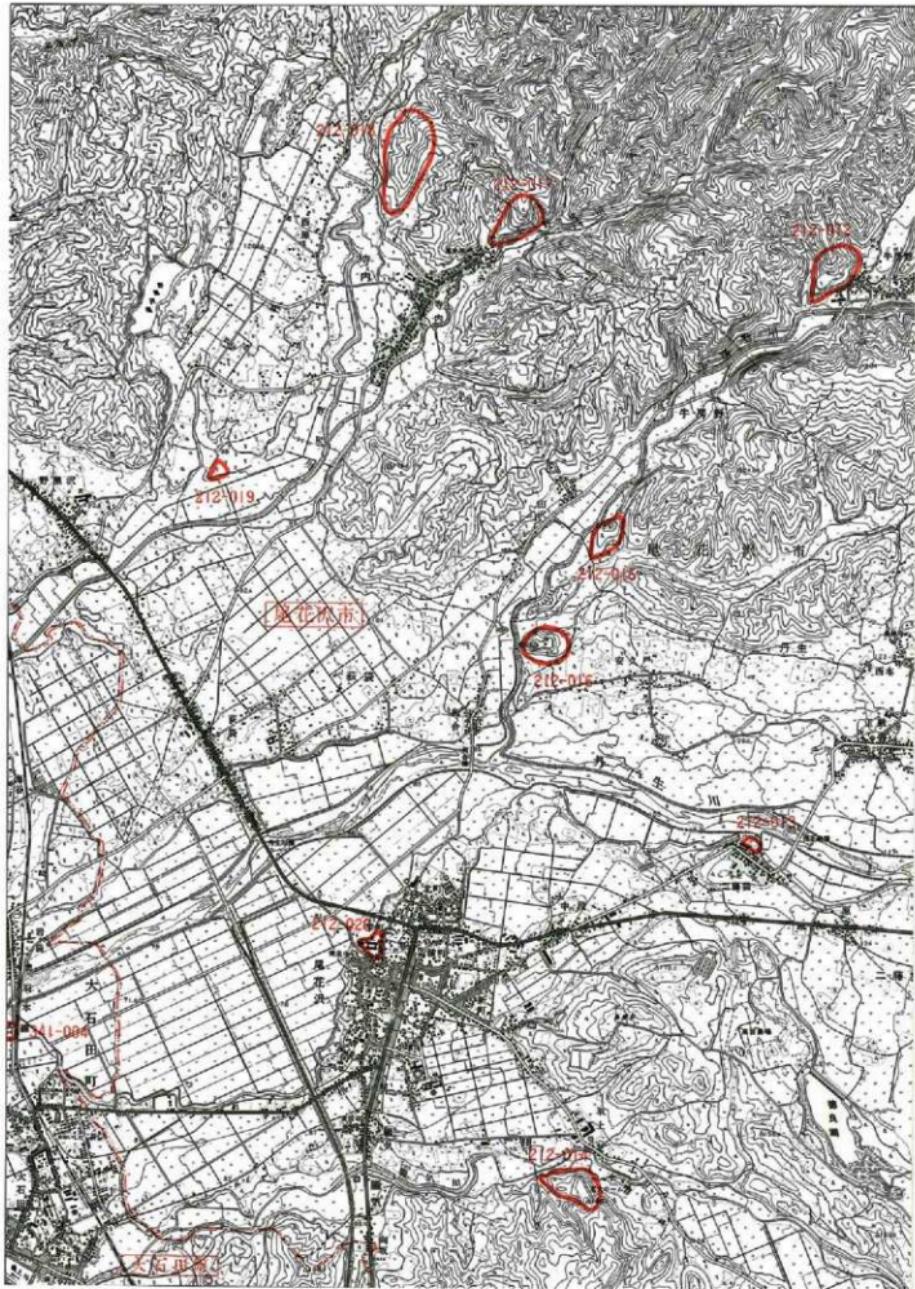


富並

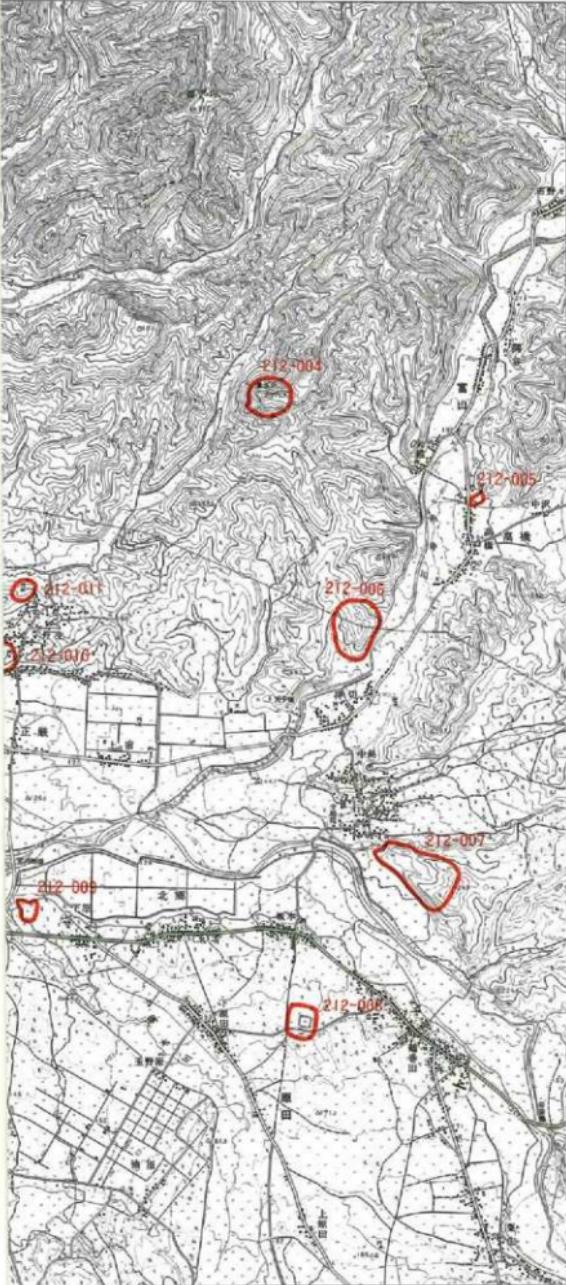
208 村山市
208-010 富並橋
208-011 山の内橋
208-012 柏木森
208-013 毛倉森

341 大石田町
341-007 横山館
341-009 塩ノ沢館



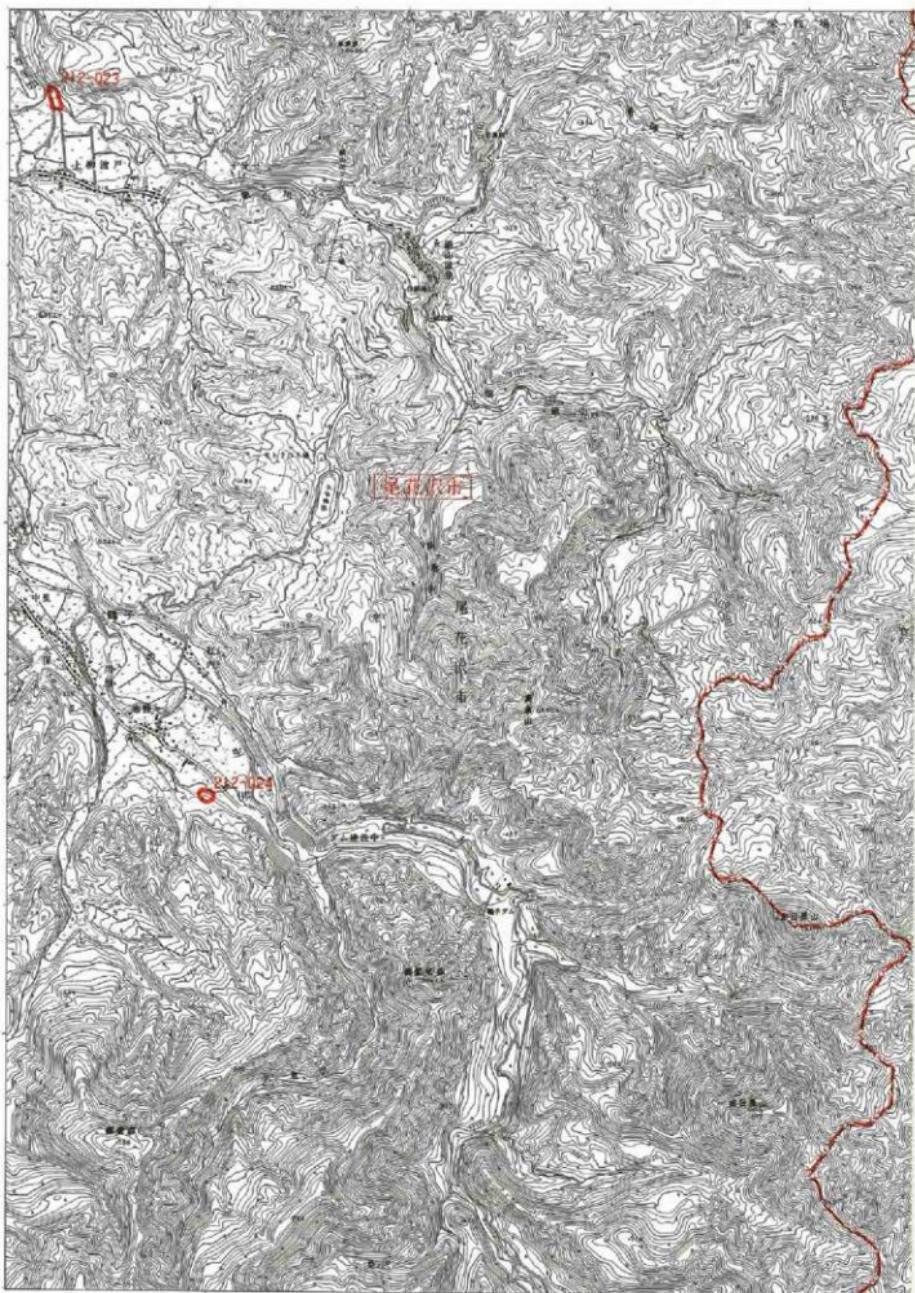


尾花沢



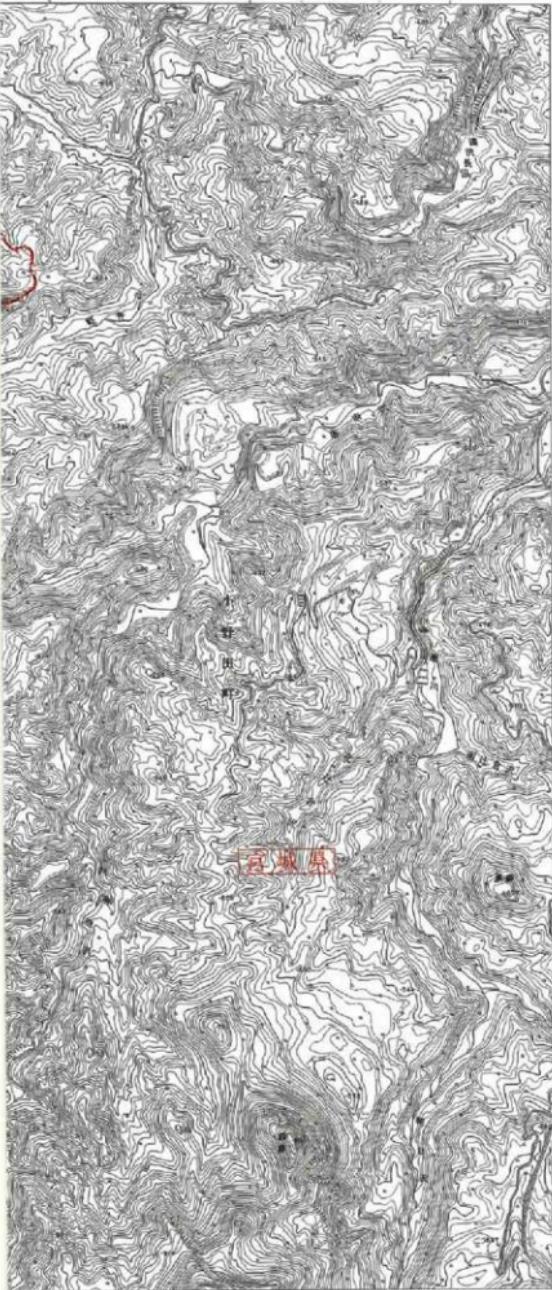
212 尾花沢市
212-004 豊立山樋
212-005 矢越樋
212-006 押切樋
212-007 行沢樋
212-008 兵沢遺跡
212-009 北郷樋
212-010 砂山樋
212-011 丹生八幡樋
212-012 牛房野樋
212-013 二藤袋樋
212-014 荒樋
212-015 大沢樋
212-016 森岡山樋
212-017 寺内八幡樋
212-018 寺内古樋
212-019 野尻樋
212-020 尾花沢樋

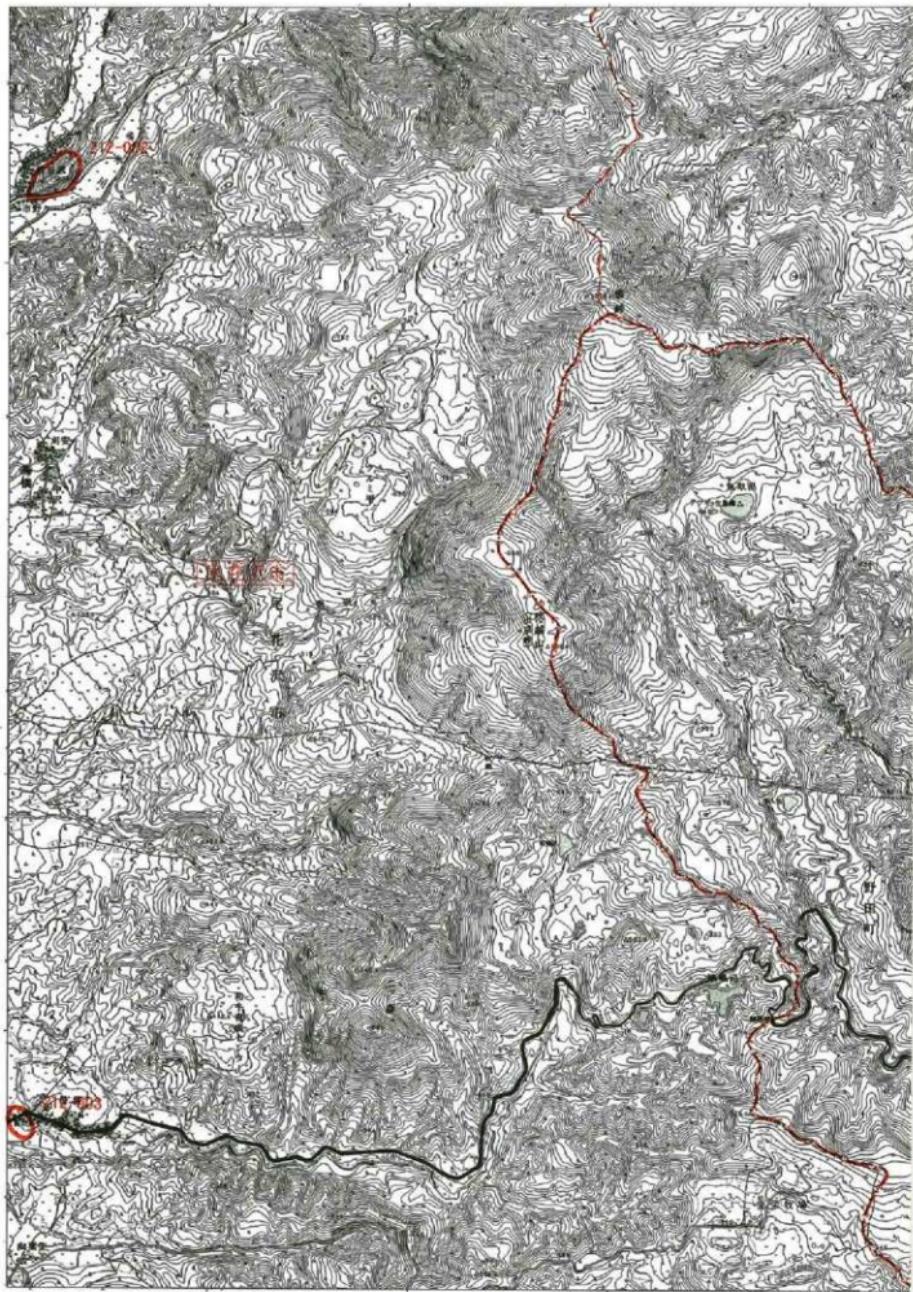
341 大石田町
341-004 井出館



銀山温泉

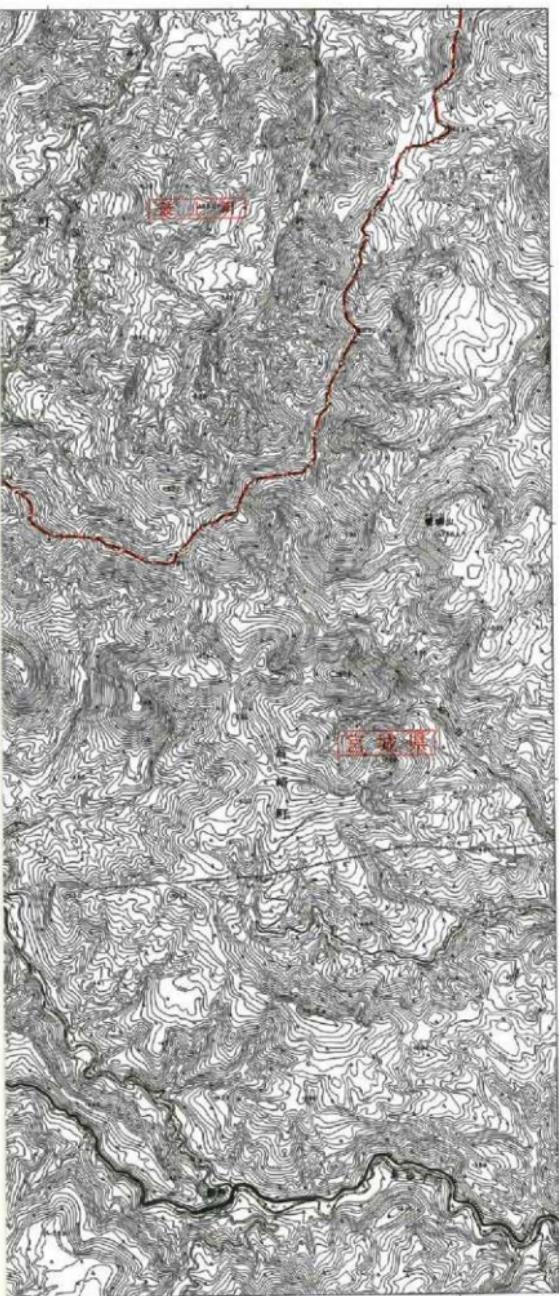
212 尾花沢市
212-023 上柳渡戸橋
212-024 いるかい橋

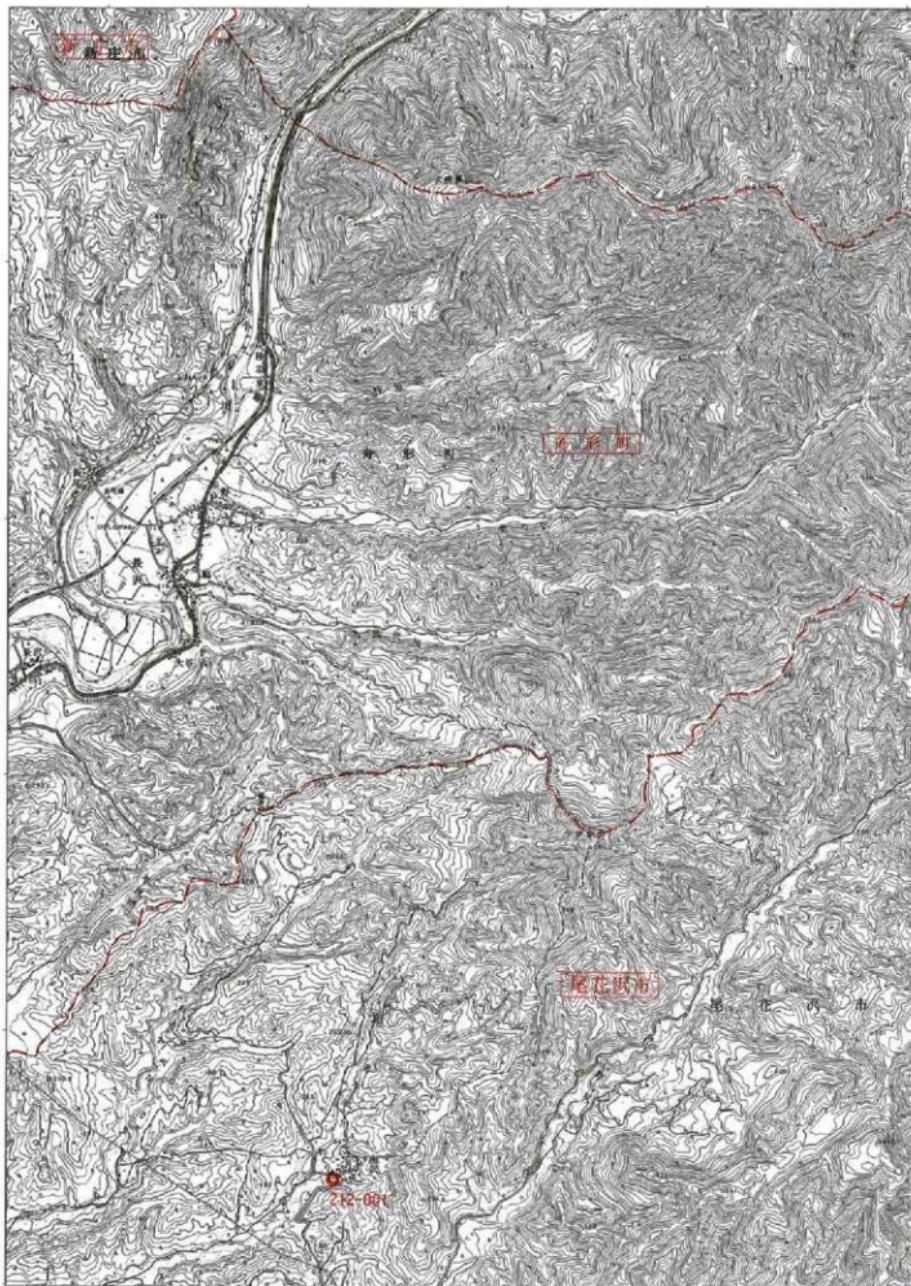




魚取沼

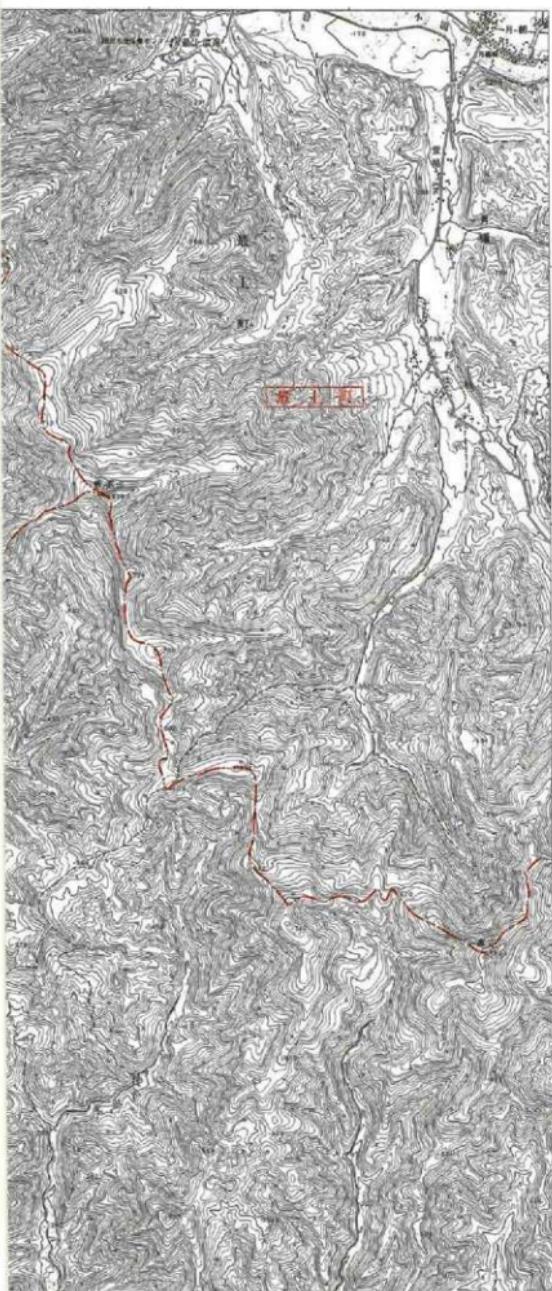
212 尾花沢市
212-002 岩谷沢橋
212-003 母袋橋

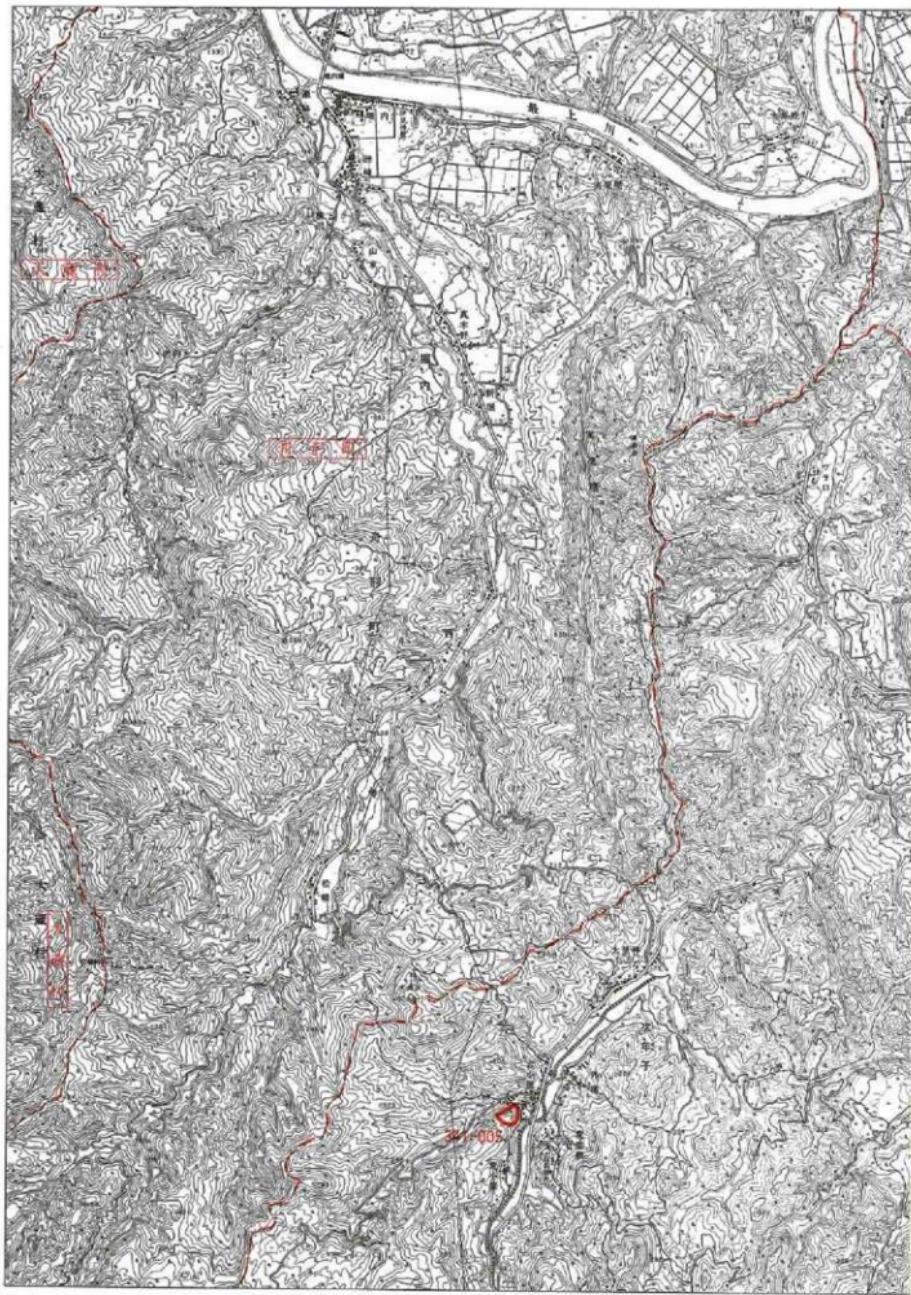




月 櫃

212 尾花沢市
212-001 南沢編

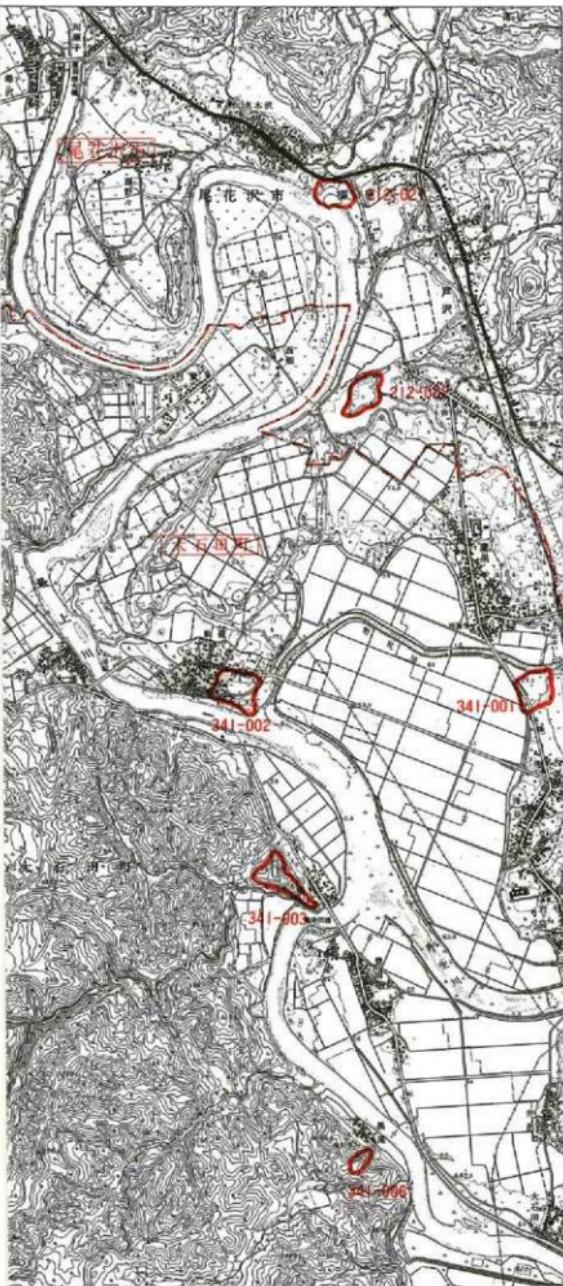




海 谷

212 尾花沢市
212-021 名木沢橋
212-022 芦沢橋

341 大石田町
341-001 鷺巣館
341-002 駒籠館
341-003 川前館
341-005 次年子館
341-006 黒滝館



資料

資料

調査委員・調査員等名簿

1 中世城館址調査委員

(地区担当を持たない調査委員)

入間田宣夫 東北大学文学部教授

仲野 浩 東北芸術工科大学教授

加藤 稔 東北芸術工科大学教授

伊藤 清郎 山形大学教育学部助教授

尾形 康典 (昭和 63~平成 2 年度)

(地区担当調査委員)

譽田 慶信 東南村山地区

北畠 敦爾 西村山地区

鈴木正一郎 北村山地区

2 調査指導

服部 英雄 前文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官、九州大学助教授

(昭和 63~平成 5 年度)

伊藤 正義 文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官 (平成 6 年度)

坂井 秀弥 文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官 (平成 7 年度)

3 中世城館址調査員

(東南村山地区)

山形市 茨木光裕、横戸良一、大場雅之、

上山市 加藤和徳

天童市 川崎利夫、村山正市、山口博之

山辺町 後藤禮三、佐藤繼雄

中山町 小関昭栄、佐東一男、鳥堀沼宏之 (故人)、横尾尚壽

(西村山地区)

寒河江市 宇井啓、大宮富善、高橋慎示

河北町 北畠敦爾、鈴木聖雄、横清哉

西川町 鈴木聖雄、高橋正次、宮林吉一朗、松田絞月、佐藤茂弥

朝日町 鈴木治郎、登板高典

大江町 高山法彦、松田進、林精一郎

(北村山地区)

村山市 佐藤幸作、高橋欣二、

東根市 佐藤好次郎、奥山敬三

尾花沢市 横山右一、大類誠、石井浩幸

大石田町 板垣一雄、清水助太郎

4 直接調査を担当した市町教育委員会担当者

中山町 高橋昌敏

村山市 原田一裕

東根市 太田浩雅

尾花沢市 大類誠

大石田町 関淳一

5 事務局

山形県教育庁文化課 (昭和 63~平成 5 年度)、同文化財課 (平成 6~平成 7 年度)

東南村山教育事務所社会教育課

西村山教育事務所社会教育課

北村山教育事務所社会教育課

参考文献一覧

No.	書名または論文名	編著者等	発行年
(山形市)			
1	山形城下絵図		
2	山形県史		
3	山形市史		
4	史跡・山形城二ノ丸大手門復原建設工事報告書	山形市都市開発部公園緑地課	
5	最上時代 山形城下絵図	高橋信敬	
6	南館村粗絵図		
7	最上千種		
8	性山公治家記録		
9	「境目の城」と城の破却	菅田慶信	
10	上泉泰綱条書（小山田文書）		
11	最上記		
12	奥羽永慶軍記		
13	最上家中分限帳		
14	羽州最上成沢城をめぐって	伊藤清郎	
15	渡辺家文書（山形市黒沢）		
16	山形市史 上巻		
17	古館城考	大曾根郷土史研究会	
18	高瀬郷土史		
19	長谷堂城の築城プランについて	菅田慶信	
20	ふるさと明治	明治地区郷土史編集委員会	
21	光明寺由来記		
22	山形市史資料編1 最上氏関係資料		1652
23	馬見ヶ崎川流域の変遷	斎藤林太郎	
24	印役村御繩打之帳		1623
25	古代集落の発展と郡衛	山口和夫	1975
(上山市)			
1	晴宗公采地下賜録		
2	東置賜郡史		
3	赤湯町史		
4	山形県史		
5	綾郡書類從		
6	最上義光物語		
7	中世城郭研究	松岡 進	
8	西郷村誌稿		
9	上山城繩張図	国立公文書館内閣文庫蔵 大阪城天守閣原蔵	

No	書名または論文名	編著者等	発行年
10	上山市史		
11	上山城郭資料集		
12	ふるさとの城	山形新聞社	
13	伊達天正日記		
14	米沢市史		
15	会津四家合考所収文書		
16	最上斯波家伝（上山合戦）		
17	上山見聞隨筆		
18	上山郷土史 (天童市)	梅津吉造	
1	天童市史 別巻上	天童市史編纂委員会	1978
2	天童市史 上巻	天童市史編纂委員会	1981
3	天童の城と館	天童市教育委員会	1993
4	寂ゆく面影小関村の来しかた	丸山 茂	1957
5	天童市史 別巻下	天童市史編纂委員会	1984
6	天童風土記 1		
7	天童織田藩史	天童市	1987
8	天童市史 中巻	天童市史編纂委員会	1987
9	最上四十八館の研究	丸山 茂	1944
10	風雲天童城	渡辺克司	1981
11	天童史跡八幡山古戦場誌	須藤重治	1974
12	大木翁遺文	木龜山翁	不明
13	水鄧寺津史	(村史発刊実行委員会)	1968
14	芳賀村地誌	(東村山郡史続編巻2 所収)	1879
15	中世城館跡研究・立谷川扁状地・	村山正市	1979
16	天童の歴史	天童の歴史を語る会	1979
17	高掛郷土史	佐藤栄太、丸山 茂	1957
18	高掛城の興亡・戦国争乱期を中心として・	荻野和夫(県立博物館研究報告8号)	1987
19	続太平記		
20	天童の生い立ち	天童町史編纂委員会	1952
21	天童市内の中世城館跡	川崎利夫	1990
22	天童古城（舞鶴山城）の調査	川崎利夫	1991
23	出羽諸城の研究	沼館愛三	1980
24	日本城郭大系 3	川崎利夫他著	1981
25	天童の歴史散歩	川崎利夫	1984
26	山形県文化史 3巻	丸山 茂	1949

No.	書名または論文名	編著者等	発行年
(山辺町)			
1	江戸時代の北山村山輪絵図		
2	北行日記	高山彦九郎	
3	北作・渡辺平治家文書		
4	作谷沢誌	朝倉高次郎	
5	出羽合戦の史蹟	鈴木和吉	
6	上杉家御年譜三		
7	伊達史料集 上・下		
8	山辺町郷土概史	武田泰造	
9	最上四十八館の研究	丸山 茂	
10	江戸時代の村絵図		
11	村絵図		1761
12	山野辺城址地図		
13	山野辺分見図明細絵面		1823
14	相模村史讀勝地調査要項	安達卯太郎	
(中山町)			
1	中山玄蕃頃系図	新貝勝治	1602
2	長崎館址記並補説	高橋友之助	1940
3	中山氏の歴史	国井蔭村	1968
4	中山鏡	東海林莊九郎	1968
5	山幡の研究	中山町郷土研究会	1982
6	達磨寺村・向新田村絵図		
7	中山町史 上巻	中山町史編纂委員会	1991
(寒河江市)			
1	寒河江大江城古絵図		1576
2	寒河江市史 上巻	寒河江市史編纂委員会	1994
3	寒河江大江氏	阿部西喜夫	1988
4	寒河江城を語る	沖津常太郎	1966
5	西根村史談	沖津常太郎	1952
6	大江系図	寒河江市史編纂委員会	1985
7	柴橋村誌	長井政太郎	1980
8	中山町史	中山町史編纂委員会	1993
9	日和田櫛について	宇井 啓・大宮富善	1990
10	慈恩寺一山絵図		1716
11	慈恩寺一山図		1714
12	山形県史 古代・中世資料 I		1977

No	書名または論文名	編著者等	発行年
13	山形県史 古代・中世資料2		1979
14	寒河江市史編纂叢書第28集「宮内村資料集」		1983
15	西村山郡神社誌		
16	木ノ沢郷 (河北町)	大宮富善	1993
1	工藤弥次右衛門手控	工藤仁一所藏	1710
2	善住院由緒書	宮下清治郎所蔵	1783
3	字限図	河北町教育委員会所蔵	1872・3
4	谷地本郷八ヶ村鹿絵図	横 真司所蔵	1689
5	中條備前守と白鳥十郎公	谷地教育会編	1933
6	河北町の歴史	河北町史編纂委員会	1962
7	出羽の武将	大友義助編	1981
8	宝林坊文書「慈恩寺舞童帳」	山形県史(慈恩寺史料)	1974
9	寺司文書「はとう物収納の覚」		
10	溝延郷土録本	中沢茂治郎	
11	溝延古地図	清野正司所蔵	
12	大町念仏講帳	河北町史編纂委員会	
13	堀米家地図		
14	山形県神社誌	山形県	1943
15	両所神社社伝 (西川町)		
1	編年西村山郡史	西村山郡役所編	1915
2	奥羽軍談	佐久間昇編	1975
3	寒河江大江氏	阿部酉喜夫	1988
4	出羽諸城の研究	沼館愛三	1980
5	最上四十八郷の研究	丸山 茂	1978
6	神都岩根澤之面影	丸山 茂	1940
7	間沢村鹿絵図	佐藤昌一所蔵	1593
8	要害森寄附証文	松田皎月所蔵	1820
9	西川町史編集資料第3号	西川町史編纂委員会	1977
10	安中坊系譜	寒河江市史編纂委員会	1985
11	高橋家系図	寒河江市史編纂委員会	
12	字限図	西川町蔵	1974
13	大江町史	大江町教育委員会編	1984
14	農業補習学校史料	川土居村	
15	佐藤家系図	入間幸輔所蔵	

No	書名または論文名	編著者等	発行年
(朝日町)			
1	編年西村山郡史	西村山郡役所	1915
2	東五百川村郷土誌	鈴木正良	1924
3	米沢市史	米沢市長	1944
4	朝日町の歴史	朝日町教育委員会	1988
5	上山市史 上巻	上山市史編纂委員会	1980
6	大江町史	大江町教育委員会	1984
7	大江町史 年表編	大江町教育委員会	1986
8	朝日町史年表 前編	朝日町教育委員会	1989
9	奥羽永慶軍記	戸部正直	1698
10	最上記	最上家の浪人	1644
11	羽陽軍記	依遜軒某	1730
12	羽源記	僧 信弁(羽黒山)	
13	最上合戦記(出羽合戦)	直江兼続の家臣	
14	乱補出羽國風土略記	近藤重記	1982
15	朝日町史編集資料1号	朝日町教育委員会	1972
16	研究集録11号	寒河江高校社会部	1973
17	最上四十八館の研究	丸山 茂	1978
18	やまと歴史と伝説	後藤嘉一	1978
19	出羽諸城の研究	沼館愛三	1980
20	山形県歴史の道調査報告書 最上川(1)	山形県教育委員会	1980
21	角川日本地名大辞典6 山形県	編纂委員会	1981
22	最上義光物語	中村 晃	1988
23	山形合戦	鈴木和吉	1988
24	日本歴史地名大系6巻 山形県の地名	平凡社地方資料センター	1990
25	朝日町史編集資料16号	朝日町教育委員会	1981
26	朝日町史編集資料13号	朝日町教育委員会	1979
27	朝日町史編集資料14号	朝日町教育委員会	1980
28	「荒谷館東郭」発掘調査報告書	山辺町教育委員会	1991
29	河北町の歴史 上巻	河北町史編纂委員会	1962
30	私たちのむら・大谷風土記第一集	沖津常太郎	1960
31	猿田越ヲ探ル記	大泉 潤	1932
32	太郎記	長岡恒義	1673
33	郷土のあしあと	相座孝太 外	1982
34	羽州川通絵図	山形県博物館	1688
35	ハツ沼城絵図	朝日町教育委員会所蔵	
36	大谷村北館略図	大江町大泉潤	1932
37	朝日軍道について	宇井 啓	1986

No.	書名または論文名	編著者等	発行年
38	私たちのふる里大谷の歴史	白田八十二	1987
39	朝日町の中世城郭について(八ツ沼城を巡って)	田宮 浩	1992
	(大江町)		
1	尊卑分脈		
2	天文本大江系図	寒河江市史編纂委員会	1985
3	大江姓安中坊系図	寒河江市史編纂委員会	1985
4	寒河江城を語る	沖津常太郎	1966
5	図説中世城郭辞典 左沢城	村田修三 編	1987
6	羽州長崎村古城主中山玄蕃頭系図	寒河江市史編纂委員会	1961
7	朝日町大谷白田氏家譜		
8	大江町史	大江町教育委員会	1984
9	柴橋村史	長井政太郎	1980
10	出羽諸城の研究	沼館愛三	1980
11	大谷風土記	沖津常太郎	
12	歴史の道・最上川・	山形県教育委員会	
13	吉川安中坊藏「阿弥陀尊略縁起」	寒河江市史編纂委員会	1985
14	大沼大行院大江系図	寒河江市史編纂委員会	1985
15	寒河江大江氏諸系図	寒河江市史編纂委員会	1985
16	寒河江大江氏	阿部西喜夫	1988
17	寒河江城を語る	沖津常太郎	1966
18	徳蔵院伝記		
19	大城古絵図		
20	伝 五輪塔「大江町史」		
21	大江高基十二家臣の墓「大江町史」		
22	貫見村古文書		
23	貫見村古絵図		
24	大江高基公について	松田 進	
25	大江高基公 400回忌にあたって	松田 進	
26	御館山城石碑		
27	西村山郡史		
28	山形県の地名	平凡社	
29	歴史大辞典		
30	七軒村史		
31	伝 佐竹氏系図		
32	伝 源氏の日の丸		
33	寒河江秘鑑		
34	毛利山羽守大江高基家中覚書		

No.	書名または論文名	編著者等	発行年
	(村山市)		
1	袖崎の郷土史	袖崎郷土史研究会	1980
2	発掘調査報告書「土生田橋」	佐藤幸作	1989
3	最上橋岡元祖記	祥雲寺藏	1677
4	村方差出明細長	山形市史編集史料第9号	1760
5	最上四十八館の研究	丸山 茂	1944
6	村山市史	村山市史編纂委員会	1989
7	新庄領村鑑	新庄図書館蔵	
8	出羽諸城の研究	沼館愛三	1980
9	北村山地方の伝説と民話	橋岡高校社会研究部	1968
10	白鳥長久公	中里松藏	1981
11	天正最上軍記		
12	湯野沢略史		1902
13	富木村史	湯野沢尋常高等小学校	1917
	(東根市)		
1	高崎村誌	早坂界外	1958
2	東郷村史	名和季藏	1954
3	野川村差出明細長		1689
4	奥羽永慶軍記	今村義孝校注	1966
5	東根市史 別巻上	東根市史編纂委員会	1989
6	東根市史資料	東根市史編纂委員会	
7	正保城絵図東根城	内閣文庫蔵	
8	出羽諸城の研究	沼館愛三	1980
9	日本城郭大系	村田修三	1981
10	東根市史	東根市史編纂委員会	1989
11	日本地名大事典	角川書房	1981
12	最上四十八館の研究	丸山 茂	1944
	(尾花沢市)		
1	庄内考古学		
2	日本城郭大系	村田修三	1981
3	最上四十八館の研究	丸山 茂	1944
4	玉野村史	鈴木勇三郎	1927
5	延沢軍記	尾花沢市史資料第9輯	1985
6	字野尻全図		1888
7	尾花沢村絵図	尾花沢市史資料第1輯	1818~
8	名木沢橋跡調査説明資料	山形県教育委員会	1992

No	書名または論文名	編著者等	発行年
11	いるかい遺跡発掘調査報告書	山形県教育委員会	1983
12	奥羽軍談 (大石田町)	鶴岡市立図書館本	
1	最上四十八館の研究	丸山 茂	1944
2	大石田町史	大石田町史編纂委員会	1985
3	御巡見様御下向ニ付御案内留帳	山形大学所蔵文書	1761
4	大石田町誌	長井政太郎	1941
5	次年子	成生荘研究会	1992
6	新庄古老覚書	常葉金太郎校訂	1918
7	谷地郷村鑑	新庄図書館蔵	
8	地誌取調書	山形大学附属図書館蔵	1876
9	善翁寺淨土三部經袖書願文	今宿善翁寺蔵	1609

山形県の中世関係年表

西暦	年号	事項
1056	天喜 4	前9年合戦(～1062)。
1083	永保 3	後3年台戦(～1087)。
1094	嘉保 1	このころ藤原清衡平泉に居館を移すという。
1110	天仁 3	出羽守源光因、寒河江庄に乱入。
1151	仁平 1	大曾禰、屋代、遊佐各庄の年貢増徴問題おきる。
1185	文治 1	塙ノ浦の戦(平氏滅亡)。
1189	5	奥羽合戦。奥州藤原氏滅亡。 地頭の設置。 大曾禰庄－安達(大曾禰)時長
		寒河江・成島・屋代・北条各庄－大江広元
		時広(長井氏) 親広(寒河江氏)
		小田島庄－中条氏
		大泉庄－武藤(大泉)氏平
		成生庄－二階堂(藤原)氏
1221	承久 3	承久の乱がおこり、上皇方に味方した寒河江親広零落する。
1331	元弘 1	元弘の乱、後醍醐天皇笠置山に移る。
1333	3	鎌倉幕府滅亡。建武の新政。
1336	建武 3 (延元3)	室町幕府成立、後醍醐天皇吉野還幸(南北朝分立)。
1344	康永 3 (興国5)	南朝方の拠点だった藤島城落城。
1347	貞和 3 (正平2)	北畠顯信(顯家の子)、守永親王を奉じて、立谷沢城にたてこもる。
1350	親応 1 (正平5)	親応の擾乱(～52)がおこり、これに乗じて南朝方蜂起。
1356	延文 1 (正平11)	斯波兼頼、出羽管領として山形に入部(斯波氏は足利一族のなかの名族だった)、これより北朝優勢となる。
1380	康暦 2 (天授6)	伊達宗達、長井道広を攻撃し、置賜郡を略取。鎌倉府の足利氏満は“伊達の悪党”をしりぞけるよう命ずる。
1392	明徳 3 (元中9)	南北朝の合一
1462	寛正 3	武藤(大泉又は大宝寺)淳氏、出羽守に任せられる。
1478	文明 10	砂越氏雄、信濃守を拜領する。 武藤氏は砂越氏をおさえるため、東岸寺(酒田)城を築き、攻防戦が展開される。
1514	永正 11	山形城主最上義定、伊達稙宗と長谷堂に戦って敗れる。
1515	12	最上義定、伊達稙宗の妹と婚約。

西暦	年号	事項
1532	天文 1	砂越氏雄、土佐林氏の藤島城を攻め、武藤氏の大宝寺城を焼く。以来武藤氏は尾浦（大山）城によった。
1542	11	伊達稙宗と長男晴宗の対立激化。天文の乱がおこる。
1546	15	最上義光、義守の長男として生れる。
1548	17	天文の乱おさまり、稙宗退隠して、晴宗米沢城に居城。
1568	永禄 11	武藤義増、上杉謙信に和を請い、上杉氏に完全に従属。
1570	元亀 1	最上義光、父義守らと家督問題で対立。和解後、義光が家督をつぐ。
1574	天正 2	最上義光、父義守、弟義時らと対立、伊達輝宗、義守を助けて出陣。白鳥長久（谷地城主）、最上の内紛を調定する。和談破れて、義光は一族らの討伐を強行しあげる。
1579	7	観音寺城主来次孫四郎、武藤義氏に帰参。
1581	9	最上義光の勢力、最上郡地方まで進行。庭月城主庭月広綱、真室城主鮎延秀綱、新庄城主日野左京亮らも義光に帰参。武藤義氏も清水城を攻撃。
1583	11	武藤義氏の部将前森蔵人謀叛。地侍ら蜂起。義氏自殺す。義氏の弟義興を武藤氏の家督にさだめる。
1584	12	義光、谷地城（白鳥氏居城）寒河江城（大江氏居城）を攻め滅ぼす。
1587	15	東禅寺筑前守、武藤義興にそむく。最上義光大軍をもって東禅寺を助け武藤義興敗死。尾浦城陥落。義興の養子義勝（本庄繁長の次男）は小国城に逃れる。
1588	16	十五里ヶ原の戦いで最上・東禅寺軍敗れる。庄内は武藤義勝の領有に帰す。 義姫の和解工作により、伊達政宗と最上義光の和解なる。
1589	17	伊達政宗再度大崎攻撃をはかる。大崎氏伊達氏と密約、事實上服属する。芦名氏、佐竹氏も伊達に敗れる。義光の企画した大崎・最上・芦名・佐竹戦線くずれる。
1590	18	伊達政宗、小田原参陣。最上義光もこれに2ヶ月遅れて参陣。豊臣秀吉、上杉景勝、大谷吉繼に命じ、大宝寺領並びに庄内3郡を検地させる。
1591	19	上杉の将直江兼続、藤島城によった検地一揆をくだす。本庄繁長・武藤義勝は一揆煽動の嫌疑で大和に流罪となり、庄内は上杉景勝の所領となる。出羽諸将に知行朱印状が交付される。 最上義光13万石、仙北三郡のうち上浦（雄勝郡）もあたえられる。 伊達政宗は伊達、信夫、置賜郡を没収され、岩手沢（岩出山）に移る。会津、置賜は蒲生氏郷にあたえられる。
1592	文禄 1	奥羽の諸大名、九州名媛屋に参陣。義光、山形城の普請に力を入れるよう國元に命ずる。
1595	4	衆楽第事件、秀吉の養子秀次切腹させられ、義光の娘駒姫をはじめ多くの処刑者がである。

西暦	年号	事項
1598	慶長 3	上杉景勝、会津に移封。置賜郡も上杉領となる。
1600	5	徳川家康、最上義光はじめ奥羽諸将に会津攻撃の部署を指令。石田三成挙兵の報により、会津攻撃を中止。関ヶ原合戦へ。諸大名は帰国し、最上は孤立した。上杉と伊達は和解し、上杉軍は最上攻撃を開始。長谷堂合戦が起こる。関ヶ原合戦（9/15）で徳川方大勝の通知が届くまでの15日間死闘が続く。直江兼続は撤退し、最上軍の反攻が開始された義光。置賜を除く現在の山形県の殆どを領有する。
1601	6	上杉景勝、米沢30万石に減封される。
1603	8	最上義光、東禅寺を亀崎、大宝寺を鶴岡、大浦を大山と改名。義光、長男義康を庄内で射殺する。
1614	19	最上義光死去（享年69歳）。家康の近習として寵愛をうけていた三男家親襲封。大阪冬の陣おこる。上杉景勝先鋒。
1617	元和 3	最上家親変死（享年36歳）。12歳の遺子義俊相続。
1622	8	最上義俊改易される。幕府、鳥居忠政を山形に、酒井忠勝を鶴岡に、その弟直次、忠重を左沢、白岩に、戸沢政盛を真室に、松平重忠を上山に封ずる。

山形県中世城館遺跡調査報告書

第2集

(村山地区)

発行日 平成8年(1996年)3月 第1刷

編集 山形県教育委員会

発行 山形市松波二丁目8-1

印刷 株式会社 谷野屋
山形市松波四丁目3-27